奇譚クラブ

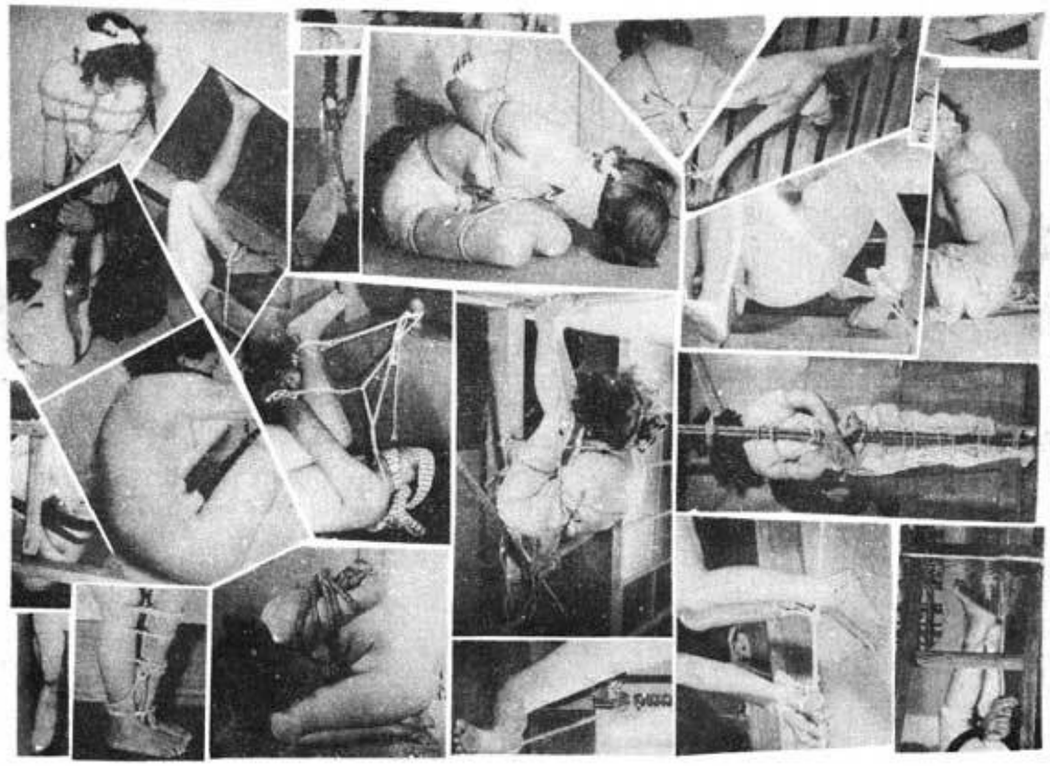
新時代の風俗雑誌

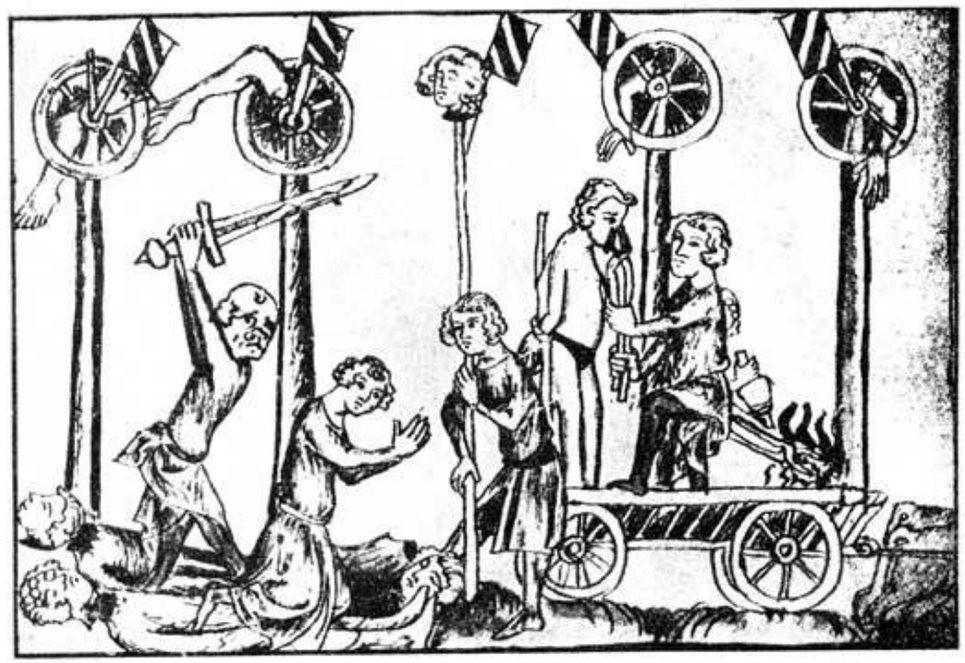
1953.3

奇譚クラブ

定價百円

地方売価百参円





Theobaldo de Brusatiの拷問及び斬首　(1311年)

拷問、後方は生唇をはぎとる所(Tengler, Laienspiegel mainz)　テングラー・ライネンス

拷問、のばし責め　——アントワープ(1554年)

☆縄を纏った女体美の探究☆

印刷ではない直接印画紙に焼付けた貴重の写真をあなたの蒐集なコレクションの一頁へお加え下さい。本誌に発表し得なかった数々の必艶を取揃えて居ります。

☆吊リ三態特選集 三枚一組☆

三枚一組キヤビネ版 五百円(荷造送料共)

才一組新作
才二組新作

此れは今迄に一度も発表したことのない、特別撮影の多数の中から緊縛感のあるものを選び三枚一組のもの二組完成しました。前記写真集とは全然別個のものですから重復することはありません。

御申込次第早速厳封の上急送致します。

○本欄完表以外のものはKK通信誌上にて御覧下さる様お願い致します。

愛好者の方々の熱狂的な讃美を受けて発売したる本誌独特の縛られた女の写真は、毎号引続いて変つた姿態美と緊縛美の新作品を加えて参りましたが、今回更に新しい構想と斬新なアイデイアにより、好事家垂涎の傑作の完成に成功致しました。愛読者サービスとして実費にて分譲したいと思いますので多少に拘らず是非お申込下さるようお待ち致します。

縛られた女の写真・分譲

光沢面印画紙　横行五枚一組(一巻分)二百円(送料共)

○第五篇(四十一集より五十集迄)十集
○第六篇(五十一集より六十集迄)十集
○第七篇(六十一集より七十集迄)十集

○以上各集共一集分各々五枚一組で手落を生れるごとに必ず発送して参りました本誌読者の間に大好評を博しまして、優秀なコレクションとしての役目を果して参りましたが、其後引続き緊縛や道具を用いたもの、更につづいたもの等を発表、その特殊な緊縛美の表現又はポーズをして慾情に訴え込んで居ります。

今回は更に読者御望の各種の吊り下げられた姿態の写真を数百、最新的な人気を呼ぶに至りました。また御注文下さる毎お待ち致します。

★襲われる女★

十二枚一組五百円(送共)

此れは暴漢に襲われる美少女の表情の変化を通じ、恐をアクセサリーに用いた理想的作品です。(シリーズ十二態)

◎鎖を纏つた女◎

優美な曲線のような女体の肌に喰い入つたくさりの輪と出す微妙なコントラスト、鎖を纏つた女体の美しさを遺憾なくここに五枚一組の写真に結集しました。

第一組(五枚一組)一百円(送共)
第二組(五枚一組)一百円(送共)

大阪府堺局区内密封通四丁

◎申込所　曙書房代理部

振替大阪三四九五六番

柱に縛られた女

北多玲子著

奇譚クラブ 三月号 目次

口絵 柱に縛られた女 喜多玲子・画
口絵写真 東西拷問くらべ（スペインの宗教裁判拷問／江戸幕府四種の拷問）
扉 ウイレットの描いた鍔狩り
讀者通信……(22)
サディズムの精髄 吾妻新……(41)
切腹史談 中康弘道……(62)
男性的同性愛の謎 柒田玄……(172)
受難記（或る女の告白） 岡田唉子……(130)
第二回讀者座談会開催予告……(133)
關次外傳 白秀妖異聚樂第 戸崎平馬……(97)
らぶ・すれいぶ（第三回） 鬼山絢策……(129)
鉄格子の中にて（女囚私刑体驗記 其の二） 小坂多美枝……(42)
黒井珍平さんへ 羽村京子……(50)
玲子さまへ 艶書通信 高野すみ子……(68)
文学及び歴史に現れたるサディスムス 仁比山等……(76)
人類に於けるサディスムスの傾向
悲痛と快樂 波多野新……(80)
第七天國の夢想 梅井清……(90)
伊藤晴雨先生へ答えて 黒井珍平……(92)
—男性ヌードと實寫眞について—
我が軍隊時代の懐古 森原太一……(94)
屍し臭しゅう 丹波太郎……(120)
色情の價値 角田平八……(100)
猿轡雜考 千葉三郎……(98)
白い便器の幻想 芳野眉美……(170)
伊藤晴雨氏の解答を読んで 和泉としお……(112)
破つた日記帳 川端多奈子……(114)
眼を中心とした猥褻人相学 高島青峰……(116)
心中雜考 七條美樹子……(120)
（緊縛女優列傳）
縛られた女優たち 升岡金吉……(107)
アドニスの灯 鷲巣千芳……(140)
續・不貞の倫理 二人の會話 貴崎郷子……(148)
ジプシイの性的生活 有馬正秋……(154)
悲劇的な喜劇 笹田豊……(161)
淫 みだらび 火（第三回） 松井籟子……(164)

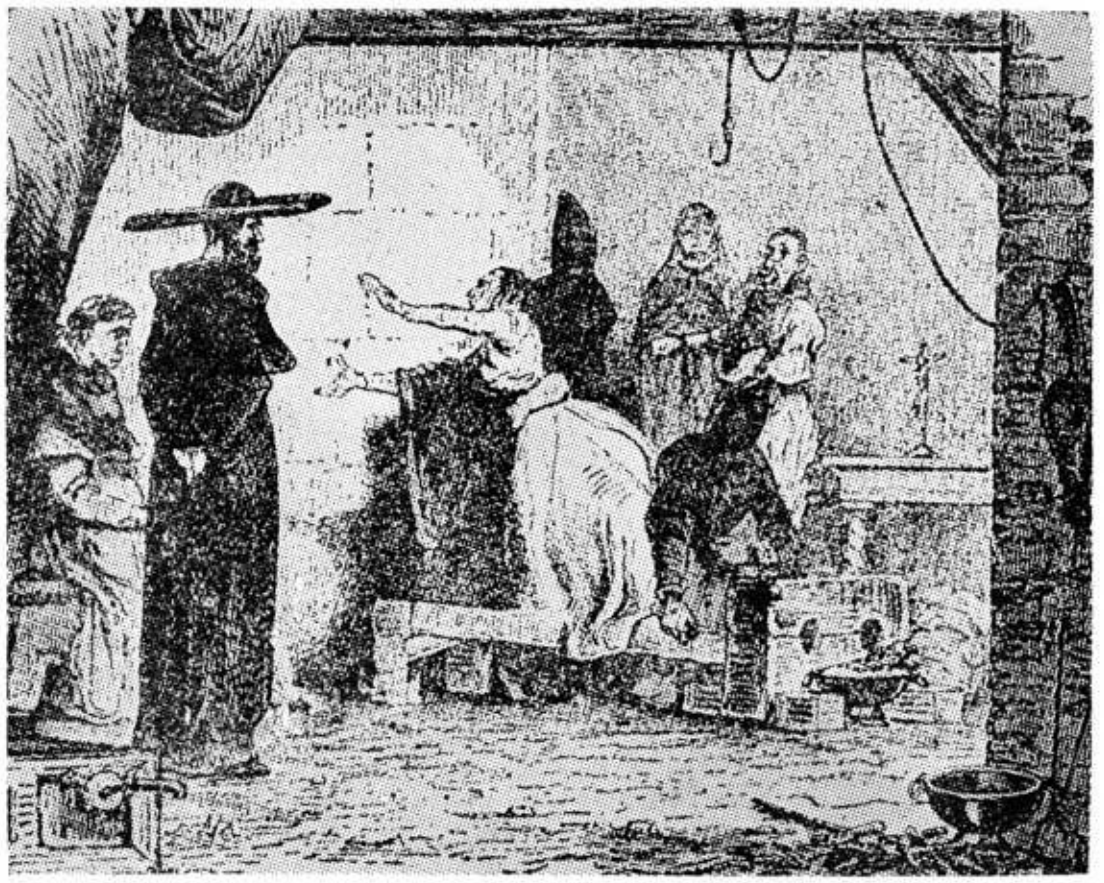
★東西拷問くらべ★

刑罰と密接な関係にある拷問は東西その所を問わず行われ来つたものであるが、言う迄もなく拷問は責め道具であつて刑罰そのものではない。併し中には拷問と刑罰とが一緒になつて其の区別のつかないものがある。言い換えれば拷問そのものを刑罰として殺すのである。何んな拷問でも強くされゝば必ず死ぬにきまつている。罪科によつては拷問的刑罰を行うこともある。宗教刑罰の多くは残忍極まる拷問の果と云つてよい。

此の恐ろしい拷問は一体何時頃起つたかと云えば矢張り刑罰と同時に始まつた事は確実であろう。太古の埃及、フエニジア及びアッシリア等にては既に拷問を行い、ギリシヤに至つては女までも拷問にかけて責めたばかりでなく、その皮を剝いだり、肉を剝つたり、車輪にかけたりして虐殺した事もあつた。

スペインに於ける宗教裁判拷問

笞責め



火責めの仕度

火責めの仕度――足枷のついた死の床では被拷問者が台上に縛られようとしている。火桶には薪が既に燃やされている。火責め――フイゴで炎々と燃えた薪で赤く焼かれた金棒が身動きも出来ない哀れな犠牲者の足に押し当てられ、異臭を放ちながら焼け爛れていった。

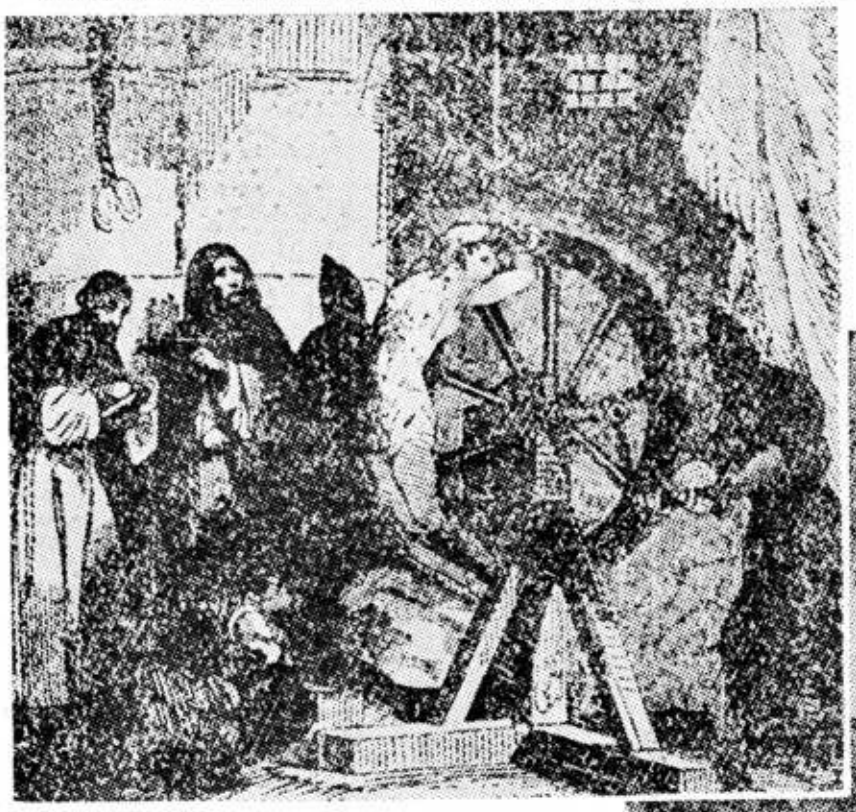
火責め

水責め——仰向けに台上に縛された被拷問者の顔の上へ絶えず少しずつの水が注ぎかけられる。初めは口を結んで堪えても息をしようとして口を開けば水が口中に入り、次第に腹の中に満ちるという絶え難い拷問である。

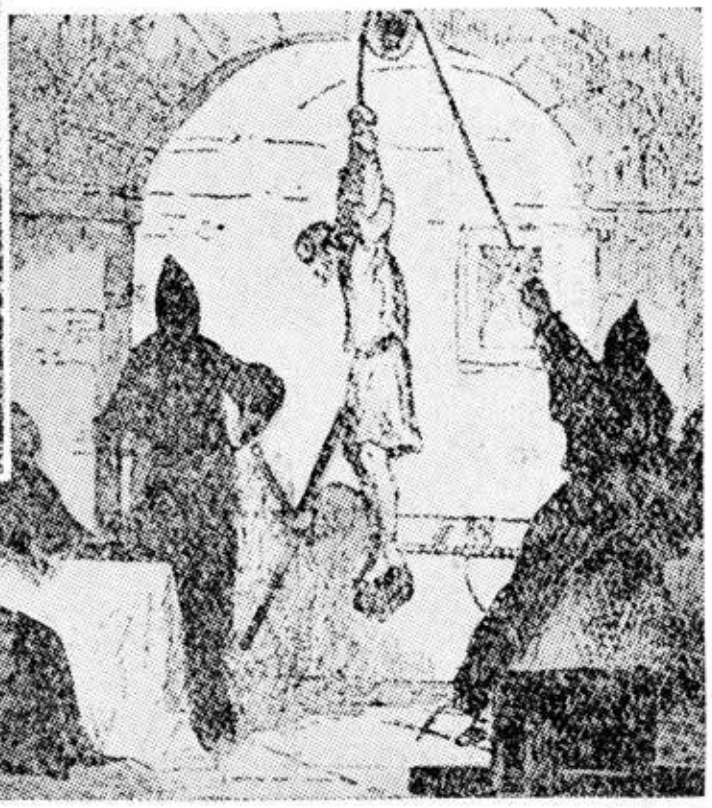
水　責　め

吊し責め——両手を括つて滑車で吊り上げ足には鉄の重しをつける。

のばし責め——手と足とを別々に車輪を用いて極度に伸長せしめる。



吊　し　責　め

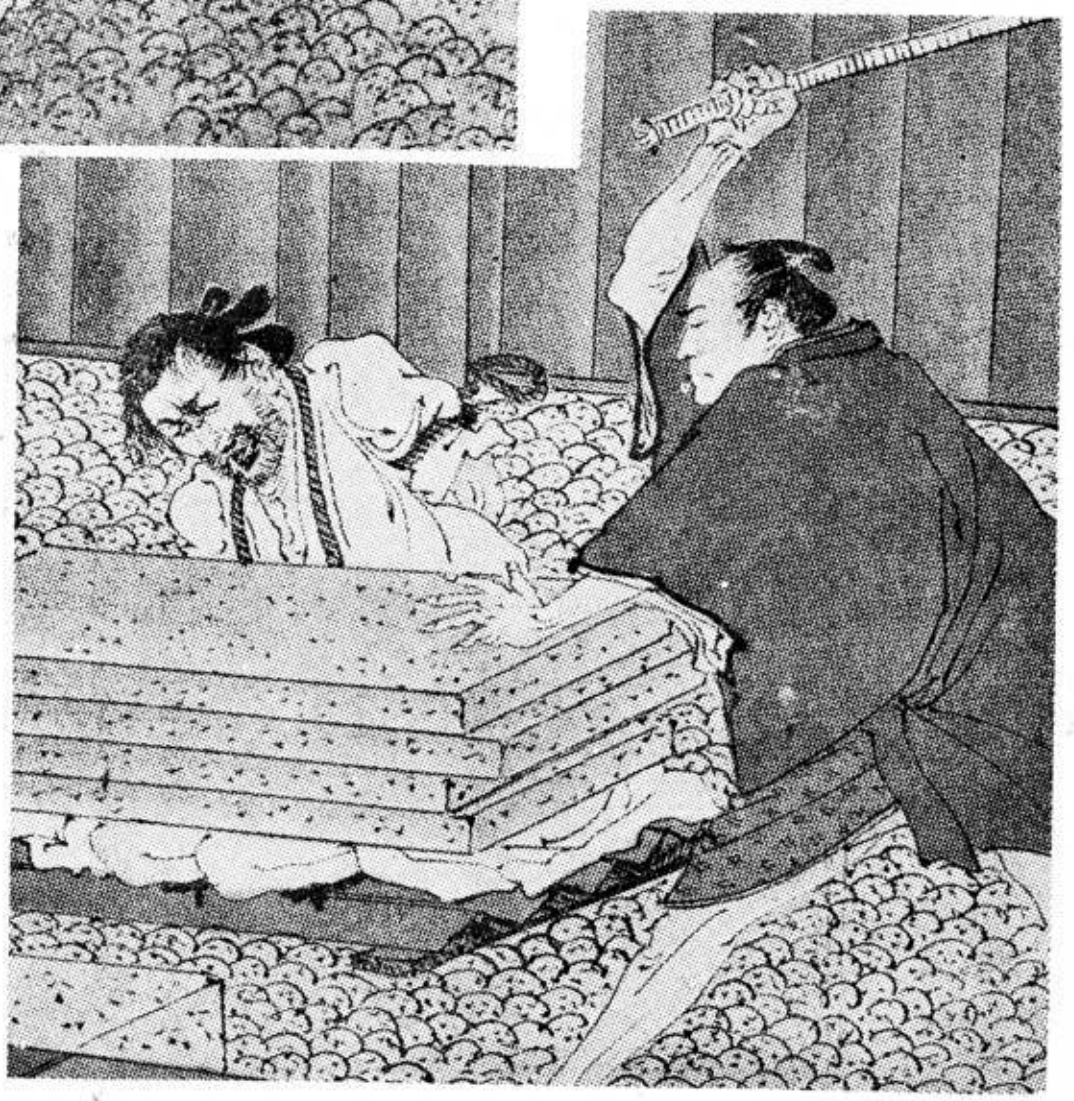


のばし責め

江戸幕府四種の拷問

我が国で罪人を訊問するのに拷問を用いた事は極めて古くからあり、その方法も水責、火責、或は水牢、木馬等考えの及ぶ限りの苦痛の仕方の案じ尽して行われたが江戸幕府に至つて、拷問の方法を答打、石抱（算盤責め）海老責め釣責めの四種に一定して、答打、石抱、海老責を責問いと云い、釣責を単に拷問と唱えた。

答打ち（女子）



算盤責め（男子）
一名 石抱き

拷問――訊問、拷問は普通白洲で行うが特に海老責と釣責の二種は別に牢内の拷問蔵にて行つた。拷問の出役人は、第一吟味方（掛り町方与力、今云う主任）で、次は書物役（かきものやく）（町方吟味方下役同心）御徒目付（おかちめつけ）、御

笞打ち（男子）

小人目付（御目付方）次は、鍵役、次は打役（牢屋同心）次は牢医者次は牢屋下男、非人等である。吟味方は町奉行組与力、吟味掛りの者にて此の与力の内、主任者があつて、奉行の命を受けて拷問を掌る。

奉行が色々と嫌疑者を吟味して歴然とした証拠があつても白状しない時は用部屋の与力に命じて此の嫌疑者は何々の罪を犯した証拠があれど白状しないから拷問にかけ、此の点に関する

算盤責め（女子）

別名　石抱き

口書を取るようにと添書を認めさせ同心二人を附添えて伝馬町の囚獄方へ送つた。

伝馬町では牢屋同心が語句を荒らげて叱責し、それでも白状しない時は愈々拷問にかけるのである。口書を取れば之れを奉行に廻し奉行は裁判の申渡しをするのである。

笞打――囚人を白衣にて手錠をはめたまゝ引出し打役は囚人を莚の上よりおろし手錠をはずして諸肌をぬがせ下男と一緒に太繩にて後手に縛り左右の腕先は背後の肩まで順々にしめ上げ、その繩尻を前後に引き分け下男二人でこれを引つめ囚人が動揺しないようにする。

これだけでも苦しいは甚しいという。そして打役は先づ一方より箒尻即ち拷問杖にて囚人の肩を力一杯叩く。又時によつては左右から打役二人で互い違いに叩く事もある。囚人動いて転ぶ時は下男後より繩を以て引起し更に打つ。皮肉破れ血がはしり出る、血が出れば下男は砂を疵口にふりかけ、血止めをして更に其の上を打つ。此の様にして或は打ち、或は問いして打つ事百五六十にして尚白状しなければ、第一回の拷問は止める。

石抱き――笞打拷問にて白状しない時は直ちに石抱きにかゝる。これは一名算盤責めという。石抱きは真木又は算盤板という三角形の台を庇受柱の前に据え、囚人をその上に尻をまくつて坐らせ、縛つたまゝ、体は柱にくゝりつけ膝の上に石を五枚のせ、尚白状しない時には十枚に至る迄増す。責石は伊豆石で作り巾一尺長さ三尺厚

海老責め（女子）

吊し責め（女子）

さ三寸あり、目方は一個に付き約十三貫匁である。その石は五枚にて囚人の顎の辺まで届く。

見る〳〵口から泡を吐き鼻水をたらす故、藁を石の上にのせて首を受けさせる。石は落ちない様に太繩にて縛り柱に括りつけておく。この様に五枚積み、七枚積み、十枚積みて時間が経てば、全身は悉く蒼色と変り、口鼻より泡を吐き又は血を吐くに至る。こうなつても尚白状しない時は、下男が左右よりサアどうだどうだと石を動かすので脛の肉はめり〳〵と真木に喰い入つて骨も砕けるばかりである。時間は大抵三四時間であるが、大抵の者は六七枚で或は絶息し或は寝入るようにイビキをなし、殆んど精神恍惚のようになる。囚人の足先より次第に色が変り追々上に及んで股腰に至る。その蒼白の色が若し腹部に及べば絶命に近いから立会の医者は注意をする。最早やこれまでと見込んだ時は、打役に命じて石を下させ、下男も非人も打寄り総掛りで取片付をし囚人は釣台にのせ仰向けに臥させ、医師は気付と冷水とを与え牢内へ非人に送らせる。

〝海老責め――前の笞打、石抱にても尚白状しない時の海老責めにかける。海老責めは一名箱責めともいゝ拷問蔵で行う。扨て海老責めは笞打又は石抱きの責問の後数日を経て身体が本に回復した後に初めて行う。図の様に手を背後に縛つて身体を屈げ、両足と顎と密着する迄堅縛して、凡そこのまゝで三四時間放置するこの様に縛られて、やがて一時間もすると全身真赤に

吊し責め（男子）

なり冷汗が流れ出る。それより更に時間が経てば次第に紫色に変じ次に暗蒼色となる。尚放置すれば蒼白となる。既に蒼白に変る時は最も早や死に近ずいたのであるから縛をとく。然しこゝまで堪える者は殆ど稀である。海老責めは火附盗賊改め中山勘解由が此れを始めたと伝えられているが、海老責め以外の三種の責め方については、その起原来歴は審でない。

釣責め——前の海老責めでも尚白状しない時には釣しにかける。釣し方は手を後手にくゝしつけ紙、藁を巻いた上より青細引縄にて梁に引き揚げ、足指先が地面から三寸六分程離れる位にする。こうすれば縄は次第に皮肉に喰い込み、後手は逆手に吊り上げられるので其の苦痛は最も堪え難いものである。此の様に釣し上げて数時間にもなれば足の爪先より血汐がしたゝる事があるという。拷問中白状した時は、責めを免し、医師は気付を与え水を飲ませ、陳述を聞いて白状書を作り本人に読み聞かせ拇印を押させる。拷問は死罪以上証跡十分なるも本人が白状しない時に施すもので、証拠も挙らず曖昧の囚人に猥りに施すものでない。

海老責め（男子）

1888年ウイレットの描いた「鰐狩り」

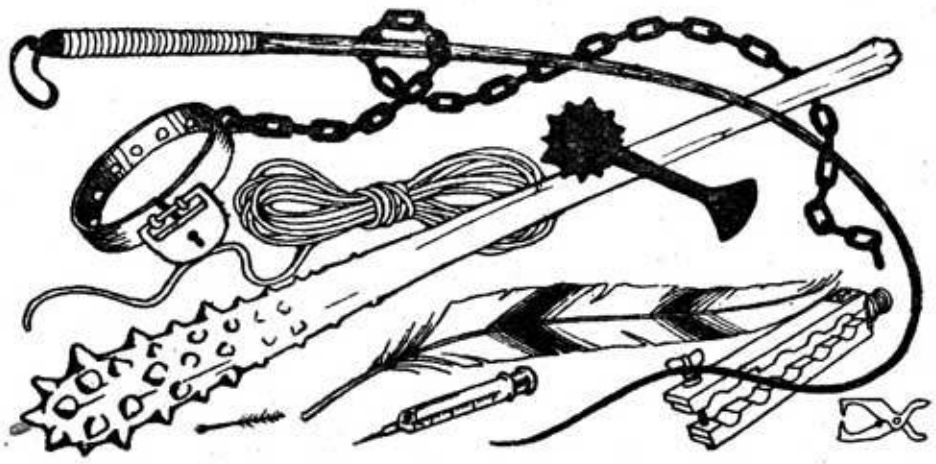
（裸の女を見せびらかして鰐をおびき寄せようとはなんと考えた手段であろう）

新時代の風俗雑誌

奇譚クラブ

三　月　号

（第七巻第三号通刊第五十三号）



サデイズムの精髄

——古川裕子氏の「囚衣」をよんで

吾妻新

1

私は本誌の六月号から最近号までずつと目を通していますが、十二月号の「囚衣」ほど印象に残つた記事を知りません。おそらくそれを読まなければ、私はサデイズムについて公刊の雑誌に書く気は終生起らなかつたでしょう。

なぜ「囚衣」がそれほど印象に残つたかといえば、これは日本はもちろん、ヨーロッパの文献にもない貴重な資料の一つとなるだろうからです。私は過去二十年間この方面の研究は怠らなかつたし、海外の稀書もよんでいますが、「囚衣」のごとく完全なサデイズム(筆者の古川裕子氏からいえばマゾヒズムになりますが)の精髄を描いたものは全くないと断言することができます。まずその理由から説明いたしましょう。

サデイズムといえば誰しもサード侯爵を第一にあげます。たしかにサードは稀代のサデイストといえますが、だから彼のサデイズムが比類ないとか完全だとか云うのは誤りなのです。これを論ずるとたいへんですが、一言で要約すれば、彼流のやりかたは、自己をも他人をも幸福にしないということです。彼の実際に行つたことや、空想の世界で行つたこと——つまり「ジュスチーヌ」や「化粧部屋の哲学」の描写などをみると分るように、彼の方法はたゞ女を傷け、血を流し、ある場合には死に致らしめるのが原則であつて(性行為はもちろん含まれますが、こゝでは問題にしません)、惨酷さが彼の生命なのです。ところが彼の名があまりにも喧伝されたため、サデイズムは残酷の代名詞のように誤解され、残酷さが甚だしければ甚だしいほど、徹底したサデイズムのように考えられがちなのです。

だが私は、単純な残酷さを生命とするこの種のサデイズムを粗野な、古い型に分類しています。それは近代以前のもので、古代からあり、現代にもどこにでもある極めてありふれた抑圧衝動の変型なのです。だから軍隊や警察や戦場のように、ある条件が与

えられるとほとんどすべての人間に、程度の差こそあれ復活してきます。いわば飢餓をみたすための衝動ですから、もちろん相手の幸福などは計算に入れないし、自己の快感も、飢餓がみたされると同時に消滅します。いわゆるサデイストは、大半がみたされない人間なので、彼らが異性を傷けたり暴行したりするときの快楽は、けつしてしみじみとした幸福感ではなく、ぐでんぐでんに酒を飲むのとおなじ心理、興奮のなかの自己忘却です。したがつてこれを繰り返せば、酒量がふえるのと同様に刺戟を強めなければならなくなります。サデイズムの究極が殺傷に走るのは、本来は刹那の満足をあたえる性質のものをくりかえすことによつて、弱まつてゆく効果を維持しなければならないからです。

ところが一方には、まつたくあたらしい、精練されたサデイズムがあります。これが古い型とちがう点は、第一に、肉体的苦痛より心理的苦悩をあたえることです。拷問ではなくて折檻であり、惨酷ではなくて凌辱することです。第二に、暴力で相手を屈伏させるのでなく、啓蒙し、教育し、そのよろこびに参加させることです。第三に、刹那的衝動的でなく、日常生活のなかに採り入れて永続させるように計劃を立て、あらゆる準備をととのえることです。

その結果、サデイズムは一時的な狂暴の形をとらず、無限の変化と刺戟に富んだ快楽と化します。しかもそれは自分にも相手にも納得ずくの満足をあたえるので、しみじみとした幸福感を損わず、荒んだ生活に墮ちることもないのです。もちろん、犯罪的な色彩も帯びませんから、社会に害を及ぼす不安もないわけです。

2

サードを頂点とする古来さまざまのサデイズムの小説は血なまぐさい場面が多く、フランスやドイツにザラにある鞭打小説の類も多くは血みどろのシーンを描写しています。しかし、たとえば鞭打にしても、血の流れるほど打つことは相手を無感覚にすることです。極度の苦痛は失神状態におとしいれるので、苦痛を与えないのとおなじ結果になります。だから在来の古いサデイズムには深さがありません。中世の宗教裁判の絵などは、恐怖をあたえるかもしれないが、真のサデイストにとつては少しも満足しないのです。乱歩の小説にしても、すぐにメスで切り刻んだり、手足をバラ〳〵にしたりするが、この種の惨酷さはどんなに手を代え品を代えても単純極まるもので、なんら興奮を感じさせません。

そこで古川裕子さんの「囚衣」ですが、この特異性は私がさきにのべた新らしいサデイズムの条件をすべて満たしていることです。（これは貴重な文献になりますから未見の方には是非一読をおすゝめします）たとえばこの夫婦関係において夫はサデイズムを妻に強要していません。欲望しながら抑えており、たゞ妻がそれに応じてくれるのをひそかに願つていたのです。一度、酒の力をかりて妻を縛り、猿轡をはめますが、そのあとで「怒つた？」とやさしく訊ねています。たまたま妻が典型的なマゾヒストだつたので、事態は急速に発展しますが、もし妻がいやだと言つたらおそらく二度と暴力に訴えたりしないでしよう。そして、忍耐ずよく、じぶんの欲望に同意してくれるまで、啓蒙をつづけたでしよう。

この夫の知性と洗練された趣味とは、もちろん妻の同意があつたからですが、責め方に遺憾なくあらわれています。きわめて科学的且つ計劃的です。妻の体力を考慮して週一回に定めたり、折檻の標準表をつくつたりしたこともその一つです。またそのサデイズムが単純な肉体的苦痛よりも心理的凌辱に周到な準備をしていることも注目すべきです。たとえば懲罰の形式をとること、その罪の重さに応じて、折檻の内容に変化をあたえていること。正式の折檻をはじめるまえに、いろ〳〵の手続きをおいて、心理的苦悩をなるべく永く引き延ばしていること。

猿轡がどうでもよい布切れでなく、あらかじめ念入りに用意された夫の褌で行われ、そのもつとも汚れた部分を口に当てて、汚辱感を百パーセントみたしていること。この場合には鏡にうつされたその姿をみること、いやでも汚臭を嗅ぐことで、視覚と嗅覚が大きな役割りをしています。元来繩で縛ることと猿轡とは肉体的苦痛よりも、自由を奪われて何をされても抵抗できないという状態をするどく意識させるためのもので、あたらしいサデイズムのいちばん魅力のある方法なのですが、特に猿轡はそうなので、ごく最近になつてサデイズムの王座を占めるようになつています。これは明白に、残酷から凌辱へと進歩してきたためです。だから今日では、もう猿轡は単に声を立てさせないだけのものではないはずです。口に紐や手拭をくわえさせるやりかたは古い粗野な型にぞくし、豆しぼりの手拭なども伊藤晴雨式感覚です。たしかに猿轡は声を立てさせないのが目的だけれども、サデイズムの真髄はさらに凌辱感が伴はねばいけないので、それには「囚衣」のように臭いズロースを押しこみ、さらに鼻と口を夫の褌の汚れた部分で掩うようなのが理想的です。猿轡については、まだ書きたいことがたくさんありますが、またの機会に譲りましよう。

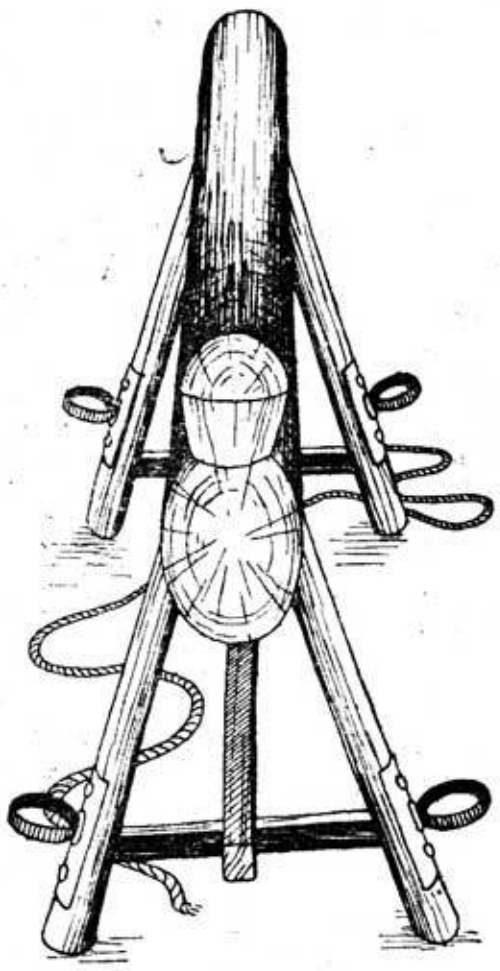
縛り方も、この夫婦は多くの責め絵や写真を研究していろ〳〵工夫しているようですが、おなじ原理でゆくならば、苦痛よりも苦痛にみえること、屈辱感を深めるような点に努力すべきで、むやみと複雑な縛り方や、神経麻痺を起したり脱臼したりするようなことはむしろ避けるべきでしよう。私に言わせれば、倒さ吊りなどは邪道で、古いサデイズムにぞくします。なぜなら、倒さに

【読者通信】

私は沖繩本島に住む極く平凡な独身青年ですが、偶然書店で奇譚クラブを求めてから熱烈な愛読者となり私のあこがれと充たされぬ夢とを慰めて貰う好伴侶となりました。

KK通信も是非拝読いたしたく又奇譚クラブも沖繩ではすぐ売切れてしまいますので直接お送りしてほしいと思います奇譚クラブは沖繩では三十五円です。送金方法としましてはまだ日本と為替が組めず此方の切手も通用しない様で大変困つております。然し小包は自由に送付出来ますから沖繩の特産品例えば黒糖等御希望の品物で日本での原価に相当する額を送付して費用に当たいと思います。こちらから先に送付致しますが、若し他によい方法がございました御教示願います

記念のために此方の切手二枚同封しておきました。同好の方々との文通が出来ましたらこんな嬉しいことはないと思います。戦後の沖繩は今では日本とは外国みたいになつて通信や送金等大変不便を感じています。この点からも日本復帰の一日も早からんことを切望しています。この点私の御願いは貴社様にも色々お困りになることもあると思いますがよろしくお願いします。（沖繩本島小禄村高良　銀条　照文）



なつた時から頭は充血し、かるい失神状態となり、するどい明白な意識のなかで凌辱を味い味わせる境地とは遠去かるからです。また縛るものについて云えば、鎖や荒繩はやはり犠牲者の意識を単純な苦痛で濁らせるので、理想的ではありません。ヨーロッパ人、とくにドイツ人は鎖が好きで、ヒルシュフエルトの書物には鎖で縛つた写真がたくさんありますが、これはいずれ別の機会で述べたいのですが、サデイズムの世界では東洋人のほうがずつと進歩しているからです。緊縛は、からだの自由の奪い方（姿勢）が重要なので、直接手首や足首に食いこむ痛さはマイナスなのです。私はいろいろ研究した結果、あまり太くない布製の紐がいちばん適しているように思います。

緊縛それ自体で満足する人はべつとして、そうでない場合はこれから行う折檻の準備なのですから、えび責めのような形ですでに苦悩を発散させてしまうのは愚策です。いちばん心理的効果のあるのはベットに俯伏せに縛りつけることで、手と足を左右にひらきます。これは後ろ手よりも肉体的に楽でありながら両手が身体から遠去けられているという不安感を増します。また身体のどこに、どんな攻撃が加えられるか見ることができない点で、いつそうすぐれています。足は大の字に開かず、また固定せず、別々に長い紐でベッドの両脇につなぎ、足を最大限に合せようとしても十センチほどの間隔しか許さないようにしておきます。するともがけばもがくほどそれ以上に足を開げる外ないという状態で、この擬似の自由が羞恥心を傷けます。

鞭は、「囚衣」では通常巾四センチの厚い革のバンドを用いるとありますが、私はやはりしなやかな革紐かゴムの鞭のほうが効果的と思います。なぜなら痛さのわりに音がよく、聴覚を刺戟するからです。鞭打は一ヶ所を無感覚になるまで叩くべきではありません。絶えず場所を代えて、刺戟に馴れぬように注意するべきです。

3

「囚衣」の卓抜さは、長期刑にあります。手枷足枷をつけ、柱につないで一週間も拘束すること、そして好むときに更に折檻を加えること——これはサデイズムの完全な形のひとつです。ただゴム引きレインコートを着せることは特殊なコンプレックスで一般性なく、あなた方だけの知る心境でしよう。

あなた方夫妻はあらゆる体位、あらゆる方法を用いるとのことですが、サデイズムに残されたいま一つの大きな問題がありますそれは着位の問題です。

ふつう裸体にすることがサデイズムの前提のようになつていますが、裸体は決して最高の、ないしは絶対の状態ではありません

といつても、伊藤晴雨のように長襦袢だとか髪のほつれなどを言うのではないのです。そんなものはいかにも古風で、彼の責めと同様、すでに時代感覚を失つています。私の提唱したいのは、女にズボンをはかせることです。もしキモノをクラシック、裸体をリアリステイックとすれば、ズボンはロマンテイックです。なぜなら、裸体は特に夫婦の場合にはめずらしいものでなく、現実そのものであつて想像を働かせる余地がない。またキモノやスカートは下半身の線をあまりに隠しすぎて強烈な視覚の満足をうることができません。ところがズボンは、肉体の線に合せて作られるものです。どのようにでも密着させることができるし、どの程度に想像の余地を残すかも自由です。しかもそれは用いようによつてサデイズムのりつぱな道具となるのです。

きわめて小部数の珍本で、キドロドシユトツクの「クリスチーヌの受難」というのがあります。（キドロドシユトツクは変名でその名を分析すれば分るように鞭打愛好者で他に二百部しか印刷しない「Stays and Gloves」というやはりサデイズムの小説をかいています）その中で美しいクリスチーヌが無数の折檻を受けるのですが、サデイストの男はじぶんの留守に看視人が犯すのをおそれて、彼女に変つたズボンをはかせます。それは汚れきつたズボンと上衣とを縫い合せたもので、背中を開くようにし、ふだんは紐ですつかり緊め、留守にするときは紙で封印をします。その封印を切るのは彼だけの特権で、夜かえつてきて彼女を犯すときに限られています。ところがそのズボンは素裸の上にはかされているので油じみた粗悪な布地の感触は絶えず彼女を刺戟する上に、胴の寸法をわざと短かめに作られたので、間断なく股間を苦しめます。しかもそれはぜつたいに自分一人で脱げない服装ですから、便所にゆくにも哀願しなければなりませんが、それを口実にまた虐められます。看視人は主人の留守に犯せないので、しだいに狂暴となり、閑さえあればズボンの上からいどみ、看視人の妻は嫉妬からまたクリスチーヌを責めるのですが、しまいには折檻そのものに興味をもつて、三人がかりで毎日、夜となく昼となく弄ぶようになります。さてその責め方ですが、縛つて猿轡をはめておいてから、ありとあらゆる凌辱の方法を用いるのです。過度に肉体的苦痛をあたえず、つねにするどく刺戟を感ずるように、痛さに麻痺しないようにするのです。たとえば鞭で打つにしても身体をぐるぐる廻して場所を代えるし、くすぐるのもホンの僅かにとどめ、抓るのも時間をかけて、ゆつくりやるのです。

その中の一つに、股間を縦に縛る方法があります。よごれたズボンの上から、両手を縛つた細を尻をとおして前にまわし、強くしめたバンドの下をくぐらせて、その端をもつて踊らせたり淫らなポーズをとらせたりするのですが、それもただ股を強く締めつけるようなことはせず、自由にゆるめたり圧迫したりして、凌辱に主眼をおいています。つまり、裸体を縦に縛るのは痛いばかりで意味がないのですが、ズボンの上からだと傷も与えず、犠牲者は肉体の苦痛よりも鏡にうつる浅間しい姿に、牛馬のごとき汚辱を満喫させられるのです。

キドロドシユトツクのサデイズムはこのように深い境地に達していますが、われわれはこの上にもつとさまざまのヴアリエーションを加えることもできます。たとえば革鞭に機械油をつけて叩くとします。幾日かたつうちにズボンは、どの部分がいちば

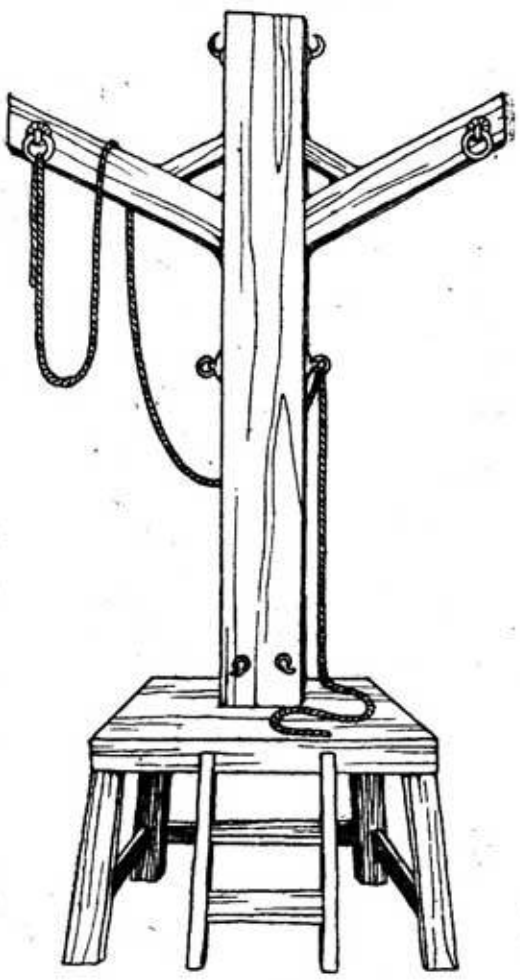
ん多く叩かれたかを、黒ずんだ汚れから物語つてくれます。そして、ある部分を真黒く塗りつぶしてゆくこともできます。それを日夜眺め、味わなければならない女の気持を想像すると、やはり洗練された凌辱の方法となります。また、「囚衣」の場合には通常の営みを必要としないようですが、一般にはこうした遊びのあとでコイタスするのですから、それも一々ズボンをぬがせずに、股間に小さな穴をあけて、着衣のまま行うのも興味ふかいと思います。すくなくとも私はそれを好み、実行しています。

4

終りに一言したいのは、このようなことが果して罪悪か否かということです。「囚衣」の筆者はこう告白しています。

「このような悪魔に魅入られた夫婦の異常性は、正常な人間性への冒瀆であり、神の赦し給わぬことであることはよく知つています……」

そうでしょうか。私がまだ学生時代、同性愛にかんする浜尾四郎の記事にたいして批評を送つたのにたいし、彼から感動した手紙をもらつたことを思いだします。当時は同性愛ですら、暗い犯罪めいた偏見にとりまかれていました。しかし、ハヴェロック・エリスが正しく言つているように、お互いが完全に満足するかぎり、いかなる性行為も神聖であり、人間性を冒瀆することにはならないのです。病的とかアブノーマルといふ言葉は、最大公約数の人間を中心につくられた言葉にすぎず、しかもひとたび固定してしまつた古びた性観念のおかげで、アブノーマルと呼ばれる人たちがどの程度に少いかを知る方法がなくなつてしまつたのですあなた方夫婦のいずれかが他を強制し、暴力で従わせるのでないかぎり、また第三者にそれを求めない限り、どんな方法、どんな条件で幸福をえようとも自由です。何人もそれに干渉する権利はないし、社会全体としてもなんの支障も受けないのです。



サデイズムという言葉も、すでにのべたように反社会的な危険な色彩に染め上げられています。それは惨忍な犯罪者のあらゆる蛮行のおかげです。しかし私たちは決して他人を害しようとも思わないし、不幸に陥れようとも考えていない。ただ合意の上で性慾の満足をみたそうとしているだけです。魚を食う場合にも、ある人は刺身を好み、ある人は塩焼を好むでしょう。また性行為にしても、ある人は前位を好み、ある人は後位を好むでしょう。強制を伴わない、精練されたサデイズムも、趣味の問題であつて、なんら道徳の問題ではないのです。

関白秀次外傳
妖異聚樂第

戸崎平馬

一

ポルトガル渡来の修道士、ルイス・フロイスが説き進める天国の福音が秀次には判らないでもなかつた。然し彼の苦悩、それに由来する殺人と淫楽の日常は、死ぬ迄解決し難い底のものであつたのである。

「踏躙された花は二度とは咲かぬ。元木に増さる花も無く、まして向くべき刃も向け得ぬでは、自然誰彼無しに斬りもしよう。酒も呑む。信仰も所詮は妥協に過ぎなかろうではないか。御坊、哀れと思わば思え、我と知りながら滅びの道を地獄に向う男、それが此の関白秀次の姿なのじや。」

フロイスは、聰明で、万事知り尽しての上で、淫虐の限りを尽そうと云う秀次の、天魔に魅入られた魂を、救うすべが見当らないのであつた。

世の風説では、数多の妾の上にも、大名の奥方の美貌と見れば捨ておかぬ秀吉の好色故に、秀次も北の方一の台様を、秀次の奥州出陣の内に寝取られた、という事である。

フロイスは其の噂を聞いて秀次に同情を感じていた。然しそれと是れとは別問題と、信じるのだ。それにしても、聰明すぎる程の性格が、却つて此の人の身を傷つけるのだ。ともフロイスは嘆じた。

手にした盃を乾したと思うと、投げるように卓におく。秀次は俄かに高笑いした。

「はて、よしない事を聞かせた。闇の子には地獄の快楽が待つていようと申すもの。御坊には珍らしい地獄廻りの案内しよう。お辰、先に参れ。」

お辰と呼ばれた女性の、眸の黒い切長な眼は、青いフロイスの瞳にも、艶やかに美しく映じる。すつと立つた秀次に続こうとする近皆の衆を、ゆつたりと手を上げて、

「そち達は参らずともよい」

と秀次は制止した。

花のような薫りを残して、秀次とお辰の方が先に立つ。フロイスも続いて幾つも幾つも広い部屋を通り過ぎた。

やがて、藏の前に似た作りが、行き止りであつた。立止つた秀次が囁くように言う。

「是れが地獄の入口、此の戸の内に入れる男は今日迄此の秀次一人。」

フロイスの胸に、何となない不安が漲む。それを吹つ切るように、彼は秘かに十字を切るのであつた。

黒髪長く打掛の裾を捌いて立つたお辰の方の白い手が、大きな鉄の錠に掛つたと見ると重い金具の軌る音、やがて錠は外れ、厚い扉が音も無く内に開く。

唐草の錦羽織の秀次が、まず吸い込まれるように入る。お辰の方、それにフロイスも続いて入つた。薄い明りの中に、三つの人影は朧に浮かんで歩いて行つた。

長廊下の行き詰まりに、又扉がある。その扉も開いた。すると又、果知れぬ長廊下、右も左も眩い許りの銀燭の林である。白光に照らし出された壁の絵は、金銀七宝を鏤ばめた朱塗の枠に、丹青凝らした男女秘戯図。表裏四十八手と耳にのみ聞いて、眼に見るは始めてのフロイスである。逸らすとすれば猶のこと、近々と眼に映る妖しい姿態、上になり下になり、左に右に、寝つ起きつ、何れも観喜に身を焼く色相の諸々が、奥深い聚楽第の密室に、くり拡げられているのであつた。

「地獄の一丁目、眺めも又格別とは思わぬか御坊」

秀次の声は酒気に濡れて、深山の怪鳥の叫びにも似る。陰にこもつた笑いであつた。

「憚りながら出家の身には迷惑でもござろうもの。」

フロイスの返事に腹も立てず、笑いが一段と高まつた。

「ま、よいわ、次の間で休息致されい。」

指さす迄もない、手ずから秀次が廊下の突き当りなる扉を引くと、フロイスは、むつと噴き出す暖気、奇香、芳熟な花園に遊ぶ心地した時、早や扉は彼の背後で閉つていた。

すべ知らず立ち尽くすフロイスの、やゝ暗がりに慣れた眼前に、淡紅色の光線が漂うように流れている。壁には紅の帳、床には緋の絨氈、たゞ一方の壁のみが、彼の生国ポルトガルにも珍らしい、総ギヤマンの鏡となりその前の寝台には絹が張り詰められている枕許のギヤマンの器に盛られた酒も血の色。一としお不気味な赤い部屋である。

ふわふわと弾みのある絨氈を踏み、寝台の端に腰を下そうとしてフロイスは驚いた。腰深く埋もれたかと思うと、すとんと仰向けに返りそうな弾みである。堪えがたい温気に加えて、湧き起る妖しげな楽の音、流石堅固のフロイスも、心いつしか浮き上る思いではあつた。

すると又、音も無く正面の帳が揺らぎ一面に現れたのは男女裸形の秘戯図はつと背後を振向けば此処にも又男女の睦み合う絵姿と見えた時は、フロイス既に心の落付きを失つていた。温み、香り、歌声、すべてが心を溶かし体を疼かせ、やがては捗け口を求めずには居れぬ妖しい其の場の雰囲気なのだ。逃れる道は何方と探すのフロイス手に触れた把手は左の方の帳の蔭に有つたのである。

おゝ、ゼゼス・マリア、と呟いたが、開いた扉の彼方は、是れこそ最も魔性の郷。広く仄明るい大浴場はすべて乳色の石もて築き上げられ、ほの〳〵と湯気の漂う中に、肌あくまで白く唇あくまで朱い裸女の群が、立ちつついつ、ねそべりつ、雪の肌を惜しみなく曝したまゝで、湯船に浸り合う秀次とお辰の方に待つているのであつた。

首を垂れたまゝ床に坐つて、フロイスが一

心にサンタ・マリアを祈念する折しも、一人の女が、つと立つた。湯段から此方へ気付かぬフロイスの前の通りすぎた。

一陣の薫香にはつと頭を上げたフロイスの前で、女は鏡に向つて立つ。豊かな乳房、くびれた胴、それにもまして幽かに麗わしいのは、緋の光に染められた皓体、鉄石のフロイスの身も心も蕩かさんずる魂胆と見える。女は血の色の南蛮酒をギヤマンの盃に注いで、白い喉もと滑らかに呑み干した。そのまゝに仰向けざま、寝台に裸形を横たえる。

我と我が膝を摑んだフロイスの顔に、脂汗が浮いている。思わず呻くように言つた

「お女中、何とか此の出家を救けてたもれ。戸口を開けてたもれ。命を失うより尚苦しいのじや。」

といつしか絶えていた歌声の甘い恋の囁きさながらに、一としお艶めいて響いて来た。寝台から起き上つた裸女は、其の楽に合せて手ぶり鮮やかに舞い始めた。雪の肌に光つた生毛の毛すじも見える程、フロイスの傍近く寄るかと思うと、一転して舞い戻り円い肩を妖しく揺りつゝ手ぶり足ぶりおかしく踊り狂つてみせた。桜貝のように形美しい指が、フロイスの眼の前で笑つていた。

鏡に映じた影と共に、裸女二人舞い戯むれるかと思う風情に、我知らず眺めていたフロイスは、はつと気付いて

「お願いじや、此の体を断ち切られるように苦しいのじや。此の上は、たゞ救してたもれ逃がしてはくれまいか、此の通りじや」

拝まん許りに頭を垂れた。

「ほゝゝゝ」……

強く嘴せるような女体の香りが近付いて、柔らかい手が、フロイスの頭を巻く。

「高が賤しい婢女に、何して気をお使いであろう。舞い疲れた、お膝を貸しては下さるまいか」

淡紅の柔肌が、崩れかゝるようにフロイスの法衣に取り付くと見えた。

弾じかれて立上るフロイス、其の手に切るは十字。……

「もうよい、お妙、案内して元のお部屋へ案内申せ」

その時秀次の声が湯殿からひゞいたのであつた。

二

此の湯殿での戯れが、傷心の秀次には、最も快い愉しみであつたのも、湯殿の遊びからであつた。

或る時、侍女一同を集めて湯に入れた事がある。十人余り湯に浸りながら、いそ〳〵と囁き交す折しも、事もあろうに秀次が、一糸まとわず入つて来たのである。

驚き慌てゝ這いつくばる女達に

「固うなるな、それでは石の弁天様じや、お互い裸になれば主従はない、あるに男と女の区別だけ」

皮肉な笑いを頬に刻んで、秀次は流し場の床に長々と横たわる。

「奥勤めの其方共、男の体は珍らしかろう。近う寄れ」

恥ずかしがつて尻込みする女に

「皆で、此の身を洗うてくれ」

一人ずつ近寄つて来た女ども、やがて皆して秀次の手も足も、胸も腹も、洗い流しするのであつた。

一方秀次は、一人の滑らかに厚い膝を枕に手足を委ね切つて、立ち廻る女体を品定めするのである。

「その方ども皆、生娘であろうような。そちは色が白いが細すぎる。そちは脂性かな。艶々として滑るようじやな」

「そちは又、格別の美しい肌じや。生目が細

こうて、肉付きもよい、うん、生娘に違いない。乳房が小そうて、乳首も鳩の足のような赤さ。何と申すな、何、お辰か」

やがて其の夜、お辰は夜伽に召されたのである。

こうした淫蕩地獄の原因は、一つに北の方の操にかけた疑い故である。それは叔父秀吉の無慚な性格を思い合す時、北の方自身の誓言にも拘らず、秀次を焦立たすのであつた。

若し真実彼女が、瀆されたものならば、恐らくは夙くに潔よく自刃していたに違いないと、北の方の性質を熟知していながら、時には、むら〳〵と湧く怒りに任せて、あの白く艶やかな喉もとを、姫君を設けて一層豊麗さを増した乳房を、抱けば温かく柔かな腹を、思うさま抉り裂きたい衝動を感じるのであつた。そして、例え彼女が汚れていても、それは北の方の罪ではなく、秀吉の悪業と思えば反省と同時に、一層向け所のない憤怒が、身内を焼くのであつた。

関白の栄職にあつて尚心晴れず、豪奢に任せた聚楽弟の密室に、秀次のすべてが堵けられていたのである。

女体の妖しい陰微さと、向け先のない破懐慾とに迷わされて、秀次の淫虐は日に日に募つて行つた。ふとした過失から料理人を惨殺した。通り合せた盲人も手足を寸断した。

姙み女は尚更彼の淫心を唆る。大きく膨らんだ腹を断ち割つた時の快さは、何ものにも換え難かつた。

忘れ得ぬ疑惑も焦燥も、暫しは遠のいて行くのだ。

秀頼の誕生に地位の危さを感じながら、彼の行状は一層激しくなつた。殺生関白の異名が都の内外に漸く高まりつゝあるのだつた。

今に何事か起る。それは秀次自身も気付いていた。秀頼可愛さに秀吉が自分を関白から追い落すのは、眼に見えている。其の口実となりそうな所行を気付いていながらせずには居れぬ秀次であつた。

三

文祿四年、秀吉上洛の知らせがあつた時秀次は来るべきものが来た。と感じた。

たゞ有りのまゝに生きる、その他に彼の生き方は無いような心地がしていたのである。

三日泊つた秀吉は、明日大阪へ帰るという夜、秀次に、次の間で寝るように頼んだ。秀次は不意討を気遣う家臣を制して、秀吉夫妻と襖一と重隔てゝ寝たなるようになろう、と捨鉢であつたのだ。淫楽と、心の葛藤に今は疲れ切つていたからである。

果して夜半すぎ、隔ての襖は音もなく開いた。

「何やつ、」

はね起きる秀次の眼に映つたのは、秀吉その人の姿。

「内談じや、まずは、」
言いさして、秀吉は秀次の前に坐つた
「甥も二、三に止まらぬが、そなたに勝る者はない。折入つての頼み聞いてはくれまいか他に頼る者とて無い。」
「されば叶う事なれば……」
命もさして惜しからぬ秀次である。
「他でもない、関白の職を秀頼に譲つてはくれまいか。」
「何とお易いこと、如何にも。」
「ならば朝鮮征伐の暁は国王に任ぜようぞ。」
「それに及ばず一つの願い。」
「何事じや。」
「こゝな妻の操、元通りにして賜ろう。」
秀吉の顔が急に緊張したが、又、同じ早さで笑み崩れた。
「そなた戯れが上手になつた。承知してくれて満足じや。」
「戯れではない。秀次の身に妻の操は天下も替え難い。此の条成らずば世は譲るまい。」
「何と申す、長久手合戦に不覚取つたも腹切らさずおいたに、関白とさえしたものを。」
「何の命が惜しいものか、恋妻の操をむざと破られて、何時でも不用の命、操さえ返して貰えば此の命は差上げ参らす。」
「女一人が何事じや、そこな女は此の頃可愛がつていると申すお辰か、ふつくらと抱心地よげな」
差しのぞく秀吉の顔は狒々に似る。
「おのれ。」
歯がみする秀次に、
「口惜しいか、此の女にも伽さしようぞ」
秀次ぐつと堪えて、
「何時なりとも」
「異存ないか」
「代りには秀頼殿の首じや」
秀吉の腕の中に抱かれた秀頼を抱き取つてその咽に刃を擬した時、円らな黒瞳が輝いた。
「や、たばかられた、是れは和子か。」
突嗟に思案もなく、刃は姫君の咽喉を突き貫く。血汐は蛇のように、白い喉首を伝つて流れる。
「此の姫も猿めの子やら知れぬ、是れで心も晴れたわ」
此の上は秀頼もと、追いすがる秀次の身の廻りに、何時しか取り巻く人数は、何れも血に塗れ髪を乱した異形の人群。
「此の秀次に恨み持つて来居つたか」
大刀を一と振り喰わさんとした時、
「殿様、何として――」
秀次の前に、北の方の愁いに満ちた美容が浮かんだ。あゝ夢であつたかと絞るような脂汗を双股脱いで拭いながら、秀次はひしひしと身に迫る黒雲の濃さを計る思いであつた。

四

果せるかな夜明けと共に、伏見へ出向せよとの命令である。白井備後木村常隆始め、重臣共の反対と押し切つて、秀次は聚楽第を出た。それが見納めとは知らず、北の方にも名残りを惜しむ暇さえ無かつたのである。
興に行く程に、秀吉の軍兵は行く手にはもとより、過ぎ来た道に迄溢れ、藤の森には増田長盛が待ち構えていた。
「太閤殿下お憤り深うござりまする。一とまず高野へお忍びなされませ、よきよう計らいまする」
秀次は昨夜の夢を又しても思い起していた運命はもはや定まつていたのである。何一つ悔ない迄に、色道を味い尽した秀次、命に未練は無かつた。唯々として高野に上つたのである。
七月の高野は既に晩夏であつた。蜩の降るように鳴く中を、凪は伽の僧と碁を打ち暮し

夜は、不破万作、山本主殿、山田三十郎と何れ劣らぬ美容の小姓を、交互に抱いては憂さを忘れた。

今は住う場所の故か、総身を綟り絞るような女体よりも、滑らかに味わい淡い若衆の体の方が、秀次の疲れ切つた心身には、深い慰めを与えた。

何れは死ぬ命、五年十年早めたとて何でもない。一生かけても味い兼ねる程の歓びを、此の数年に味い尽くし、此の上は美貌の寵童を供にして、潔よく果てるのが好ましいのである。

木食上人の命乞にも拘らず、七月十五日、日の内に腹切るよう検使福島左衛門大夫より通告が有つた時、秀次は、一席終る迄、と悠々と碁を打ち終えた。

主従一同湯を浴びると、携えて来た銘刀を一口ずつ小姓に与えた。別れの盃を酌め交しまず不破万作が庭上に設けた白砂の上に端座する。

万作は何れ劣らず花の咲く如き十八才の美童の中にも、天下一の美青年の誉れ高かつた拝領の脇差を頂き、両肌脱いだ。美女の裸身に勝るとも劣らぬ柔肌、小さく薄赤い乳首さえ、いとほしげである。雪より白い乳の下の肌深く脇差を立てた。

忽ち血汐が迸り、絹糸を投げかけたように溢れ流れる。苦痛を堪えて、右の細腰かけて一文字に掻き切る。切口から臓腑を摑み出す所を、じつと見つめていた秀次が、やおら立つて首をはねた。

秀次の瞳は恍惚として、その凄惨な美しさに酔うようであつた。

続いて三十郎、更には主殿も相果てる。いよいよ秀次自身の番となつた。

かつては盲人を斬りすてた因縁浅からぬ浪游の名刀を藤部淡路が手にした。

秀次は静かに双肌寛げ腹を撫でた。今迄人を斬る事数知れぬ身が、今は我が身を切り苛むと知りつゝ、秀次は何故か心の清々しさを覚える。

左脇に力限り突立てると、激痛が全身に伝る。押し堪えて右脇迄引いた。血がざーッと流れる。浪游が振り冠らされた。気配を感じた秀次は、待て、と止めた。

此の苦しみ、痛みが、是程快いものとは味つて始めて知る思いである。末だ直ぐに死には惜しいのであつた。鳩尾深くこの大刀を立て、力一杯竪に切下げた。下腹迄裂けて行つた。そこで始めて秀次は坐つている気力を失つて行くようだつた。

肩先へ切付けられるのを感じた時、彼の息は絶えていた。彼は幸福の絶頂で死んだ。

淡路は秀次の首を拝んでから、二度腹を突き刺した。背中迄刃先が露れる程深く刺し、十文字に切つた。

秀次の妻や妾達三十四人、何れも聚楽第を追われて押しこめられていた。

八月の二日になつて、三条河原に引出されたのである。秀次の首は刑場に据えてある北の方を始め、一人ずつ其の首の前へ連れて行かれた。皆、涙を流し、体を地に擦り付けん許りに嘆いている様は、秀次が如何に女達に慕われたかを知るに充分であつた。

やがて、北の方がまず首の座に直つた。三十過ぎながら二十程にしか見えぬ美しさであつた。彼女の首は、少しも恐怖も苦痛も露してはいなかつたと云う。秀次への哀慕の内に死んで行つたのであろうか。三十四人の血で砂も水も朱に変つて行つた。女達の操はこのようにして秀次のものとなつたのである。

（完）

◎アブニストの記◎

らぶ・すれいぶ

（三）

鬼山絢策

「あら、暫らく……」

艶然と微笑して歩み寄る春美の表情には昔の通りのあどけなさがあり、その笑顔には、私を電気にでも触れた如く、痺れさせ、其の場に縛りつける魅力を持つて居ました。

あゝ春美！ちつとも変らない。

あれから六年、彼女は二十七になつて居る筈だが、容貌は些かも老けず、只肉体のみが一廻り大きくなつたような感じで豊かな肩から腕へかけての肉ずきと言い、腰の廻りが特に大きくなつて、一層私を圧倒するような妖しさを漂わして居るのでした。

あの当時から見ると私もかなり世間を見て来た男になり、青年時代の引込み思案で憶病な性質から、大体常人程度の押しも出て来ましたし、自分の好みの美貌の女性に会つても、昔程はにかむ事はなくなつて居たのでしたが、初恋の女春美を今眼の前に見ると、どうにも眩しくて、視線を合わせて居られなくなるのでした。

「ほんとに久し振りですね。今どちらにお住い？」

「荻窪です」

「もう奥さんお貰いになつたんでしよ、お子様何人おありになつて？」

「……」

私は何故か答えられませんでした。

「おい、紹介しろよ」

池崎が肱で突つきました。

「これ僕の友人で池崎です。こちら霧塚春美さん、ァ、今でも霧塚さんですか。それ共？……」

「まあ失礼、勿論霧塚ですわ、私まだ一人なのよ」
と言つて私の眼の奥を覗き込んだようにした眼差しは私の心臓を手摑みにしてギュッと握り潰すようなショックを受けました。
「あなたは、お子さんは？」
「僕だつて一人ですよ」
「あらほんと？」
春美は池崎を見て眼で問いかけました。
「ほんとですよ、此奴は変り者ですからね。女嫌いなんですよ。ハ、、、」
池崎は調子を合わせてくれました。
「大槻君どうしました？」
大槻の事を私は聞かずに居られませんでした。
「あゝ大槻さんね、どうしましたか知ら、何でも中野の辺にいらつしやるつて聞いたんですけど」
結婚しなかつたんですかと危うく口から出かゝりましたが一人だと言つたんだし、今の他人行儀な口のきゝようで、まだ結婚してなかつたんだぞと自分に言い聞かせました。
「で貴女は今どちらです？」
「三鷹ですわ。前の所焼けましたの。貴方の所も焼けたんでしよ」
私は春美を私のテーブルに誘つて
「何をお飲みになります。ウイスキー、ビール、それともお酒にしますか」
「そうね、ウイスキーがいゝわ。ホ、、妾この頃お酒が強くなつちやつたのよ」
彼女の態度は以前の淑やかさがなくなつて、何となく蓮葉になり、それが又私はあの当時の彼女が大槻に対する時の態度と同じものである事を思い出し、只訳もなくゾク〳〵とくすぐつたいようないら〳〵するような嬉しさがこみあげてくるのでした。
「恭夫君は？御一緒ですか」
「居ますわ。でも母と一緒に居ますの。妾は一人でアパート暮し。呑気だわ、お遊びにいらつしやいませよ」
「じや何処かへお勤めですか？」
このキヤバレーのダンサーにでもなつてるのかと思いましたがそんな様子にも見えないのでした。こんな事が聞けるようになつただけでも以前の私よりいくらかましでした。殊に依るとパン〳〵になつてるかも知れない彼女に対して
「つい先頃迄勤めてたけど止めちやつたわ。社長さんがイヤらしい事言うんですもの、フ、、、」
ウイスキーを飲みながら私を見る眼が以前の彼女と全然違つて居ます。思いなしか情熱が溢れてくるようなまなざしでした。
バンドが又タンゴを奏で始めました。
「お踊りになりません？」
「僕踊れないんです」
「じやこちらの方、何とかおつしやいましたつけ、池田さん？」
「池崎です、お願いします」

「じや一寸失礼……」

立ち際に片眼を細めてニッと笑つた春美は、ウインクされたよりも私には強烈な刺戟を受けました。

二人が踊りの渦に捲き込まれて行くのを見ながら、激しい嫉妬が胸をかきむしるように起つて来ました。

何故ダンスを覚えておかなかつたんだろう。殊に依ると今に池崎が大槻の後釜を占めるのではないだろうか。

私は立て続けにウイスキーを呷りました。池崎と春美がピッタリと身体をつけ合つて、頬と頬とが触れんばかりにして踊つて居るのを見ると、まるで恋人同志でもあるように見え人の蔭にかくれた時などキッスの一つもして居るのではないかとさえ思えて来て、まず普通の場合ならこのまゝ帰つてしまうのが一番サッパリするのでしようが、まだ彼女の住所もはつきり分らず、いつ又会えるかも分らないし、それもならず又「傍観者」のポジョンに坐らせられた事が私をいら〳〵させました。

私は大して飲めもせぬのにグイ〳〵やつたので、ひどく酔つて来ました。一、二曲踊つて来た彼女も又グイ〳〵やつて大いにはしやいで居ます。池崎は頃合を見計らつて、帰つて行きました。

私は「失礼します」とも、「もう帰りましよう」とも言えずカンバン迄彼女と飲んで居ました。

「送つて下さいね、貴方が荻窪なら同じ方向でしよ。妾今夜はあまり頂いてしまつて一人では歩けなくなつちやつたわ」

車の中で彼女は何もかも委せるように、グッタリと全身で私にもたれて来ました。曾つての二年間の交際の中でも、こんなに親しい態度は一度も見せた事のない彼女に、今夜初めて会つた時からこんなにも接近出来るとは夢にも思つてなかつただけに、私は只もう嬉しさに、幸福感に浸つて居ました

彼女は眠つて居るのです。このまゝいつ迄も車を走らせていたい……。

と思つたのですが、間もなく三鷹の近くへ来てしまいました。彼女を起こしてもなか〳〵起きません。やつと揺ぶり起して道順を運転手に言つて貰つて、彼女のアパートへのりつけました。

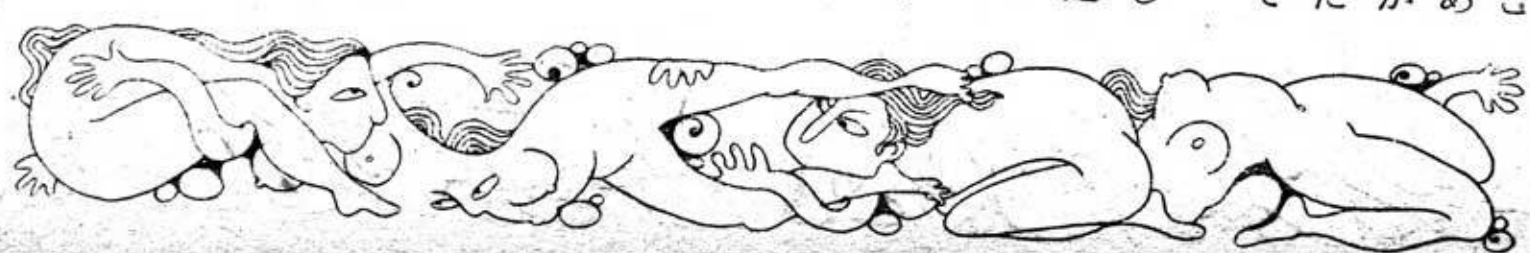
車をおりる時から、彼女は私の肩に手をかけて、足もともフラ〳〵と歩きました。ともすると彼女の頬がつきそうになり甘い香料と体臭が私の鼻をくすぐります。玄関は閉つてましたので「此方よ」と彼女は私の耳許で囁いて非常梯子から二階へ上つて行きました。

おそいから人に見られる事もないかも知れないけれど、こんな恰好を見られたら人から誤解を招くのではないかしらと思い、そう思われるのも悪くないなと思いました。

「鍵、こん中」

彼女は無雑作にハンドバックを渡します。女のハンドバックの中を覗くのは面白いものです。然し彼女を眼の前において一々中の物を詮索する事も出来ませんから、鍵だけ見つけてやつと部屋の中へ彼女を入れました。

彼女の合オーバを後に廻つて脱がせるのは、女主人に仕える下僕のような気がして、私を昂奮させました。



「済みませんわね。妾ほんとうに酔つちやつて。此処一寸外して頂戴い」

彼女は片手をだるそうにあげて腋の下を覗かせました。白いスベ〳〵とよく手入れの届いた腋の下を見ながら、その下のホックをはずして、イヴニングを脱がせてやると、もう正体もなく、スリップ一枚のまゝベットの上に転がり、そのまゝ眠り込んでしまいました

私は室の中を見廻しました。割合綺麗な室で、中もキチンと片ずき、調度などもぜい沢なもので、彼女の生活が差迫つてみじめそうだと言うのでない事が分りました。又その比較的整とんされて居る事が、平常の彼女の品行を物語つて居るようにも思え、今夜だけ羽目を外して居るのだとも思いました。

帰らなければいけない。

私の理性が強く命令しました。

「春美さん」

小声で呼びましたが起きません。

「春美さん、春美さん」

何度呼んでも軽い寝息を立てゝ居るばかりです。このまゝソツとしておいて帰ろうかと思いましたが、エチケットに欠けると思い、恐る〳〵肩に手をかけて揺ぶりながら

「春美さん春美さん」

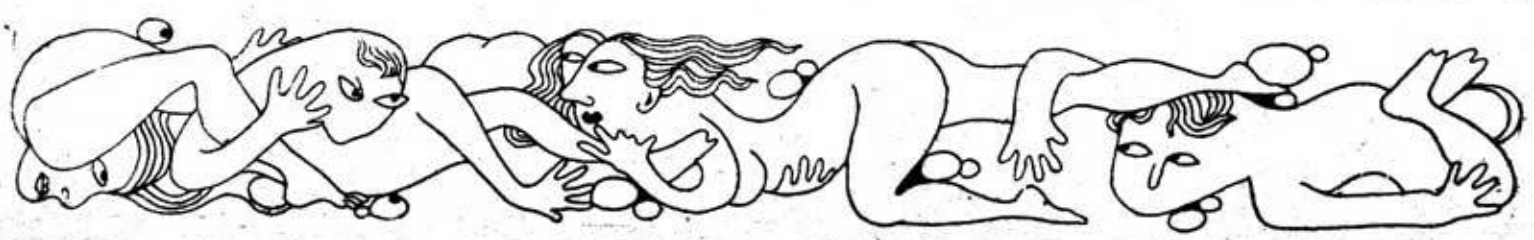
と呼びましたが、てんで起きようともしません。

「弱つたなあ……」

私は改めて彼女の全身を舐め廻わすように見ました。スリップの下に半分かくれてもり上つた乳房は、以前見た時よりも丸く膨らんで乳房と乳房の間の谷間が魅惑的な陰影を作つて居ます。ぐつとつぼまつた胴から下腹へ向うと急に広くなつて、スリップの裾が捲れ上つた下から、はりきつた白い太腿が脱き露しになつて居ます。その太腿を見て居るうちに何んとも抑制しきれない衝動にかられて、ベットの傍に跪まずき、太腿の傍へ顔を寄せました。春美は相変らず軽い寝息をたてゝ居ます。私は唇を太腿へつけて接吻しました。

あゝ五年振りで彼女の太腿へ再び接吻できた。

私は唇を上の方へズラせてスリップをズリ上げました。純白のズロースが見え、ギツチリと内股に喰い入つて居るゴム



が一層脚を太く逞ましく見せて居ました。

春美はまだ何も知らずに眠つて居ます。帰ろうと思いましたが、扉に鍵がかゝらないと不要心だと思い、帰るに帰られず、私は畳の上にゴロント仰向けに寝転がつて煙草を一服つけました。時計を見ると二時過ぎで、もう電車もなく車も流しては居ないでしょう。

ウス寒くなつて来たので、春美に毛布をかけてやり、裾の方にクシャ〳〵になつて居た毛布をとつて、畳の上に転がり毛布を引被りました。眠ろうと思いましたがなか〳〵眠られません。

二

「お水持つて来て頂戴」

突然ベットの上から声がしたので私は吃驚してとび起きました。春美は蒲団を剝いで妖艶な姿態をくねらせて、ニッコリ笑いながら私を見上げて居ます。

「そこの水道の上にコップがあるわ」

私はコップに水を注いで彼女に渡しました。彼女は一息にグッと飲みほして

「あゝおいしい……」

「黙つて帰ろうかと思つたけど、後が不要心だと思つたのでね、起きる迄待つてたんですよ」

「泊つてたつていゝわよ。もう帰れないでしよ」

「じや一晩厄介になります」

私は勇気を出してそう言いました。顔が熱くなるのが自分でも分りました。彼女は再び眼をとじました。

「靴下脱がせてよ」

彼女は寝たまゝ私の方へ脚を持上げてきました。私はガーターを外してやり、クル〳〵と捲いて脱がしてやりました。白い肌のスンナリした脚が露われてくるのに私は又新しく昂奮して来ました。春美の顔を見ると、私も真正面からパッチリした眼で瞠めて居ます。私は裸の足を両手に持つて、そのおや指へキスしました。

「あなたは今でも妾が好きなの」

「えゝ……大好きです」

「ほんとうにあなた奥さんないの」

「……ありません、あなたの事を想うと結婚する気になれませんでした」

私の顔はいつしか彼女のやわらかい太腿の間にはさまれて居ました。

「じや妾と結婚しない？」

彼女の太腿がギュッと力が入つて私の両頬を締めつけました。あゝ私の恋は遂に叶えられました。五年越しの想いが、たつた一夜の邂逅で実を結ぶとは何と言う幸せでしよう。

然かも彼女はどうやら私の理想にピッタリ当嵌つた性格の女性のようです。

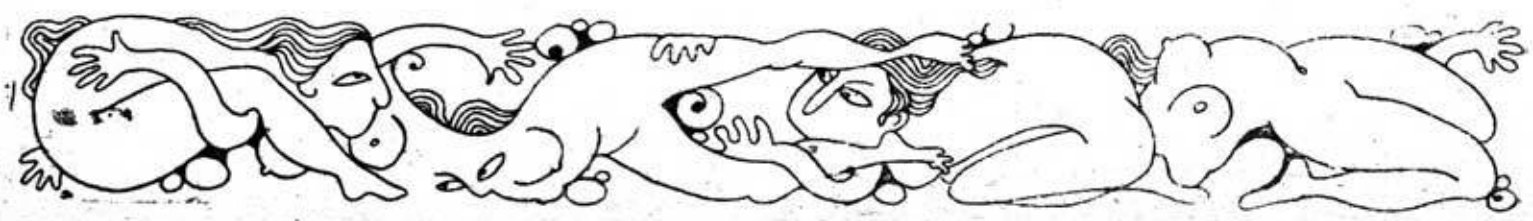
男の顔を白い太股のマフラーに包るんで求婚する女！

こんな風変りなプロポーズのスタイルが他にもあるでしようか。私は歓喜にむせんで彼女の両脚を外側から抱いて強く締めつけました。それは私の顔に快い苦痛を加えました。

「ねえ、どうなの？」
「願つてもない事です。あなたさえよければ……。私はあなたのその言葉を永い間待つて居ました」
「ホ、、それで今迄結婚なさらなかつたの」
「そうです」
私は彼女に対して嘘を吐いて居るとは毛頭思つて居ませんでした。私は形の上での結婚はして居ても、ほんとうに肉体と精神の融合した結婚ではないのですから。又彼女と結婚する事も肚に決めました。私はもう決心してしまつたのです。
「嬉しいわ」
彼女は脚を解こうとしました。
「もう少しこのまゝにして居て下さい」

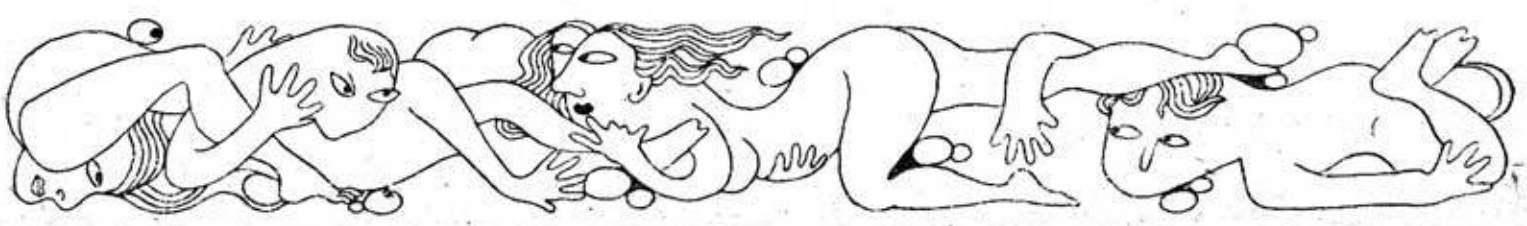
三

私は編集室で仕事をして居てもさつぱり身が入りませんでした。あれから三日間、春美の事ばつかり考えて、何度彼女のアパートをもう一度訪ねようかと思つたか知れません。
あの日彼女はかなり慾情して居たようでした。身も心も私に全部を委せようとして居る様子があり〳〵と見えて居ました。然し私はキスだけでそれ以上の行為には出ませんでした出れば恥をかくに決つて居るのです。私がほんとうに好きな崇拝する女性に対しては、対等の性慾が起きず、ノーマルな性行為を行なうとしても、それは不能に終る事は若い頃からの経験で、自覚して居たからです。彼女はかなり焦れて居たようですが、総ては正式に結婚してからだと考えました。
私はあさ子と長男の浩と別れる決心をしました。全面的に私を信頼して何一つ落度のないよき妻のあさ子と、何の罪もない実子の浩と生別れするにはかなりな決断力がいりました然しその頃には私は完全に妖魔の虜になつて居りました。
春美が妖魔だと言うのではありません。悪魔は私の心の中に巣を食つて居たのです。
電話のベルが鳴りました。春美からでした。今晩会いたいと言うので、銀座の資生堂で落ち会う約束をしました。
私は仕事を打つ棄やらかして、とび出しました。
資生堂でお茶を飲み、映画を見てから、一口豚カツで飯を一緒に食べました。お酒は二人で四合程飲んで、私はいゝ気持になりました。私はどこかホテルに泊つて見たくなりました。彼女と別れたくもなし、と言つて彼女のアパートへ度々足を入れるのも迷惑だろうと思つたからです。
「僕と一緒に泊つてくれますか」
「いゝわよ、何処へでも。地獄の果までもついてくわよ」
千駄ヶ谷の双葉荘と言う洋室ホテルへ私達は車をつけました。ウイスキーと果物を持つて来させて、又少し二人で飲みました。彼女は私の父や弟の事を聞き、それとなく私の財産調べするような口振りも見えました。私は彼女を安心させるために私のありのまゝの財産を正確に言いました。
春美は相当酔つて来たようです。ダブルベットへゴロン寝転がつて、宿屋のパジヤマの裾から靴下をはいた脚を私の方へ突きつけました。私がそれを例に依つて靴下を脱がせ、足へキスしようとすると、彼女の脚が躍つて私の肩を蹴りまし



た。私はよろ〳〵とよろけて床に尻餅を突きました。
「今夜はだめよ。貴方は一緒に寝させないわよ。その床へお寝なさい」
私は春美に足蹴にされた時、激しい感情が勃然とおこりました。
「どうしたんです。何か気に障つた事でもあるんですか」
私が起上つて、彼女の顔を覗きこんだ時
「この嘘吐き！」
彼女は私の胸を突いて脚の方へ突きとばしました。
「何ですか。僕が何か嘘を言つたと言うのですか」
「呆けてもだめよ。今日チヤンと調べたんだから。貴方には奥さんも子供さんもあるじやありませんか」
「あゝその事ですか」
「その事ですかつて、貴方独身だと言つたじやありませんか」
「言いました。今の女房子供と別れるつもりでしたから。私はまた精神的に結び合つた結婚はして居なかつたのです。只世間体をつくろうありきたりの結婚生活です。あなたを知つて、あなたとなら真の理想的な結婚が出来ると思つたから、私はこの前からもう今の妻と別れる決心を決めて居たのです。ですから独身も同然でしょう」

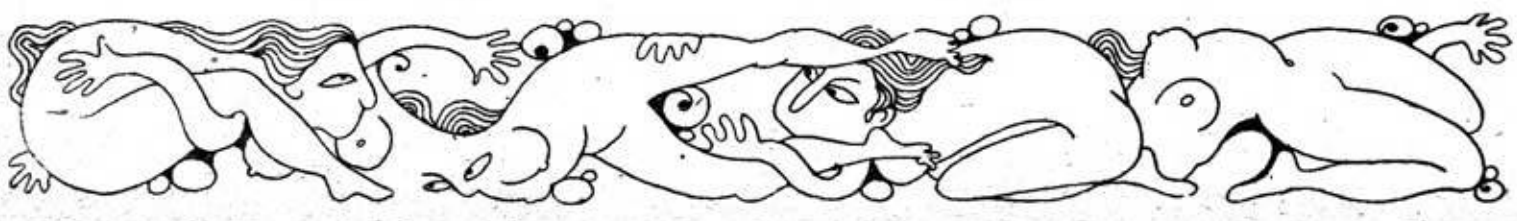
「フヽヽヽ、あなた内気なようで居て割にお口がお上手ね。その手で大勢の女の人をだましたんでしょ」
「とんでもない。僕はあなたをだますつもりなんか毛頭ありません。真剣で言つて居るのですよ」
「貴方のほんとうの気持はどうなんですの。妾分らないわ。妾の身体が欲しいんなら、この前の晩に貴方のものになつた筈ね。そうでもないし、妾何だか狐につままれたみたいよ。妾をからかつてるの。妾を焦らして面白がつて言うお心なの？」
「とんでもない。私は五年間もあなたの事を思い続けて来ました。そんな気持は全然ありません。あなたを崇拝し、あなたの奴隷にでもして下されば、僕は充分満足なのです」
「あなたはマゾヒストなのね」
「えゝ春美さん、やつと分つてくれましたね。僕は自分の口からそれが言い難かつたのですよ、その通りなんです」
「じや妾が貴方をウンと玩具にし



たり。苦しめたりしてあげればいゝのね」
「そうです。私はそれを心の内でどれ程願つた事でしよう。それが今迄あなたに言えずに悩んで居たのです」
「いゝわ、妾は男を玩具にするの大好きよ。サジストになつてあげます」
「あゝほんとですか、春美さん、僕は五年越しの想いがやつと今度叶いました」
「それじや今夜はどうしてあげましよう。貴方を獣扱かいにしてあげましようか」
「えゝ〳〵結構です。そうして下さい」
「フ、面白いわ、嘘を吐いた罰にウンと虐めてあげるわ、でも途中で勘弁してくれなんて音をあげないでよ」
「絶対そんな事にはなりません。どんな苦しみにも辱かしめにも私は堪えます。それが私にこの上ない喜びなのですから」
「じや今夜は貴方を猫にしてあげるわ。私に対して嘘をついたお仕置をするわよ」
彼女は私を見てニッコリと笑いました。あの無邪気に見えた眼の中に、一沫の残忍さが好色的な光をおびて光つて居るのが何とも言えない美しさを感じました。
彼女は私の首根つ子を摑まえて、床へ押しつけ、猫が板の間に鼻面をこすりつけられる、あの折檻を真似ました。
「畜生に対して叮寧な言葉なんか使えないわ、いゝわね」
「えゝその方がいゝです」
「バカ、猫が口をきく奴があるかい。もうお前はどんな事をされても黙つて居るんだよ。苦しかつたらニヤーゴとおなき」
彼女はベットに腰かけて、足で私の床の上の頭を踏みながら言いました。
「よし、このサカリのついた牡猫に可哀想だからお慈悲をかけてやる。このベットの上におあがり」
私はベットの柔かいクッションの上に寝ました。彼女が床へ私の鼻をこすりつけても、それは多分に手加減した、あまり痛くないお仕置きでした。
あゝ妄想の世界でのみ憧れた事が今現実となつて実行されたのです。その香ぐわしい芳香は私が想像して居たより遥かに強烈でした。その瞬間、私の脳裡を、彼女が処女か、非処女かと言う疑問がチラと閃めきました。が直ぐ「そんな事はどうでもいゝじやないの」と言う風に、彼女の芳香と触感が上から揉み消してしまいました。
私はつぶつて居た眼をソーつと開けて彼女を見上げました真上から大仏さまのように彼女の眼は私の眼を見下して居ます。それは軽蔑しきつた表情でした。私はそれに寧ろ安堵の思いがしました。
彼女自身も、男を畜生扱かいにする征服感に陶酔して来たのでしよう。
「フ、どうなの？」
「えゝまるで天国に上るような気持です」
「そう、こんな事でよかつたら毎晩やつてあげるわ、けどあなたほんとに妾と結婚する気なの？」

「ほんとです。妻には気の毒ですが別れます」
「そんなら妾、あなたと結婚してもいゝのよ、今夜、たつた今からでも」
「えゝ、僕はたつた今あなたと結婚のしるしを楽しみました」
「じや、結婚しても、今のような事を妾にやれと言うのね」
「それがあなたはお嫌ですか」
「嫌じやないわよ、でもそれだけでいゝの？」
「いゝのです。あなたは御不満ですか」
「ウ、、、、」
「御不満なら勤めて世の夫と同じ様に致しますが、僕には何だか勿体なくて、貴いあなたの肉体を瀆すようで良心が咎めるのです」
「いゝわ、妾あなたの主人になつてあげる。一生あなたを恋の奴隷にしてやるわ。からかつてやる。苦しめてやる。それでいいんでしよ」
「あなたが、その気持になつて下されば、僕はこの上なく幸福です」
「よし、じや早くお前の汚い嘴アとガキを叩き出して来い」
彼女は私の頬に肉付きのいゝ腕を捲きつけ、ギユッと締めながら命令しました。
幾度かためらつた後、私はあさ子に別れ話を告げました。あさ子はあまりに突然な私の申出に唖然として居ましたが、それが冗談でないと分かると、泣き出しました。私は仕方なく五年越しの恋を打明け、私の正常でない性癖を知らせて、納得させようとしましたが、彼女はどうしても聞き入れてくれません。
仕方なく私は非常手段を取りました。彼女が十年位は養つて行けるだけの預金と現在の家を残して、私はごく身の廻りの品物だけをトランク一つに詰めて、この平和だつた家を捨てゝ春美の許に走りました。
私は大岡山に六十万円で小さな文化住宅を買い、そこに春美と愛の巣を作りました。
春美は私と一緒になると、兄を救つてくれと言つて五十万円の金を兄に渡すようにせがみました。兄の恭夫は、或る事業に失敗して借金に苦しんで居たのです。私は仕方がないと思つて、無担保、無期限で、恭夫に貸してやりました。
これから、皆さんが読んだら世にもばか〳〵しい夫婦生活が始まるのです。私は恥を忍んで、この哀れにも愚かなラヴスレイブの手記を敢えて続けます。（続）

羽村京子さんから
二月号を拝見しました。早速原稿を送るように書いてありましたけど実は私、今月も駄目でしたのいつも書きたい〳〵と思つていても、今度は殊に夫の郷里のN市に旅行したり、その前後もお客があつたりして、やつと今日落ちつてお手紙をまとめる気になりましたの。次には是非書きますわ、それから川端多奈子さん私たちすつかり好きになつてしまいました。春になつて暖くなつたら、勇気を出して住所をお知らせして是非遊びに来て頂きたいと二人で相談していますの。私の告白が決してウソでないということもお見せしてよ。でも、きつと来ていただけますでしようねこれからもどん〳〵面白いものをのせて下さるようお願いいたします。では、今日はこれ位で。
かしこ
一月九日



【読者通信】（投稿歓迎）

奇クは私のように気性のむずかしい者にとつても今はなくてはならない伴侶になつています。お世辞は虫ずが走る程大嫌いな小生ですがいさゝか愚見を述べてみます表紙特に裏表紙のポーズのとり方他誌の追随を許さぬと感心します文中の挿絵についても他誌の普遍的な下卑た煽情性と違つて何か激しく吸引される持味でしかも顔赤らむものでないのは嬉しいです。

表題のとり方の極めて淡々として而もその内容で充分に読者を魅する点、それは大なる自信の下に出来る本当の意味（俗のでない）の高尚さであり、見出しで読者を偽瞞する他誌に対する忿懣を洗い流してくれるものとして期待しています。作品について二俣、松井岡田各氏の力作は何かイライラした山道を手を引張られて登りながら八合目あたりでそのまゝ手を離されたといつた感じで心残りですなたの縛られた姿を見て本当に美しいと思いました。今迄のモデルの方の中で貴女が一番均整がとれてよい体をしています。新年号で貴女の桃色のベールに包まれてを拝見しながら写真で肌に喰いる繩息苦しいばかりの猿轡等の実体を見ますと実に興味深いものがありました。私は女が責められ縛られている時の姿態が一番美しいと思うのです。夢の中で貴女を縛っている事が度々です。どうか今後も素晴しい写真と貴女の告白とを載せて下さるようお待ちいたします

（秋田市　皆森一）

◇せいぜい川端さんにも頑張つて頂いて皆様の御期待にそう様します。尚返信料封入の私信に限り川端さんからお返事して下さるそうですから、御遠慮なく御通信下さい転送の労をとります（編集部）

○

過日はKK通信を御送付賜り有難うございます。興味深く拝見させて頂きました。ジイドの背徳者公刊雑誌としてやむを得ないといつたらオシマイでそれを克服してこそ奇クの真面目があるのだと思います。

（川崎市　H・H生）

○

二月号八十五頁の読者通信に京都T生の言として黒井珍平氏の髪の嫌いなのは氏個人の主観に過ぎない。とありましたが、そういうT生氏の今はもう過去の遺物である日本髪に魅せられるという事自体が単なる主観ではないですか、黒井氏の云われたように現代人はやはり現在流行の髪型にこそ強い魅力を感じるのであり、それだからこそ多くの女性も挙つてパーマをかけ洋髪をしているのではないですか、もつとも棺桶に片足を入れたヨボヨボのおじいさんの意見では仕方ありませんが、少くとも現在活動している青壮年は断然黒井氏の意見に賛成だと思います。

（徳山　浅香生）

○

川端多奈子様、雑誌の口絵であの主人公もそうだつたと思いますが嘗つて病から回復した際肉体のシヤルムを知覚しました。以来ベニスナイドはもつと以前ですがギリシヤの彫像にあるヘルメルアポロン、青年像の様な男性の肉体の美しさに魅されて町を歩いても映画館へ入つても相手のない空虚さ、堪え難いまでの虚無が孤独が身に迫つてくるのです。男色家（といつても小生には全然経験はありませんが）にとつては各々愛するイメージがあるそうですが、小生は美しい知性のある青年を愛したのです。然し禁色ゆえに満三十七才を迎えてそう無鉄砲も出来ず雑誌の文章或は想像等によつてはかなき充足を得るより外ありません。美しい青年の肌に接吻し自分もそうされたらどんなにか生き甲斐を感じ此の世が楽しくなることでしよう。

（名古屋　藤村雅人）

女囚私刑体験記（その二）

鐵格子の中にて

小坂多美枝

一、室長お美代

私の入れられた女囚刑務所では雑居房毎に室長というのが半ば公式に任命され房内の秩序を保つ役をするのですが、こゝへ抛り込まれるような女囚はどうせしたたかものぞろいですから、それらをおさえる頭としてはどうしても一番凄いつまり人殺しの一つもやったような一番兇悪な女囚が選ばれるのです。

そうして選ばれた室長が自分の気に入つた女囚達を子分にして取締りに名をかり、室長の威光を笠に着て弱い女囚達をいじめるのです。今はどうなつて居るか知りませんが私の入獄して居た頃は女看守達の規律は全く乱れ放題で、すべて賄賂の金で動き室長達の暴状を見て見ぬ振りをしていました。

毒婦という言葉がありますが、私達の房の室長、藤山せつ子こそ誠に稀代の天性の毒婦ともいえる女性です。彼女の顔は眉のあたりに少し険しい所もありますけれども、白い蠟のような皮膚、切長の瞳、長いまつげ、高い鼻、女でも惚れ惚れするような美貌の持主です。

そして絖のように脂ぎつた身体には肌一面に見事な蜘蛛の入墨をしていて精悍な女豹のような感じのする豪気な女なのです。

詳しい事情はよく知りませんが、長崎で娼妓をしているうちに色々の悪事を働き挙句の果二人の男女をあやめて、しかもその方法は惨酷を極めたものだつたそうですが、それが持前の美ぼうと巧みな言いぬけで胡麻かし僅か懲役十年なのです。

入獄して一年余、今では押しも押されもしない見事な室長です。この人殺しの妖婦やその子分の淫売女囚たちに玩具にされ続けた六カ月間、全く今思い出してもぞつとします。

彼女の新入り女囚に対する取扱いは誠に惨酷を極めたものでした。

女囚刑務所の風習として戦前でも雑居房内では新入りの女囚はやはり古参の女囚達によつてたかつて素裸にされて色々と虐められたものだそうですが、彼女は終戦直後の混乱期の取締りの手薄に乗じて徹底的に弱い女囚を玩具にしました。

きく所によると徳川時代の江戸の女牢で行われて居たという女囚間のリンチの方法を、

どうして知つて居たのか、そのまゝ行つているという事で、あの新入りの裸踊りの〃しやば忘れミもその頃〃スッテン踊り〃と言われて居たリンチの一つだそうです。

戦前の女囚刑務所では女看守が女囚にひどい拷問を加えていたそうですが、女囚間のリンチは取締りが厳しいのでそれ程ではなかつたようです。

私が入獄していた頃の刑務所長は汚職のため転任になり又看守達の大異動があつて、今では規則も大分厳しくなつて女囚間のリンチもこつそりやる程度だそうで、結局私等の昭和二十四年組が一番貧乏くじを引いたわけです。

仲間の間に毒ぐもお美代と異名をとつて居る（室長お美代というのは娼妓のときの源氏名）は本当に身体にほり込んだ毒ぐものように恐しい女でした。今でもまざまざと入獄の日の恐怖が胸に浮びます。犯した罪におののき母や弟妹の明日を案じて悲嘆にくれて居る私にツルがないからといつても前にも書きましたように図太いアマとののしり、自分の寝衣の裾をまくり上げて股の間から無理無体に顔を出させて恥しい恰好であいさつをやらせたのです。

「こゝは貞婦や孝行娘の来る所じやないよお前さん、名は何というんだい？」

「小坂多美枝と申します、どうかお慈悲を」

「何いつてやがるんだい。ツルなしにはツルなしのお仕置があるのだよ、後でうんと可愛がつてやるからな。齢は？」

「二十二です。弟や妹がかわいそうでついお金に手をかけました、本当に出来心です」

「同じようなことをいうない。出事心が懲役を食らうかい。で商売は何だい？」

「バスの車掌です」

「何ッ、バスの車掌、いつか私に切符をごまかしたといつて恥をかかせやがつた。お気の毒だが身代りにお礼をさせて貰うよ、それで売上げをチョロまかせたのだな？」

「すみません、出来心で」

「出来心もへつたくれもあるもんか、どうして盗んだ？」

「便所へいく時、ズロースの中へかくしたのが見付かりました」

「そんな汚い所へかくさう」

皆はどつと笑う。

「それで男は何人だ？三人か四人か、もつとあるのかい？」

「いゝえ、一人だけです」

「××××××？」

この言葉の意味が判ると赤くなつて

「いゝえまだそんな――」

「何に、そんな可愛いい顔でその身体で男を知らないつて、嘘をつくとひどいよ、いずれ後ではつきり調べさせて貰うがね」

後で何をされるのかと胸は早鐘のように高鳴る

「いゝえ本当です。どうか堪忍して下さい」

「お前さんのズロースはあそこがひどく汚れて居るがお前は――？」

こればつかりは図星をあてられ、室長の股倉の間で私の顔はゆで蛸のように赤くなりました。女囚達はそんな私を見てキヤッキヤッと喜ぶのです。

引続いて一糸まとわぬ素裸にされ例の裸踊りを踊らされたのです。

息も絶え絶えになる程しやば忘れを踊らされびつしよりと汗まみれになつた頃漸く室長お美代のお許しを受けてその場にへなへなと坐り込みました。

「新入り、のびるのはまだ早いよ〃つび改め〃だ股を開いて前かがみになり」

言われるまゝに両足を開いて前かがみにな

りますと例の淫売婦のお千代がいきなり細い板で裸のお尻をピシヤンと叩き

「何んて恥かしがりだ、足はこう開くんだ」

とぐつと三尺ばかり股がさける程開かされ頭の髪の毛をつかんで海老のように身体を曲げさせられる。

「澄江、そいつの両手を背中で合せて縛つておしまい」

パン助の澄江はそんな恰好の私の手を後に合せて眼紐でがんじからめに縛り上げる。こうしてパン助や淫売達にとりかこまれて、女としては一番恥しい恰好をやらされ人殺し女囚お美代の眼の前に丸出しにさらけ出されます。

男の人は不思議に思われるかも知れませんが、私達は男の人には比較的平気で裸体をさらし出しますが、同性の前ではこんなにあばずれた今でもやはり恥かしいのです。

そういう女の弱点を知りつくした淫売たちは男との交渉をさえぎられて年余に及ぶ焦そうとうつぷんを弱い女囚殊に素人娘である新入り女囚にぶちまけるのです。

彼女達の一番いやがる事をやらせて、罪人としての恥しさと、女が女に玩具にされる恥かしさを二重に味わせて絶望的にのたうち廻る姿をさかなにして悦ぶのです。悪魔的な心かも知れませんが、幽閉された女性の心理の当然行きつく所で、よいも悪いも人間性の奥深い心理を感じるばかりです。

後に坐つてギラギラする眼で眼前にある私を見つめていたお美代は、股の間から右足をさし込み、私の顔に足の指先を触れ汚い足先で私の顔をさかなでにします。そして指先の触れて居る所の名前を言わさせるのです。そして鼻の先を足の指ではさみ私が「鼻」と答えると面白そうにみんなで腹を抱えて笑うのです。

散々汚ない足先で私の顔を玩具にすると今度は足を引つ込め、今度は肩から乳へと指先を下げてゆきます。おへそのあたり迄は私も「おへそ」と云えるのですが、それからだん下へ下がる指先の当てられた所の名前はだん下の頃生娘だつた私でも知るには知つて居ましたが、恥かしくてよう云いません。お美代は目をキラキラ光らせて今指先で玩具にして居る所の名前を云うように強要します。

「これは何というんだね？これは、えーい、じれつたいね、ばかかね、お前さんは」

じつと見て居る女囚達はくつくつと嬉しそうに笑つて喜んで居ます。

火のように真赤になつて蚊のなくような声で言うと

「華族の令嬢じやあるまいし、そんな小さい声しか出んのかい。バスの中で張り上げるような声をお出し、出せないなら出せるようにするからね」

と、又裸のお尻をどやし上げられる。

「おや？こいつ本当に生娘だ。何んて馬鹿だろう。まあ、私がこれからうんと可愛がつて上げるよ」

とお美代は獲物を見つけたりやう師のような歓声を上げるのです。

二、獄内の生活

ここで所内の様子の大体を一寸紹介して置きましよう。先ず衣類ですが、これは

一、作業衣
二、常衣（寝衣）
三、襯衣
四、帯
五、下衣

を支給されますが、下衣つまりズロースは自弁の私物の着用を許されます。作業衣はモンペのような草色の服で重罪犯だけは柿色です。常衣というのは房内へ帰つて着る着物で

丈夫な綿の寝巻のような仕立で、作業衣以外の着物は全部あさぎ色です。そして皆襟元に番号をかいた白いきれをつけます。

襦衣はシャツのことで夏用、合用とあり冬は合用の上に冬用の特別厚い襦衣を着ます。一番困るのは塵紙で、一日に三枚の割で渡されるだけですからその苦労は男の人にはお判りにならないでしょうが大変です。殊にお腹を下したりすると泣き出したくなります。

食事は一級食から五級食迄五種類あり、体質作業内容に応じて支給になり朝夕は房内で昼食は食堂でとります。主食は木の箱に押型にした麦飯、副食は人数に応じてバケツで房毎に分配されるのを私等の新入りが食器に分配して食事の支度をします。

夕方六時の帰房から朝八時半の出房迄の間は便所は房内の隅にある便所を使用します。この便所は戸が普通の半分位しかなく上と下は中迄見とおしです。

お土産をもたない新入りの私は臭い臭いこの女囚便所の直前の所に坐を占めさせられました。便所は普通のと異つて脱獄の防止のため穴の巾は三寸余りで、汚すまいとすると、非常に苦労します。

女囚の中には便所専門の係りの女囚がありそれが平の女囚の便所の使用を監視して居り少しでもふちを汚すとすぐ見つかりそれ相当のお仕置をうけます。そのことは又あとで書きます便所の掃除は勿論新入りの役ですが、女囚便所のあの異様な臭さは恐らく経験のない人にはお判りにならないと思います。

夜寝るときは室長以下取締りに当る五人の毛布は一人に一枚宛あるのですが暑くて皆は着ません。ですから大抵のものは太股を丸出しの見つともないすがたで寝るのです。

又困るのは南京虫や、しらみや着物のしらみに全く手を焼きます。夕食後就寝迄は大抵はしらみ退治に過されます。又かいせんは変な所を犯しますので全く恥しい話ですが、皆は暇さえあればあのへんをかいて居ます。

（お美代、淫売の千代、バン助の澄江、雪隠係の三十六になる火つけのお駒、それに、妾を切りつけて重傷を負わせた宿屋のおかみの計子）の女囚が大きく場所をとるので平の女囚達はそれこそ一畳位の所に三人程文字通りざこ寝です。

むし暑い夏の夜の女囚雑居房の女囚達の寝相は本当に見られたものでありません。備付

三、女囚のお仕置

前にもいゝましたように此所では兇悪な毒婦がバン助や淫売女囚を使つて素人の娘や人妻や未亡人の女囚達を苛めさせるので、彼女等は房内の厳重な規則を勝手にこしらえて、平の女囚が少しでもそれを破ると女看守の目から解放される夜中にお仕置をやるのです。

例えば役付女囚の夜の床を世話する役をあてられて居る万引をやつたおかみさん、三十になる二四二番の女囚ですが、これが少しでも床のとり方が悪いと、それだけで充分懲罰の理由になるのです。食事つけ、便所そうじ星のかずの多い女囚達のマッサージとやらな

ければならない仕事の多い新入り時代の私はしくじりを仕でかすまいと戦々きようきようとこまねずみのようにとび廻つて居りました

又おかしいことに自分たちが大泥棒のくせに空腹にたえかねた女囚が残つてある食事を皆の寝しずまつた夜中にこつそりと盗み食いしたのがわかると大騒ぎが始まるのです。

二四五番の伊藤春江は二十四になる貧乏娘ですが、愛人を同僚の女事務員に寝とられて口惜しさのあまり、その女事務員のべんとうの中へ亜硝酸カリとかいう毒薬を入れたのがばれて入獄した女囚で入つた当座はその女事務員を殺してやるといつてギリギリ歯がみして口惜しがつていたそうです。以上の女囚達は皆

「スッテンスッテンスッテンスッテンスッテンばかりは参りません……」

と浅間しい裸踊りを踊らされた口ですが、この春江が又食しん棒で夜中に盗み食して居る所をお千代に見つかつたのです。

もつともあまつた食事は淫売たちの玩具になる気なら食べさせて貰えるのですが、勝気な春江はそれをやらずに夜中に便所に立つ振りをして食器棚に近ずき戸をあけて正に盗み食いをやろうとした所を、

「おや、春江何をこそこそして居るんだい」

とお千代に見つかつたのです。はつとした春江は真青になつて立すくんでしまいました

「ようし、おいしい御ちそうをお腹にこたえる迄たべさせてやるからな、さあ、寝まきをお脱ぎ」

騒ぎにおき出したパンパンたちが口々に罵り乍らよつてたかつて春江のねまきを脱がせてしまいます。

「さあ、ズロースもとつて、ズロースはこの股の所を手前の口でくわえてこゝへ来て立つんだ」

無理矢理に春江はすつぱだかにされ、自分のズロースを口にくわえさせられ、鉄格子の扉の所でこちらを向いて、両手には防火用のバケツに水を半分程入れて持つて立たされる十五分、二十分苦しみにたえかねた春江がバケツを下へ置こうとすると見張りのパン助が

「誰がおけといつた、勝手なことをおしでないよ」

といゝ様、手にした板で春江のお尻を力まかせにたゝくピシヤーンと実に小気味のよい音が春江の悲鳴と共にきこえる。今は苦しさに春江はズロースを口にくわえたまゝ

「うふんうふんうふんうふん」

と声を上げて泣き出す。勝気な彼女としては私達にそんな姿を見られることは恐らく死ぬよりつらい事でしよう。

パンパン達は泣き叫んで居る春江をとりかこんであらゆる淫靡で卑猥なからかいを始めます。

一人は手をのばし両方の大きな……。又他のものは下の方の……たりします。

一時間程してお美代が

「もうそれ位で許しておやり」

と声をかける迄そんなはずかしめがつづくのです。許された春江はそれから役付女囚の一人一人の前に土下座してお詫びのあいさつをします。

四、パイパン責め

それはたしか九月十五日のことでした。昼間の苦しい工場での作業に精魂共につかれ果てて帰房しました。今日は新入りがあるということをきいて居たものですから、今日は踊りを踊らなくてもすみそうだと喜んで夕食をすませました。食事がすんで皆の食器をかたずけ終つてほつとした頃、房の入口が何だか騒々しい。新入りです。房の扉がかぎでがちやんと開けられた。二十七、八の肉ずきのい

ゝ年増だ。それが必死になつて格子をつかみ

「牢へ入るのはいやじや」

と叫んで激しく抵抗する。中から例の二人がかけより新入りの頬げたにビンタを食わせ女看守に「騒がせしてすみません。うんとお仕置はしますから」

と答えて泣き叫ぶ年増の新入りの両脇へ手を差し込んで牢内へ引ずり込む。背後で扉はがちやんと無情な音を立てゝしまつてしまうその女はいつまでもいつまでも房の隅に折りくずれておえつして居た。

点呼巡視がすんだ。

さあいよいよあいさつが始まるのだ。私はかたずをのんで新入りを見守つて居た。寝衣を身につけた彼女は未だしくしくとしやくり上げ乍らおえつをやめない。

「皆起きろ、並ぶんだ」

の命令に私達はぞろぞろと両側にならぶ。漸く事態を悟つた新入りは顔を真青にしてぶるぶる震えて居る。正面にどつかりとあぐらをかいたお美代は

「新入りをつれておいで」

室長の側に坐つて居た千代と澄江はむつくりと立上るや、泣き乍ら震えて居る新入りの両腕をねじ上げ、

「キヤツー」

と悲鳴を上げるのをずるずると引きずつて室長の前に引たてる。

「めそめそしやがるな、このどすべた。頭を上げろ」

お美代は右手をのばして新入りの鼻をじやけんにつまんで、ぐいと持上げ頭を上げさせる。

「ここは貞女の来る所じやないよ、挨拶はゆるゆるときくがツルはどうしたい、ツルは？」

「ツルつて何ですか？」

「おふざけでないよ、悪い事をするならそれ位の事は心得ておいで、いゝ度胸だよおねえちやん、手前がその気ならこつちも覚悟があるからな」

二五七番の番号をつけたこの美しい年増の新入り女囚は又例の股のぞきの恰好で挨拶をやらされる。

入墨をしたむき出しのお美代の太股の間にぎゆつと締めつけられた新入りの恐怖におのいた顔は、本人は気も動てんして居るのでしようが、見て居る方にとつては女の股倉からのぞかされて居る女の顔というものは全く滑けいそのもので、皆の女囚達が吹き出すのも無理はないのです。

隣りに坐つて居る強盗の見張りをやつてつかまつたとかいう娘が私のお尻を指先でつついて面白くつて仕方がないという風に目くばせします。

新入りは着物の裾をまくり上げられてズロース一枚の大きなお尻をつつたてて全く見られた恰好ではありません。

お美代は新入りの髪の毛を引つ張つて顔を上げさせ、

「めそめそするとひどいからね、名は何というんだい？」

「高村京子と申します」

「いくつだい？」

「二十八です」

「虫も殺さんようなその顔でころしかい」

「いゝえとんでもない人殺し等しません」

京子はしくしく泣出し乍ら

「夫が胸の病気で長いこと会社を休んでますし、子供が二人と母がおりますので、私が近所の旅館に働きにいつていたのですがお客さんのお金が二万円なくなりました。絶対私じやありません。紀子という女中に違いないのです。それを私が貧乏なばつかりにろくろく調べもしないでこんな所に入れられたのです本当に口惜しい！」

「いくらくらいこんだ?」
「三ヵ月です。絶対に私じやありませんわ」
「言い訳はきゝあきた。二万円といや大金じやないか、どうせ好きな男とその金でいちやついていたのだろうよ、ここ迄来てしらを切るとは図太いにも程がある。二万円も曲げこんでツルなしとは人をなめなさんな。これから面白い面白い踊りを踊らせてやるからな、覚悟をおし、あいさつはこれ位ですませてやろう。さ、着物を脱いでまつぱだかにおなり」

卒倒する程びつくりした京子は、お美代の手を離れるとさつと立上つて入口に走りより鉄格子の扉にしがみつき大きな声で

「助けて、助けて、こわいよ、助けて」

と愚かにも看守を呼ぶつもりか喚きたてる淫売の千代と澄江はそんな京子に躍りかかつて房の真中に引ずり出し、又二、三人の女囚が加勢して無理やりにおさえつけて着物をはぎにかかる、多勢に無勢、狂い廻つても所詮無駄で、とうとう丸裸にされてしまう。そんなことならおとなしく裸になればよいのに。この豊満な肉体が

「スッテン、スッテンテン、スッテンテンばかりは参りません、お次はよいのが参ります。スッテン、スッテン、スッテンテン」

と例のスッテン節をはやし乍ら踊り出した見事さは全くかたずをのむ思いでした。

今は見る方の側に立つた私は女囚達がこのリンチをあれ程喜ぶのも無理がないと思いました。殊に淫売たちはお互いにみだらないたずらをしかけて、一同を笑わすのです。所で京子がおとなしくお仕置をそのまゝがまんして置けばそれですんだのですが、女学校を出て居る程の彼女は余程口惜しかつたのか翌日作業の最中に女看守に泣いて告口し房をかえて呉れとたのみこんだのでした。

勿論室長等に買収されて居る女看守にそんなことをたのんでも無駄なことは判つた事です。逆に女看守は京子を叱りとばし房内に居る室長（室長は作業免除です）に連絡して

「この女囚は生意気だから今晩気合いを入れておやり」とそそのかすのです。

その晩哀れな人妻の京子は告口したばつかりに再び房内の中央に引き出され

「よくもこの私の顔に泥を塗つておくれだねお前さん掟をやぶつたらどんなお仕置か、たんのうする迄味わせてやるよ」

役付の女囚は全部進みでてお仕置にとりかかります。

京子は又着物を脱がされ素裸のまゝ、今度は畳の上に仰向けに寝かされ両足を大きく持ち上げて股の間に顔を出すような恰好を無理矢理にやらされます。そして命ぜられて進み出た四人の女囚に京子の体を寸分も動かないように押えさせるのです。

「お多美、一寸おいで、」

お美代に呼ばれて私は何かと思つて進みでると

「お前ズロースを脱いでこいつの顔の上へお

尻をおろしておやり」

獄内の生活にも次第になれて生娘だつた私も荒んだ獄内の気風に染んだのでしよう。お美代のそんなむごいいたづらの命令にもむしろ惨酷な期待をもつて従いました。

あられもない恰好でひつくり返つて居る京子の傍に進みよつた私は、私のお尻を、この哀れな人妻の上にのせてやつたらどんな顔をするだろうと自分のズロースを脱いで仕度にかかりました。

不思議なことに私と同じような境遇のしかも私は本当に盗みを働いて入獄したのですから地獄の責苦も当然の事でしようけれど、この新入りはどうやら無実のようです。だから可愛想に思つてなくさめてやらなければならぬ筈ですが、そんな心は少しも起らず、京子のそんな恰好を見ると、ケチョンケチョンに虐めてやれという気になるのです。打明けた事をいゝますと、こんな機会でもなければ女学校を出た程の女を文字通り尻の下にしいて日頃のうつぷんをはらす機会はないでしよう

京子の顔の上にまたがつた私はあらわなお尻を彼女の顔の上にゆつくりとおろしましたが、口と鼻をふたされた京子は息が出来ないのかしきりにもがいて顔をうごかします。お

美代は

「お多美、仲々やるじやないか、そいつがどうにか息が出来る位にしてそのまゝへちやいつけておいで」

お美代が自分でそれをやらないのは噛みつかれるのを恐れるためで私に代役をやらせるのです。

「ぎやつー」

と京子は悲鳴を私のお尻の下で挙げます。京子はそれでも必死になつて苦しそうな息でうつと口を押えつ——。夫に言い訳が立ちませんから、どうぞそればかりは堪忍して」

と命じます。私はお尻に重みをかけ京子の口全部を押えつけ、辛じて鼻で呼吸が出来るだけにします。京子は必死に手足を動かそうとするのですがお美代は

「お多美、そいつのものがいえないようにぐうつと口を押えつけておやり」

と泣き叫ぶのです。

仲々やるじやないか、そいつがどうにか息が出来る位にしてそのまゝへちやいつけておいで」

お美代が自分でそれをやらないのは噛みつかれるのを恐れるためで私に代役をやらせるのです。

「ぎやつー」

と京子は悲鳴を私のお尻の下で挙げます。京子はそれでも必死になつて苦しそうな息で「そればつかりは堪忍して——。夫に言い訳が立ちませんから、どうぞそればかりは堪忍して」

と泣き叫ぶのですがお美代は

「お多美、そいつのものがいえないようにぐうつと口を押えつけておやり」

気ずかせ、再び繰り返えして続けられるので第三者が見れば恐らく正視にたえないものでしよう。この刑罰は女囚が告口したとき、と脱走を企てたとき、それから女看守や役付女囚に力ずくで手向いしたときの三つの場合に、刑務所の正式の懲罰以外に房内で加えられるのです。これを〃バイパン責め〃と呼んでいます可哀そうに京子は傷がなおるのに一カ月程かかつたようでした。

◎本誌をお読み下さつた方は是非KK通信を御覧下さい◎

本誌に発表出来なかつた珍奇文献、写真、挿絵、読者通信、論壇、告白、研究等挙げてKK通信に収容、KK通信は第六号から倍に増頁の上内容をうんと充実しました。

第六号の内容

赤い部屋（山城一男）地獄絵（行田和子）
ボクの責め方（宝塚二三夫）、
自縛の実験報告（土山徹）
縛り絵に対する考究（南畳）
外、作家だより、代理部便り、短信往来、
二月号迷評並に補遺、其の他満載！

黒井珍平さんへ

羽村京子より

黒井珍平さんが一月号で私の告白が真実だとは信じられないように書いていられますがそれも無理はないと思います。けれども、いくら云つても信じていただけないかも知れないけど、私の告白は（九月号の分も、十二月号の分も）全く真実の偽りない告白ですの。私の肛門のことにしても、浣腸だつて病状によつてはかなり多くの液体を腸内に注入することもありますし、またそれにひそかに病的な快感を感ずる人も案外多いと思いますから私に特に病的なところがあるとしたら、それは私が妙な実験癖をもつていて、少しずつ液体の量をふやしてみたり、液体の代りに気体を入れてみたり、それによつて生ずる下腹部の膨満感を楽しんだりするところにあるに過ぎないのではないでしようか。

勿論私は幸か不幸か環境にめぐまれていて夫と二人で誰にも気兼ねしないで秘密の楽しみにふけることができます。これは誰にでも与えられる条件ではありません。しかしこれも充分ありうることですわ。だからこのような実験（それはその気さえあれば誰にでも比較的容易に行えるものです）をやつてみる人が少ないからといつて、また私が夫に、私よりももつと上手に、もつと進んだ実験をしてもらうことができるからといつて、私の変態の度合が特にひどいとかどうとかいうことにはならないと思つていますの。私は死ぬまで夫と二人でこのような生活をしてゆくつもりです。各人は各人の幸福を求める権利があるのですから、その幸福が普通の人のそれとどんなに異つていようと、生殖にとつて非目的であるという点以外、どこに原理上の差別があるでしようか。その上、人は生殖という目的を意識してある種の行為を行うのではなくまた生殖のためには必ずしも必要でない行為でも正常と認められていることが多いのですから。

とにかく私の肛門による性感は「奇譚クラブ」などにも余り見かけない独特なものだろうと思いますが、それだからといつて、告白がつくりごとだろうということにはならないだろうと思います。ただ「女性肛門姦」というのはより多く見かけられるように思いますけど。

生意気を申し上げて黒井さんお怒りになつたかしら。

近頃私、肛門でタバコをふかすのと、肛門からお酒を呑む（ウイスキーは強すぎて駄目ですが日本酒やビールなら口からよりも吸収は早いし、酔つた時の症状は全然同じことです）のを実験してみましたの。ゴムの大きな風船の小さくなろうとする力を利用することも試みています。お酒とタバコの方は二月号に「妖花」と題して出ています。でも、矛盾するようですけど、本当に血を見たら、きつと私はひつくりかえつてしまうと思います。

私のあこがれている「腹を割かれた女の死体」にしても私は空想だけで満足した方が（勿論それより仕方がないですが）私の能力にふさわしいのだと思つています。そのために

空想はあくまで空想として、その代り思い切り残酷に、思い切り醜悪に幻想の翼をひろげるのです。私は若い美しい女の料理法をいろ〳〵考えてみます。焼鳥のように串刺しにして焼いたもの、会陰部を切り開いてそこから腸を出し、中に詰め物をした丸のまゝのスタフド、ローストなど。また私は下半身を麻酔されて下腹部を切りさかれる自分の姿を鏡の中に眺めている私自身を想像して、そうしてほしいとさえ願うのです。すべては楽しい空想なのです。

この間私はクリスマスのごちそうの夢を見ました。丸のまゝで真赤にむし上げられた妊婦が大きな腹を開くと、羊水が卵の白味のようにすつかり固まつていましたが、どうしてあゝいう連想があつたのか今でも分りません。でも私はいつも妙なことばかり考えているのですから別に不思議はないのかも知れませんわ。

妊婦の話が出ましたから、この間十二月号にS子さんが日赤病院でお産した時のことを書きましたが、あのような機会は二度とありそうもないので絶望しています。

S子さんは本当のことをいうと私の女学校の時のエスで私より一級上、おとなしい静かな人です。私は昔からS子さんにはわがまゝばかりしながらかわいがつてもらつていたので（勿論肉体的なものなどないのです）元来変に自尊心が強くて自分の秘密を他人には見せたがらない私もついあんなことをしてしまつたのです。また、もう既に大分頭が変になつていて偏執狂的なところが私にできているのでもありましょう。

その後銭湯などで時々妊婦を見かけますが私は余り銭湯へは行かず、行つてもうまくぶつつかるとは限らず、またたちようどいても、本当に大きくなつたのは少ないし、衆人環視の中でちら〳〵ッと見る位では我慢ができません。医学書によると、羊水過多症という病気の場合は羊水が五—二〇リットル（普通は〇・五—二）にもなるそうで、そんなのにめぐり合いたいと思つています。

さて、編集部にお願いしたいのですが、他にもし妊婦に興味をおもちの方がありましたら「奇譚クラブ」でも妊婦の絵や写真をとりあつかつていただけませんでしようかしら。でもモデルが見つからないかも知れませんわね。実は私が妊娠すればいゝのかも知れませんけど、私たちは子供なんかがあつたら、到底今のような生活もできませんし、今のところ子供をもちたいとは思わないので、気が変らない以上一生子供なしでいたいと思つています。

注文ついでにもう少しばかり。十二月号の折込写真のうち宙吊りになつているのは素敵でしたわ。ただ修正の跡が少し見えすぎるようだつたのは残念でしたけど。

一月号では喜多玲子さんの口絵「吊り下げられる女」のようなもの、これからものせて下さい。また今年の始めごろにあつた「怪奇画集」のようなものも復活していただけたらいゝと思います。

私たちは妙な自尊心——羞恥心があつて編集部の方にでも住所を知られるのが嫌で直接分譲の写真など買い得ませんので市販される本誌だけしか見ておりません。申しわけないとも思うのですが、秘密的なところが好きなのか　そうでないといつもの思い切つた告白やその他このようなお手紙も書く勇気が出ないような気がしますので、しばらくお許しねがいたいと思います。（羽村京子）

× × ×

日本自殺史の内

切腹史談

中康弘通

三七全伝南柯夢の挿話

1 創始期

切腹は、世界自殺史上に最も特異な、而も日本独特の自殺方法である。然るに従来多数の研究が行われたにも拘らず、何時何人を以て起源とするかさえ、確定的ではない。従つて本稿も、一応は定説通り、藤原保輔を以て第一人者としておこう

保輔は権内の子弟に優るとも劣らぬ成績を挙げながら、官吏登用に洩れた事から世を拗ね、強盗殺人を業としていた。後、検非違使の追求を逃れる為に僧形に姿をやつしていたが、密告されて隠れ家を囲まれ、逃げるに途無しと知るや、刀を抜き腹を刺し切り、腸を引出した所を捕えられた。翌日、獄中で絶命したと云う。

此の事例を見ても、切腹の自殺形式としての特異性は、既に発現されている。即ち保輔の盗賊としてのスタートが、門閥全盛に対する一種の劣等感と、それを否定する為の反社会的行動意識から始まつた事である。第二には、彼が其の境遇から向上する事を望まず、問罪の機を迎えようとした時に、自殺を決意し、腹を切り腸を引出した。是れは彼の自棄的な感情の方向を、自己破壊に選んだものと見る事が出来よう。即ち意識すると否とに拘らず、彼の劣等感が自己損壊と結び付いた点である。

以後、源平二氏を主流とする武士階級の興起、従つて度重なる合戦と、それに伴う敗者の自殺が、壇の浦に滅び去つた平家の公達の最期を除いては、殆ど切腹を以てさ

れた事は、切腹史の自然発生的発展を意味する。

源為朝は海遠く逃れ去つて尚、朝廷方の追捕を受け、一矢で兵船を沈めた後、柱に背を倚せて腹掻き切り、死なれぬまゝに背骨を断ち切つて死んだ。

是れは記録に残る範囲では、立切腹、所謂立腹（たちばら）の始めである。是れより先、保元の乱で捕えられて首を刎ねられた天王（為朝の幼弟）の守り役、内記の平太は、あの世までもお附きしようと、天王の死骸を抱いたままで腹を切つて果てた。是れは所謂追腹の始めであろう。

然し、切腹の具体的な様相が伝えられているのは、源義経の臣、佐藤忠信の最期を以て嚆矢とする。

頼朝と不和となつた義経が、逃れ〳〵て吉野に在つた時、忠信は、義経以下を逃がす為、火中に切腹する様を真似て、僧兵共を誑かして遁がれた。間もなく京都入り、四条室町は小柴入道の娘、かやの許に身を潜めた。忠信は義経全盛時に在洛中、かやと深く馴染み、今に忘れ難かつたのであろう。時に元暦二年十二月二十九日であつた。不幸にも此のかやは、忠信の都落ち以来、梶原三郎景久と通じていた程、操の薄い女であつた。

明けて正月四日、忠信が東国へ下ろうとした時、女は名残を惜しんで離さなかつた。とんだ床上手が仇となつて、景久に通報した。然し景久は、却つて女の無節操を憤り、女との交渉を断つた。かやは止むなく江間の小四郎に密告した。此の女、或いは小四郎とも何がしのわけがあつたのかも知れない。あくまで忠信を殺さずにはおかぬ執念深さである。こうなれば此の女の心理は、処女を破つた忠信への、一種のペニスナイド的憎悪に支配されていた、と見ては悪いであろうか。とまれ五日の内には忠信を鏖す準備が出来上つた。

いよいよ六日、出発という日の未明、二百余騎の軍勢が忠信の宿を囲む。かやは勿論とつくに逃げ出したのである。忠信は、今迄に幾度か死に損ねた命、惜しくも無しと思つたが、同じ死ぬならば義経の館であつた三条堀川で、と決心する。

やがて追付いた軍勢と激しい大刀打の後次第に傷つき弱つて来た忠信は、雑兵の手にかゝるも恥辱と、椽に上つて、

「お静まりあれ、剛の者の腹切る手本を、お見せ致そう」

と江間の小四郎に呼びかける。寄手も流石武士である。忽ち鳴りを静める。

まず念仏を称えた忠信は、大刀で鎧の引合せを切り、膝を立て居長高になつて、取り直した刀を左脇下に刺貫き、右脇下迄一気に引廻した。そこで抜いた刀を、心さきと云うから鳩尾の辺りであろう、突き立て臍の下迄切り下げた。引抜いて刃の血を拭い

「冥途迄持つて行こう」

と独語し、腹の切口を拡げ摑み出した腸を椽に撒き散らし、刀を腹中に差込んだ。

それでも死ねないので、

「是れこそ判官のかたみ」

と、義経から拝領の大刀の切先を口に含み、立上つたかと思うと俯伏に倒れた。切先が頭の後ろに抜け出て、やつと息絶えた。時に忠信二十八才。

此の話柄にも切腹の特異性が如実に現れている。その一つは露出性である。多数の

見物人の面前で肌を寛げ、腹を断ち切つた上で内臓をも掴み出せしめている。それは自己加虐の極致でもあると同時に其の自己加虐を誇示してさえいる。而も此の惨烈を極める自殺の様相を、敵対者たる人々は粛然と見守つて、充分に自己加虐を遂行せしめた上に、是れを賞讃した事は、彼の首級が鎌倉に送られて叮嚀に扱われた許りではなく、次の義経の自刃に当つて立証されている。其の点に就ては後述するとして、忠信の自己加虐が斯くも完全に行われた心理状態に就て一考しよう。

武士は常に他人を殺傷する術を以て戦場に功名を立てる可く教養されている。従つて生命の破壊は日常茶飯の事にすぎない。即ちサデイズムを心奥に養う事は、彼の武勇を示すものとして、相乗的に奨められるのである。

然るに其のサデイズムが一旦窮地に陥入つた時、自己の名誉を保つ唯一の方法として、加え得る限りの自己破壊を誇示するマゾヒズムに転化し、殊に忠信に在つては、愛人に裏切られた憤怒と悲愁とが、其の唯一の捌け口を此処に求めたものとも見られる。即ちこゝに至つて切腹は、多少とも自己劣等感の反射的な昂揚状態に於て、易々として遂行され得る性質を持つに至つたもののようである。

さて衣川の義経は、孤立無援の悲境に於て自刃を余儀無くされるのであるが、いよいよ死ぬべき刻限が迫るや

「如何にしたらよいのであろう」

と臣下の者に尋ねている。義経のような合戦の場数も踏んだ勇将が、切腹の方法を知らぬというのは不可解でもあるが、一面切腹に未だ定まつた形式の無かつた事を、此の言葉が立証しているのではあるまいか。そして義経は、忠信の最期が讃えられている、と聞くや

「疵口の広いのがよいのであろう。」

と言いざま、鞍馬時代に師から授かつた六寸五分の短刀を、左の乳の下に立て、後へ徹れと許りは深く掻き切り疵口を三方へ掻き破つた。腸をくり出したが死ねず、刀を衣の袖で拭い、衣を被つて胸息に倚つたまゝ絶命を待つた。

此の話柄で注意すべきは、切腹に用いた刀の寸法が明示されている事、並びに忠信の例と同様、主として上腹部に刀を加えたらしい事、及び切腹後腸を抉り出しても直ぐには絶命しないと知りながら、敢えて行われている事である。

由来、自殺は最も安楽を願う為に死に就く手段である。従つて苦痛の少しでも少い方法を選ぶべきである。然るに切腹は、次々と自

ら苦痛を増大せしめる方法であるから、長い時間を絶大な体力と気力によつて、自己加虐を支えねばならない。そこで自己加虐の大きさに比例する勇気と体力が、一層切腹者の、敗北その他の不名誉を償うものと、目され始めたのである。

と同時に忠信の場合、見物する側は、自虐する切腹者を見守る事によつて、潜在的サデイズムを満足させた事は想像に難くない。是れはやがて、幸若舞曲から、下つて浄瑠璃に繋がる切腹礼讃の文学、そして歌舞伎による切腹の擬態的実演が、次第に成形して行き、更に下つて天下泰平の江戸時代、即ち現実の切腹が次第に形式化し、且つ戦乱の終息によつて其の頻度を減じた事と、反比例的に歌舞伎の腹切場が盛んに観賞された時代、に至る事を以てして、可逆的に証明出来よう。

さて忠信の切腹は所謂十文字の法によるものであり、当時は此の方法が主として用いられ、承久の乱に際し、朝廷方に攻められた伊賀判官光季も、奮戦の極、館に火を放ち腹十文字に掻切つて果てたと云う。

やがて元弘の乱となるや、鎌倉幕府と朝廷との合戦は全国的規模に拡大し、従つて敗北その他の理由より、切腹は正に全盛期となる。

2 盛行期

村上房四郎義光は護良親王と共に吉野城に在り、落城迫るやまず親王を密かに落し参らせた後、櫓に上つて護良親王なりと偽りの名乗りを上げた。鎧を脱ぎ棄て練貫の二つ小袖を押肌脱ぎ、白い膚に刀を突き立て左脇から右の横腹迄一文字に掻切り、摑み出した腸を投げ付けた後、大刀を口に咥えて伏した。是れは一文字切腹の目覚ましい例である。

此の頃から切腹は、一種の美意識を以て文章に写され始めたようである。即ち、白く清げなる膚を露わし、青白く光る刃を突立てるやがて流れる血汐が膚も着衣も赤黒く染めて行く、種々な色彩の内臓が抉り出される。

それは惨虐な、然し悲愴な美しさを以て印象付けられるように説述される。錦の鎧を脱ぎ棄て練の小袖に直垂許りとなる、という説き起しからして、伏線的でさえある。とまれ切腹は、こゝに於て意識して美化の方向に発現されようとするのである。

是れは著名な単独の切腹例であるが、此の頃から、敗戦故に同時同所で多数の将兵が切腹する例も多くなる。

例えば、最後の六波羅探題、越後守仲時は、足利高氏が北条氏に反した為、京都から東帰する途次、番馬の駅に於て囲まれ

る。仲時は部下に帰順を奨め、自分の首を手柄にせよ、と言うまゝに膚を露わし腹掻切る。呆然と見守つていた部下の内、糟谷三郎宗秋という者は、

「情なきお言葉かな」

と落涙しつゝ、仲時が柄にまで腹に突刺している刀を取るや、我が腹に突立てゝ、俯伏す。並居る将士も亦我遅れじと、同時に腹を切る。その数四百三十二人。溢れる血汐は死骸を浸して流れ、悲叫と共に夕暗の番馬の宿を凄烈な鬼気で包んだに違いない。

新田義貞が鎌倉に迫ると、北条方の将士は奮戦力闘の甲斐無く諸所で自刃した。その心理的過程も、単に敗北の結果、降伏乃至捕虜の恥辱を避ける為という許りではなく、敗北を予見し戦うに詮なしと自裁する例が目立つている。その数例を上げる。

赤橋相模守は高氏と姻戚関係にあり、高氏の叛により北条方から何かと心隔てされはすまいかと、まだ敗北も確定せぬ内に潔く切腹する。

安藤左衛門聖秀は、新田方から帰順を奨める手紙を受取るや否や、憤怒の極、使者の面前で手紙を刀に握り加えて腹を切る。

塩飽家では、子の三郎左ェ門忠頼が、父新左近入道聖遠に自害を奨める言葉の下で袖の下から刀を抜き密かに腹に突き立て、そのまゝ死んで行く。弟の四郎は大肌脱ぎになつて、父の首を打つた大刀を取直し、鍔本まで己が腹を突貫いて果てる。

車勝寺に集つていた高時以下一門の主立つた人々の中にも、まず長崎次郎高重は、左の小脇より右の脇腹迄長く掻破つて腸を手ぐり出す。次々と先腹切つて果てる中に、僅か十五才の長崎新右ェ門は、老年の祖父を刺殺し、次の刃で腹掻切る。高時も此の少年に励まされて切腹、次々と自刃する者二百八十三人が、猛火の中に散つた。

この結果、一旦平和が恢復されたが、新謂南北朝時代となつてからは、合戦は全国に波及し、勝敗は兵家の常ながら、新田方でも越後守義顕は金ヶ崎で囲まれ、餓死寸前に、尊良親王の御前で自害の法を示し奉る。即ち刀を逆手に、左脇から右脇肋骨に二、三枚かけて掻破つた後、刀を親王の御前に差置いて絶命する。右兵衛右義興は窮妾の許へ通う途で討られて、武蔵国矢口に於て沈み行く舟中、七生まで恨みを報いんと呪いつゝ、左から右へ二度まで掻切つて果てる。

もの哀れな挿話では、秦武文という者は主の女房を護送の途中、敗かれて舟で奪い去られ海中に立すくんだまゝ、十文字に腹を切る。

塩谷判官高貞が、美貌の妻故に高師直の邪恋に苦しめられ、是れも七生までも恨みを抱きつつ馬上で切腹する。仮名手本忠臣蔵の発端は此処に取材したものであろう。

変つた例では遊佐入道性阿が、まず喉を掻切り返す刃で腹を切つている。通常まず切腹してから喉を断つのと逆である。

下剋上の気風が現れた足利時代には、戦乱は諸国に絶え間なく起つた。

関東管領足利氏満は、美濃の乱れに乗じて将軍を狙おうとし、上杉憲春に相談した。憲春は諫めを容れられず、帰つて妻を落飾せしめ、持仏堂に入つて切腹した。諫死の為の切腹は平手政秀のみでは無いようである。

義理故に合戦を待たず切腹した例も此の頃から始まる。畠山家では養子政長と遅く

生れた嫡子義就との抗争から、一門の西方備中守は、父子主従十一人が、東山建仁寺の西来院に切腹した。最後に当つて備中守が、息彌次郎に向い、訓諭した後、我を見送れと言い果てぬ内に、彌次郎が、覚悟仕ると言いざま九寸五分の守り刀を抜き、腹十文字に掻破つた。時に僅十九才であつた備中守は、よくぞ切つた、と悦びながら其の刀を取つて、胸に止めを刺してやる。こゝで始めて腹を切るのに九寸五分の短刀を用いた事が明示されている。又、介錯と称して斬首する事が未だ行われていないのは注目すべきである。備中守自身も寺僧に挨拶した後、腹十文字に掻き切り腸を巻き出して死んだ。

時に哀れを留めたのは、彌次郎の稚児が摂津の国に居たが、彼の自刃を聞いて悲嘆に暮れる余り、心の内を書置いて、十四才で切腹した。衆道の追腹では是が初めてではなかろうか。此の事件に連累して、抜井民部という者が大原寂光院で切腹している是は又剛勇と言おうか、腹十文字に掻切つた後、西方に合掌し彌陀号を称え、譜代の仲間に遺言を申し聞かせた上で、喉を刺して死んだ。

女性でも武門では腹を切る者があつた。武田信満の女で上杉禅秀に嫁した左ェ門という婦人は、応永二十二年禅秀が足利持氏と戦い敗北の結果、鎌倉で自害したと聞くや、甲州から藤渡の辺り迄来て、守り刀で腹十文字に掻切り水中に没して果てた。

腹の切り方が文書に明示されたのは、永正四年八月の細川九郎澄元を始めとする。九郎は、もと関白尚経の末子で政元の養子となつた人。一門の六郎澄之と家督を争い敗北の末、お傍の波々伯部伯耆守が自害を疑める。

当然切腹するすべも知らないので、伯耆が、西に向い十念し腰の刀を抜き、左の脇に刺立て、右脇へ引廻し、返す刀にて心本に刺立て、袴の着ぎわへ推下すもの、と教える。蓋し臍の下辺りまで切下げるのである。即ち九郎は教えられた通り腹を切り、伯耆が介錯する。勿論伯耆も直ちに切腹する。是れは佐藤忠信の例同様、十文字切腹の一定型である。介錯も此の頃から始まるらしい。

享徳四年、足利成氏が多胡の城を攻めた時、城将は僅か十五才の千葉介胤直であつたが、兵卒も残り少くなつたので、開城と共に仏前にて切腹仕りたしと願い出る。やがて城を出て阿彌陀堂に入り、別当来照院

絵挿の記後南夢占

が読経する内に切腹、乳母子の円城寺藤五郎直時が介錯、続いて直時も切腹する。少年ながら哀れ胤直は降伏を恥とし敗北を認めて開城の上で、潔く切腹したものである一方、成氏の側からは、その健気な心情を察し、名誉を重んずる意味で切腹を許したものであろう。此の頃迄は、合戦に敗れ自ら切腹せぬ限り、捕えられた者は斬首の刑に逢つていたようである。

降伏した者を斬首せず切腹を強いる例では三好之長の場合がある。之長は前述の細川澄元に仕えていたが細川高国との抗争に敗れ降伏した。然るに高国の臣淡路房四郎は親の敵と怨んでいたので、遂に切腹させられた。

之長の子二人も降伏して他に移されていたが、之も房四郎の進言により切腹と決りまず弟の孫四郎が腹を切り、兄の次郎は弟の介錯を終えて自身切腹、侍は相互なれば介錯をと頼む。苦しむ内に槍長刀で首を打たれた。

所謂戦国時代に入つてからは、城主が降伏の条件に切腹し、城内の将士を助命して貰う例が多くなつた。此の場合は攻囲軍から担当の地位に在る者が、検分役として派遣され、脇差の類に正しく布を巻き付けた腹切刀を整えて、充分に切腹した後、臣下の特に目をかけられていた者が介錯する。勿論介錯した者も概ねは直ちに切腹、主君の後を追つたようである。有名な高松城水攻めの悲劇の主、清水宗治の場合は、水上に小舟を浮かべ、羽柴方の検分役が乗つている小舟の前に上つた。

まず羽柴方から送られた酒で主従五人別盃を交し、宗治起つて一さし舞う。しばし扇がきらめくよと見るまに立ちながら腹掻き切り、続いて次々と舟中に切腹、小姓市之丞は介錯を済ませて後に切腹した。尚、其の前日には城の一廓を預つていた老臣が負傷の身で蔭腹を切り、宗治に介錯を受けている。所謂先腹の一例であろう。

中には、村上義光の故智に倣つたのか、伊達三河守盛重が政宗に攻められた時、その家臣が城門を開いた上で、盛重と名乗りを上げ敵前に立ちながら腹十文字に掻切つた。

その間に盛重は逃れ去つたという。

国主が臣下に命じて切腹せしめる例では上杉謙信の臣に長尾右ェ門という者があり偶々不都合を働き士籍を剝奪された。然るに親類縁者一統が彼の父の功績を申立て、切腹を乞うたので、特に帯刀を恢復させた上で切腹を仰せ付けた。是れくらいが刑罰としての切腹の始まりではあるまいか武田家でも重臣の諏訪頼重が切腹仰付けられている。

又、此の事によつても、切腹が武士にとつて死後の名誉を傷けぬ死に方とされていた事が立証出来よう。

敍上の例では何れも切腹に際し後世見る如き厳密な作法を守つてはいない。特に合戦時には、鎧直垂を脱ぐ暇も無く、刀も可成り長い二尺近いものを用いて、草摺を畳み上げた隙間を、着衣の上から掻切る例が多い。

（未　完）

同性的男性愛の謎

染田玄

一、同性愛の名称

同性愛とは、男性が男性を愛し、女性が女性を愛する一種の性慾的傾向をいうのである。此の性愛に関しては、我が日本も旧くより名称を有している。然しそれは学術的の名称でなく総てが土俗的の名称であつた。これが学術的名称として、Homosexualit なる新語となつて、初めて世に現われたのは、一八六九年にドイツで発行された小冊子に拠る、此の小冊子は、無名氏の著述であつて、其の後三十年間以上も絶版となつていた。

此の書は、発行後三十余年、即ち一九〇五年に至り、再び、ブロッホ、ヒルシュフエルド諸氏の手によつて、他の性的著述と同時に再版されたが、此の無名氏こそ、実に同性愛なる術語の名付親であつたのである。けれども、当時 Homosexualitat なる語は、名付親なる無名の著者に取つては、男子及び女子の「同性愛者」という意味を以て表示されていたのである。此の小冊子の著者は、自分の名前が、此の言葉によつて、不朽的になろうなどとは、夢にも想つていなかつた。彼は一八二〇年に生れたハンガリイの医師で、カール・マリア・ベンケルトと称する人であつたが、其の著述には、Benkert なる本姓の綴りを顚倒さして kertbeny なるペンネームを用いて執筆していたのである。（其の後、ラテン文学研究者として、はた、同性愛研究者として知名なるカアル・ハインリツヒ・ウルリツクスが、其の「同性的男性愛の謎」を公にした。）

此の同性愛なる語が、発明されたと殆ど時を同うして、（一六八九年「男性脱化（ウラニズムス）」又は同性色情なる新語が発明された。これはベルリンの有名なる心理学教授カアル・ウエストフアレが初めて用いた

文字である。

此の語は、如何なる意味を現わしているか、尠くとも、単なる同性愛なる語とは区別すべき語である。

男性的同性愛の研究者ウルリックスは、一八六二年、其の三十八歳の時に、其の親戚に宛て「自分は、純粋なる、不可避の、同性色情者である」と記した。ウルリックスは、斯る不自然なる性慾に関して、使徒のポーロが「羅馬書」の第一章において非難している事実を挙示している。即ち、これは、左の如くである。

これに縁り神は彼等が恥ずべき慾をなすに任せ給えり。其婦女子さえも順性の用を変えて逆性の用をなす、此の如く男子は又婦女の順性の用を棄て互に嗜慾の心を熾し、男と男と恥ることをなして其悖戻（よこしま）に当るべき報いを己が身に受けたり。（新約聖書、ローマ書、第一章、第二十六節——二十七節）

ウルリックスは其の著述中に、此の男性脱化（ウラニア）者は、男性的の体軀を有しながら、婦人との性的関係に嫌悪を感ずものであると云っている。

此の語の起源に就ても、ウルリックスは、其の該博なる研究の結果、プラトンの「饗宴篇」の第八章、九章におけるソークラテスに関する一節から出て居ると云っている。

同性愛問題を論じた此の一節にはギリシヤ神ウラノスの母なき長女、アフロデイトのことが記されている。アフロデイトは一名 Urania と称し、男女の中間性を有している。（されば、「男性脱化」なる訳語は適当でないが暫く一般の用語に従う）

ウルリックスが後年著わした著述は、よく「男性脱化」の事実を伝えたもので、ヒルシュフエルド其の他、後進者に取つて、非常に有益な文献であつた。

同じ意味の語を、英国のエドワード・カーペンターは Homogenie love と称した。これは「同性慾的恋愛」と訳すべきであろう。其の他、ザヴイエル、メエン、ラファロイッチ、ロバート・ヘッセンなど、同性愛について種々の新語を用いているが、現在では、最初の Homosexualitat なる語が決定的の術語となっている。ところが、此の Homo がラテン語の「人」という字であるために、一九〇七年一九〇八年のイタリアの新聞紙が、これを Uomosessuale（性慾的の人）と訳して、飛んだ間違いを起した例もある。此のセキジュアルという意味は、決して性慾的という意味ではなくして、性的傾向という意味である。これは Paderatie という字を直に、少年愛もしくは、鶏姦というが如き醜悪なる文字に訳すことの誤れると同断である。

二、同性愛の意義

「ウラニズムス」なる語の意義に関しては、ウルリックスの解釈した通りであるが、それを今少し詳細に述べて見よう。

森鷗外博士は其の性的自叙伝の中に、次の如く記している。

……少年という詞が、男色の受身という意味に用いられているのも僕のためには新知識であつた。僕に、帰りに寄つて行けと云つた男も、僕を少年視していたのである。（中略）僕には Urning たる資格はない。——鷗外全集第五巻　第一二九——一三〇頁——

鷗外博士の此の小説は、第一次大戦前に書かれたもので、ウラニズムスなる語が、今日の如く一般的でなかつた時代のものであつたに拘らず、よく適切なる場所に用いられているが、所謂「ウルニン

グ」と称すべき人物は次の如きを称すべきであると思う。

ヒルシュフエルド博士が南ドイツにおける某裁判事件で、鑑定を依頼された人物は、即ちそうした人物であつた。

彼は全然倒錯性感を有する人物であつたが、男性との交際を好まず、老婦人と交際するを好んだ。裁判官が彼に向つて、結婚する気はないかと質問した時、彼は、揮つた答弁をした、曰く、「私は、私の亡くなつた母の代りとなることの出来るような老婦人を探しています」と。

此の男が男性脱化者であつたということの、他の証拠は、彼が趣味において、全然男性と異つていたことである。彼は、立派な四つの客間を持つていたが、何れも、黄色や、赤い絹でもつて、部屋の内部を張廻らし、婦人部屋としての装飾を施していた。また彼は裁判官に向つて、自分で編物を示した。彼は、生母の生前中は、全然甘やかし児であつたそうだ。証人Aの証言によれば、級友たちは彼に、「テクラ」という綽名を付けていたそうである。特に彼は料理に通じていて、ある時、自宅で多くの客を招待した時、彼は母に代つて料理を引受け、美事に多くの客膳を拵らえ上げたそうだ。彼の重なる嗜好は、花や小鳥であり、また其の好きなものは、甘いものであつた。

こうした婦人趣味の反面において、彼は全然男性の趣味や、仕事を嫌悪する傾向をもつていた。彼は、一切の新聞紙を読まず、政治に興味を持たず、狩猟にも亦興味を覚えなかつた。たゞ、彼は、多くのスポーツの会に属していたが、それをスポーツそのものに対する趣味からではなくして、スポーツ協会の若々しい会員と交際するために他ならなかつたのである。

彼は、其の父の後妻の独り児であつた。幾人かの腹異いの兄弟は何れも、幼少の頃に死亡した。彼が生れた時、両親達は既に四十歳であつた。児童時代の彼は、泣き虫であり、憶病であり、そして、往々頭痛に悩まされた。彼は二十歳になつてすら、尚母の部屋で眠つていた。これはヨーロッパにおいては、全く異教な例である。

彼は齢若くして既に英国に就職口をもつていたので、其処に勤務していたが、其の両親に送つた手紙の文面は、全く成人の手紙ではなく、子供の手紙であり、甘やかし児の手紙であつた。彼を知つていた小学教師の一人は、彼が気取り屋であつたことを証言した。彼は学校でも、大変に物覚えが悪く、優良な成績を得た学科と云えば僅かに図画と宗教だけであつた。

長ずると共に、彼は次第に神経質になつた。不眠、憂悶、そうしたことは、絶えず彼を悩まし続けたが、殊に神経的の喘息で彼は苦しまねばならなかつた。いつも移り気であつたり、極度に興奮したりして、常人の態を持していなかつた。

其の母が七十三歳で死亡すると彼は殆ど二ヶ年間、毎日二回ずつ墓参をした。

こうした人物こそ、真に男性脱化的人物としての資格があると云つて良かろう。

同性愛なる語が、医師又は性学者以外に、初めて用いられたのは一八六九年の法令によるものであ

つて、是は、プロシアの司法大臣レオンハルト氏が用いた。或は、此の文字が、同性愛（Homosexnaliteat）という話の最初の語かも知れない。当時にあつては、一般大衆は其の字義を知ることが出来ないで、此の語を単に「少年愛」を意味するものと思つたらしいけれども、これも、適切なる解釈でなく或る一種の性的行動だと考えるようになつた。

前記の某が犯罪と認められたのは、同性愛的の目的を以て、其の下男の寝室へ入り込んだことであるが、裁判官が此の行為を犯罪であると詰責した時、彼は全く意外に感じたのである。彼は此の訊問を受けた時は、電撃をうけて全身麻痺したかの如く感じたそうである。彼は鑑定の結果精神薄弱であるという理由の下に免訴となつた

恐らく此の人物が同性愛なる意義を充分に解していなかつたことは、彼を免訴にさす理由の一つになつて居よう。日本においては、特に同性愛に関する刑法上の罰則を見出さないようであるが、然し以上の様な犯行の場合は猥褻罪として罰せられるものと見てよかろう。

同性愛を、単に Paderastie（男性同士の性愛）と見るのは誤りである。其処になお Tribagie（女性同士の性愛）のあることを忘れてはならない。これは日本においても、旧くから十一八一と称せられて居り、現在でも女学生間には、四、五種類の名称を有している位であるこれは、流石に女性の附した名称だけあつて、其処に嘲笑の意味が含まれているにしても、幾分柔らか味があり、少しも不快の念を催させない。

一体此の「ペデラステイ」とは如何なる範囲までの同性愛を指して云うのであるか、単にこれを「男色」と訳することは、間違つて居りはしないか。プラトンは其の「饗宴篇」の中に、「ペデラステイ」を次の如く言つている。

それは、少年を愛することではない、ペデラステイとは、既に性格を持ち始め、髭が生え始めた頃の青年を愛することである。

ドイツのハインリッヒ・シュルツは、同性愛は、青年組合から起源をもつていると云つたが、恐らくこれは、ギリシヤ古文の断片から、其の想像を起したものであろう。紀元前七世紀の頃のギリシヤ古文の一つで、スパルタの植民地であつたテラ（Thera）島の碑文によれば、青年組合の同性的盟約は、当初は単に名誉ある純潔なる契約に過ぎなかつたが、後年になつて同性愛的関係を加味するに至つた。それが「ペデラステイ」である。

ギリシヤの詩には次の如き句が

【読者通信】（投稿歓迎）

KK通信並に編集部の皆さんお元気ですが、私は奇クの比較的新しい読者の一人ですが、本誌の異色ある醍醐の如き内容には全く魅了されてしまいました

不敏ながら美の探究者を以て自任する私が今迄本誌の存在を知らなかつたというのは全く不覚の至りです。美と悦楽の夢幻境を随所に現出して、読者を恍惚の夢寐にひきずり込むあたりまことにボオドレエルの「人工楽園」にも比すべきものです。殊に羽村京子さんの「狂い咲くカンナ」の如きは讃嘆するばかりです。私も傑作を発表したいのですが、文才がないので残念です。今までの非力無能で灰色の現実の前にむなしく屈従してきました。しかし今や奇クを得てまことに千万の味方を得た思いです。名古屋伊東氏の賞讃されたサド侯爵のように美の殉教者たらんと思つているのですが

ある。

げに私は、
十二歳の美を喜ぶ。
されど、十三の春には
童に優る愛らしさがある！
十四歳の愛の花を
なお甘しと、私は思う。
十五ともなれば、少年は
一しお感じ易くなり、
十六歳には、彼は神々のもの
である。
されど、十七歳ともなれば如
何に
そはジョースのものであり、
私のものではない。
君は、成人者に興味をもつか
いまは、もはや児戯をなさじ
青年は既に
「君我に為せ、我君になさん」
を希う。

ドイツにおいてもペデラステイは、少年愛の意味を持つて居り、ルーテルの如きも、屢々その意味において此の語を用い、ゲエテも亦同様の意味に此の語を解していた。

三十年戦争当時においても、亦それ以後においても、同性愛という意味の場合に、「少年」という語が用いられた。

生来の懦夫、何卒志を同じうする方々の御声援を願います。
（横浜・三木生）

○

新年号の天邪鬼氏の御意見には大賛成です。それに僕の記録等大変よい記事だと思います。黒井さんの言つていられることは私としては同感で伊藤晴雨氏のあのぼうぼうの髪には美も喜びも感じません。私達近代人にはやはり繩をアクセサリー程度に使用した緊迫感の中に醸し出される雰囲気が楽しまれるのではないでしようか、他の方々の御意見を御伺いしたいと思います。
（長崎Y・M生）

○

貴誌の特異性のある編集は我々のグループの間でも驚異の的になつています。どうか今後共益々此の線を押し進められて文字通り日本唯一の風俗雑誌としての真価を発揮して下さい。及ばず乍ら御援助したいと思います。
（東京都A・S生）

三、同性愛名稱の起源について

ギリシヤ人は、同性関係のことをフェニチア的関係と云つたが、これはエージアン海のシフイノス島から起つたものらしく、今は全く不明に属するところの都市の名称に縁つたものである。恰も男色という別名がSodomy（ソドミイ）即ちソドムの市名によつたと同様である。

一四二二年のスイス国チューリッヒ市の法令書には、此の事が「フロオレンス的」と記されてある。けだし、中世紀においては、イタリーのフロオレンス市が同性愛の代表的都市であつた。所がフローレンス人は、これを「ネアポリタン的愛」（ネエプルス人的愛）と

ギリシヤにおいて、少年愛は、多くの場合に、同年齢位の少年の間の同性愛を云つた。

即ちクリトブーロスのクレエニアスにおけるが如き（ゼノフオンの語れる通り）場合を云う。

西欧における同性愛は、其の淵源をギリシヤにもつているかと思われる程であるから、後世の人は同性愛のことを、一名ギリシヤ的性愛とも称した。ナポレオン一世は、露帝アレキサンダー一世が、フランスの青年士官に熱烈なる同性愛的感情をもつていると知るや、「最も美しき、最も狡猾なるギリシヤ人」と云つた。

称していた。

中世紀には又此の事を「ウェルシュの結婚」と称した。Welscheとは「ローマン族の」という意味である。一五四六年以来、男色を非難した歌が歌われていた。それは、

「ウェルシュの結婚は、残酷なる辱しめである」

と称する句である。即ちローマス族の男色的風習を罵倒したものである。

同性的行為を忌んで、近世のフランス人は、これを「ドイツ人の醜行」と称している。何れの国民も、こうしたことは、他国のせいにしたがるものである。されば、ドイツにおいてはこれを、「フランス流の方法」と云っている。豈に独り、フランスのみならんや、ドイツでも、イギリスでも、苟くも人類の住むところ、性慾問題の論議せらるゝ所で、同性愛問題の解決に悩まない国があるであろうか。

近東においては、——殊にバルカンにおいては——同性愛的行為を始めたものはトルコ人だと云っている。けれども、東洋においては、ペルシヤ人をもつて其の創始者であるとして居る。ところがペルシヤ人はコロザン洲の人民に其の責任を塗り付けている。

西洋においても、東洋においても、他人に罪を塗り合う児童らしい習慣は同様である。

ヒルシュフエルド博士は、巌谷小波山人の説として、日本人が男色を仏教と共に中国より輸入したと記している。

中国は日本から見れば、非常に旧い文明国で、かの秦の徐福が日本に来朝した時代は、邦人は一つの蠻族に過ぎなかつたのである。故に、中国の文明が輸入されると同時に、漢民族内の欠点を併せて輸入したからとて別に不思議はない。中国は、既に漢の高祖の時代にも、また、それ以前にも、男色を、其の記録の上に持つている。戦国策には「姜童国を誤る」の文字がある。

中国それ自身においても華南は、華北の行としてこれを非難しているが、南方中国人の脈管には同性愛行為を喜ぶマレーの血が多分に流れている。

南米人、特にブラジル人は、同性愛を、北米人から学んだとも云い、また中国人から、更にイタリーから学んだなどとも云う。何れにしても、これを他国へ塗り付け、己れ自ら清うせんとしているのは、人情の然らしむるところとは云え滑稽である。

古代の史家ヘロドツスは此の行為はスキイト人より発生せりと云いユダヤの「タルムッド」においては、それをエジプト人の行為だと記している。

こうして偽善的行為、即ち、恥を他国、又は他の民族に塗り付けようとする行為は、野蠻人の中にも行われている。即ちフイヂイ島人は、これを白人の行為なりと云い、ヨーロッパ中世の記録家は、これを異教徒の中から輸入された行為なりと称している。けれどもキリスト教徒の中にも、此の名称は一再ならず口にされているのである。

中世紀のキリスト教は、邪教、異端、男色ということを、殆ど同意義に用いた。ミハエリス氏によれば、スイスのウリの法文では、異端ということは、「信仰上または肉慾上の罪悪」とされている。フランス語の He'ye'tignre（異教徒）という語は、異端とも解せられ、又男色とも解せられる。

ブルガリヤ人という語は、ブルガリヤ国における異教徒であると

いう意味であるが、後には其の後は、英語のSodomie 鶏姦者という意味に用いられるようになつた。

ルイ十四世の頃から、此の醜行を、「ドイツ流の醜行」と称していた。近世では、此の文字がミラボオによつて用いられた。

ミラボオはベルリンに滞在中、フリードリッヒ大王の行動を知つていたので、そうした文字を用いたものと思われた。然し、「ドイツの醜行」なる語は、主としてヴオルテーアが、多く用いた。彼がフリードリッヒの宮廷にあつたこと、そして、又フリードリッヒと仲違いしたことは有名なことである。ドイツ人に対する此の侮辱的言語の復讐として、ドイツ人は、梅毒をフランス病と称している。

イタリーにおいては、「ベルリン人」という語を同性愛者と同意義に用いたゝめに、大問題を起し遂に裁判問題にまでなつた例がある。

フランスのヘンリイ三世の時代にスペイン語で次のような歌が流行した。

スペインでは　騎士が
フランスでは　英雄が
ドイツでは　少数が
イタリーでは、総てのものが——

これ以外にも同性愛の名称と離すべからざる関係をもつている地名が二ヶ所ある。それはレスボスとソドムである。

ギリシヤ人は、男色の発生はクレタ島からだと云つているが、女性の同性愛は、レスボス島から起つたものと思つている。レスボス島に住んでいた女詩人サツフオこそは、女性的同性愛の創始者であつたのである。後年ローマの婦人フイレエニスがサツフオ同様の行為をなした。彼女の精力絶倫なる、実に一日××名の少女を×××したということをマルシヤルは記している。

レスビア的恋愛、レスビシズム、レスビア女等の名称は、それぞれの意味があるにはあるが最も多くの場合に、それは、「女性の同性愛」という意味に用いられている。ローデラアの如きも、「レスビア恋愛又はサツフオ恋愛」と云う文字を用いている。

男色をソドミーと称するは、ソドムという土地に関係があると、前に述べたが、これは、旧約聖書のモーゼの書に記してある記録より起つている。

ソドムの市の市民がロトに云うよう、

「今夜、お前の所へ来た男達は何処に居るのか、俺達は彼等を知つているのだから、彼等を連れて来て呉れ」

そこでトロが云うには、

「私には、未だ、男を知らない二人の娘がある、その娘をお前さん達に差上げるから、娘達をいゝようにして下さい。けれども、たゞ此の人達には何もしないで貰いたいものだ。なぜなれば、此の人達は私の家の蔭に入つて来たのだから」

ロトの此の言葉にも拘らず、ソドムの人達は、二人の少年に暴行を加えようとした。其の時、天は火を降らしてソドムの全市は滅亡した。

こうした物語から、「ソドミイ」なる言葉が起つている。

又ある場合には、「ソドミイ」は無智、不信、頑迷の意味を有するかの如く考えられている。それは旧約聖書の「ヘゼキエル書」（第十六章、四九節――五〇節）に記されてある記事を参照すれば会得出来るのである。

また、或る場合には、此の語を獣姦という意は用いている人もある。ドイツの詩人ハインリッヒ・ハイネは、其の「古城の伝説」の中に、そういう意味に用いている。

けれども、「ソドミイ」は人類の不自然なる性的行為であつて、ロシアの法律ではこれを婦人が行う場合と雖も罰を加うることになつている。

ヴォルテーアは、其の哲学辞典の中に、同性愛を「ゾータミテスの恋愛」と記しているが、これは、むしろ、Sotades（ゾーテード）の愛とした方が適当だと、リチヤード・バートンは云つている。バートンは、有名な「一千一夜物語」の飜訳者であるが、彼は、ギリシヤ詩人ゾメアテの詩を以て同性愛的事実の資料と見ているのである。故にそう云つたものと思われる。

ドイツ語で Zastrieren という語は辞典にも発見されない語であるが、これ又同性愛行為を意味している。これは、一八六九年に、同性愛的の事件で訴訟を起したザトロオという名前から起つている

またドイツにおいては、第一次大戦前には、「オイレンブルク」（Eulenburg）なる名称が、非常に恥辱の意味をもつていた。「オイレンブルク」といわれゝば、その人は、同性愛者又は男性既化者の如く考えられた。これは、当時世間を驚かしたモルトケ将軍とオイレンブルク事件を連想さす言葉であつたからである。

英国においては、「オスカア」（Oscar）という名前は、異色者の別名の如く考えられた。これは、オスカア・ワイド事件に連想をもつ語であつたからである。

一体一くちに同性愛者と云つても、その中には、種々な人物がある。婦人の変装した男子があり、男性として生活している女性があり、又、男女両形を具備せるもの、仮性の男女両形者、女性的男子男性的女子、もしくは男性にして女性化せるもの、女性にして男性化せるものなど、其の種類は雑多であるが所謂半陰陽、準半陰陽等は他日記すことゝしよう。

女性同士の同性愛を称してトリバディ（Tribadie）と称する。此の同性行為は、如何なる性質のものであるか、古来、国々によつて其の名称を異にしている。これはギリシヤ時代に女詩人サツフオによつて創められたことは前述の通りである。

我が国においても徳川時代の大奥の女性は、男性に接すべき機会を有せず、極度の禁慾生活に苦しんでいた結果として、一種の同性愛を行つていた。川柳子は、最も適切に此の同性愛の秘密を道破している。曰く、

長局丑満刻に角が生え

此の句については、現代人は恐らく、解釈を聞かずしては、その何が故に同性愛に関する句なるかを知るに苦しむであろう。徳川期の女性の同性愛には、張型が用いられていたのである。

女性情死に関して、珍しい事件があつた。

それは某工学博士の令嬢と、同年齢の某省役人の令嬢の情死であつた。二人とも高等女学校の出身者であり、そして中流以上の家庭

に人となつた所謂良家の子女の同性情死であるがために、此の事件は相当世間のセンセーションを起した。

死の原因は、二人が余りに同性間の恋愛に溺れ過ぎた結果、家庭の圧迫が加わり、二人は意の如く接近出来なくなつたので、遂に二人は厭世的恋愛死を遂げたのである。

ところが死体の漂着した越後の糸魚川の村役場で、二人の死体を検案した所、其の○○は、二人ともに非常に××して居るので、役場では売笑婦同士の情死であろうと思つたと当時の新潟県の新聞紙は伝えていた。これによつても、女性の同性愛者の行動が、男性のそれに劣らないものであるを知るに足ろう。

こうした同性愛者の行動に関しては、詳細に十分の記述をなす能わざるを遺憾とする。

近時、この「トリバデイ」は、女学生間において可なり行われているようであるが、スペインのマドリッド市の如き性慾と犯罪の都市においては煙草工場の女工の間に、非常に多く行われているという事である。

四、日本に於ける同性愛の名稱

太古にあつても、既に男色は存在した事実がある、大祓の詞の中に、畜を犯す罪がある。既に獣姦が存在したとせば、獣姦に類似せる同性慾の存在を想像し得るのであるが、其の名称はこれを知ることが出来ない。

「日本書紀」には小竹祝と天野祝なる二人の男子が、その醜行の結果、天神怒りて数月の間紀伊の国は雲霧に閉ざされたという。これを阿谷那比之罪という。

これが日本における同性愛の最初の名称かと思われる。又捨遺集には同性愛を歌つた歌がある。けれども、同性愛そのものゝ名称を現わしていない。

「和訓栞」の「わかしゆ」の説明には、わかしゆは若衆の義であり男色のこと、衆道のことなりと云つてある。

「徒然草」における乙鶴丸の物語、鳥羽僧正の絵巻など、同性愛を現わしているが、其の名称に就いては記していない。

「宇治拾遺」には、かはつるみなる語がある。

戦国時代より後、同性愛の対象人物を小姓、稚児、若衆など称しているが、それは少年愛の対象人物を指して云うので、同性愛そのものゝ名称ではない。然し「衆道」「陰間」の如き名称は、同性愛もしくは、其の行為を称したものであろう。

其の他にも、多くの名称があるようであるが、何れも土俗的の名称であつて、一般的でないものが多い。

中国では、少年を恋童、相公などと称している。

「龍陽」は同性愛の対象を指すのではなく全く Pederastie の意味を現わしたものであろう。

◎御詫び◎　二月号及び三月号の発売が予告しました発売日よりいさゝか遅延しました為、愛読者の皆様に大変御迷惑をおかけしました事を厚く御詫び申し上げます。電源ストを初め種々の悪条件の累積の結果、やむを得ず印刷が遅れましたが、今後はかゝる事の起らぬよう十分注意して発売日の定日を確実に実行するよう努力したいと思います。

○艶書通信○

高野すみ子

…喜多玲子さまへ…

拝啓

読者通信で拝見致しました。私も責められる女縛られた女等に大変興味を持つて居りますの、どうか文通御交際お願い致します。

五月二十三日　高野すみ子より

喜多玲子さま御身許へ

×

お返し有難う御座いました。

沢山のお便りで大変でしようね、私は或る会社に勤めておりますの。

男性の方には興味が有りません。家庭には両親と弟が一人ございます。

前々から女の人の縛られ責められて居る絵や写真を集めて楽んで居りましたが、私も此の様に責められたらと独り色々想像していましたの、変態艶書は何回も読み返し興奮しましたわ、一度あのように縛られ責められる苦痛を受けてみたいと空想していますのよ。

お便りお待ちいたしております。

五月二十七日　高野すみ子

喜多玲子様

×

玲子様

男の方が逢いに来られたりお手紙をよこされるのでさぞお困りでしようね。

皆様にすぐお断りのお手紙お出しなさいませな。

男の方なんて嫌ですわ、どうぞ私一人の玲子様になつて頂戴ね。男の社員の方で映画やお茶に誘つて下さいますが私皆お断りしますのよ。

女のお友達の宅で時々内密に楽しみをしますの、私が腰紐や扱帯で裸体の両腕を後手に縛られ足も縛られ口中にチリ紙を押込まれ、猿ぐつわをはめられ責めて〳〵責められ、そして結局二人でへんな事になつてしまいますのよ、こんな事を空想して楽しんでいますの女性の方からお便り御座いますの、どんな方々でしようか。

雑誌に載つています玲子様はあれは創作ですの？それならつまらないわ、本当であつた方がいゝわ。

私あなたにいじめられ責められたら肌に繩を喰い込ませてどんなにうれしいでしょう。想像しただけでも胸がドキ〳〵しますわ。絵をお描きになつたらどんなポーズがお報せ下さいね。

わたしがもし玲子様に責められるとしたら絵で見ました海老責好きですわ、繩でキック〳〵縛られて責められる——

とてもわたしの想像もつかない素敵なポーズをお考えでしようね、お教え下さいませね御覧の通り悪筆と下手な文章でとても思う様にうまくくわしく書けませんの、又お便りさせて頂きます、お許し下さいませ。

六月一日　かしこ　高野すみ子

喜多玲子様

×

玲子さま

お便りありがとう存じます。玲子さまがやつぱり雑誌の通りとわかりましたので本当にうれしく存じました。わたし嫉になるどころではありませんわ、益々あなたが大好きになりましたわ、お手紙拝見してとても興奮してますの、お友達と楽しみます時は責めが終つてから、言おうかしら、恥しいけどいゝますわ、けど、きつと〳〵内緒よ、玲子さまも御存じでしようネ、ある専用具と—中略—

玲子さまも内緒の詳しいお話して下さいませな、玲子さまに責められたら、どんなにうれしいでしよう、私胸が高鳴りますわ、でも又とても玲子さまと逢うのが恐ろしいようにも思えて迷いますわ、もしお逢いしてどんなにお手紙にない様な責められ方をするかと思うと、とても心配ですわ。

もし玲子さまと一緒に旅館に参りましたら家の人変に思わないでしようか、私旅館に参つたことありませんの、玲子さま縛られる時は私きつい方が好きなの、少し位の傷や血なら私平気ですわ、あなたの海老責とてもしそうネ、私辛抱出来るかしら、でもぞく〳〵しますわ、私裸になつて縛つて頂こうかしら、でもやつぱり始めてお逢いする玲子様に恥しいわ、玲子様が嫌になるなんて絶対なくてよ、どんな画が出来るか早く見たいわ、又お便り致しますわネ、お返事お待ちしていますわ。

かしこ　すみ子拝

わたしの玲子様

×

大好きな大好きな

玲子さま、お返事有がとうございましたいつもお便りにキスしてから拝見しますの今日は雨降りでうつとうしかつたわ、梅雨ですわネ、あなたの方はどうですの。

玲子さま、わたしもあなたのお便りを拝見していますとお逢いして縛られ責められいじられている様に空想して大変昂奮してしまいますの、御免なさいネ、こんな事書いたりして、御目にかゝらないとはいえわたし変ですわネ。

玲子さま、もしお逢いしてもあまりひどい事なさらないでネ、わたしお友達に内緒で玲子さまとお便りしておりますの、もし知られたらそれこそどんな苦しい〳〵責めをされるかわからないわ。

玲子さま、前のお便りに書きましたが、やつぱり血を出したり、傷をつける様な事はやめて頂戴ネ、内緒の事がお友達にわかつてしまいますわ。

初めは着物を着てズロースもはいて責めて頂きたいわ。

六月五日

ひどい〳〵アブノマールな玲子様、わたし益々嬉しいわ。

玲子さま、あなた御存じないの、専用具というのはネ昔の張型の様な物の現代的なものですの、柔かいゴム製ですわ、色々変つた細工をしたのがありますわよ、でもわたしのお友達が大事に仕舞つてますので私持ち出せませんわ。

旅館なんかで人に見られたりしませんかしら、そんな事になつたら、わたしとても恥しくて居られませんわ　大丈夫でしようか、私のよろこぶ方法を是非〳〵考えて下さいませネ。もし私が止めてとお願いしたら直ぐやめて下さいます?。わたし玲子さまがいやになる様な事ぜつたい有りませんわ、どうぞ御安心下さいませ。

玲子さま、くすぐるのだけはやめてネ、わたしとても辛抱できませんの、秘中の秘きつと教えて下さいませネ。

わたしの彼氏とてもわたしを可愛がつてくれますの、とても上手に〳〵に責めてくれますのよ、でもあまりはつきり書いて玲子さまのお気を悪くしてはいけませんわネ。

わたしの責められ方なんかベテランの玲子さまに云つても笑われますから申し上げませんけど、どうぞよろしくお教えの程御願い申上げますわ。

素敵、玲子様が断髪、男装なんて、私想像もしませんでしたわ、わたし断髪の方大好きなわたし玲子さまのお好きな様にどんなにでもなりますわ、今日はこれでゆるしてネ。

どうぞ早くお返事下さいませ。

十日　かしこ

大好きなわたしの　すみ子拝

玲子さま

×

玲子さま、どうか誤解なさらないでネ御返事有難うございました。

玲子さまのお便りの書き方がまずかつたの前お友達は女の方ですの。

私玲子さまに嘘をついたりしませんわ、お願い、どうかおこらないでネ。

彼氏といつたのは、彼女の事をしやれていましたのよ、ネ、おわかりになつて、

保温器だつたら玲子さまも御存じなのネ、おやきにならないでネ、男の方大嫌い、玲子さまどうか御安心下さいませ。

もしお逢いした時、血を出したり、傷つけたりするのやめて下さいネ、お友達に見られた時困るわ。

裸になるのも待つてネ、

わたしいやだわ、いじめないでネ、

絶対男のお友達なんてありませんの、彼女に知られると私とても困るわ、玲子さまはお都合いゝでしようがネ、知られずにいてほしいの。

わたし玲子さまが怖くなつてきたわ、にくまないで下さいね、お逢いしたらどうかひどい事なさらないでネ。

私素直にあなたに縛られますわ、ひどい拷問なんかもやめてネ、わたしホテルへ行くの勝手がわかりませんの困りますわ、大体の様子お知らせ下さいませネ。

お友達にも悪いし内緒にお逢いするの、も少し待つて下さいネ。

私お願い、都合がつき次第お便り致しますわ、許して下さいませネ。　かしこ

十三日　すみ子拝

すみ子の

喜多玲子様

×

大好きな玲子さま

お返事ありがとうございました、あたしも玲子さまの御手紙拝見しますとうれしくてうれしくて堪りませんの、玲子さま、お友達女の方ですのよ、前のお手紙で彼氏なんてかきまして済みませんでしたね、おこらないで下さいませ、男の方でも女の方でもいゝ事ありませんわよ。

いやですわ、玲子さま、どうぞ気を直して頂戴ね、男の方チットも興味ありませんの、お友達とのこと許して下さいネ。

玲子さまとお便りさせて頂く以前からですもの。

此の前のお便りに書きましたように、すみ子本当に血を出したり傷がついたりする位責められてみたいの、でも……うちのお友達に見付けられて、どうしたの？誰に此の傷をつけて貰つたのと問い詰められてもすみ子は断然いゝわ、かまいませんわ、でも、もし責められ拷問同様にしられて玲子様のことが知れたら？

大変なことになると思いますのよ、あたしそれがとても心配なの。

お顔はとてもシャンですけど気象がとつても強いの男性的なの。

玲子様に良く似ていると思いますの、あなたに負けない様なアブノーマルだと思いますわ、玲子さまは映画女優でいえばだれに似ていらつしやるだろう？

早くお逢いしたいけどお友達の事を思うと後が怖いし、

イヤ、玲子様、蛇やら蛙を殺すお話、あたし蛇が大嫌い字を書くのもいやだわ、どうぞこれから蛇なんていわないで頂戴ネ、あたしふるえるわ。

すみ子男装の方とても大好きですの、玲子さまの男装振りどんなかしら？素晴しいでしようネ、お友達との遊び方のことといわないで前のお便りに専用具のこと云わなかつたらよかつたわ、あたし馬鹿ね。

玲子様すみ子が男のお友達と愛し合つたりなんてしどいわ。

あたし玲子様に独占されたいような気持ですの、でもお友達の顔を思い出すと、あたし苦しいわ。

玲子さまと二人ホテルの洋室で空想するともう堪らないわ、南宝ホテル玲子さまの御知合ですの、今迄いらした事ございますの、

すみ子同性愛じやないわ、責められるのが大好き、気が遠くなりそうですの、その内にお友達が色々な方法でよろこばしてくれますの、すみ子同性愛でないと思うわ、

玲子様はどうお思いになりましてお聞かせ下さいませね。

玲子さまへお便りしますのいつも雑誌社気付であたしいやですわ、お宅へ直接お便り出してはいけませんの、すみ子なんだかたよりないわ、お返事下さいます時アドレスくれぐ

れもお願いいたしますわ。

六月十八日　すみ子

すみ子の

玲子さま

×

恋しい玲子さま

お返事待遠しかつたわ、玲子さまの意地悪本当に〳〵一日千秋の思いでしたわ、いつも御手紙拝見しますとすみ子うれしくつてうれしくつて堪りませんの、頬ずりしたりキッスしたりそれは大変ですのよ。

今日のお便りあたし本当にヤケますわ。神戸迄出張でお楽しみ、いゝお友達がお有りでうらやましいわ、さぞ〳〵およろしゆう御座いましたでしよう、おつかれ様、腹の立つたくさんのおのろけ、もう結構ですわよ、

あたし玲子さまにお逢いしようかしら、うちのお友達に内緒で、でも怖いし、といつて今玲子さまにお逢いするのもなんだか怖い様な気がするし本当に困つたわ。

コケシ人形大きいんですの、あたしイヤだわ、今日のお便り拝見していつもより以上にへんな気持になりましたわ、早速お友達に逢いに行きますわ、そうしてうんときつく縛つて貰いますの、それからたくさん楽しみますわ、一度お友達に玲子さまのお手紙見せようかしら、それこそ大変でしようね、おこつて〳〵うんといじめてよろこばせてくれるかもしれないわネ。

あたしも負けずにお友達とのこと書きますわ、房子さんというのよ、お責めになる時はいろ〳〵の方法があるんだけど、あたしの足をまげて太もゝの処で足首と一緒に縛るの、両方共よ、両手も後手に高手小手にしばられるの、するともうわたしこんにやくのようにくた〳〵にされるまゝになりますの。

玲子さまが美代子さんになさるのと同じ様に腋の下から脇腹、足の裏迄くすぐりなさるのよ、それからはとてもく大変なことといろいろありますの、でも、いくらお手紙でもわたしそんなことまで書けませんわ。

つい〳〵お恥しいこと書いて仕舞いまして相済ません、お許し下さいませネ、お手紙おくれないようお願いしますわ、よろしくつてくれ〴〵もよ。

かしこ

二十四日

すみ子の

玲子さま

×

早速の御返事ありがとうございます。

すみ子バンドの用意をして拝見致しましたわ、あたしいつも玲子さまのお便り拝見しますとどうしても昂奮しますの、本当にうれしいわ、玲子さまもそうですの、あなた月経バンドのこと感心しちやいやよ。

玲子さまのお人の悪い美代子さまとのお楽しみですみ子をやかしたりなんかなさつてほんとにいやですわ。

つい〳〵玲子さまのお便りに釣られて房子さんの事書いてしまつてあたし本当に恥しいわ、お許しになつてね、すみ子の絵どうもどうもありがとうございます、うれしくつてよろこんでいますわ、少しおとなしい様に思いますけど玲子さまはすみ子をいたわつていてくださいますのね、そうでしよう、あたしうれしくつてよ、でも本当はもつときつく〳〵縛られたいの、こんな事書くと玲子さまに叱られるかもしれませんけど、

この前のお便りあまり玲子さまつたらすみ子をそゝのかすんですもの、房子さんのとこへ行きましたわ、うんと可愛がつて貰いましたの、よかつたわ、玲子さまの美代子さま遠方で本当にお気毒ね、御同情致しますわ、すみ子迷つてますの、玲子さまに一度可愛がつ

て頂こうかと……

房子さんと又変つた技巧でね、房子さんのもちよつと誰も真似の出来ないテクニックがあるの。

玲子さまと美代子さまと房子さんとあたしと四人一緒に遊べたらうれしいんだけど房子さんにいえませんわ、あたし同性愛かしら、お道具は房子さんが皆お買いになるの、あたしもお写真少し集めてありますの、絵の本も色附きのと墨絵の持つてますわ。

大鏡をはつたお部屋なんて本当にございますの、あたしも一度行つてみたいような気がしますわ、罪な玲子さま、すみ子の心をぐつと摑んでしまわれて、すましていらつしやるの、いやだわ。

こんど房子さんに逢いましたらあなたのおつしやる様にして頂きますわ。

また今度、今日はこれで失礼しますわ。

二十七日　かしこ

すみ子拝

すみ子の大好きな

玲子さま

×

玲子さま

さつそくお返事ありがとう存じました。

おそまつな品お贈りしましたのに厚く御礼のお言葉あたし恥しいわ、玲子さんお笑いにならないかと、それが大変なお気に入りました御様子、すみ子嬉しいわ、それニューですの、あたしの身体にふれていませんの、使つたのお好きでしたら、あたしのお古お贈りしたのに残念ですわ、でもそんなこと出来ませんわネ、又すみ子の絵本当にうれしゆうございます。すみ子いつも玲子さんのお便り拝見しますと大変ですのよ、玲子さんにお見せしたいけど恥しくていやですわ、いじめないで頂戴ね。

あたし唄の文句じやないけど、お多福おかめであなたの想像なさる様なのではございませんのよ、房子さん本当にお上手ですわ、玲子さまのお楽しみ目に見える様ですわ。

すみ子の絵美人に描いて頂いて本当にうれしいわ、房子さんに可愛つて貰つたの嘘ですわ、お気になさらないでね、そして房子さんをにくまないであげて頂戴、玲子さまつたらあたしが昂奮するようなことばつかりお書きになるんだもの、ほんとうにたまんない。お逢いしないといろんないゝこと教えて下さらないのね、あたし玲子さんがじきおあきになるんじやないかと、そんな気がしますの、今迄に沢山お友達がおありだつたんでしよ。すみ子もじきあきられるんじやないかと心配ですの、それでお逢いするの迷つてますのよ

房子さんともわかれられないし、玲子さんともはなれられないようになつたらと思うとてもお逢いする元気ありませんの、お許しになつてね、お願い。

かしこ

三十日　　すみ子

大好きな
玲子さま

×

玲子さま、わたし本当に何んといつておわびしてよいかわかりませんわ、どうかおゆるしになつてね、今日のお便り拝見して泣けてきて仕方有りませんの、どうかたんとにくんで頂戴、お逢いしないのが悪いんですもの、お逢いして玲子さまのお気のすむ迄責めて頂けたらとわたし思いますのよ、でもそれが出来ませんの、かんにんして下さいませネ、どうかしばらくすみ子のことお忘れになつてねいやになられても、にくまれてもわたしがいけないんですもの幾重にもおわびしますわよ、玲子さん、すみ子のお便りそんなに憎いかしら、あたしも房子さんと当分逢わないことにしますわ、玲子さん、お願い、悲しいこと云わずにいて下さいませね、すみ子決して冷たんじやないんですけど、あなたの燃ゆるようなお気持よくわかるの、それだけにお逢いすることのできないわたしも悲しいの、

今後もお便りだけは下さいますよう、わたしからもお願いしますわ。

今日も素敵ないゝ絵お送り下さいましてありがとうございます。うらの絵始めはわかり難くかつたけどよく見てびつくりしたわ、とても凄いわ、でも表の絵の様に大きく彩色してあつたらすみ子ももつとよかつたのにと胸がドキ〳〵してますのよ。

玲子さまがどんな凄い絵をお描きになられてもすみ子決してびつくりしませんからどうぞ御安心してお描き下さいましね。

こゝにわたしの使いましたもの、つまらないものですけど同封いたしますわ、御笑覧下さいませね、外にもなんか別便でお送りいたします。

かしこ

七月三日　　すみ子

あたしの大好きな
玲子さま

×

玲子さんお手紙ありがとうございます。お返事大変おくれまして本当に済みませんいつも気になつていますのよ、これからすみ子にさまをつけずにお書き下さいましね。お願いしますわ、決して玲子さんがいけない子ですの、じやなくてよ、すみ子がいけない子ですの、どうかお気を直して下さいまして本当に済みませんでしたの、そのお水のみましたらとてもいい味本当においしかつたわ、この絵とハンカチ大事にしまつておきますわ。

玲子さまのおよろこびになるいゝ物、何からないんですもの一寸したスリルですわ、今度の絵一段と凄いわ、すみ子自分が縛られていじめられている様な気分になつて堪りませんわ、いつも玲子さんいゝものお送り下すつてすみ子本当にうれしいわ。

玲子さん、男の方とおつきあいしていらつしやるの、いやな玲子さんだこと、あたし男の方大きらいよ。

お写真今しまつた処忘れましてわかりませんの、次のお便りの時御送りしようと思つてますの、今度御便り下さいますね、玲子さんのお写真送つて下さいませんこと、お願いしますわ。

隠居さんとのお話是非きかせて頂戴ね。今度お便り二日続いて頂きましたでしよう、すみ子どうしたのかと思いましたの、いつもと違つて厚みがあつて一寸重たいでしよう。柔かで何かしらんと思いましたら、玲子さんのお使いになられたハンカチでしよう、あたしうれしくつてしばらく匂かいでましたの、それからねコップにお水を入れてハンカチをつけましたの、そのお水のみましたらとてもいい味本当においしかつたわ、この絵とハンカチ大事にしまつておきますわ。

玲子さまのおよろこびになるいゝ物、何か

よろしいでしょうね、せいぜい考えておきましょう、あなたのお好きなもの云つて見て下さいな、すみ子で出来る物なら早速お送りしましてよ。

かしこ

七月八日　すみ子

玲子さま

×

玲子さまお便り有難うございました。お返事おそくなりましてすみません。

玲子さまのおかきになつた絵大好きですのわたしの気持に一番びつたりいたしますわ、それをみるのとてもたのしみですわ、わたしまだ処女ですのよ、

玲子さまそんな事おつしやつたらイヤ、男の方なんて大嫌い、お友達もありませんのよ房子さんともしばらくお逢いしてませんの今度房子さんと遊びましたら、又詳しく様子お知らせいたしますわ、このお手紙に同封しましたもの、この前のお便りでお約束したものですのよ、どうかごらん下さいませネ、玲子さまお笑いになつたらイヤよ、わたし恥しいもの、でもわたし玲子さまにだけこんな恥しいものでもお送りしますの。

どうかそのおつもりでお願い。

七月二十一日　すみ子

玲子さま

×

お便り有難うございました。

玲子さまの送つて下さつた絵とても物凄いものですわネ、あたし驚きましたわ、あんなの見るのはじめて、前のもよかつたですけどこんどの方がすみ子好きですわ、女の方のうつとりとした気持よさそうなお顔、男の方の恐ろしい怒りにみちた表情、すみ子も一度あのようにして縛られてみたいと思いますの、でも恐ろしいわ、玲子さまにだつたらいゝけれど、男の方からだつたらイヤだわ。

玲子さまあんなのお描きになる時お気持どんなですの、おきゝしたいわ、わたし房子さんに頂いた事、内緒で、そしてこの絵のようにして縛られてみたいと思いますの、房子さんに房子さんにしていただきましたの本当によかつたわ、玲子さま御免なさいネ、男のお友達の事変に思つたりしまして、すみ子男の方きですの、房子さんつたらわたしの足がきれいだつていつも頬ずりしてくれますのよ、繩で胸や腕を力一ぱい縛られるでしょ。わたし痛いので足の指に力をいれてこらえますの、それがとても美しいつておつしやるの。

わたしもそんなにしていじめられて、足の指に力を入れてびーんと延してぼうとなる時が何んとも云えませんわ。身体中をきつく縛られるのが一番好きですの、叩かれたり傷つけられたり血を出されたりしますの困りますわ、繩で縛られるのでしたら、あたしどんなひどい事でも辛抱できると思いますのよ。

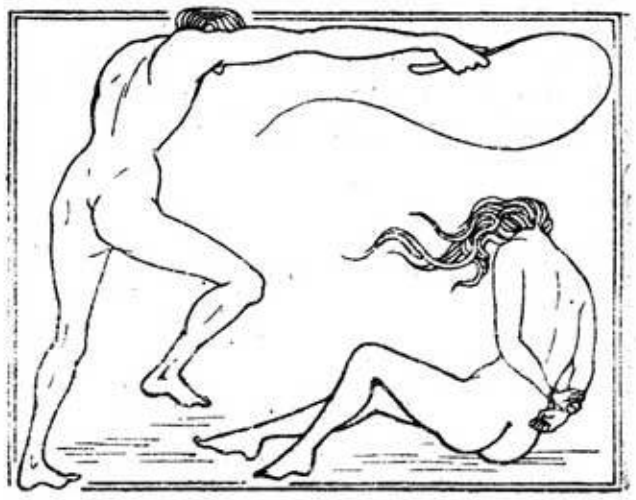
あたし近頃色々御用がありましてゆつくりお便りも書けませんの、どうか今日はこれ位で御許し下さいませね、あたしの写真を一葉同封しておきます。

七月二十七日　かしこ

すみ子

大好きな

玲子さま



文学及び歴史に現われたる サデイスムス

比山仁等

一、サロメ、ユーデイツト　安達ケ原、酒顛童子

サデイスムスとは、サド候爵（一七四〇年——一八一四年）の小説によつて初めて起つた淫虐症の名称であるが、こうしたことを取扱つた文学は、その他にも類例が尠くない。

同性愛者として有名なオスカア・ワイルドの戯曲「サロメ」は、一種のサデイスムスを取扱つたものである。サロメが、予言者ヨカアナンの首を得て、これを接吻するのは、彼女が一種のサデイスチンであつたことを現わしたものである。

ヘツベルの「ユーデイツト」の如きは、一種の愛国的勇婦を描いたものとして見られているが、此のユーデイツトは近時ではゲオルグ・カイザアによつて、一種の他の性格を有する女性として取扱われている。

ザツハ・マゾツホの如きは、其の小説の中に、ユーデイツトを一種のサデイスチンとして観察している。即ち、己れの身を任したバビロンの将軍フエルホルネサスを殺害したユーデイツトの行為は、表面は愛国的であるが、裏面はサデイスムス的であるというのである。即ちサロメの場合と同様に見ているのである。又一種の観察眼を持つていると見てよい。

日本の安達ケ原の鬼婆の伝説の如きも、一種のサデイストとしての残虐なる女性を語つたもので、科学的にこれを見ればかの老婆は淫虐的殺人鬼であつたのである。

大江山の「酒顛童子」の物語、即ち丹波の山奥に住つて居り、女を殺して其の血を飲む殺人鬼というのは、性学的に見てサデイスムス的淫虐性慾者と見られるのである。

倉田百三氏の「布施太子の入山」に現われた悪魔の如きも、仏教を無視した科学者の眼から見れば、これ又サデイスト以外の何ものでもなかつたのである。

上田秋成の「雨月物語」の中の「青頭巾」に現わされた怪僧の如きも、亦同性愛からサデイストに推移した色情狂と見れば間違いはないのである。

二、日本の劇に現われたる サデイスムス

日本人は、その国民性から観る時は決して惨虐なる人種ではないのであるが、其の徳川末期から明治に至る劇を見るに、著しく殺伐

な材料を取扱つたものが多い。そしてこれを代表した作者は、実に鶴屋南北であろう。「累物語」の如き「四谷怪談」の如き「佐倉義民伝」の如き、怪奇と残虐と、交々錯綜したものであるが、殊に「四谷怪談」は最もサディスムスの代表的なものと云つてよい。

多くの仇討劇にも、多少のサディスムスの加味されないものはないが、中にも「崇禅寺の仇討」に至つては、残酷を極めたものである。其の残虐さを知りつゝ尚好んでこれを見ようとする観客の心理には、幾分のサディスムス的傾向がないとは云われないのである。「播州皿屋敷」のお菊殺しの如き「明烏」の如き「伊勢音頭」の如き、何れも若い艶美なる女性を殺害するか、又はこれを虐待することを主題にしていないものはない。即ち、最も弱き、最も美しき、最も可憐なるものゝ最も悲惨なる境遇や、運命が、観客に喜ばれるということは、観客の凡てが、サディズムに陶酔し得る瞬間的快味を欲していることを、無言の中に語つているものではないか。

「世は情、浮名の横櫛」における切られ与三郎の如きは満身三十余ヶ所の創痍を受けて、なお死に切らないところに、観客中の女性をして、サディスムス的刺戟を喜ばすのではないだろうか。

老獪なる戯曲家は、往々女性の同情心と、同時に女性のサディズム的弱点を当て込んで最も美しい青年武士の悲劇的死を取扱つている「三浦三代記」の三浦「太功記十段目」の十次郎、もしくは熊谷対敦盛の如き、それ等の例と見てよい。

三、歴史に現われたるサディスムス

ヨーロッパの歴史に現われたサディスムの例証は、実に枚挙に暇ない程である。

ユダヤ人の大群が、放浪者イエスを捕えてこれに荊の冠を被せ、更に重い刑架を担わしてゴルゴタの丘へ追い立て、これを殿打、嘲笑して後磔刑に処し、以て快哉を叫んだというは、恐らく事実であろう。事実とすれば、これは、当時のユダヤの民衆をして、充分にそのサディスムスに陶酔さしたものと見てよい。

キリスト教に対する迫害は、総て一種のサディスムスの形を以て現われているが、ネロ帝のキリスト教徒迫害の如きは、其の著しい例の一と云つてよい。

欧洲では、ローマ時代に、そうした淫虐狂が殊に多かつた。カリグラ帝の如きもそうであるが、ネロに比すれば其の程度は遥かに低い。ネロは、個人としても、幾人もの人を殺している、その妻のブリタニカを殺し、母を殺し、遂には、其の師であるセネカをさえ殺している。そればかりか、遂に狂暴の極はローマ市に火を放つて、これを焼き払い、其の焔の天に冲するを見て手琴を弾じ、詩を賦して喜んだ。全くサディストとして世界史に類例なき残虐者である。

ネロより少し以前に、ユダヤ国にはヘロデ大王があつた。これまた一種のサディストであつたことは争われない。

新約聖書記者であるマタイは、彼が嬰児ヤマソを探し求めて、之を得ない結果、ベツレヘムの村における二才以下の嬰児は悉く惨殺さしたと伝えている。また、自分の面前で予言者ヨカアナンを殺害さしたのも彼である。其の一生の行為は、彼がサディストとして著しい傾向をもつていたことを証している。キリスト教の事実上の創始者とも称すべき使徒ポーロも又一種のサディストであつたに相違ない。

「四福音書」の記者であり、そして「使徒行伝」の記者であるルカは、彼を何と評してい

るか「サウロは兇嶮にして乱を好む」と云つているではないか。当時彼はキリスト教徒と称するものは、其の老幼男女を論ぜず、鞭をもつて打ち、これを有司の所へ曳いて行つたのである。当時彼の冷酷無惨であつたことは筆舌に絶している。即ち、彼には、常人としての憐愍の情もなく、全く狂人の態度であつたのである「兇嶮乱を好む」という性格、それは淫虐症者としての真骨頂を発揮しているのだ。

然るに、彼は、ダマスコに至る途中、日射病のため、馬上から墜落して一時盲目となり後に性格一変して、キリストの大使徒となつたということであるが、これは彼が、如何にも移り気であつて、狂人らしい面目を発揮している好例と見てよい。けだし「天才は狂人なり」とはロンブロゾオの論証を待つまでもなく事実である。

遥か後に、ロシアに現われたイワン暴帝の如きも又一種のサデイストであつた。彼はその王子を槍で刺殺して、すぐとそれを後悔している。其の態度は全く狂人であつた。これを支那史の上で見ると、暴王傑の如き、紂の如き、何れも完全なる兇暴性のサデイストであつた。

人類に於けるサデイスムスの傾向

総ての人間は、多かれ尠かれサデイズム的素質を持つている。其の軽微なるものに至つては、人類のみならず、総ての動物にさえも通例のことゝして見られるが、其の強度のものに至つては、これを、色情狂と目するの外はない。

一体サデイスムスなる語は、侯爵サアドの小説から起つたもので、性愛の対象となるべき人物を、残虐に待遇することによつて、其処に一種の快美感を覚えるものである。

それ等の淫虐症者は必ずしも性交を必要としない場合もある。愛の対象を苦しめることそれ自体が、性感に代る快美感となるのである。けれども、多くの場合に、それ等の人物は、愛の対象を虐待して、一層性感に強烈なる刺戟を与えることを目的としているようである。

ある南洋の土人は、性交の前に、其の妻を殴打することを一つの習慣としていた、これなども、一種のサデイスムスの現われと見てよい。

日本においては、古来より婦人が其の愛人を抓る習慣がある「あゝ憎らしい」と云いつゝ嬌笑を含んで其の愛人に痛みを与える女性達は、それを、何等科学的意識なくして行つて来たようであるが、何ぞ知らんそれは又一種のサデイスムスであつたのである。

こうしたサデイスムスの傾向は、多くの動物の世界にも見られるのである。人間も亦高等の動物である以上、そうした動物的の自然的傾向を持つていることは、又否み難い事実であろう。

ところが人間には、愛人の虐待を非常に歓迎する一種の倒錯性慾がある。これを称してマゾヒスムスと称する。もしサデイスムスを陽性の倒錯性慾とするならば、此のマゾヒスムスは、陰性の倒錯性慾である。此の両個は、殆ど至るところに、対蹠的に存在を示している。

多くの人は、日常生活においても、此のサデイスムスか、もしくはマゾヒスムスか

殷の紂王は、人を刑するにあたり、特に炮烙の刑というを用い、罪人には灼熱している銅柱を抱かしめて、これを焚殺し、王自身は其の寵姫妲己と共に、杯を傾けこれを喜び見たと云うから、ネロ以上であつたらしい。その他ロシヤの女帝カタリナの如き、マリア・スチユアルトを殺さしたエリザエス女皇亦サデイスチンであつた

日本史上の人物で、代表的サデイストは殺生関白の称ある豊臣秀次であろう。これに次いでは、結城秀康の子忠直卿であろう。

女性の部では、千姫を第一としなければならない。但し、どの程度まで、例の「吉田御殿」の伝説を信じてよいか、其の辺のところは明言することを得ないが、伝説の儘なる千姫であつたとすれば、彼女は古今に比肩すべき人もないサデイスチンである。比較的近年に属することで、最も悲惨を極めた事実は会津城落城当時の眼を蔽わしめるような事実である。

KK通信　半年分概算百円一部定価二十円、見本切手二十円にて急送、只今第六号発売中！

何れか一方を無意識に行つている。多くの人は、待合の女中などに、「旦那、又お近いうちに！」と云つて玄関に送られつゝ、軽く一つ背中を打たれた経験を持つていよう。女中そのものは、恐らく他の意味をもつて、客人の背中を打つたのであろうが、彼女としては、無意識の中に客人に対して軽微なるマゾヒスムスの快感を与えつゝあるのである。

狭斜の巷にある女性が、その愛人の膝に与える一つねりは彼女自身、サデイスムスの快美感を味うと同時に、其の愛人に対してはマゾヒズムの快味を与えているものと見て可なりである。

サデイスムスは、多くの児童が、これを先天的傾向として有している。児童が、夏季に、蟬、蜻蛉の如きを取つて、それを弄り殺し、少しも生類に対する憐愍の情を持たないのは、彼等がサデイスムスの傾向を備えているのだという説を、児童性学の泰斗アルバアト・モオル博士は唱えていた。まことに穿つた言であると思う。

多くの児童が、其の玩具を破壊して快美を覚える心性も、亦、サデイスムスの現われである。必ず一人や二人の悪童と称するものがある。彼等は凡ゆる隣人の迷惑を見て快哉を叫ぶ、猫の児を殺して河中に投げ込む、蛇を殺して、女の児の前で揮り廻す糞尿を村の富豪の塀に塗りつけて喜ぶ。―これ等は、無目的であり、無意味の行動であるかの如く見えるが、実はサデイスムスの現われと見るの外はない。

我々は世上の夫妻間に、往々にして連日喧嘩の絶え間なき人々を発見する。これ等の夫妻は決して、深い理由があつて喧嘩をやつているのではなく一種のサデイスムス的の遊戯として喧嘩をやつているのである。されば、偶々仲裁に入つた者は、後で、夫妻双方から憎まれるを常例としている。

なぜなれば、これらの夫妻は、一種のサデイスムスの快楽に陶酔しようがために、夫婦喧嘩をやつているのであるから、何者か門外漢があつて、其の意味深長なる喧嘩の意義を解しないで、これを仲裁するとせば、夫妻は、サデイスムスの快楽を妨げられる訳である。さればこそ喧嘩の後で、仲裁者は夫妻から犬も喰わない罵倒を受けるわけである。

悲痛と快樂

波多野新

狂信的な自己虐待者（十三、四世紀に行われた鞭撻宗教）

闘争と騒擾とは動物界に於ける求愛である。闘争と騒擾は人間界に於ても同じくそうである。力の手段は女と男とが異るように自然に異つている。そしてもし自然的な関係を「正しい」と」呼ぶならば力の手段の分離は「正しい」。と云えいる。

女の力は純精神的である。女の力というのは、彼女自身動揺しながら、或いは動かずにいながら、拒絶したりすることが出来るということに存している。男の力というのはより肉体的のものである。智的並びに心理的な強さである。

すべての力は優勢ならしむことに努め、すべての権利は優先権を望む。それは優勢な力と優先権とが快楽的刺戟を持つているからである。

今や我々は恐らく最も異常にして且つ最も説明し難い所の人間心理上の一現象に近ずいて此れを解明する必要に迫られた。

私は既に力の優勢と優先権とによつて乱された平衡に就いて物語つた。この力の優勢と優先権との中には快楽を刺戟するものがひそんでいることは云うまでもない。彼等は本能の柵を広め、意志自由の感じを強め、かくて快楽として感じられるようになる。之に反して、その狭搾と妨止とは同じ程度に悲哀として感じられる。

所が、悲哀が欲求される場合がある。もし狭搾、抑圧、妨止が感情複合体にとつて真に悲哀であるならば、これは解き難い謎であるそれともその感情複合体がこれには悲哀であり、あれには快楽であるのか？

悲哀が逃避される所か寧ろ欲求される場合は決して少くない。

蜂の針にたつた一刺し刺されると苦痛の反作用として必ず力強い防御運動が起る。だが、支配者の無限の抑圧に対しては殆んど何の反抗も起らない。もし、人が自らを支配することが出来るためには、人が自らを支配することが出来るためには、社会的教養の発展段階をまず自己が豊かにならなければならない。社会的教養の発展段階を通過して来なければならないというならば、その代償として未来に対する感情の転回を男に持つてゆくということは、私にとつては不可能でした。どうしても不自然に思われたからです。しかし私は自分は非常に多くの希望がある筈である。もしも被支配階級が自分達の位置をまさに快楽の反極であると感じれば、防御運動は蜂の針に刺された時と同じようにすぐに来るであろう。

だが我々はまず性慾を問題にしよう。そこでは人間の最も本源的な本能性がはつきりと物語つているのである。恋愛生活の正確な非常に公平な研究者であるハヴアロック・エリスも矢張りこの問題に心をひそめた。

我々は一人の婦人がこの問題に就いて彼に告げたところを聞こう「たとえ苦痛の表象が一種刺激的なものを持つことが出来るとしても、私の考えでは、実際の苦痛ということになつたらまるつきり、逆ではないかと思います。ほんの僅かばかりの苦痛でも私のすべての快楽を破壊してしまいます。結婚後のまる一月というものはそうでした。何かの拍子で苦痛を感じると私の快楽は忽ち滅じてしまいました。やさしい接吻とか愛撫だとかにはちつとも動かされない鈍感な人達が乱暴に寵愛されたいと願う気持ちはわかりますが、こんな場合は何も苦痛を欲しているのではなくて、一種の興奮を欲しているのです。それですから、こういう鈍感な人達に就いて、たとえそう見えても、彼等が苦痛を愛しているのだとは云えません。私は単に苦痛に注意力を分ち、方向をそらすという理由だけでも、自分に実際に苦痛を引きおこすようなものを愛する人があるということは考えられません。これは私の否定的な経験から得た見方であります。何にせよ、私に敢て喜んで苦しめられている女などというものは見たことがありません。……私は自分を罰せられた天使と見なすことが大変好きでした。一方妹は一緒に悲しんでくれる人がないということのために、あんまりそれを好きませんでした。こういうような感情の転回を男に持つてゆくということは、私にとつては不可能でした。どうしても不自然に思われたからです。しかし私は自分をきびしい規律と真面目な訓練で女としての生活をしている男であると感じることに満足を覚えました。だが此の想念の中には何等残酷なものは含まれていません。何となればその際常に私は少女を愛するという考えをどうしても持たずにはいられなかつたからです。愛する男から苦痛とか悲哀とかを与えられている女を思い浮べて、私がしかも喜びとか満足とかを感じられるのは、次のような条件が満たされている場合に限ります。

一、女はその男から確実に愛されていなければならない。

二、女はその男の判断力に対して充分な信頼を持つていなくてはならない。

三、苦痛は気まぐれでなく、熟考の後与えられたものでなくてはならない。

四、苦痛は善意で与えられなければならない。女の改善のためであつて、怒りや復讐のためであつてはならない。何となれば後者は男の理念を乱すからである。

五、苦痛はあまり大き過ぎてはならい。それは我々が子供の頃に「ちつと痛い」と云つた位の程度を越えてはならない。即ち決して傷つけたり切つたりなどと云うことになつてはならない。

尤も私はこれ迄、右のようなすべての条件にかなつた苦痛を受けたことがありませんから、果して実際に快楽を感じ得るか否かを断言する権利は私にはないわけです。」

エリスは右の例を他の二三の例と共に、「苦痛を求め愛しようとする女の傾向」という事実の証拠として掲げている。しかしこれは私には賛成出来ない。それは同時に感じられる快感を除いたあとの苦痛として感じられる所の或る物に過ぎない。

先へ進む前に私は性慾と苦痛との関係に就いて重要な研究をしなければならない。

所謂「鞭打ち」は簡単にサデイズム・マゾヒズムの標題の下に一括されているが、大多数の場合それは当つて居らない。即ち単なる鞭打に終始しているもの〻如きである。それは皮膚神経の外的刺戟に依つて毛細管に過度の充血を惹き起こし、従つて脊髄に於ける生殖神経の興奮をうながし、生殖器の周辺にそれに応じた経過を生ぜしめるに過ぎない。脳髄は(或る特定の性的色彩の観念連合と共に)この場合謂わば除外されている。その証拠には殆んど同様の経過は眠つている者にも生ぜしめることが出来る。本当のマゾヒズム・サデイズムの観念内容の豊富さに較べるとかくの如き外的な鞭打ちは心理的に極めて貧弱である。この狭い範囲に於ても矢張り缺くことの出来ない変化は単に機械的の変化に過ぎない。即ち使用される道具とか位置とかに関しているのである。

しかしマゾヒズム・サデイズムの複雑な感情方向の重大な要素としての鞭打ちとなると、それは全然異つたものである。それは単なる皮膚の刺激だとか無選択な相互的なものとかではなく、意識的で一面的なものである。それはまた一連の行為の中に於ける一定の瞬間を必要としない。何となれば実際の鞭打行為を必要としないマゾヒストがあるからである。彼等にとつては肉体的苦痛は忽ち準備的愉悦感を無関心の状態に引き戻してしまうからである。

従つて悲痛と快楽の関係の問題は二つの成分に分たれ二様に解答されなければならない。その前に我々はこの問題の中心点に非常に接近しているクラフト・エビングの言葉を引こう。

「問題は単に、普通ならば肉体的苦痛を惹起すべきであるものが、此処では肉体的快楽として感じられるということではなくて、マゾヒズム的のエクスタシーの中にある者は、激動のあまり(激戦中の兵士のように)肉体的作用が彼の皮膚神経に全然知覚されないためか、或いは(殉教者とか狂信者とかのように)意識が快感で一杯になつているので、虐待の観念がほんめしるしとして、何等苦痛を伴わないものとしてしか存在しないためか、いずれの場合にせよ、とに角、何等の苦痛を感じないということである。この場合に於ては肉体的苦痛が心理的快感に依つて過度に補充されているのである。狂信的な自己虐待者(十三四世紀に行われた鞭韃宗教、彼等は鞭韃をもつて洗礼、聖餐礼と同功徳なりと唱えた。——挿絵参照)がそれである。殉教者の意識も唯殉教に依つて神に仕えるとか、罪を償うとか、天国に行くとかいうような快感を惹起する観念で満たされているのである。」

右の例に於ては肉体的の快楽と精神的の快楽とが区別されているが、これは事をわかり難くする恐れがある。すべての快楽は神経網に依つて精神的に知覚される。唯一の相異点は刺激が、感覚器管に依つて感受された新しい瞬間的の印象に依つて与えられるか、或いは記憶や、純内面的な幻想、例えば夢の如きものに依つて与えられ

るかという所にある。激戦中に於ける感動状態の例は、あまり適当でない。最近の武器は恐ろしい勢いで、てもなく人を打ち倒してしまうので、彼が苦痛を感じるのは、気絶から眼がさめた時である。剃刀を使う時にも人は何等の激動状態にない。傷をつけても痛みは後でしか感じない。

さて私は二つの群に分類して研究することにしよう。第一は全然心理的な情熱なしの、純粋に外部的な鞭打である。打たれたる場所が何時苦痛を感じるかということは、此の場合は全然打撃の強さの度と個人々々の感受性に依る。痛感にどんなに種々の程度があるかということは全く驚くべきことである。

バアキンソン氏は南洋の或る地方で、子供達の頭蓋骨を割る時のことを次のように述べている。

「生涯、頭痛や顳顬にかゝらないようにと、用心深い母親達はその子供達の額の骨を開いてやることを忘れない。或る地方ではこの手術は一度行われるだけであるが、或る地方では二度乃至三度行われる、数年前迄私はこの傷痕をたゞ飾りのための「ほりもの」だろうと思つていた。尤もそれにしては何故その溝が、はつきりと骨の中迄くいこんでいるのがわからなかつたが。

所が二三年前のこと、サンタ・マリサ岬の近くで二三人の子供の苦しそうな叫び声を聞きつけたので行つて見ると小さな川の浅い水溜りに女が多数集まつている。そしてその女達が三才位の女の子を二人しつかりと押えつけていると、母親達が鋭い貝殻でその子供の骨を削り取つているではないか！所がその骨を削り取ることそれ自身は子供達に取つては大した苦痛ではないらしい。叫び声は寧ろぎゆう〳〵押さえつけられていることに対する反抗らしいのである何となれば、押さえつけていた手が放されるや否や、叫び声もぎやんでしまつたからである。手術は長さ一センチメートル、広さ半ミリメートル程の小さな割目が出来る迄続いた。それから皆はその傷をあまり綺麗でない川の水で洗つて、もみくちやにした木の葉をその上に載せて、古い木綿の切片で繃帯をした。手術がすんでしまうと子供達は大元気で母親の手にぶらさがつて行つてしまつた。」

この子供達が喜んで額を切り割られているのでないことは確かである。しかし我々の普通の心理から考えるとこの子供達の場合は余程不思議である。

さて、第二の群は心理的の熱情を有するものであるが、この場合にも、普通ならば苦痛を惹き起す経過に対する注意力の転換は存在するのみならず、より以上に説明し難い有様を呈している。

私は此処に、あまり注目されていない、しかし非常に明らかな報告を引用しよう。それは或る男がエッチ・エリス氏に告げた事実である。

「まだ十四位の子供だつた。或る時、私は両親の或る友達の家に長い間とまりに行つていたことがあつた。そこの家の一人娘は私よりも六つばかり年上で、綺麗な健康な娘であつたが、それが私の遊び相手であつた。彼女はいつも美しく着飾り、可愛らしい足とくるぶしを持つていた。自分でもその点をよく心得ていたので、出来るだけその長所が現われるようなみなりをしていた。即ち短いスカートと踵の高い浅い靴を穿いていた。そしてコケツトな様子で抜目なく人の眼先にちらつかせた。彼女は物を踏みつけることが特別に好きであつた。それも踏みつけるとつぶれたり、歪んだりする物で、例えば花とか、落ちた果物とか、木実とか乾草の塊とか、藁とか、か

り立ての草とかいうものを踏みつけるのが好きであつた。二人で庭を散歩するときなど彼女はしよつちゆうこれをするので私はすつかり慣れてしまつていた。さてその頃私が特別に好きであり、今でもなお喜んでやるのであるが、私はよくさかんに燃えたストーヴの前で厚い絨毯の上に身を延ばして横になつたものである。或る晩のこと私はいつものようにこういう恰好をしていた。私達は二人きりであつた。彼女は何かストーヴの上から持つて来ようとして部屋を横切つて来た。そして私の向うから腕を差し伸べる代りに、彼女は、そら、乾草や藁と同じように踏んずけるわよといつたようなふざけた様子で私の上に乗つた。私は勿論その調子を受け入れて笑つた暫く私の上に立つていたと思うとやがて彼女は、ストーヴの縁にしつかり摑まりながら、褐色の絹の靴下をはいた足をストーヴの火の光の中に突き出して温め初めた。そうしながら彼女は私を見下して、私の熟くなつた顔を見て笑つた。彼女は全く無邪気なチヤーミングな娘であつた。

どんな敍述も決して私のその時の感情のほんの慨念をも与えることが出来ない。たゞ私はこの瞬間以来、私の性向が永遠に定められたことを知つているばかりである。此の晩以来殆んど数えきれない程屢々私は彼女の華奢な靴の重みを感じた。私は私が踏まれている時と同じ程の満足を同時に彼女も味つているということを知つている。彼女は可成り贅沢の出来る身分だつたので、すぐに美しい靴下だの、出来るだけ高い鋭い踵を持つた靴だのを買つた。踏ませるという条件で、それ等を私に見せてくれた。彼女はその靴が私の身体の中に沈むのを見、高い踵の下で私の筋肉がゴリゴリするのを感じるのに夢中になつた。

私達の間には決して性交などということが問題にならなかつた。私達はそのまゝで充分満足していた。二十才を越した頃私は旅行に出た。三年たつて帰つて来て見ると彼女は結婚していた。私達はちよい〳〵会つたが、以前のことはおくびにも出さなかつた。私達はたゞ仲のよい友達としてつきあつた。だが誰も見ていない時には彼女の足を見ながら、彼女との遊戯を想像した。しかしその時は遂に来ないでしまつた。」

マリアンネの足踏

右の例はいろ〳〵の見地から見て非常に有益である。しかしそれに就いて詳論することは後に譲つて、此処ではたゞエリスがこの現象から得た結論といつたようなものを紹介するに止めよう。

彼は右の現象を彼の所謂「性的シムボリズム」というカテゴリーの中に入れている。この言葉は彼に依れば「注意力が性的刺激複合体の中心からはずれて如何に相似や、空間的に並びに時間的の因果

関係で結び合わされていようと、何等直接的の関係のない対象又は経過に向けられているという心理状態」を意味している。

今や私は次のような結論を持ち出してもいゝと思う。即ち統計上すべての快楽的行為の大多数は明らかに「種の持続」を目的としていない。

大多数の女にとつては種の持続と×××とは決して同一ではない何となれば不完全な××が彼女を準備的愉悦感の状態に放置するからである。そこでその性慾が時間的に延長することになる。従つて男にあつては意識的に索められた××××に達するための道と種の持続とが合一することが常であるが、女にあつてはそういうわけにはゆかない。

さて、先に掲げた例をもつとよくしらべて見ることにするが、その前に、「女に依つて踏まれる」ということを題材にした絵に就いて一言述べて置こう。

まず第一に注意すべきことは、これ等の絵を描いた芸術家達がすべて性的連想の要素をその絵の中に突つ込んでいることゝ、それがきわどければきわどい程芸術的だと思い込んでいるということである。

だがこれは極めて自然なことであつて、当の芸術家が去勢者でない限り如何ともしがたい。しかしそのためにそれ等の絵はだらしがなく浅薄で、内的な強さと云つたようなものに缺けている。

それはそれとして、芸術家が何か一つの考えを絵に描こうとし、しかもそれを彼の性慾から強制されて描こうとするときは、彼は決して「種の保存」の概念が彼の筆を導くというような方法で、抽象的なものを具体化しはしない。

既に述べたように、性慾に於ては観念と行動とは同価値である。たゞ一方が他方よりも量的に多いというだけのことである。女に依つて踏まれるという性慾的行為をアブノルマルで、変態で、病的で堕落的だと云いながら一方で同じテーマを取り扱つた芸術品を価値があるように云う程非論理的なことはない。観念も行為もはつきりと、同じ源から迸り出しているのではないか！

フランスのジヤン・フベエルという画家が、当時フランスで問題になつていた国家と教会の分離ということを絵にすることになつたこのテーマは性慾とはまるで関係がないと人は云うであろう。事実何の関係もない。しかし芸術家は完全な六感を持つた人間であり、しかも男なのである。そこで彼はこの元来の要素の中に性的な観念連合を突つ込んでしまつた挿絵の「マリアンネの足踏」を見るがいゝ。画家はもとより別の題をつけていた。即ち「大寺院のボルカ」という題である。何故？絵を描き上げてしまつたら彼は彼の画筆を導いたものがいくらか恥ずかしくなつたからに違いない。彼は何とか下に字を書きつけて巧みに注意を肥つた女からはずさせようとしたが、如何せん画の中の唯一つの主人公は相変らずこの女である。この図々しい、豊満な、乱暴な、力の強い女はまるで酔つ払つたかのように、その足の下に来るものを一つ残らず踏みつぶそうとしている。

この画を描いたのが一人の男であり、しかも完全な感覚を持つた男であり、その上にエネルギーのある芸術家であるということがすべてを語つている。「国家」という概念が彼にとつては一人の女にそして勿論こういう女に思われた。もし同じテーマを一人の女画家がこういう風に描いたとしたら、彼女は同性愛的な女に違いない。

もし他の男が他のニュアンスでこの同じテーマを描き現わしたとすれば、それは彼の性的方向が他のニュアンスを持つていたからに他ならない。

一六〇〇年代のザーデラーの銅版画も亦同じ種類に属する。（挿絵参照）この画の外面的の主題は何か平和恢復の有様を表わしたものである。邪魔な戦争が過ぎ去つてしまつたので、芸術と科学とがいきをついている。所がこうテーマをつかまえてザーデラーは何という形をそれに与えたことだろう?勇気凛々たる一人のアマゾンが一人の男を床に踏み跨り、繩でしつかりと手足を縛り上げている。彼女の足は男の咽喉を踏んでいる。私は後でエリスの挙げた例を引用することにしよう。その男にとつては、こんな風な「勝利の女神」が此の絵と同じように彼の咽喉を踏みつけて、彼を憐れな「戦争の奴隷」として虐待してくれる瞬間が最も望ましい瞬間なのである。

私は先に注意力が苦痛を惹き起す経過に向けられるということが説明を困難にすると云つた。そしてこの場合を珍しく純粋な有様で示しているエリスの挙げた例を引用した。

イギリスの上流社会のよく教育された二人の少年少女がいる。少女は性慾的方面ではまだ書かれざる白紙である。たゞ環境の偶然と催眠的な状態のためにあゝいうような境地に達する。男の子が苦痛な行為を非常な興奮で待ち望んでいたことも、初めての時に、苦痛と快楽との間に直接の関係があることを経験に依つてでも報告に依つてゞも知つていなかつたということも確かである。しかも現象はあゝも典型的で同時に謎のような有様で起つたのである。箇々の場合に於て普通には苦痛を惹起する行為が快楽として知覚されるということを科学的な意味に於て説明することは私には出来ない。しかしこれは人が信じるよりも遥かに屢々起る。私は初めのうち多分記憶力の誤まりだと思つてそれに対してむしろ懐疑的な態度を取つていた。しかしあとになつてこういうような場合を自分で充分に調べることが出来てからは（勿論単なるヒステリー的又は神経衰弱的症状を除いて）私はこの事実を認めざるを得なくなつた。催眠術がなお充分に説明されていないのもこれと同じである。

催眠術は誰にでも、完全に健康な人間にでもかけることが出来る一つの状態である。或る人は言う、催眠術は意志の活動が一時中止する状態であると。これは所謂マゾヒズムを意志薄弱又は無意志の状態と説明するのと同じような誤りである。意志が強くてよくそれを集中することが出来る人程容易に催眠術にかけることが出来るということは一般に認められている。意志の集中が殆ど出来ない子供にも催眠術者が被術者に莫大な意志の流れを注ぎ込むのではなくて当の被術者が自分からかゝろうと欲するのである。

催眠術にかゝつた人は普通ならば不快なものを快と感じる。又はその逆に感じる。これは彼がそう欲するからである。これまで一度も催眠術を受けたことがなく、しかも普通以上に痛がり屋の男に私が催眠術をかけて、柔らかい毛で撫でると云つておいて針をさし込むと、彼は笑つている。空間的に彼から離れている私が突拍子もない観念連合のちよいとした一と触れで、こんなにも触感の知覚を変化させることが出来るというのは余程奇妙である。所がこのすべての経過は全然被術者自身のしわざなのである。私の云つたことはたゞ彼の意志の力を強めることを助けるに過ぎない。意志の行為は動機の斗争から跳び出す。で、被術者が私の命令を聞くと此の斗争が

忽ち解決されるのである。

これが全く当の被術者の意志の力に依るものだということのもつと明らかな例は、催眠術が全然存在しない場合である。「自動的暗示」と呼ばれる。医者であり、詩人であり、こういうことの研究者であるユステイヌス・ケルナーは練習の結果、自分の心臓の鼓動を思うまゝに速くも遅くもすることが出来るようになつた。

更に驚くべき例はインドの回々教徒の場合である。私はそれを実際に見た或るイギリス人の報告をこゝに書こう。それは現在の科学では解決する事の出来ない異常な現象である。即ち回々教徒は長い間、生きた儘で棺に入れて埋葬され、その後、平気でピン〳〵して出て来るのである。恐らくこれは動物の冬眠と同じような状態が起るのであろう。ヨーロッパにもたつた一つこういう場合があつて科学的に研究された。即ちブダペストの一千年展覧会に於てヒンドスタンから来た二人のヨーギが現われたが彼等は代り代りに八日乃至十四日ずつ棺に入るのである。眠りに入るのも眼を醒ますのも公衆の前で行われる。ガラスの棺の中で眠つている所も展覧されているテレク氏はこの現象を研究して科学的な報告をしている。それを左に引用して見よう。

「眠る番が昨日ゴパル・クリシュナに廻つた。眠りが初まる迄彼は非常な元気で、おしやべりで、人類学的研究に対して活潑な興味を示し、自分が眠つている間の経過を醒めた時にすつかり話してくれと私に頼んだ。ほんの三分間ばかりサンスクリットの祈禱を呟いたのち、ゴパル・クリシュナは長さ二米突、高さ一米突、幅一米突余のガラスの棺の中に横になり、厚い絹の蒲団の中に頭迄埋まつたすぐに彼は眼を閉じて一人のヨーギのビムゼン・プラタップが時々リズミカ々に変化するチムバルの音を混えて唱える祈禱に和して、一二分間呟いた。約三分ばかりたつとゴパルの口は黙つてしまつたビムゼンは続けてその単調な祈りをとえていた。なお三四分たつと突然ビムゼンは祈りををめてゴパルの左の眼の上瞼をあげた。瞳は既に上の方に転がつていて、打ち見た所、無感覚らしかつた。ビムゼンは布でゴパルの額と顔を覆つて、彼は眠つたと云つた。成程ゴパルは全く静かにガラスの棺の中に横わつて身動きもせず、呼吸も静かで余程注意して見ないとあるかないか解らなかつた。二十分程たつて右の眼瞼をあげて瞳に触れて見た。心臓の鼓動も脈膊もしらべた。呼吸も口のあたりに手を置いて見た。体温は依然として三十七度、脈膊は八十、呼吸十八、筋肉は弛み、瞳は無感覚であつた。

今日、即ち二十四時間後、私はゴパルが相変らず全く静かに、殆ど認め難い程微かに呼吸しているのを見た。顔の皮膚は幾分憔悴しているように見えた。体温三十六度、脈膊七十三、呼吸十六。この睡眠に就いて云々する前にこの昏睡からどんな風にして覚醒するかを述べて置こうと思う。土曜日の晩七時に、ガラスの棺は公衆の面前に持ち出された。ビムゼンは手を組み合せたまゝ棺に駆け寄つて大声で、但し声に強弱をつけて、サンスクリットの祈禱をとなえたそれが約八分間も続くと、布でもつて、眠つているゴパルの額、眼鼻、口を拭つてから、まだ全然無感覚のゴパルの眼を開けた。呼吸もまだ静かで浅かつた。ビムゼンはまた大声で祈禱を初めた。それが五分程も続いたその内ゴパルの呼吸が段々と強く早くなつて来ただが息使いの音はまだ聞えなかつた。ビムゼンは突然一層声を張り挙げて祈禱をとなえながら眠つているゴパルの頭を摑まえて、可成りひどくそれを揺ぶつて、何度も布で顔を拭き、力まかせに口を開けた。祈禱の声は益々大きくなつて行つた。五分ほどたつとやつと息使いの音が聞え、やがて、よく眠りこけている人が出すような、痙攣的な、不意の、不明瞭な声を出した。ビムゼンはなお絶えず祈禱を続けながら、幾度もゴパルの首を揺り、助手の助けをかりて眠り続けているゴパルの身体をもちあげて坐つている姿勢にした。胸を強く押したり、背中を叩いたり、顔を拭つたりした。こういうような強い刺激の結果、ゴパルは突然意識を回復して、二三度痙攣的に身体を動かしたのち、嗄声で「ミルク！」と叫んだ。ミルクが彼の口の中に注ぎ込まれた。頭と顔の皮膚は汗でびつしよりになつた眼は大きく見開かれ、顔は烈しい苦痛を感じているように険しく歪んだ。やがて彼は弱い嗄声で祈禱を唱え初めた。二三分たつて彼は棺から助け出され、椅子に腰掛けさせられた。ミルクをもう少し飲まされ、身体を摩擦され、軽い衣服が正されたのち、彼は自分の力で立ち上つて公衆に自分を示した。すべてが終る迄には凡そ半時間程かゝつた。一時間たつてから、私達はゴパルと一緒に電車に乗つて町に出掛けた。彼はすつかり元気になつて盛んにしやべつたが、たゞ疲れていると云つた。体重をはかつて見たら此の八日間の昏睡中に八キロ失つていた。眠つている間彼が時々眼を開き、又は手を幾分動かしたことも書き加えて置く——。」

しかしこの事件に就いてはもう少し書き加えて置かなければならない。「仮面をひんむく」ことに興味を持つている二三人の男が真夜中に棺を襲つて眠つている回々教徒を驚かした。すると彼は起き上つて菓子を一片とミルクを一口所望したというのである。また、リヒアルド・シュミット氏は回々教徒に関する一書を著したが、その中で右の男達の言に依つて、このブダペストのヨーギ達を「かたり」だと片ずけている。これは大変にわけのない見限りようであるたとえヨーギが実際に夜少しばかり食べたとした所で、八日間における厳密な検査に依る体重の六十四キロから五十八キロへの減退、体温の三十七度六分から三十六度四分への変化、脈膊の七十四から六十への、呼吸の十八から十への減少は動かせない。それに彼は依然たる昏睡状態のまゝで食物を摑んだのかも知れない。何れにせよ我々の研究のためにはこれだけの記述でこの回々教徒等の異常な意志力の結果を疑うべからずとするに充分である。

この現象は勿論回々教徒達の妖術とは何等の関係を持つていないその妖術に於てはごまかしと、真実と、詐欺と自己欺瞞とが滅茶苦茶に入り混つている。

回々教徒について注意すべき点は他にある。即ち、自ら導いた苦痛を堪えようとする訓練である。例えば彼等は五ヶ所に積み上げた燃える木の中に坐つて徐々に蒸される。こういう訓練の外面的な目的は主として商売的なものである。即ちこれに依つて信者や患者をひきつけるのである。ミルの見た一人の聖者は四つの火の真中に一本足で立つて天を見つめていた。次は彼は仰向きに寝て足を天に挙げて三時間じつとしていた。それから足を組んで坐つて晩迄動かずにいた。その間中印度の太陽が頭をかん〳〵照りつけていたそうである。

サクンタラの中に次のように書いてある。

「マリチヤの祈禱所は何処にありや?——かしこ、日に向いて柱の如く身じろぎせずして立つ所に。その身は蟻の塔の中に半ば埋め、蛇の皮を婆羅門の紐として用うべし。臺を乾して作れる環を以つてその頸を烈しく鞭打つべし。髪はこれを冠の如く編み円めて肩に迄及ばしめ、内に鳥の巣を満たすべし。」

或る者は釘を隙間なく打つた板の上に坐り又眠る者は片手を高く差し上げてしつかりと縛りつけてそのまゝにして置き、しまいには萎縮してその位置から下にさげることが出来ないようにしてしまう。或る者は掌を長い間しつかりと握つて、爪が掌の背に抜けて出る迄そのまゝにして置く。或る者はまず身体をドサリと地面に投げ出し、それから額のあつた所に踵が来る迄這つて行きそこでまた身体をドサリと前に投げ出す。こういう風にして巡礼の旅をする。こうしてヒマラヤにある聖地へ来る迄には数年が経過する。

だが、こういう回々教徒達の多くは苦痛の代りに快楽を得る能力があるということは疑をいれない。従つて折角の難行苦行も「贖罪」ではなくなる。これは他の宗教の有名な苦行者達にも同じような程度で当て嵌まる事実である。

多くの未開民族の間では、この個人々々の意志と非常に密接に結び合つた人間固有の性質は、男性的の力と意志の強さの試験という形をとつて現われている。

この試験は成年の祭のときに行われる。そしてこの場合には性慾との関係が非常に明らかに表われている。それが特に男のマゾヒズムにのみ関わつているということは注目されなければならない。女の回々教徒も、女の柱の上の聖者も、成年祭のときの少女の意志の強さの試験もない。マゾヒズムというものはどうも厳密に男性的なものらしい。

私はこゝでまたクラフト・エビング氏を引き合いに出さなければならない。彼こそは一般に行われている誤まつた考えの張本人であるからである。

彼は、マゾヒズムは厳密に女に固有のものである、それは女が生れつき屈従的なものだから、と云う。しかしもしマゾヒストが「屈従」を愛するものならば、女の性的性質は元来同性愛的でなければならないということになるではないか。

成年祭は——教会はそれから堅信式というものを作つたが——青年のマゾヒズムへの典型的な教育を我々に示してくれる。二三の例がそれを証明する。

スパルタでは青年を女神アルテミスの祭壇の前で烈しく鞭打つ。充分に強くない者は気絶して倒れる。

サモアの人々の間に於ては堪えて苦しいいれずみが行われた。青年は敷物の上に身を横たえて、いれずみ師の手の下に首を差し出す。

槌と六十本の歯のある沢山の櫛がその道具である。櫛はまず椰子の実の灰と水とをまぜたもの〻中にひたされる。それから手早く皮膚に刺し通し、刺し通しされる。取り囲んでいる人達は血を拭いながら、青年の呻き声を圧倒するような大声で歌をうたう。手術は非常に長く続く。何故と云えば、一時間のうちにほんの九平方センチメートルしか完成しない、しかも全身にいれずみしなければならないのだから。そして、この手続きをしない男は結婚する資格がないのである。

昔ベルーでは男の子が成熟すると、聖い山へのさかんな行列と、鞭打ちと、競争と、踊りとから成りたつているお祭りが行われた。

オーストラリヤ人の成年の祭りは、飢餓、或る特殊な食物の禁止傷をつけること、歯を打ち落とすこと、切ること等から成り立つている。

（未完）

第七天國の夢想

梅井清

私は10、11、12月号の作品の中から私の好きな10の作品を選んで見ました。勿論これは私のひとりよがりであり、私個人の好みに応じたもの以外の何物でもありませんが如何ですか広く愛読者各位の選ぶ一年か半年のベスト、テンを募つて見たら、以下失礼なことを申上げたら何卒御諒承下さい。

(1)、続・変態艶書（十一月号）作者が女性だから甘いのだろうつてそんな筈はありません。この奇抜な構想の清新さを大いに買いました。創作と違つたなじみの人々のあらわな気持がにじみ出しているのも強烈で好感が持てるのです。読者通信によると他の人々にも評判がいゝ様ですが、まず第一の作品です(2)、糊と泥と砂（十二月号）この人の持つ変つた趣味は私にはとても味うことが出来ませんが作者の持つ異常なそしてある程度のセンチメンタルな味のある淡い弧独感が溢れていて一風変つた作品として大いに吟味させて頂きました。違つた意味で私の思い出のノスタルジアをかきたてゝくれるのです。

(3)、非公開映画、世界の闇房（十二月号）失礼かもしれませんがこの作者、藤安氏の他の作品には私は一向注目出来なかつたんですがこの一作は誠に私の心に喰入りました。私自身この様な映画に憧れ、夢想している処なんですから、又私は小さいときから映画に異常な興味を感じているのです。私はこの作者の正体に強い?を感じてしまいました。善い意味のですが。

(4)、あらたま村の奥にて（十月号）十月号での白眉だと思います。どうも女の人ばかりを

推するのは怪しいぞと申されるか分りませんが、この人の作品は前に「乱数表の誘惑」というのを見てから好きとなりました。文学的誇張を以て讃美するならば、清新で知的で情熱がひそんでいる様な追究的野心が感じられるのです。併しこの人の十二月号「四Sクラブ探訪記」にはがつかりしました。

(5)、大衆小説に現われた女の責場（十月号）面白い肩のこらない集録です。こういうものをどんどんと集めて頂きたいものですね。唯紙面の都合その他で歯痒い感じは免れませんでしたが、もう少し種々と揃えて頂ければ……併し他のものと変つた試みとして推薦いたします

(6)、孤独なファンタジー（十二月号）夢想の世界の甘美さをうたつたとろける様な味わい普通ならば顔をそむけたくなる様な告白でありながら私にはロマンチックな余韻を感じさせてくれます。私自身夢想家であるからですが、併し私は糞便には普通の嫌悪しか感じません。どの様な恋人のでも。

(7)、悪魔と口紅（十一月号）どぎつさを巧みにカバーした至極巧妙に構成された飜れた文体に私は感心致しました。他の人のもそうですが豊富な知識と研究が私には羨しいと思います。生意気な様ですが口あたりのいゝ、それでいて辛味をピリッときかせたおすしの味……「マリヤ・マグダレナ」も結構でした。

(8)、アブニストの記、へぼきうり（十月号）十一月号のも面白いと思いましたが私自身の好みからいつて矢張り十月号の年増女の肉体に興味を感じました。この作者の言頭の辞が私の心に響きました。成程この人のいわれる通りだと思いました。

作品やその他から想像してこの道で苦労された？落着きのある敬すべき人、と見たのはひがめか。

(9)、錯乱の倫理（十二月号）多少盛沢山の内容が強過ぎた様な気がしましたが読んでいる中、わけても終頃の浜子との愛慾の場面描写は実に凝つた充実したものを感じました。もう一度よく読んでみようと思います。私の如き浅学なものがこんなことを云えた柄ではないのですが。

(10)、狂い咲くカンナ（十二月号）私の様な気の弱い男にはこの作者の告白は一寸刺激が強く怖いみたいな気がします。しかし私のこの取澄ました身体のどこかに快哉を叫ぶ悪魔がむくむくと頭をもたげてくるのをどうすることも出来ませんでした。理窟なしにこの作者の気丈夫なのには頭を下げます。

以上の他に十月号の縛られた妻、悪女、男色の海、十一月号では男色魔の虜、少年嬌正院体験記、十二月号の香具師放談、奴隷妻、等は面白く読みました。その中で勿論喜多玲子氏構成の十月号の口絵及び辻村隆氏構成する処の写真はいずれも例外なく喜ばしいもので興味の点ではベストテンのトップであることはいうまでもありません。

以上偉そうなそのくせわけのわからないことを、くどくどと述べましたがこれも私のアブ的な異常心理から生み出された夢想、そうです、丁度映画「虹を摑む男」の主人公、ダニイ、ケイ演ずるあれが丁度そうなんです。名ずけて精神分裂症、いや誇大妄想狂とでもいうのでしょうか。それがこの道と結びついたその一部なのです。ブツブツとわけの分らぬことを呟いているのが私のくせなのですから悪しからず、今後もどうかよろしくお願いします。

では、次に誌上でお逢いするまで皆様さようなら、ごきげんよう。

× × ×

伊藤晴雨先生へ答えて

黒井珍平

晴雨先生直き〳〵のお答え真に恐れ入りました。一寸御返事申上げます。

先ず先生は「此の一文に対する読者の反駁を期待する」と書いたのは思い上つた成り上り根性だと云われましたが、これは編集部でお書きになりましたので、私はそんな積りで投稿したのでは御座居ません。従つて私は私の責（仮にそう名ずけて置きます）は斯うして生れ、斯んな状態にあると云う事を書いただけで他意は御座居ません。

そして自らの立場をはつきりさせるため、晴雨先生の場合を引用して比較したのですがそれが議論的になり、筆が多少曲つたり排他的な箇所のあつた事は反省して居ります。先生が見事に観破なすつた如く私は小胆で、他人の前では録に口も利けぬ人間です。胆つ魂の小さい事人一倍です。何とか改めたいものと努力いたして居りますが、いくらお叱りをうけてもこればかりは如何にもなりません。

残虐的な事、血が恐いならそんな絵は見るなとお叱りですが、その癖〃女を縛る〃と云う興奮から脱け出せないのですからその点お許し下さい。私がぼう〳〵に乱れた髪が嫌いだと云つた事は只私の場合はこうですと申しただけで主観である事は勿論です。それ故にこそわざ〳〵母との一件をあそこに挿入したのです。私はぼう〳〵と乱れた幽霊の様な髪をした、やせ衰えた頽廃的な女の写真とか絵に美を感じる訳に行かない、と云つた迄ですましてや私が日本髪排斥論を称えたとおつしやる晴雨先生のそれに対する反駁は意外であり、私の文章を故意に曲解しているとしか思えません。私は幼い時から絵（特に日本画）が好きで、御指摘の画家の絵を集めた事（本や画集ですが）が御座居ますし、その美も私なりに判つて居る積りです（勿論先生の高い観賞眼には較ぶべくもないでしょうが）歌舞伎も七才の時からずつと見て来ております し現在も毎月参りまして友人から歌舞伎気狂いと云われる程です。日本髪排斥など決して致しません。毛の無い美人等申す迄もありません。只私は〃責〃の場合には対象となる女性はピチ〳〵と健康的なモダンな然も現実でなく空想の女性であると云う好みがあるのです。その時始めて私は弱者の征服慾（巨人になれない反動としての）悲愴美を味うのです。相手の女性が心身共に健康的である程好いのです。私に於て責と浮世絵、責と歌舞伎は結びつきません。そしてそれと同じく私は責を離れて浮世絵も歌舞伎も愛して居ります。晴雨先生は私が先生の描かれるタイプの浮世絵的責め美人画に感心しない故を以て責の絵を狭義な性慾の対称物（或る玩弄物）として、見ている人々（私もその中に入るのでしょう）と云われますが果してそうでしょうか。私の責の興味が性慾から出発していない事はあの記録に書いた筈です。中頃それが性慾と結びついたからと云つて、只玩弄物として見ては居りません。私は私なりの単なる性慾を超えた美を追究する画家がモデルに対する時の様なあり方を理解している積りです。

例えば責絵を見て手淫する事があるとすれば（女性の手さえふれた事のない私ですから

結婚する迄は仕方ありません）それは手淫のために責絵を集めるのでなく（これは一層低俗です）責絵によつてもたらされる美、快感それをあく迄味わい尽そうとする願望、その願望が満たされぬ時、それを絵にも、筆にものせる事の出来ぬ時、それを永久的に継続する事の出来ぬ時、むしろそれからの逃避として、その快感、その美への陶酔の終末点として手淫がある。手淫は〃責〃に満足するための目的ではなく、責の興奮から自らを消失させる道具です（手淫をしてアクメに達したと云う事は性の快楽の一応の終点なのですから）だからこそ〃責〃についてより軽挙なより強烈な事の出来る人は、精力のある人よりは、インポテンツとか、満足させてくれる相手のない女性等においてより激しいのではないでしようか。倒錯は巨人ではなく弱者が消極的征服慾のあらわれではないかと思います。巨人は相手を縛る事なくして、他の力を頼る事なくして征服出来るのですから（どこからか話の筋が変りまして、元へもどします）現代的健康な若い女性を責める、又それに美を感じる事が性慾の対象物にすぎず、浮世絵的美人の責絵（いわゆる晴雨調の）のみが〃美〃であるとは少し我田引水ではないかと思います。晴雨先生が小生如きチンピラの意見によつて毫も微動だにもなさらぬ事は先刻こちらで承知しておりますし、七十年間我が身を持して居られた事は、なさつている仕事の種類が社会において如何なる立場にあろうとも私は尊敬に値すると思つているのです。これは決してお世辞でも皮肉でもなく本当の事です。〃残念に思います〃等と皮肉を云われるのは僕の方こそ残念です。

然し晴雨先生、相手に反論する場合〃責〃と云う平面上の議論をのりこえて、相手の人格迄もこてん〳〵にやつつけずんば止まずと云つた論の進め方は私には納得が行きません。私は〃責〃と云う一分野に於て先生のあり方に反対の意見を持つただけで、先生の人格に迄云々したつもりはありません。それどころか尊敬さえしております。信じていただければ幸です。和而不同と云う風に行きたいものです。

〃自己の告白と云うものを進んで書いて得々としている性格〃なんてものがあるでしようか？私は奇ク と云う雑誌が、そう云う（晴雨先生によれば得々とした性格の）集りであるからこそ書けたのです。私は奇ク に書いた様な事を奇ク 以外の誰にも知られたくないし、知らせたくもありません。お前は得々とした性格だが、俺は人々の要望に答えたんだ。とおつしやるのは、確かな事実でしよが、胆つ魂の太い七十翁の晴雨先生のお言葉とも受取れません。私は同好の士の居られる奇ク を愛しており、その編集方針に意見を述べたり、奇ク の来るのを一日千秋の思いで待つている読者の一人です。お互いに楽しむのが目的であつて論争が目的ではありません。私はこれ以上弁解いたしません。世の中で反目する人間はお互いに人格も何もかもぼろくその価値しかなくなつて終うものですし、又その同じぼろくその人間が他の気の合つた人との間では互いたのもしく尊敬し合えるものらしいですね。又老人が若い者をけなすのも昔からのしきたりなのでしよう。

此の世に生れてたつた二十三年の私には、こう云つた事が悲しいですね。胆つ魂の小さいせいでしよう。晴雨先生の本年の御健康と同好の諸氏を見出し、又告白文募集の編集部の記事を何度も見返した後やつと書けたのです。幾多の人々が告白文を書いておられ、奇ク と云う雑誌の如きチンピラの

暴言多謝

我が軍隊時代の懐古

—男性ヌードと貴寫眞について—

森　原　太　一

此度奇譚クラブ新年号を店頭で拝見致し、小生の蒐集せる写真と同傾向のものを発見して友ありの感を深くして欣快に堪えませんでした。小生の集めた写真の中比較的無難な六枚をお送りさせて戴きたいと存じます。極めて平凡で未熟なものですが、先輩皆様の御批評を頂けたら幸いと存じます。女の貴場の写真は貴誌に沢山掲載してありますので男の写真をお送り致します。至つて不出来ですがポーズをとらせたものではなく軍隊時代に撮映しておいたものです。その当時というともう十年近くなろうとしていますがフイルムが手に入らずレントゲン用のフイルムを使用しましたので変な処もあると存じます。

簡単に説明致しますと、此の六枚の写真のモデルは○山○雄という軍隊時代小生の部下だつた男で終戦後分れ分れになつてから消息がありません。私によくなつ いてくれたので七、八年経つた今でも気になつています。彼に初めて逢つたのは昭和十九年の夏で私は幹候から○○○連隊付の見習士官となつた時で私は新兵の中から帝大文科在学中の彼を自分の当番兵に選んだのでした。彼の何所が気に入つたかと云つてもはつきり言えませんがまあ人並の整つた顔をしている事と、それから経歴が気に入つたのでしよう、或はその経歴への淡い嫉妬から多分にサジズム的な気持が何所かにあつたのかもしれません。後で聞いた話ですが彼の中学高等学校時代の成績は非常に優秀だつたそうですが、まあ性質はおつとりした方でお坊ちやん育ちの子がそのまゝ大きくなつた様な気のする男でしたが、軍隊では出世はまあ出来ない方でしたろう。当時学徒出陣とか何んとかもてはやされた時代でしたが彼は幹候の志願もせずに一兵卒としてのんびり入隊してくる位ですから凡そ世の中の事にはうとい方でした。

内気で人前に出たがらない彼は人と争うという様な事は殆どなく、あの頃よく流行つた一列に並んで物を貰う時等にはいつも一番後に並んでいるのがよく見られました。そういう気質は私の気にも入つたのでよく可愛がつてやりました。そういう関係で彼と私が同性愛に入つていつたのも自然の成行きだつたろうと思います。当時私は親譲りのローライを持つていましたので彼の姿態をいろ〳〵撮つていました。そして興にのつて今で云えばヌードというものを撮つていたわけです。

此の写真の中で（一）は昭和十九年の冬撮つたもので、当時小生等の部隊は勇躍関東軍に入る予定になつており、実は当時内地は空襲が次第に激しくなり却つて満洲は内地より安全だと云われていましたが、今から考えてみますとやはり貧乏くじをひいた事になります。そういう訳でその準備に大童になつていた時に彼が失敗をやらかしました。というのは、丁度将校用の防寒オーバの配給があるというので彼に取りにやらせたのですが、又いつものよう後に並んだのでしよう。品不足で皆に行き渡らず、彼は手ぶらで帰つてきて現地に着いてから配給すると云われたと報告し

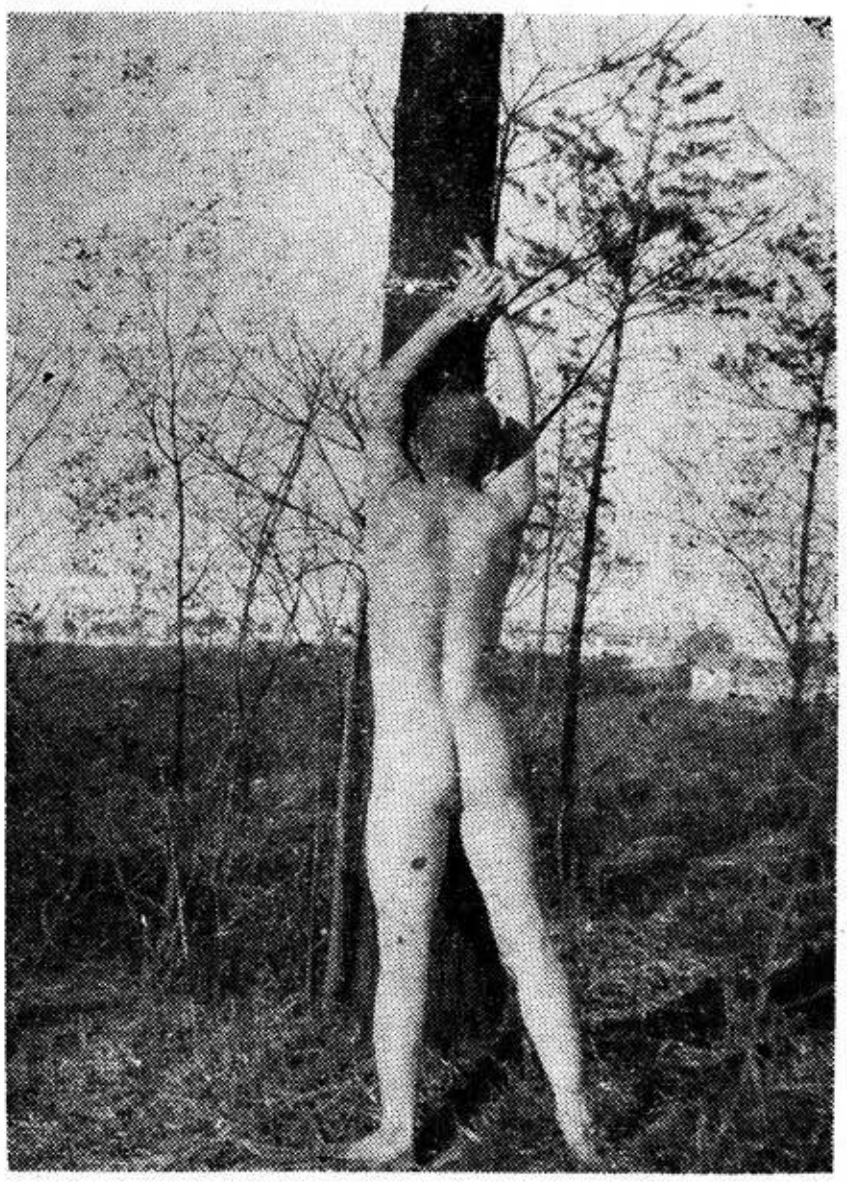
たものです。途端にどなりつけてその私の疳癪のとばつちりが(一)の写真のような惨めな事になつたのですが、今では可哀そうなことをしたと思つています。彼は自分の事だつたらそれですませて別に欲しがりもしなかつた事でしよう。然し当時日本の軍隊という所は人権も何もない所でしたからまだ〳〵ひどい事が感情的に行われていましたし、それに私の心の何処かにサデイスチックな所があつたのでしよう。この時はポカポカ日の当る所でしたが北風がピユーピユー吹いていて彼の肩や股の肌がさつと鳥肌立つのがよく見られました。うつむいているので

「面を上げい、寒い事が分つたか」

と気合を入れたものでした。彼は顔を上げましたが目はずつと伏せていました。私が近ずくとチラと私の顔を見上げましたが直に又目を伏せました。私もいじらしくなつたので三十分位晒した頃勘弁してやろうと松の木から解いてやりましたが、この時彼が思わずほつとしたのが運悪く私の勘にさわつて、そのまゝ後手は解かずに仰向に寝かせて彼の足首をつかまえて彼の身体をグッと海老の様に曲げて両足先を頭の両側の地面に押しつけて踏みつけ、尻を天に向けさせてポケットにあつたピストルの実弾をとり彼に見せつけながら詰め込んだのですが彼のピリッと緊張したのがふまえた足からよく感じとられました。

「よしと言う迄出しちやいかん、分つたか」

と一発どやしつけて、そのまゝ引き起し縛り直してパチリとやつたのが(二)です。御覧の通り彼は太つた方でなく、どちらかと云えば筋骨薄弱型の女性的の体格をしていました。この後で五、六回尻を叩いた後で弾丸を排出させて今度は接写レンズ局部を撮りました。



此等のヌード写真を最初に彼に見せた時の彼のまごついた様な顔は今でも覚えています。併し度重なるにつれて馴れてきて、後には人のいない所で自分のヌード写真をじつと見つめているのを見た事があります。だん〳〵マゾヒズムかナルシスムに傾いていたのか知れません。

(三)も同人のものですが、その当時マグネシユームが手に入らず室内で写したので非常に暗くなりました。此れは同僚三人と集つて飲んだ時の作品です。その時に当番兵達に余興をやらせたのですが彼だけはの例通り学校の教科書的の事以外何も知らないので、その罰にこんな事になつたので初めは(三)の様な姿態で尻を叩くだけの積りでしたが酒の勢でそれだけで止らなくなり、遂に(四)の様に裏返えして弄んでしまいました。此の写真以外は猥画になつてしまいました。尤も此

れもその範疇に入るかも知れませんが、

この写真の現像焼付は彼に手伝わせて、その時集つた人全部に渡させたのでした。随分悪趣味だつたのですが、彼ははにかみながら下を向いたまゝ渡していました。併し私は彼の態度から彼は心の中ではその嫌がつていない事、そして却つて暴露症的な心がどこかにあつて嬉しいのではないかと思いました。後で彼を抱きしめて彼の心臓に手を触れながら自分の裸体写真を皆に配らされた時の気持を冗談交りにきいてみました。彼は黙つていましたが心臓は急にどき〳〵してきたのがよく分りました。後でしつこく聞いて、遂に恥しいけれど何か理由のわからない快感を感じた事を白状してしまいました。

（五）は責ではなく二人で合意で撮つたもので楽しむ前姿態です。合意といつてもこちらが着衣していて彼が一糸まとわぬ裸体では合意もないと云われるかも知れせまんが、それなら襲われる前の生けにえという図としましよう。光線の具合で右の手が見難くなりましたが、今更撮り直すわけにゆかないので私にとつては貴重な記念写真の一つです。我々男色者にとつては大分挑発的に感ぜられる姿態ですが、興味のない方にはつまらないと思われるかも分りません。然し私は女のずんぐりした肉体よりも男性のすらりとした悪くいう人はのつぺりしたというかも分りませんが、そういう方にひかれます。といつても女体のふつくらとした乳房や臀部を愛される人達の気持がわからないわけでもありませんが、どうしてもやはり男性の凹凸の少い、それから此れは私だけかも知れませんが、筋骨薄弱型の裸体に興味を感じます。

（六）は折檻の図です。その理由は一寸申し上げ難いのですが、まあ私の方が無理を云つて彼がそれを渋つた結果、又虐めてしまつたものです。此れも光線の具合が悪く多少異様に見えるかも分りませんが、私にはやはり貴重な写真の一つです。此れは四ッ切に引伸して持つていますが、「チョー陰」と題がつけてあります。彼は御覧の通りポチヤチポチヤした丸顔でまた平凡な顔付きですが、時に非常に可愛いく見える時があり、可愛い〳〵というよりノーブルな顔をしていました。私が彼を責める時、彼は初め見当がつかずおどく〳〵していましたが馴れてくると務めて平静を粧つて顔の表情も変えない様に努力していましたが私は悪趣味といゝますか、そういう彼を見ると彼の変つた顔を見たく一層輪をかけて彼をいじめたものでした。時々余りのことに眉間に皺を寄せるのを見た時はとても嬉しいものでしたが、此れを写真に撮つておこうとなると非常に困難で彼の顔の変化は本当に瞬間的ですぐに元に戻つて平静な顔になるので大抵失敗しました。

（六）はしてやつたものゝ一つで、後手に縛つて仰向けに寝かせて天井のカギに通してギユッと吊り上げると同時にシャッターを切つたもので思わずこんな顔になつたのでしようが直に平静な顔に返つたのですが、時既におそくフイルムに焼付けられてしまつたわけです。後で彼と戯れてこれを見せた時の彼の表情も愉快だつたものでした。

兎に角彼は素直な子でした。地主の二男坊で人の言葉の裏を変に考えたりする様な事はなかつたでしよう。既に才能の一端が見られ自分とは生れつきが違つた高等な人種の様な気がして、自分より年少の部下だと思いながら何か近寄り難い圧迫感を感じる事もありましたが、その時は無闇にいじめたくなり縛り上げて裸に剝いで、そのノーブルな顔とそれに連つている裸身を眺めて小気味よさと快感を感じました。彼も最初は正常な男性だつたのでしようが、彼の身体のあらゆる部分

を撫で廻した私の悪魔の触手が彼の心身を次第に変化させていたのでしょう。私は彼の身体のすみずみ迄見つめ、さわり、そして写真に撮りました。

…中略…

あれから七年経ちます。純心な、そして私にとつてはいつ迄も子供の様に思われる彼の事が忘れられません。彼も私の住所が分つたら直ぐとんで来る事と思います。そして若し彼が職を求めていたら又一緒に働いて貰つて今度はより民主的にお互いに理解しあいながら付き合つて行きたいと思つております。尤も彼自身はこちらが承知かどうか尋ねた時「自分の意志を無視して扱われた方が何をされるか分らないという不安と期待があつてスリルを感ずる」旨を述べた事があります。或は軍隊時代の方がよいというかも分りません。

簡単にすます説明がつい昔の懐しい思い出が次々と出てきて長くなつてしまいましたがこの外に彼の写真が七、八十枚、その他日本人や満人の賣図や刑図を少々集めましたが、猥写真やどうかと思われるものが多く、どの程度迄御覧に入れてよいか分りませんが、若し許されるなら御覧に入れて御意見を承りたいと存じています。然し大部分が自作の為、自臭が強く感じられて飽きが来易く新鮮味がないので、貴誌の写真や賣図を大いに期待している次第です。

学校を出てから多年軍隊生活、職工生活と殺風景な生活の連続のため文が意の如くまとまらず冗長になりました。では御繁栄を祈ります。

森原生

◎貴重な文献写真を有難うございました。六葉全部を誌上へ発表出来ればいゝのですが事情が許しませんので、（二）のみを掲載いたしました。詳細私信にて御返事申し上げたいと存じますので貴下への連絡場所（局留置にても可）を御指示下さい。

染田玄

（読者通信）

川端多奈子様

十二月号折込写真は貴女の全面的な協力の結果発表された写真を通して新あり貴女の手記桃色のベールに包まれてを読み非常に感興が湧きました。殊に動物の肉かなんぞのように吊りさげられてみたい、吊り下げられた時一番満足を得たとの心境を率直に発表された事は更に一段と近親感が生れました。

これは恐らく私一人だけの感じではないと思います。この道の理解者にとつては貴女は憧れの中心であり羨望の的となられる事でしょう。そして奇ク金子塔の一礎石となり、若し奇ク金子塔の読者によつてこの道の壮麗な王国が建設されるときは貴女は女王として君臨されることでしょう。貴女の言われる疲労は愉快であり、むしろもつとむごたらしく扱つて頂きたかつたとの此の言こそ、完全に読者を悩殺させる喜悦の骨頂です。女性の同志が増えて嬉しさの余り一筆認めました。

（加佐和天音）

奇ク が益々新境地の翼を拡げつゝある事は同慶の極みです。表紙の画は空想の幻影とでも言いましょうか、見つめている中に夢幻の人物が動き出す様に感じられます。二月号の〃恋に狂つたワンカット〃の写真を見ながら文章を読む中に恍惚境にさまい呆然としてしまいました。今後共想を新にして此の様な作品を辻村様にお願い致します。羽村京子さんの妖花に満足させられました。燐光は見事な作品です。淫火は次号が待ちきれません。松井さん頑張つて下さい。次号の岡田咲子さんの作品は首を長くしてお待ちします。

（静川K・M生）

猿轡雑考

千葉三郎

江戸時代、キリシタン処刑にあたつて、刑場に護送する受刑者中、主だつた者に猿轡をはめ、途々見物する群衆に、キリストの教を説くことなど出来ないようにしたことが文献にみえる。

また、政治犯などの重罪人が地方で捕えられ、これを江戸に護送する場合、罪人が舌をかみきつて自殺するのを防ぐため、罪人の口に噛ませておく刑具があつた。「地方落穂集十二」に依れば、左の通りである。

「大切の囚人江戸へ召連候こと――前略、駕籠乗物に入、戸前に錠をおろし、青網をもつて、厳重に縛りなり。但し身分の格により、品はあるべし。百姓町人は目駕籠に入る。駕籠は高さ三尺に作り、琉球莚に縛り絵や類似の写真において、縛しめられている婦女子に猿轡を噛ますことが、画面の効果を一層高めるとの読者の意は本誌上に多く散見するところである。それで、筆者は手近の文献の中から、猿轡に関する記録を拾つて、極く簡単な雑考を試みることにした。

小説などでは、主として、婦女子を誘拐する際など、猿轡を噛ませるのが多いが、猿轡は、又、捕縄や手枷、足枷などと同じに、刑具として、使用することもあつた。昨年、毎日新聞に、拘留中にインターなどを歌つて暴れる共産党系の被告に防声具、革手錠を使用して、秩序を保つた、との記事が出ていた如きはこれである。

てつゝみ、……内には柱を一本立て、其柱に囚人を繋ぐなり。囚人は手錠をかけ、足にほだを打ち、口には管――細き竹にて、口の広さより少し長くつくり苧繩を通してくはへさせ後にて結う也。是は舌をかまざる為也――を含ませ……略」ほだとは足枷の一種である。

さて、猿轡の語義であるが、問題になるのは猿と云う字である。大言海によれば、猿は戸に設ける仕掛けの名であり、戸の内側に横木をとりつけ、柱に穴をあけて、この横木をさしこみ、戸が動かぬ様にする。つまり、これに依れば、猿轡の猿は止めるの義であるとされている。或は正し解義であるかもしれない。

語義論はさておき、後来の小説――江戸時代の小説には、多く布轡、或は不言轡口械と云う文字が使用され、サルグツワとルビをふつて用いられている例が多い。

シナでは罪人処刑の際、猿轡をかました上で、殿罪した時代があるらしく、彼の地の刑書に散見する。邦書では、江戸時代の一種の百科辞典とも考えられる「名物六帳」にこのことが明記してある。「名物六帳」

器財篋一刑獄器械中に「木丸――唐書郝象賢伝＝将ニ刑セン人ヲ必以木丸ヲ塞グ口云〇濶憧小品＝刑人ヲ者以木丸ヲ塞グ口ヲ始テ武ニ殺ス郝ノ象賢ヲ」木丸とは猿轡であるが何故木丸と云うか、筆者は不明である。識者の教示をまつ。

ヨーロッパ諸国の例もかなり多い。英語では gag, muzzle, bidle, branks 等が猿轡を意味するが、普通には gag が使用される。（アメリカの悪漢小説（ロマンビカレスク）など）この中 branks は特別に、口やかましい女を懲しめる刑具である。Webster の辞典により、要記すると、次の如くである。

「branks――往時、口やかましい女を矯正するために使用された器具。頭部を鉄製の枠をもつて囲み、口中に三角形の鉄片を含ませる」。至つて簡単であるが、図に依つて了解されたい。この器具の顧客は専ら女性であつたらしい。女性読者の一考を要する点。鉄の枠を頭からかぶされて、口に鉄片をくわえさせられるのは如何にもみじめである。尚この刑具は古ギリシヤ・ローマ時代からあつたものらしい。

ジャンヌ・ダークの火焙りは有名であるが、彼女もまた、当然猿轡――フランスでは、baillon――を噛まされて、処刑されるべきであつた。と云うのは、当時のフランスの慣習では火刑罪人は、（時代に依り相異するが）通例、衣服をはがれ、硫黄を塗つた刑衣を着せられ、時には硫黄を塗つた冠（ミートル）、頭巾をかぶされ、処刑台に立つ。刑史は、罪人の口に猿轡をかませ、頸、両足は太繩をもつて、胴は鎖をもつて刑架に縛し、火を放すのであつた。しかし、ジャンヌ・ダークの場合は、多くの聖女処刑図に見る如く、素面のまゝ処刑されたのであるが、これはカルメットが指摘している様に、ボーヴェの司教ピエール・コーションの陰謀であつた。ジャンヌの逮捕から処刑までの間に、最も重要な活動をしたこの人物は自分の行動の正当化のために、何とかして、彼女自身の口から、彼女の罪を認めさせようとした。その為、わざと猿轡を噛ませないで処刑し、火につゝまれたジャンヌが、苦しみのあまり、己れの罪を認めることを了期していた。しかし、彼の期待は外れ、聖女が最後にもらした言葉は、「イエス」の一言であつたと云われている。

「イヴェリヤの梨」と云う一種の猿轡がある。梨に似た外形をもち、鉄でつくられ、内部にバネを仕込んである。スペインの異端糺問所の拷問吏が使用したもので、これを強く握りしめると、鉄球は刻んである溝にそつて、縮小する。これを罪人の口に押し込むと、バネが仕込んであるため、口の中で一パイにひろがり、罪人はものを云えなくなる。その上で、気絶するまで、吊し責めにかけるのである。

一六九五年、イギリス海軍において、定められた航海中の犯罪者処刑法には、「冒瀆者に対する猿轡、もしくは舌削り（gag gingorscraping）」が載つている。

【註】昭和二十七年十一月頃の毎日新聞に共産党系の被告に対して防声具、革手錠を使用して秩序を保つたという記事の中に防声具の説明が掲載されていたから参照されたい。

色情の價値

角田平八

わしは今年三十六才です。五つになる男の子と去年生れたばかりの赤ん坊との二人の児の父親なんです。わしはこれでも京都の大学を卒業ているのです。わしが学校を終えた頃親父も生きていて、まあ世間並の生活をやつとつたです。その頃わしは仲々の色男で、へゝゝ、こんなこと云うのはおかしいかもわかりませんがね。わしの恋愛、結婚は充分小説にもなる位面白いもんでしたよ。この話はまたいつかお話しますたゞ、こゝでは今のわしの鼻のことにだけちよつと触れておきます。

わしの鼻は今でもそうですが、若い頃はそれは〳〵美人でした。わしは結婚してからもぞつこん惚れ込んでいたのでした。しかし鼻は悪いことに、いや大変えゝことには物凄い助平でね、おつとゝゝ、これは鼻には内緒ですよ。こんなこと鼻につげられたらわしはどんなことになるかわかつたもんじやない絶対鼻には祕密ですよ。それでね、結婚してから子供が出来る迄と云うものは全く鼻の奴隷の様になつていたんです。前にも云つた様にわしは兎に角惚れ込んでいたので、鼻のいゝなりになりましたね。その頃は。わしもね、これで仲々助平な方で鼻の身のとろける様な情痴の命令や仕草には喜んで応じていました。例えば、これは何でもない様ですが、わしにすれば気の遠くなる思いだつたんですが。その頃わしの家では食卓は洋風の高いテーブルで椅子に腰かけて食事をしたものでしたが、夕食の時、会社から疲れて帰つて来たわしに鼻は自分の腰かける椅子になれ、と云つて聞

かないのです。わしを四つ這いにさせてその背に腰かけて嚊は飯を食うんです。そしてそれが三十分も一時間も続くんです。余り永いのでもうかんべんして呉れと云いますと、嚊は

「あなた、わたしの言うことをきけないの、わたし家出するわ」

と大きなぶちぶちしたお尻をわしの背中で弾ませながら云うのです。惚れた弱味で、そう言われると亦じっと食事のすむまで嚊のお尻の下で我慢していました。そして満更嬉でもなかったのです。しかしこれだけではないのです。嚊は友人だとか親戚の人だとか云つて時々女の人を二人も三人も連れて来て、皆んなで寄つてたかつてわしをおもちやにするのです。それもね、女達は殆んど全裸になつて、わしを馬だと云つて股がつたり、あげくの果に湯殿にわしを無理に引つ張り込み、体を洗わせたり、肩をもませたり顔を剃らせたり、もうさんざんな目にあわしよるのです。興が乗つてくると、終いには、わしを真中に坐らせ、わしのまわりを取りまいて一斉におしつこをひつかけよるのです。わしは黙つてへへゝゝ、御推察の通り喜びに身をわなわなとふるわせて、このちよつと匂いのあるシヤワーを浴びるのです。

まあ一例をこんな調子で、こんな状態が一年、二年と続く内にわしの性格はすつかり変つてしまいました。かつては大学にまで学んだ私でしたが結婚後三年も経つ頃には、頭はいつもぼんやり霞む様になり会社の仕事は全然出来なくなり、——仕事で思い出しましたけれど、その時分は会計の主任をやつてました。——男が恐しくなり、女はどんな女でも非常にえらい神様の様に思われてくるのでした。そして亦、どんな事でも人から命令されるのが嬉しくなつて来ました。

その内に戦争は段々烈しくなり、わしも遂に狩り出されることになりました。勿論戦が怖く、嚊と分れるのが悲しくこわい〳〵泣きましたが仕方ありません。そして結局終戦迄も幾分平常に居りました。その間にわしは体も心て来て見るとわしが元勤めていた会社はもうつぶれていてありませんし、嚊は嚊でまたわしの肉体をなぶりまわすのでした。長い間餓えていた嬶の行動は常軌を二重にも三重にも踏みはずしていました。けれども敗戦後のわし等の生活は昔の様に生ぬるいものでは到底続けて行けませんでした。もう親父は死んでしまつていました、帰つてから二カ月もする内に貯金もすつかりなくなり、衣服や調度品も目ぼしい奴は皆売り払つてしまいました。そこでとう〳〵或る人の勧めに従つて、嬶と二人で、近所で極く内密に行われるエロショーなんかに出演して生活をやつていました。それは好奇に眼をギラ〳〵光らせている人々の前で言うに耐えない様な、いかがわしい事をやつて見せるのでした。終戦後一年位はこんな事もやれたのでしたが、段々警察の眼がうるさくなつて、遂に出来ないことになつてしまいました。それは、そのエロショーの主催者が検挙されてしまつたからです。そこでわしはK会社の工員に雇われることにしました。嬶は相変らず旺盛で夜な〳〵充分楽しく遊んで呉れました。そして亦、昔、と云つても兵隊に行く前と同じ、去勢された男の様になつて来ました。

会社では仕事というのは、名前は工員になつていますが、何も技術をもつていないわしはあのあんことか云う仕事をしていました。毎日朝から重い品物を肩に担いだり、車に積んで引張つたりしました。こんな重労働をしたのですが給料は大変安く、嬶と子供と三人が食つて行くのにはとても足りませんでし

た。あれ程わしを可愛がつて呉れた嬶も一言うのを忘れていましたが、わしの嬶はわしより三つ年上です—終いに怒つてしまつて、パンパンになりました。嬶のことでしたからパンパンと云つても、あんなありふれたパンパンではありませんでした。この事に就いては後から追い〳〵話す積りです。有難いことに嬶がパンパンになつたお蔭で、嬶の恐しい迄に激しい情欲から開放されて、わしは段々正気に帰つて来ました。昔の豊かな生活が恋しくなつて来ました。それで商売をして大儲けをしてやろうと思つて、時々会社を休んでは色々な物を売つたり買つたりして見たのですが、損するばかりでした。もう商売など簡単にはやれない様になつているからでした。つまる所会社で一心に働いて沢山の給料を貰う外ない様に思われました。

生活の方は嬶の援助が大きかつたのでその割に楽でした。嬶から開放された私は、開放されたと言つても以前程ではなくなつたというだけですが、だん〳〵元気になつて来ました。それと共にアンコという仕事を、漸く再生して来たわしの自尊心が許さなくなつて来ました。あなたも御存じの様に終戦後はどこの会社にも労働組合が出来ましたが、わしはこれに目をつけて、学校時代の経済の知識や生噛じりの社会主義理論なんか振り舞わして遂に組合の役員になつたのでした。そして、あれは確か、おとゝしの二月だつたと思うのですが、賃上げ斗争の時にわしが組合を牛耳つて随分激しい運動を起し、会社を惨々な目に逢わして、わしは名を上げる結果になりました。会社は大変わしを恐れ出しました。その中でもわしをこわがつたのは崎山という男です。

崎山は副社長の様な資格でしたが、まだ若くて仲々のやり手だつたんです。彼はその事（賃上げ斗争）があつて以来、わしを自分の宅へまねいて、よく御馳走をして呉れましたわしは馬鹿な男ですが、金や御馳走で節を売る様なつまらぬ人間ではないのです。この点はどうか認めて下さい。唯わしは女が苦手だつたのです。わしがわしの嬶にすつかりいかれたと同んなじ様に崎山の女——即ち妾ですね。これに参つてしまつたのです。それは夏も近い或る日のことでしたが、わしが組合と会社の或る事で—これは脱税の事です—崎山の家へ行つたのです。すると運悪く彼は留守だつたのです。出て来た女は上れと云つてわしを帰えさないのです。今に崎山は帰つて来るから待つて居て呉れと云うのです。わしはその時既にこの女の非常に情欲的な雰囲気にひかれていたので、こいつは危いと思いました。けれど、問題が問題で直ぐに崎山が帰つて来るものなら、待つていて一刻も早く話をまとめておく必要があると思つて、家へ上り込んでしまつたのです。いくら何でもこれが彼の仕組んだわなだとはわしは夢にも思いませんでした。これは後から分つたのでしたがやり手の彼は少し前からわしの嬶に取り入つていたのでした。この事は後で述べますが。崎山は嬶から色々わしの性癖や弱点を探つていたらしいのです。結局労働者の立場にあるわしがいくらかでも彼を信用していたのが悪かつたんです。わしは前にもう言つたかも知れませんが、女難癖があるのです。ちよつとした女にでもころりとしてしまつて直ぐ自由意志を失つて、結局奴隷の様になり女の言いなりになるのです。

わしは通された立派な応接室で三十分程待つていました。もう崎山は帰つて来るのだろうと思つています、ドアをノックする音がします。あゝ帰つて来たなあ、とドアの方へ目をやりました。同時になんだもう帰つて来やがつたのか、つまらないという気持もありま

した。実際の処。ところが入つて来たのはぴつちりと豊満な肉体に合つた略式の桃色の部屋衣をつけた崎山の女でした。胸の辺は大きくはだけていました。崎山でなかつた為の失望と共により大きな歓びがありました。この点はお互に男であるから認めて下さるでしょう。女は手にビール二本とコップ二つのつかつているお盆を持つていました。そしてわしの向いに腰かけて妖しく笑いかけました。

「どうもお待せしました。今ね崎山から電話があつて、帰えるのが少し遅れるから、も少し待つて戴く様につて伝えて来ましたの。」

と云つて、また更に妖しく笑いました。何もありませんけれど、ビールなりと飲んで下さいと、上手な手つきでビールの栓を抜きました。わしはビールなんか飲んだら、今迄の経験で絶対危いと思い、極力こわりました。けれどこの女は笑つて相手にしません。元来わしも酒は嫌いでないのでビールの一本位何でもないという気になつて飲み始めました。ところがビール一本では済みませんでした。女中が、ビール、ウイスキーと次から次へ運び込んで来るのです。それら酒類の美しい色を見たとたん、わしは腹を決めて飲み始めました。しかしわしとしては会

社にとつても組合にとつても重要な用件を持つているので、仲々酔いはまわつて来ませんでした。心を引締め、ともすれば激発しそうになる情欲を懸命に喰い止めていました。この女の様なあんなコケテイッシュな、しかもあんな挑発的な服装をした女の前でわしがこゝまで耐えたという事は充分賞められていゝと思うのですが。あなたはどう思います。しかしやつぱり破滅がやつて来ました。わしがなみ〳〵とウイスキーを注がれたカップを持上げた時、この女はわしの足先をギューと踏みつけました。わしは思わずカップをとり落しました。あわてゝ、テーブルの下へころがつたカップを取ろうとして、わしはテーブルの下を覗きました。あゝそこに女のほんのりと桜色に色ずいた可愛いゝ二本の足が、獲物の引つ掛るのを待つていました。わしはふーとのぼせてしまい、女の足をかゝえ込みました。女は立ち上りました、わしは足をかゝえた儘熟し切つた眼で女を見上げました。

「バカ！」

と女は小さな声で云つて、わしを睨とばしました。わしは仰向けにひつくり返りましたが、すぐ亦にじり寄つて、再び女の足を拝む様にだきしめ、

「どうか私をあなたの奴隷にして下さい」

と叫びました。しばらく窺う様に私の顔を見つめていた女は、私の欲望に痴れた表情を見てとると、

「それではあんたは崎山に刃向ってはいけないよ。崎山の都合のいゝようにしなくちやだめよ。わかつた？」

「はい。」

「それではお前のお望み通り奴隷にして上げよう。」

と女は言いました。あとはもうでたらめです。女の言いなりになりました。あそこの毛まで剃らされました。これはきつと、崎山にわしを陥落させた証拠として見せる為だつたのでしよう。そしてわしの組合は弱い〳〵ものになつてしまいました。わしはわしでこの女の味が忘れられなくなりそれから後も屢々崎山の留守中に女の家に行きましたが、その日以来というものは、この女は会つても呉れません。崎山も私など問題にしなくなりました。労働者は資本家に足許を見られると何の価値もなくなるものだと思いました。

こゝで、話の筋の都合上、わしの嬶のこと嬶がその頃やつていた事をわしの知つている範囲で話しましよう。前に嬶がバンパンになつたと云いましたが、まあそんな様な事をやつていたのです。嬶が一番初めに手を出したのは終戦の年の夏に、腸チブスか何かで妻をなくしてそれ以来ずうと独身でやつて来ていたのです。木本の様な頭の禿げた、でつぷりと肥えた精力的な中年の男が、そんな長い間独身で通せたのは番台に坐つて、女湯で裸体の女達が動きまわるのを毎日見ておれるという役得があつたからだと思います。この木本が特に嬶に目をつけたのは、前にちよつと言つたエロショーをこの風呂屋でやつてからではないかとわしは思つています。しかし人一倍蠱惑的な肉体の持主である嬶のことですからずつと以前から木本は貪欲な情痴の眼を嬶に向けておつたのかも知れません。免に角そんな状勢にあつたある夜遅くわしの嬶はその風呂屋へ行つたのです。もう木本は時間が、入浴の客も無いので戸を閉めかけていたらしいのです。そこへ嬶がかけつけ無理に頼んでーさあ無理に頼んだのか、喜んで迎え入れたのか疑問ですがね——入れて貰つたのです。嬶はいつも芋を洗う混み方なのだが、そんな事情でガランと空いた湯舟に一人いゝ気になつて浸つていたのです。そこへ木本が入つて来て

「一つ背中でも洗しましよう。」

と云つたのです。

「いゝえ、結構です。」

と嬶は答えました。

「いや、風呂屋の親父がお客にサービスするのは当り前ですよ。」

と木本は云いました。その時突嗟に嬶の心には、この男を喰い物にしてやろうという気持が働いたのだと思います。何も嬶の弁解をする訳ではないのですが、その時分わし等は食うや食わずだつたのですから無理もないと思います。嬶は、

「それでは。」

と云つて木本に背を向けて坐りました。嬶の肌に触れたらどんな男でも、もう千年目です。

これは勿論わしが想像したものですが、嬶は沢山の金をよくもつて帰える様になりました。わしは別段怒る気にもなりませんでした。やつと人並に食えだしたからです。しかしこんなわしにも本当に怒る時が来ました。それは去年の春先の事でした。わしは崎山の女に失敗してから、始めの内こそ女に恋々と

していましたが、自分の犯した罪の余りにも大きな事に気がつきだしました。わしを信頼——そうです。わしは例え僅かな人々からでも信頼される様になつて居ました——している組合員の悲惨な姿が眼にちらついてしようがなかつたのです。どうしてこのわしの色情から発した余りにも醜い、我が身を八つざきにしても償い切れない罪の贖罪をしようかと思い悩んでいました。わしも男です。卑屈な男ではありますがわしは決心しました。この汚れ切つた身を犠牲にして哀れな組合員の為に働こうと。しかしどうしても色情からは抜け切れませんでした。わしはこの罪の根元である色情をたゝきつぶそうと思つて色々努力しました。色情、なんと恐しいものでありましよう。へへゝゝゝ。すみません、こんな卑屈な笑い方をして。わしの場合この〃へへゝゝゝ〃は色情と結びついているのです。色情この匂が少しでも出るとわしは卑屈になるのです。へへゝゝゝ、わしは嬶の肉体を思い出しているのです。すみません、可笑しな事を言つて。しかし、わしは色情に気持よく妥協したのではありません。わしは色情と四つに組んで戦いました、種属保存ということを結論としている性の享楽を与えた創造の神に反逆しようとしました。が、結局わしは人間だつたのです。やつぱり色情には負けましたあなたはわしを極悪人と〃人〃の字をつけへゝゝゝ、あのね極悪人と言うでしよう。へる以上、人に押しつけられている色情の存在だけは認めて下さい。お願いです。わしはどうしても排除出来ない色情の罪を軽くする為色情は出来る限り嬶によつて充すことに決めました。こんな風に決意を固めて愈々わしが決然と立ち上ろうとした時、それが去年の春先だつたのでした。会社が休みの日の朝でした。どこかへ出掛けようとしていた嬶が——嬶は相変らず色んな男と関係していました。わしにとつて色情そのお蔭で生活は楽だし、わしはまだ〳〵絶対的な力を充足の対象として嬶はまだ〳〵絶対的な性的な面の、嬶のもつていたし、嬶もわしの性的な面の、嬶の趣好に合う性質にひかれていたし、亦嬶は男との関係に於ても最後の線は守つているだろうことにわしは確信をもつていたので、これは何故かと言うと性の享楽の過程の、前戯的なことにだけしか嬶は興味をもつていないことを、わしが前にちよつと触れたわし等の夫婦生活から知つていたし、亦どんな男もそれだけで、嬶の手管にかゝれば満足させられてしまうということもわしの経験で分つていたから、別にこの堕落し切つたと言えるかも知れない嬶と別れる気持は毛頭ありませんでした——ふと、

「崎山は此頃少しもお金を呉れない。」

ともらしたのです。崎山という名にわしはどぎつとしました。わしはするどく嬶を追求しました。わしのこんな態度に出喰わしたことのない嬶は驚いていましたが、男との関係はわしは認めているので、すら〳〵と有りの儘を言いました。そしてわしはあの崎山の女とのことは崎山の策動であることを知りました。わしは怒りました。あれ程、心の底から怒つたのは生れて始めてでした。泣いて怒りました。一日中泣きました。この涙で、オールマイテイだと思われた色情も洗い落された気がしました。それというのは女というものゝ正体が分つたという気持になつたからです。わしはこの人間社会を支配しているのは女だと信じていました。女は美しい女は如何なる男をもへな〳〵のしかし女には飽く迄も忠実な奴隷にしてしまうものだと思つていました。

しかしわしは知り得ました。結局、女は男に利用されているに過ぎないと。崎山の女は崎山に利用されたのです。わしの嬶はわしの

生活の為に利用されたのです。しかも、わしはわしの色情の為に崎山の女を利用したのです。へへゝゝそして色情は、わしに対する権力者ではなく、わしの最大の武器なのだと考えました。もう色情の罪なんていうことは念頭を去つて、色情の価値と云う事を思いつきました。崎山の女との事も罪の観念が去つて単なる失敗だつたのだと判断しました。わしはさつきわしも男だと言いました。この言葉の裏付けをあの時言いました様な悲壮な思想に於てゞなく、この様な楽しい思想のもとに行い得ました。わしは去年の暮の崎山が東京へ出張した隙に崎山の家へ押しかけましたと云つても実際はまあしのび込んだのです。崎山の家は幾度も来た事があり、よく案内を知つていたのでどうにか女の寝台の下に隠れることが出来ました。それは寒い日でしたが寝室には大きな電気ストーブが二つも取付けてあり、暑い位でした夜になり、九時頃になつて女は寝室に入つて来ました。

「あゝ温い、暑い位だわ。」

と云つて寝台の上にどかりと腰を落しました。私の上で、スプリングが小気味好くきしみました。そして何か変な事をやり始めました。

寝台の下でじつとしているわしにも部屋の暖かさも手伝つて、血の異状な動きが感じられ出しました。頃合いを見計らつてわしは寝台の下から這い出ました。そしてあの〃タイス〃と銘うつた、彫刻にあつた様な姿勢になりました。

それからどんなことをした？つてですか？もうわしは疲れましたから、その話は今度の機会にゆずりましょう。

今度はわしが勝ちました。崎山の女はわしに、崎山や、会社が秘密にしている様々の情報を入れて呉れました。今ではわし等の組合はないと思います。嬶は相変らずです。嬶の生んだ二人の児は、一人は去年生れたばかりですか、絶対にわしの子に違いありません。二人ともわしによく似ていると近所の人が言いますから。

こんな話は、あなたの様な若い前途有為の人に話したら悪いかも知れないと思いましたが、こんな大人の生活を一応知つて置くのも必要だと思つてしやべつたのです。亦、あなたも色情の問題でなやんでいるなら少しは参考になつたろうと思います。あなたは何の興味もないと云う顔をして、わしを軽蔑すると眼で云つていますが、偽善は排した方がいゝですよ。創造の神が与えて呉れた甘い木の実を、もつと甘くして食べよう、こう云つた努力も亦好いものです。知らぬ間に説教になつてしまつたですね。ヘッヘッヘッ。

（終り）

（読者通信）

誌上にて拝見しますれば喜多玲子様はじめ岡田咲子様二俣志津子様松井籟子様等同性の方々が沢山活躍していらつしやるのに読書通信の方では（KK通信は拝見していませんが）余りお見受け致しませんのは大変淋しく存じます。女性の方の読者も相当おいでになると思うのですけど、女性特有の引込思案で遠慮していられるのでしようか、私は文章を書くことなど至つて不得手でお恥しいのですが本誌のような記事を拝見いたしますのは大好きでございます。自分ではどうつて事はありませんが、どつちかと申せばマゾ的な傾向が幾分あると存じますの、私をいじめて下さる方つてございませんでしようか、独身二十四才の事務員でございます、お便りお待ちいたします。

（京都　弓削　友子）

緊縛女優列伝

縛られた女優たち

升岡金吉

幼時見た何んとかいう女優の縛られた姿は忘れられないが残念ながら名を思い出せない。縛られる女に美しさを発見したのは確か小学校の三年生の頃だつたろうか、それから縛られた女の出てくる映画を二十年の長きに亘つてどれ程見たか知れない。思い出すまゝに書きなぐつてみますが何かの参考になれば幸いです。

○ **鈴木　澄子**

新興キネマの女王としての彼女の演ずる化猫・幽霊・女賊の怪演はすばらしかつた。〃お伝地獄〃でポリスに捻じ伏せられて捕縄で後手に縛られた姿が忘れられない。

○ **五十鈴柱子**

〃銭形平次〃で悪人に捕われ、縛り上げられて責められ叩かれて悶える姿があつた。中々の美人だつたからその無残美はほのかだが思い出すことがある。

○ **森　静子**

〃ひよどり草紙〃中将姫で本縄で刑場へ引立てられたり、雪中の木へ後手に太綱で縛りつけられたり、その他でもいくつも縛られる役を演じた可憐だつた美人女優の一人。

○ **三条　輝子**

大都映画の女王だつた彼女も縛られ女優だつた。〃夜嵐姫〃とかいつたか短銃の為に剣を取上げられ、ヒシ〳〵とかけられる縄お小夜悲願〃夜嵐姫〃とかいつたか色ジジイの前へ引出されて、後手のクローズアップは両手首にヒシ〳〵と縄が喰い入つていた。

○ **水川八重子**

純情型だつたから時々縛られ役を演つたもの、〃江戸の夜嵐〃とかで恋仇の女賊に太綱で五巻六巻も縛られて柱へくゝりつけられた上、顎をつねられたり、平手打にされたりして責められたのがあつた。

○ **琴路美津子**

愛くるしい娘だつた。鳥人ハヤブサ・ヒデトの相手として悪人に捕えられて、縛られて責められ（空とぶ鳥人）木へ吊されたり〃ポーリン〃の如くダイナマイトの室へ猿ぐつわのまゝ寝かされたりした。（消えるオートバイ）

○ **大川百々代**

三条輝子の妹だ。琴路の後を引ついでお転婆娘の令嬢として台上に縛りつけられて次第に（大学の隼）ノコギリ引きにされんとしたり、水責めの一室に苦悶したりの大活躍をおぼえている（俺の鉄拳）

○ **大川　三鈴**

姫君に、小町娘に腰元に、可憐な彼女の姿〃直参風流男〃で姫君になつて捕われ引立てられてきて人々の前で後手に縛られたまゝ横倒しにされて叩かれたり〃護る影〃で後手のまゝ箱中へ入つての魔術の太夫。

○ **雲井八重子**

〃阿修羅姫〃の大立廻りの末に捕手に後手に縛り上げられた身をもがく姿はよかつた。

○ **真山くみ子**

〝虚無僧系図〟の男装で捕われの身を太綱で後手にされ柱へ縛されたり、手拭いの猿ぐつわをはめられた身を決闘の場所へ運ばれてカゴから転がり出た。

○ **高尾　光子**

少女時代には現代のヒバリの様に天才と云われたが、今や影もなし。〝エノケンのどんぐり頓兵衛ヱ〟で本繩かけられてエノケンの仇の男をさける姿が一寸よかつた。

○ **歌川　絹枝**

右太ヱ門との名コムビで活躍した名女優だつた。大柄だが美人だつた。悪人に捕われて責められる身を後ろから映して後手の繩が固く喰い入つたのをはつきりと見た（〇十郎の安）

○ **逢初　夢子**

〝旋風街〟で名演技者大井正夫に手拭いの猿ぐつわをされ、布紐で後手首だけを縛られて悪人を目の前にして悶える姿、猿ぐつわの手拭いが激しくゆれていた。中々の名演だつた。

○ **北見　礼子**

大都で鳴らし松竹に転じる迄、時代劇女優として大活躍〝闇太郎ざんげ〟の好太郎の妹として太綱で縛られた身を青竹で打たれたり〝江戸の青空〟で女賊弁天お吉になつて短刀の大立廻りの果てには岡ッ引に刀を叩き落されと口惜しがるのをぐいと後手に手姿は美しかつた。

○ **高山　広子**

〝たぬき御殿〟で木へ縛されたり、旗岡巡査で右太ヱ門に捕われて行く……

○ **若原　春江**

〝エノケンの彌次喜多〟でお姫様になつて死んだ高瀬のオッサンの山賊に太綱で五巻六巻に後手に縛されて花を散らさんばかりの美しい姿が忘れられない。

○ **橘　公子**

〝鍔鳴浪人〟で自ら捕われて後手に縛られ〝まぼろし城〟で悪人に荒繩で後手に縛り上げられ〝菊池千本槍〟で鎧姿の若武者になつて雑兵共にがんじがらめに縛られて引出された姿が美し。

○ **花井　蘭子**

可憐な娘故に幾度縛られた事か〝丹下左膳〟〝龍造寺大助〟〝喧嘩鳶〟で荒繩細引の後手、猿ぐつわ〝右門伊豆の旅日記〟で悪者共に「アッ」という間に猿ぐつわの後手、後向くと本当は縛られていたがゆるむ為に解けたのが知れた〝鬼姫しぐれ〟の後手。

○ **原　駒子**

〝石川仁念寺奇談〟で後手に縛られて猿ぐつわ、逃れて再び捕われて斬られんとする。妖艶なる故に仇つぽいポーズであつた。

○ **木下　双葉**

〝南蠻手品〟で嵐寛に捕えられて引立てられてゆく姿は凄艶であつた。名は知らないがこの中で町娘が役人に引かれてゆく所があつたが可憐な姿が痛々しかつた。

○ **山路ふみ子**

大女優だつたが、戦後の一作〝色ざんげ〟の女賊で捕繩が前手にからんで乳房から後へ廻り珍らしい縛られ方をして引立てられてゆく姿は情慾的だつた。

○ **宗春太郎、旗桃太郎**

〝天兵童子〟〝武藏〟〝天狗〟で活躍した二少年の姿は愛らしかつた。後手に縛られてもがくシーンは美少女の姿を思わせて可愛想にの念を抱かせたものだつた。

○ **悦ちやん・松島トモ子**

〝エノケンの鞍馬天狗〟で目明しの親分に後手にキリ〳〵と縛られた姿は可憐の極みだつた〝母〟物で大活躍の少女トモ子が〝流賊黒馬隊〟で後手の猿ぐつわ姿は余りにも無残

な美。

○ **入江たか子**

往年の女王が〃大菩薩峠〃で大河内の前へ帯で縛られ、手拭いの猿ぐつわ姿は強烈なものを残してくれた。〃天狗の安〃で土蔵内に幾十日四五巻細綱で後手に縛られ猿轡のまゝ幽閉、親分進藤英太に従わず幾度も猿ぐつわを解かれたり、嚙まされたり、はめられる時「ムゝウ」と呻く声と猿ぐつわの下の呼吸と眼が美しかつた。

○ **山田五十鈴**

戦前〃佐膳〃で柱へつながれて「三郎様！」と悲痛な声で嵐の夜。〃折鶴笠〃で悪事をばらすや帯で柱へ後手、そしてたんかを切られた腹いせに嚙ます猿ぐつわ。美人故に美しき哉。

○ **高峰 秀子**

デコちやんの可憐な姿が〃佐膳〃で盗賊に細引で後手に縛られ「泥棒！人でなし！」と切るタンカはよかつた。〃スイコ伝〃で前手に縛られ〃アヘン戦争〃で刑場の鎖でつながれた盲目の姿の美しかつたこと。

○ **大倉千代子**

彼女も縛られ女優のナンバー・ワンだ。〃涙の捕縄〃で月形に引かれゆく姿の哀しい美しさ〃風雲将棋谷〃では幾度も捕われキレイな後手縛りで〃サソリ責〃を受け後手のまゝ斬られて阪妻に抱かれて死んでゆく姿は哀れだつた。

○ **市川 春代**

これも第一位だ。〃どくろ銭〃で水から上る所をねじ上げられて縛られたり〃牢獄の花嫁〃で二役で女賊で船中へ太綱で縛られ、役人に捕縄をかけられたり、娘の方で縛られたり〃一寸法師〃で完全に後手に縛られ〃青空浪人〃で縛られて寝かされ馬上に本当の後手姿で運ばれてゆく所がはつきりと映つていた〃で型通りの後手〃花くらべ狸御殿〃で手錠やら鎖やらをはめられ、体を縛られて熱湯池へ吊され〃二十一の指紋〃で二役共床の上、寝台の上へ後手のグル〳〵巻にされ、猿ぐつわ、頭上に剣が吊られてハラ〳〵〃絢爛たる復讐〃誘拐され後手に手首を縛され猿ぐつわ抱かれて高い塔上へ悪人に引かれて。

○ **日高 澄子**

〃麗人草〃で異父妹に両手足を縛られて鞭で打たれる。〃七つの宝石〃で婦警と間違えられて悪人一味に捕われ繩で縛られて叩かれ床へ転がされ、立上つて叫びをあげる口に猿ぐつわ。〃平次地獄の門〃でカゴの中へグル〳〵巻にされて捕われてゆく。

○ **月丘 夢路**

〃七つの宝石〃は一度フイルムを焼いた為替玉女優らしかつたが一度は彼女も縛られた。綱で両手を縛られてジリ〳〵と吊し上げられてゆくシーン、椅子へ手も足も雁字がらめにされて猿ぐつわの姿でもがくシーン。美人だからたまらないスリル。

○ **月丘 千秋**

〃怪傑鉄仮面〃で悪人に捕われ後手の猿ぐつわ、ラストシーンで十字架上へハリつけにされ、手首、腹、両足を縛されて火あぶりの演、多くの縛演をやつた。〃素浪人罷り通る〃等々で……

○ **桑野 通子**

〃水戸黄門〃でスリの女になつて前手に繩をかけられて引立てられる所があつた。名女優だつたが今は亡し。

○ **喜多川千鶴**

彼女は戦後子役から娘として矢次早やに出演、多くの縛演をやつた。〃素浪人罷り通る〃で型通りの後手〃花くらべ狸御殿〃で手錠やら鎖やらをはめられ、体を縛られて熱湯池へ吊され〃二十一の指紋〃で二役共床の上、寝台の上へ後手のグル〳〵巻にされ、猿ぐつわ、頭上に剣が吊られてハラ〳〵〃絢爛たる復讐〃誘拐され後手に手首を縛され猿ぐつわ抱かれて高い塔上へ悪人に引かれて。

○ **日高 澄子**

〃麗人草〃で異父妹に両手足を縛られて鞭で打たれる。〃七つの宝石〃で婦警と間違えられて悪人一味に捕われ繩で縛られて叩かれ床へ転がされ、立上つて叫びをあげる口に猿ぐつわ。〃平次地獄の門〃でカゴの中へグル〳〵巻にされて捕われてゆく。

○ **月丘 夢路**

〃七つの宝石〃は一度フイルムを焼いた為替玉女優らしかつたが一度は彼女も縛られた。綱で両手を縛られてジリ〳〵と吊し上げられてゆくシーン、椅子へ手も足も雁字がらめにされて猿ぐつわの姿でもがくシーン。美人だからたまらないスリル。

○ **月丘 千秋**

〃怪傑鉄仮面〃で悪人に捕われ後手の猿ぐつわ、ラストシーンで十字架上へハリつけにされ、手首、腹、両足を縛されて火あぶりの

刑に処されんとする。火炎に焼かれんとする美女、無惨だが実に思い切つた見せ場でもあつた。

○**田中絹代、水戸光子**

〃わが恋は燃えぬ〃で思想犯として警官に繩を打たれる、今少しの所でカツト、水戸は囚衣に腰に鎖、脱走罪として手錠さゝれて叩かれる。女囚の生態をくわしく見せてくれた更に女工のリンチ場面は凄い、一人の女は手足。胸、腰、グル〳〵巻にされたまま天井から吊り下げられていたし、今一人は裸体に等しい姿のまゝでフトン巻きにされその上をグル〳〵縛られて、ピシ〳〵叩かれヒー〳〵と悲鳴を上げる。よくもこれ程の事を映したと思つた。

○**霧立のぼる**

〃白髪鬼〃で嵐寛に縛られて木へくゝられ猿ぐつはをされてもがく姿がなか〳〵よかつた。〃平次からくり屋敷〃ではオトリとして捕われてグル〳〵巻の後手姿、黒川彌太郎に斬り殺されんとするのがあつた。

○**長谷川裕見子**

〃遊俠の群れ〃でシゴキで後手に縛られ、手拭いの猿ぐつわ、カゴから覗いた目が美しかつたこと。〃銭形平次〃で女房お静として後手の猿ぐつわ〃地獄の門〃でも後手の猿ぐつわは可憐であつた。

○**花柳　小菊**

〃夢介春風無刀流〃でゴロッキ共に無理無態に後手に縛り上げられてさらわれんとする又々さらわれて後手に猿ぐつわまでされて、この中で娘達五、六人が後手に縛られていた。〃飛びつちよ判官〃で白装束に本繩をかけられて白洲で裁きを受ける姿も代表美人故に美しかつた。

○**利根はる恵**

〃鉄路の弾痕〃で荒繩で後手に縛られてもがくシーン〃紅二挺拳銃〃で縛られ、ス巻にされて海へ投げ込まれる。〃海賊島〃で太綱で後手に縛され鞭でリンチをされる所、これはスチール写真のみ〃緋鹿子異変〃では木へ縛りつけられた。

○**野上千鶴子**

〃白頭巾親子〃でヤクザ兵に手拭いの後手猿ぐつわ、背を見せて運ばれ縛めのまゝ道へ転がされたり〃千里の虎〃これはスチールのみの後手〃遊俠一代〃で代官殺しの為に役人に捕われて引立てられてゆく姿、中々よろしかつたこと。〃銭形平次〃で女房お静として後手に二巻三巻縛られて一室に閉じ込められてとけた猿ぐつわの下から「お母さん〳〵」と叫ぶ姿は哀れにも美しいものであつた。

○**山根　寿子**

実演の〃エノケンのノートルダムのセムシ男〃でエスメラルドに扮して後手に縛られた彼女が絞首台にというのがあつた。

○**浜田百合子**

〃右門緋鹿子異変〃で殺人罪として嵐寛に後手に繩をうたれて引立てられて行く。〃佐々木小次郎〃で切支丹が後手に頭上に前手に捕われてゆく所あり、彼女は捕えられたが出なかつた。〃ジヤコ万と鉄〃で月形に太綱でグル〳〵巻に手も足も馬ソリに縛りつけられて雪上を悲鳴をあげながらぶつ飛ばされるスリルの中のサジスムス……

○**相馬千恵子**

〃大江戸七変化〃で好太郎に帯でぐる〳〵巻の猿ぐつわ〃将軍は夜踊る〃で柱へ太綱の七巻八巻のグル〳〵巻になり〃猿飛佐助〃で綱で縛されて崖の上へ吊され〃ごろつき船〃で、賊に縛された身を情夫の前へ引出されてもがく喰い入つた縛めの美。

○**朝雲　照代**

〃難船岬の決斗〃で女間諜を見破られ、椅

子に縛りつけられ、更に後手に足まで縛られ猿ぐつわをされて一室へ〝ひよどり草紙〟で半裸の身を吊上げられた。〝獄門島〟のスチール写真は残忍美だつた。綱のグル〳〵巻。肩まで露出させて……

○ **千石 規子**

〝獄門島〟での写真で蛇に巻かれていたのはちとグロ〝奴隷の町〟では客にサイズム的なものを与えんとして柱に縛りつけられて猿ぐつわでもがき〝遊民街の夜襲〟で千恵蔵にいきなり手袋を口へ押込まれて猿ぐつわ、後手つこに縛り上げられた。

○ **荒川さつき**

〝私は狙われている〟でミス・カーニバル入社第一回に出演を両手から胸、胴、両足まで細綱、太綱で雁字がらめにされて気球へつながれた身を空へ吊り上げられてゆく、スリラー劇だがハツキリとトリツクが見えすいていた。

○ **水の江滝子**

〝狸、銀座を歩く〟で走つてくる所を繩を張られて転がされ、女共に押えつけられて後手に縛り上げられ両足までくゝられて床の上へ投げ出されて（ミーチヤン・ハーチヤン）のハートをハラ〳〵させた。もつと責めたらいゝのに。

○ **宮城千賀子**

〝酔どれ八万騎〟で悪旗本連に捕われて鞭で拷問されて転げ廻つて後手姿を見せてくれた。更に白装束姿で後手に寝かされた両足を〝牛裂き〟の刑にされんとす。〝修羅八荒〟で後手の猿ぐつわ姿で引出され一刀両断にされんとのスゴイ場面。

○ **志賀 暁子**

〝狼人街〟で細引で後手に縛られて柱へつながれ苦悶する顔、カムバック第一作を残してスクリーンから消え去る。

○ **沢村 昌子**

〝鞍馬天狗大江戸異変〟で帯で二巻三巻、両手は後手に縛られて猿ぐつわを噛まされ蚊張の中であわやという所を見せてもがく姿は美しかつた。〝緋牡丹盗賊〟で好太郎に捕われ後手に縛られた身を汚されんとして必死で争う可憐なる姿、自由なき娘の姿のかくまでも美しとは？

○ **若杉須美子**

〝ごろつき船〟で月形の入浴中の前の柱へつながれた素々たる美女の後手姿は美形。

○ **川路 竜子**

〝黄金バット〟で無人自動車の中に両手足を縛られ猿ぐつわのまゝもがきつゝ、つゝ走つた哀れな男装の麗人。

○ **曙ゆり、並木路子**

〝踊る龍宮城〟で並木は太綱でグル〳〵巻の七巻八巻、その前で恋人たる川路も曙も大の字に縛られて、くすぐり責にされる、ファンの女性が「あゝ困る、どうしよう〳〵」と

○ **三条 美樹**

〝銭形平次〟で香川良介に捕えられ一室に縛られて猿ぐつわ、口を解かれて階段をあげられる、後手の姿、今にも解けんばかりの縛り方だ。必死に後手の縛めをといて逃れんとするを一発の銃弾に倒れる。

（次号につづく）

（読者の皆様へ）

縛られた女優については本稿に引続いて次号に洋画を含めた続篇を掲載KK通信にも同好者の研究を発表致しますが、若し読者の方々の中で他にもお気付きの点がありましたら編集部宛御一報下さるようお願いします。

伊藤晴雨氏の解答を讀んで

和泉しお

一月号に載つた黒井珍平氏の告白文に対し二月号の伊藤晴雨氏「黒井珍平氏に答う」の猛烈な反駁文を讀んだが両者の考え方の差異其他について、内容が主として絵に関することなので、画家である私からも、遠慮なしの意見を書いてみたい。

何としても驚いた事は、伊藤画伯ともあろうお方が頭から煙の出そうな尖つた文章で反駁なさつているのを讀んで、そうムキにならずと、若い者共を教え説き聞かす意味からも春風駘蕩式に論じられぬものかと不思議におもつた。

此の一文に対する讀者の反駁を期待するという冒頭は自己を批判の中心とした思い上つた成り上り根情云々と伊藤氏は黒井氏をタタかれているが、黒井氏の文章は個人の風変りな記録で成り上り根性どころか、一般讀者にとつては興味深い讀物の一つであつたはずだ。黒井氏が書いた日本髪の件を伊藤氏は日本髪排斥の説には賛成出来ないと云われるが黒井氏の言は日本髪排斥論ではなくて、伊藤氏の描く髪ぼうぐ〳〵と乱した日本髪女性のことなのである。クリ〳〵頭主が良いと云つているのではない。伊藤氏の答えは極端の嫌いがある。鏑木清方先生の美人画を引つぱり出していられるが黒井氏への解答としては、そこまで言及する必要はない。血が流れるのがイヤなら見ない方がいい、頭ゴナシに書いていられるけれども、純粋絵画専門では無く、風俗画家であり挿画家でもあられる伊藤氏の応酬として、不親切であり余りに頑固であり過ぎる。私は伊藤氏の作品は可成以前から拝見して来ているが、結局は氏を一種の大衆画家として、そんな御仁が日展系に居るなら教えてほしい。黒井氏個人をタタくおろかは止めた方が無難である。この暴論を万一日本画部大御所鏑木清方先生がお聞きになつたら泣くことだろう。

伊藤氏は短い文章の中で「一流の」という文字を実に多く使つていられるので此の点に就て一言しておきたい。氏の言われる一流と挿画等はその形式に於てすでに商品化されている。だから責画にしても風俗画にしても、最後まで大衆的な新鮮な作品であつてほしいと願つている。若い者達の希望なり意見を温笑をもつて聴く位の心のユトリがあつていいのではないか。殻の中にたてこもつたり、自分の作品を自ら骨董化するような真似はなさらぬが良い。

七十才になろうが九十才になろうが絵画芸術家に年令と作品のケジメがあつて良いわけはない。

年配にも青年にも一般に観賞される立派な作品を描き続けてほしい。

面相一本満足に使いこなせぬ様な帝展の有名人さえある世の中、と伊藤氏は云い切つていらしやるが、帝展は日展の間違いはまあいいとして、そんな御仁が日展系に居るなら教えてほしい。黒井氏個人をタタくおろかは止めた方が無難である。この暴論を万一日本画部大御所鏑木清方先生がお聞きになつたら泣くことだろう。

伊藤氏は短い文章の中で「一流の」という文字を実に多く使つていられるので此の点に就て一言しておきたい。氏の言われる一流と

は何を基準にしてなのか理解に苦しむが、絵画の世界は広い。その中で、「責場の画」を描くことに於ては伊藤氏はたしかに一流と自他共に許してよかろうけれど、其の他は残念ながら一流とは申しかねる。一流と言う文字を自ら使う伊藤氏の心臓の強さもさることながら、一流に其処までコダワル必要が一体何処にあろう、真の一流はそうざらに居るものではない。黒井氏が気味悪い晴雨氏の画に対し美の感覚の新しい玲子氏に引かれたのはあくまでも感覚本位の意味で書いたのであつて絵画自体の技術的結果を云つているのではない。一月号で伊藤氏は四十余年女の責場一本槍で通して来たと云い、二月号では責場が目的でなく風俗を描くのが目的で……と云う、此れによつても氏の猫の眼的論旨の一端を眺められた気持がするのは私一人ではあるまい。

二月号で喜多玲子さんの絵に対しては心から敬意を表すとあり、先の一月号では海の者とも河の者ともつかぬ新発足の女流画家と喜多氏を素人画描きアッカイしている点、奇怪至極と申すの他はない。自分の論拠に筋道と責任とを持つてもらいたい。

なるほど、伊藤晴雨氏と喜多玲子氏との責め画をくらべて見るに、技術的には親子以上の上下がある。然し現代の若い人達の心にピッタリと来る画の感覚は、玲子氏の方が優勢である。黒井氏の文章も此れを正直に云つているのだと思う。

時代感覚の相違に就て黒井氏が述べていられるが、何才になつても画家の頭が教養深く思考力の豊かさをシッカリ身につけていれば何時代の風俗画を描いたとて新しい感覚の画が自由に描けるわけである。

現代挿画大家の、岩田専太郎氏、志村立美氏、神保朋世氏等の作品は時代物を描いても常に近代的なセンスと新らしさをうしなつていないのは、研究と教養修得と精進との三つを忘れずにいられるからだと思つている。

元来私は、実力のある人でも老人風を吹かす人物をあまり好かない。そんな老人こそ晴雨氏の言う「小胆な人」が多い。画家は何才になつても若々しい仕事を続けたいものである。たとえば北斎を見よう。

老人になる程益々若々しい仕事をしている。北斎は文政未年に中風を患んで一時健康を害したが間もなく取戻し、天保元年七十一才老いて益々盛んと云う語は天保期の彼にふさわしい言葉である。一代の傑作たるエロテイックな一巻「北斎漫画」は七十才余の人の作とは思えぬ程感覚が新しい、

「絵本忠経」「和漢絵本魁」「日光山誌」「和漢陰隲伝」等々の傑作挿画は八十才に近い高齢で執筆している。北斎ほどの大画家ですらたえず自らを百姓とよび、「一流」などと云うラッパは決して吹かさなかつた。北斎がもし現在生存しているとしたら、老人になつても線にも色彩にも他の追従を許さない若さに満ちた画を描いていると思う。

伊藤氏が黒井氏に対し「思い上つた成り上り根性」と罵倒されるなら、私は直に「いくらラッパを吹かれても現代の若人達はそれで平伏する程頭の中が単純に出来ていない。滑稽だからお止しなさい。」と申し上げたい。

と書いたからとて、私は伊藤氏に何のウラミもなければ、黒井氏の親戚の者でもない。東京の屋根の下で長く空気を吸つている、伊藤氏の孫みたいな、第五流画家に過ぎない同じ画家として、伊藤氏の人を小馬鹿にした不人情な答え方を読んで、そのままにしておくわけに参りかねた。伊藤氏の第一流の御意見に対し、五流画家の感想も是非一般読者に眼を通してもらいたいところから、かくの通りのニクマレ口となつた次第である。

☆破つた日記帳☆

川端多奈子

八月十日（日）快晴

枕を蒲団の横の畳の上に蹴とばしてグッスリ眠つて眼がさめてみると朝だつた。ゆうべ食べさしたキャンデーの包紙が誰が開けたのか窓から吹き込む朝風にヒラヒラ揺れていた。まるで白い花ビラのように。

腕時計を見ると六時四十分、あゝ今日は日曜だつたなアという気持がすうと心を軽くし、途端に約束のあのことが身体の一隅でくすぶつてくる。蒲団の中で手足を思いきり曲げたり伸ばしたりしていると蒲団の外へ出た足に冷つこい空気の感触がぎゆッと身を引き緊める。

三日前から手紙で連絡を受けていたので今日の約束のことは知つていたけれど、いや知つていたというより私の頭の中を四六時中、そのことが支配しているようで、何んだか重苦しいようでもあり、未知の世界へ導いてくれる絆のように思えて楽しくもあり、知らず知らずにそれに執着してゆく自分を断ちきれないでいる。

蒲団の中で暫く逡巡していた。それはいつもの私のクセかも知れない。起き上つて蒲団を上げた時には約束通り行こうと決心していた。此の前の七日には初めてすつぽ抜かしたのだもの、今日も無断で行かなかつたら、どんなに云つて叱られるかも知れない。そうときまれば朝食もそこそこに外へ出る。

花模様のワンピースに白のサンダルつて、どうかしら。いつも同じ服装をしてくると思われたくない娘の悲しい虚栄心のあらわれかしら、でも相手の人に好感を与えるつて事は悪いことではないと思うわ。とそんな弁解を心の中で呟やきながらいつもの歩き馴れた駅への埃つぽい道を無意議で歩いてゆく。

今日はカメラとライトを持つ助手の二人の方「早速裸になつて」と両側から私の裸になるのを待つような恰好で催促される。途端に嫌になつてしまつた。勿論最初からその気持で来たんだけれど、やはり全然商売つて気持じやないんだから、少しは処女心をいたわつてほしいわ、「イヤ、イヤ」つて拗ねてやつたら、「では、初めはコスチュームから」だなんて御機嫌をとつていたわ。

本当は「イヤ、イヤ」つて言う私を二人して無理に裸にむいて呉れる位の方が嬉しいんだけど、なんと紳士的、気弱な人達なんだろう。でも心の中では「いやいやつて言つたつて結局は肌着まで脱ぐものさ、女つていうものは—」なんて思つているかも知れないわ男の人つたら紳士面していても心の中はわからないんだもの、と言

つたら叱られるかしら。

別室で裸になつてバスタオルを膝の上からお乳まで掩つて出てくると三脚に坐つたカメラがデンと部屋の中央に据えられて、麻繩を持つた助手の方が盛んにもつれを直している。「後手に縛つて繩尻を二回程胸に巻く、顔は前屈みに左へ向け両足は揃えて右側へ」

ポーズの指示があつて私の肌を掩つていたバスタオルは忽ち部屋の隅へ放り投げられて、両手が背中で合掌するようにきつく縛られる。痛いッと思つた。でも、こんな事で痛いと云つていたら、これからずつとネを上げていなければならないだろう。乳房の上と下の両側がぎつちりと括られると、うつむいた私の眼におの椀ように盛り上つて見える。

「もつと前屈みになつて」と邪慳に頭を押されると後手が釣り上り胸の繩が引き緊つて息苦しい。太股のあたりがブル〳〵と痙攣を起して、いくら止めようとしても止まらない。足が浮いてしまつて不安定なのだ。早くしてほしい。このまゝだつたら左側へ倒れてしまいそうだわ、それに人の気も知らない二人は縦から横からこんな私の姿を眺めて、何んだか訳のわからないムツカシイ言葉で話し合つている。もう両腕が痺れて左側の腰から脇腹に鉄棒でもさゝれたようにこわばつてくる。

ライトの強烈な光が矢のように三方から四方から私の肌につき刺つてくる。顔をそむけようにもやり場のない程、あちらからもこちらからも集中される。女の下着を脱ぐ時に一番羞恥を感じるという

それも確かだけれど、というのでも、それはほんの一瞬間、シヤツターが切られゝばライトは直ぐ消されてもとの平静さにかえる一度は全裸になつてしまえば却つて度胸が出来て気が落ちついてくるものだ。でもライトの集中を浴びて眼が盲同然にされて、周囲の人達がどんな事をしているのかわからないのも不安で仕方がない。

不安といえば縛られて、そのまゝ放置しておかれる位不安なものはない。繩が腕に喰い込む痛さはどこ迄も辛抱するつもりだけど、今日の海老責めだといつて縛つてころがされた時は痛かつたわ、それに自分の姿態に羞恥以上の不安が胸につきさゝつて二の腕の痛さよりも嫌だつた。もう消えてしまいたい位の恥しさ。

それに痛いからやめてほしいと云われない私の心の中の悪魔、ほんとにあの人達の云われるように私はマゾなのかしら。もつともそのマゾという言葉の意味さえ私には十分わからないのだけれど、縛られることが嫌でないという私の気持はそれなのかも知れないわ。

案の定、この前のすつぽ抜かしで今日は大分お冠りらしい。いつもと違つて今日は本格的に責めるよ、だつて、モチOK、どんなに虐めたつてネを上げてやらないからこれでも痛いことを辛抱するなら誰にも負けない自信があるわ道具を使うんだつて、どんなのか恐ろしいようなそれに何か新しい方法を期待するような気持、又すつぽ抜かして憤らしてやろうかな。だつて、きつくきつく縛つて置かれた方が何も考えなくてもいゝので嬉しいの。悲しいことも淋しい事も嫌なことも皆んな忘れてしまえるの。そして肌にぎり〳〵と喰い込んだ繩目から言うに言われないほのぼのとしたものが湧き上つてくるんだもの。私の身体の中のすべての不愉快なものを洗い流してくれるのが、あの人達のいう緊縛つていうのかも知れないわ。終つてお洋服をつけた時のほツとした気持、一週間に一回きりのお休みだけど、やはり来てよかつた。次はどんな方法で縛られるのかしら。（未完）

眼を中心とした猥褻人相學

高島青峯

顔容ほど正直なものはない顔さえ見れば、どんなに隠蔽されている性格、感情だつて一目瞭然だ。

相手がどんなに言葉巧みに云い寄ろうともちやんとその心底を看破る事も出来るし、また相手の性格や感情をはつきり知る事が出来るのである

眼は甚だ色情に関係が深い。たとえば、相手の愛情が自分に傾いて、色情切りに動くときはこれは一番先に眼に現われてくる。眼の下の恰度蚕が匍つているような形をしたところ——人相学上これを臥蚕というが——少し瞳れぽつたくなつて、それが薄桃色を帯びてきたら、もう占めたものである。が、これは「猥褻表情学」に一歩を踏み入れている。「表情学」は後日稿を更めて詳述するとしてこゝには「動かざるもの」のみを説明する。

さて眼であるが

一、眼の左右が均整とれず、大小が甚だしいのは多情放肆の証拠であつて、おまけに瞳の浮動し易いときては曰くつきの妖婦、色魔たること疑いなしである。

二、俗に云う銀杏眼は男女共甚だ多情で、色情により災難多く、時に私通をすることがある、象眼は少し情けに深かすぎるし又瞳黒

心中雑考

七條美樹子

単に心中といつても、非常に多種多様で、これは必ずしも二人に決つたものじやなく、一家心中は、たいてい三つ以上の死が強要されるし、後追い心中は一人のようです。

しかし、心中とは、広辞林に曰く「情事の関係ある男女が、諸共に自殺すること」とありますから、動機的に、情事という事が必要なようです。だから親子心中などは、本当の心中とは言えないかも知れません。

また情事に関係ある男女が、と定義はしていますが、別に男女でなくとも、同性愛などによつて、男同志又は女同必で行われてもよいわけです。諸共に自殺しなくても、無理心中などの他殺十自殺でも、やはりこのカテゴリーに入ります。

中には早乙女の感傷から、相手の不幸に同情して、一緒に死にましようなんてな、非常に複雑なものもありますが、これはいくら死体が抱き合つてようが厳密には心中ではないようです。

心中学?となると、かなり尨大な紙数を要しますので、概論はこれくらいにしておいて、

次に各論に入ります。

大体この情死で、最も古いのは、古代エジプト史に、それらしいものが出て来ますし、ギリシヤ神話の中にもベルガモムの

く殆ど瞳孔を判別し難いのを小鳥眼と云うが、これは人気評判を得るの相で、而も情けを受くること多く、昔ならば遊女になるものが多く、現代ならば——何れを見てもこれならざるはなしですかなあ。女性の眼尻の下るは淫相、上るは淫相にして而も短気。眼尻が上つて声が男のようにアルト以下の女であつたら夢々手を出すべからでこんな女にかゝり合えば命懸けと思わねばならぬ。

又三角眼にて眼中の肉枯れ角あるは荒淫奸曲、女は嫉妬深くて夫を剋くし自ら甚だ乱倫を極めると云う。こんな女のいうことは少しも信じてはいけません。

三、眼光沈み凸眼であるのは心が常に浮動して、不実、不貞平気で虚偽を行う輩である、近眼の女は夫の名を失うものであるが、この近眼と云うのは性来の近眼を意味して、読書勤勉の為にかくなつた女性はゆめ〳〵この範疇に入らない。間違つてくれては近眼の淑女に対して申し訳が立たぬ。

四、女性の眼の底に光あるものは愛情が深く、眼に水を流したようなのは男女とも激情家で苦労が甚だしい。瞳の青味を帯びたのは肝色爵して女は心に邪毒を帯びている。眼の周囲多く爛れるのは心に締りなく、だらしない程多情である。

瞼が三重四重になつて人に逢うと微笑を含んで眼が少し潤むものがあるが、この徒輩の心情は甚だ陋劣で、口先きばかりの好意を示し陰険味を帯びた多情家である。

臥蚕（眼の下）が常に黒いのは愛欲受難の相、眼の椽に粟粒のような雀斑が多くあるのは多情である。以て口説くべしであるか？

五、眼中薄紅を呈するものは情事に溺れるものが多い。瞳が薄桃色を呈して、上下の瞼が潤いのあるのは夫婦の交情濃やかなのを示しているが、情に耽りすぎる恐れがある。

然しながらこの薄桃色が赤色の王アツタルスが、ゴール人、つまりガラテイア人を襲撃した時に、その酋長が、愛妻と無理心中を遂げています。日本では、紫式部の源氏物語が、一番古いようです。

しかし、何といつても、最流行期は江戸時代で、黙阿彌や文左衛門の戯曲に、かなり沢山出て来ます。

そのうち有名なものは、殆どが刃傷心中で次が入水心中のようです。

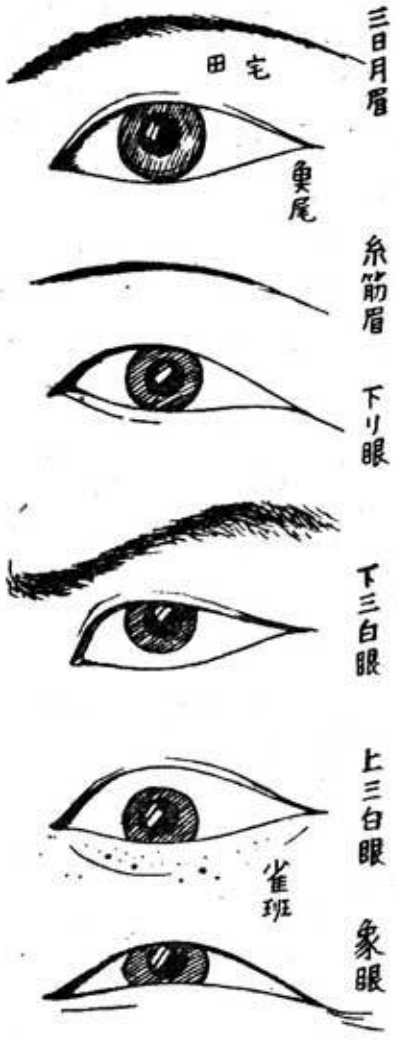
お染半九郎の鳥辺山心中、堀川猿廻しのお俊伝兵衛、大阪新町吉田屋の夕霧伊左衛門、或は鳥羽の恋塚、桂川心中、江戸城心中など、歌舞伎や浄瑠璃のドル箱になつています。

それが、明治大正の時代に入ると、今度は入水心中が俄然トップになり、中でも、天国に結ぶ恋で、一世を風靡した坂田山心中は、新企画のプラトニック・ラヴで、俄然センセーションを巻起したものです。

昭和初期は、何と言つても、断然第一位は三原山噴火口の飛込み心中で、単独自殺者を含めると、莫大な数字になります。もつとも、最近にちつとも流行らないので、思い切つて、木星号が錦上花を添えてくれましたが。

中期にはガス心中がかなり流行り、戦後は薬物心中が件数的にトップで、しかも未遂率も又トップ、次が入水心中で、確率はこれが一番高いようです。最近話題を賑わしたのは、安城美智子の片割れ心中でしょう。

心中の動機というものは、殆どが添えない二人というわけで愛し愛されていながら、父母が反対するとか、家庭の事情が許さないとか、相手に妻子があつて、世間や環境が許さないとかで、どうせ二人はこの世では、花の咲かない枯すすきという訳で、死んで楽しい天国で貴方の



線となり瞳を貫いていると不義密通の相となる、又眼中枝のように赤い脈が浮き出て眼尻に青紅色を呈しこめかみの上に青筋が現れるとこれまた不義の相である。眼頭の赤い点及び龍宮（瞳より内側即ち眼に近い白眼を云う）にある赤点は共に私通の証拠である。又龍宮の黒痣も密通の相。

眼中にしみ又は小瘡黒子等あるは恋情に於て他人に迷惑をかけたり、義理の悪い悪性の恋愛をなすものが多い。

六、眼の色混濁して紅黄乱れ交わり、斜めに人を見、眼尻の紋下乱れているものは男女ともに私通不義の愛慾に耽るを好む危険な相である。睫毛なきものはグロテスクなる愛慾を好むものである。

七、眉毛の黒々と濃く生えたのは色情甚だ盛んで、この上眉毛を撫でる癖があろうものなら、男女共にその愛情の深さ測り知られずである。一つ探して当つて砕けろという処でしようね。疵のように重なり合つた眉毛は、必ず異兄弟か異父母がある、女性なれば多情な証拠である。

八、眉骨が高く秀でているものは、我意が強く稍々もすれば親には叛き、財は傾ける相で、女は縁結びの神に疾くから見離される形である。

眉毛と眼の間を田宅という。こゝが紅色を帯びていると、余り可愛がられ過ぎて却つて損な立場に妻になりますわ、という事になるようです。でも、死ぬ程まで愛し愛され合うなんて、ほんとうに羨ましい！

自殺の方では、華厳滝から高飛込みをやつたり、旅客機上から、鈴鹿山中へ飛降りたり仲々新機軸を開拓したのがありますが、心中では珍奇に属するものは少いようです。戦後、ダイナマイトで無理心中したのが居ましたし、比叡山の同性心中があつたくらいなものでしようか。誰か型破りの心中を発表してみませんか？。例えば、エニウェトツク環礁あたりで、水爆心中をやるとか、真ッ裸で抱き合つて、デパートの屋上から、雨傘でも持つて飛降りてみるとか。

薬物心中は、帝銀事件の平沢が実験してくれたせいか、青酸加里が断然多く、その次はカルモチンとかアドルムとかの睡眠薬によるもの。続いてが砒素系の毒物亜砒酸などで、猫イラズだの昇汞だのというものは、あんまり心中には使わないようですね。

次に入水心中ですが、何といつてもこの世界的名所（？）は京都の嵐山らしいです。月産最高四八組というから大したもの心中した時、何故男は下を向き、女が上を向くかという事は、もう御存知でしようが、男は前に重い鉛沈をぶら下げてるから、下を向くんだろうなんてな解答は駄目ですよ。女の人はお尻が大きいから上を向く、これならまア、当らずと言えども遠からずで、これは法医学的には、骨盤の関係なんです。女子は骨盤が広く、部位的に低く、臀部に重心がかかるので上向きますが、男子はこの反対です。

又水死体が水に浮くのは腐敗ガスが貯溜して、比重が軽くなるからで、女子の内臓は、ガスの貯溜する量の大なる中空の臓なつたり、喜び事も多い代りに

色情による受難も又少からずの相、肉付きのよ過ぎるのも淫情多く、赤味が現われた時は仮令蜜のように甘い夫婦でも注意を要す、口舌事が起るから——。

九、糸筋眉は色難度々起り、身の納りがつく事おそく、おまけに眉尻が下つているときては淫慾倦く事を知らぬ。三ヶ月眉のものは器用にして目上の引立てあり、立身出世疑なしと雖えども、生来が多情の相だから常に女難がつきまとう、

南天葉を形どつたような眉毛ならば自我を通して妻を御し、女は不義密通をするという危険千万な相だが、眉毛のぬま〳〵した男性なら鼻下の長さ普通人以上であるよろしく取捨撰択あれ。

半分上り半分下つている不揃いの眉は浮浪性あり、常に住所定まらず、女は夫を剋くし淫奔にして私通をする相である。

女性の眉毛の運動激しい時は男性なるもの大いに注意しなければならぬ。この場合は必ず外に意気投合せる男性が出現しているに相違ないことを断つておく。

十、魚尾（人相学上眼尻の事を指ず）に紋理が深く刻まれているものは妻が変な死に方をするし、網の目のように乱れ、非常に数が多いのは、乱倫極まる性行を敢えて成すか、妻の為に財を失う相で女性は夫縁に薄く自ら求めて身を滅す道に進み易く、時には私通もする、男性にして魚尾の肉付きが悪く、紋理のないものは妻を娶る事難かしく、女ならば容姿が端麗なる時は、妾、傾城（どちらも時代遅れですが）つまり近代流行のエロ職業に最適の相で、容貌醜きものは夫を得ることが先ず〳〵不可能である。

十一、魚尾紋が上行して眉毛がそれを覆つているなら間違いなく夫婦の縁が薄い。女は表面離れていても猶内心には断ち切れぬ縁で悩むか、心では嫌悪の情を抱いていても是非ない義理でつながれて器（例えば子宮など）が、骨盤の前方にある事なども、浮揚時間に影響するし、死体が上向く事にも関係します。だから、女の子供なら、上向くとは限りませんが、幼児は今の所情死しないのでねえ……。

ついでに、情死について、二三駄弁つてみましょう。

水中では、海綿体は萎縮しますから、いくら抱合い心中をやつても、嵌接部分は、死の苦悶によつて暴れるだけでなく、程なく離れてしまいますから、いくら紐などで厳重に二人の身体を縛りつけても、それは結局醜態をあらわすだけで、抱き合つては地獄へも行けません。

天国に結ぶ恋などは、小説的詩情であり、アプレさんにはお気に召さんでしようから、肉慾が満足したければ、生きてる間に、充分心残りなく楽しんでから、ドボンとやる事ですな、それが嫌なら、抱き合つて薬物を服む方にするか、一その事、やめとく事ですな。

又水中に二十四時間あると、手掌や足のうらは白く肥厚し夏は二週間、冬は三週間程で、手足の皮は、手袋か足袋を脱ぐように抜け落ちて、真皮を露出しますし、流れや波のある所では衣類なども早く脱落します。だから、滅多に人に見付からないような所で、ブクブクやると、発見された時、余計に恥をかくことにもなりますから、これまた御用心。

また、溺死体は、一度沈んでから、必ず浮上るとは限りません。浮上つた死体でも、表面が破れてガスが抜けると、又沈みます。無理心中などで、女をブスリと一刺し、返す刃でなんてな事をすると、本当に浮ばれんことがありますよ。

それから、女の人が紐を上の方へするのは、和服の仕立上、内臓や生殖器の圧迫を保護する

いるという悪縁である。又魚尾が下に曲つたものは男女共に邪淫の相で不義私通する事があるかも知れない。

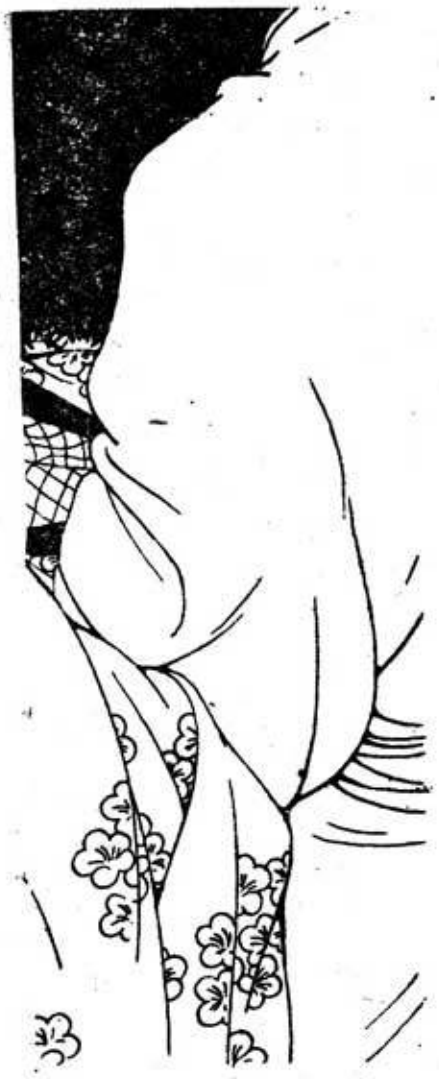
白い斑点が生じた時は九週間以内に思わぬ災厄を蒙るか、でなければ色慾による苦難を甜めなければならない。気をつけなければいけません。

魚尾の形に円味があり、紋理のないのは奸智に長けて邪推深く、剰つさえ女難の相ときている。深く凹んでいたり、疵、黒子ある時は、男ならば妻を剋くし、女は夫を剋くす相で、幾度縁があつても故障多く結局は破綻に終る。

魚尾に強く桃花色を呈しているもの、又は赤い小さな腫物があるのは愛情を催す血の動きを示すもので好機逸すべからざる状態にあるのである。

（終）

屍臭



丹波太郎

（一）

近代的センスを持つた怪異小説の元祖ともいうべき、雨月物語の作者上田秋成は、丹波国氷上郡の出である。雨月物語の巻之五に、青頭巾と題せる、淫僧の屍肉を食う鬼気迫る短篇があるが、これから述べる物語の主人公がそのモデルであつたかどうか…。日本靈異記にもよく似たものがあるから、或はそうでないかも知れない。

為だそうですが、女の人は乳房が大きいので、紐を下にすると胸の肌けられる率も高く、水死の場合では、殊に潮流のある所などですと、早く着物が脱落して、裸になつてしまう率も高い筈です。波のある所で情死したい時は、飛込まれる前に、バターフライをどうぞ。

心中は、恋愛が、封建的な思想や、環境的弾圧に歪められた頃の、遺物ともいうべきもので あり、新時代の恋愛には、情死なんてことは、原則的には考えられないのが本当なんですが、まだそこまで、社会改革は出来てないようです。しかし、この頃の若い人ならそんな馬鹿な道を選ぶ前に、賢明に自分を再考し、善処されんことを望んでやみません。

何はともあれ、天正年間の丹波は、安土桃山時代の地固めの犠牲となつて、旗鼓剣戟の間に、数々の悲劇が山野を血塗つていた。

天正七年八月二十日、智将明智光秀を散々てこずらせた赤井直政の本城保月の城が、天を冲する大火焔に包まれながら二の丸、三の丸、更に本丸が焼け落ちて間もなく、城山の麓に近い禅寺寧楽寺の庫裏の方で、乱れる足音、男の怒声、女の悲鳴がしばらく続いたが静かになつたと思う間もなく

「ウウッ…」

という女の呻きが、地をはう様に聞えて来た。

住職の天巌和尚、不甲斐なくも眠蔵の中で慄えていたが、彼はしきりに尿意を催し、何回となく雪隠に通つた。女の呻き声は、梵鐘にぶち当る撞木の様に、彼の高ぶつた神経に突き当つて来る。

且つて東京府下を恐怖のどん底に陥しこんだ説教強盗は、神経が極度に緊張すると、異様に性衝動を覚えるものだと言つている。寝乱れた姿のまま縛された婦女を、説教強盗は必ず姦して盗家を去つたが、戦塵の間、弾丸飛雨、瞬後の生命も保証し難い際、遺精を経験した読者も多いであろう。

彼天巌も説教強盗の名言を裏書する状態にあつたのだつた。最早耐えられなくなつた天巌は、足音を忍ばせて雪隠に入つた。尿は申し訳位にしか出ない。彼はおそるおそる明り窓の向うを覗つた。

有明月が銀杏の大樹を斜めに切つて、釣瓶井戸のあたりを照していた。月光を背に、或は真向いに受けて、二十名前後の人影が蠢いている。女の呻きは聞えなくなつていたが、天巌の予想した光景が二人の女体の上に次々と繰返されていた。

（二）

天巌は近隣に聞えた一かどの善智識であつた。彼は高徳の名に縛られ、愈々行い澄まして、いやしくも尼僧や壇家の婦女と淫ける様なことがなかつた。が、彼が胎内から背負つて来たハイド的宿命は余りにも悲しく、淫臭に満ちていた。ハイド的宿命は、保月落城の未明、彼が犯した脊徳以来、最早どうしようもない速力でもつて、奈落へ奈落へと天巌を追い落して行つたのだが、彼が胎内から背負つて来た宿命とは何であつたか…。

彼の生母は因幡の国、湖山長者の伝説で名高い、湖山池の周辺一帯に勢力をはる郷士の娘であつた。花よ蝶よと父母の寵愛を一身に受けて生育した彼女は、娘盛りの十七才、湖山小町と言えば因幡の国は言うに及ばず、遠く出雲、美作、但馬の国々にまで言い囃されて、我こそと思う若殿輩から、どうせ高嶺の花の百姓の小忰に至る

まで、胸をときめかす有様であつた。

ウララウララと湖山池に春霞がたなびきく或る春日、彼女は陽炎に酔つた肉体を、砂丘の松林に横えていた。其の日に限つて、侍女を連れず、唯一人であつた。彼女は噂に上る殿御達の面影を、あれこれと心に映いていた。クリーム色に薄くぼやけた蒼穹に、のびのびと手脚を延ばした彼女は、交尾期に達した乙女の特権を満喫しながら、いつしか甘い夢路に落ちて行つた。

当時因幡と美作の山境に巣喰う剽盗の一団があつた。彼等は尼子の遺臣と称し、主家再興の軍資金集めと高言したが、大将株は尼子の遺臣らしかつたが、大部分は無頼の徒で、彼等の襲撃は惨虐酸鼻を極めた。この剽盗の一味、荒くれ男共が五六名、砂丘の松林に忽然と現れたのだつた。

「おい、貴公等、仕事は子の刻だ。お天道様の下で慌ててみても致し方も御座らぬ。一休致そうじやないか」

武者修業然とした風態の男が深編笠に手を掛けながら一行に声を掛けた。皆同じ様な装束である。

「我等は夜の魔王で御座るによつて、それもよかろう」

一人が応じた。彼等が休むことなく通り過ぎれば、何事もなかつたのだが、そしてこの物語りも存在せず終つたのだが、彼等は一列に並んで放尿をやり始めた時、湖山小町を見つけたのだつた。

若い女の寝姿、余程道心堅固な仁でも淫心が湧こうもの、ましてや盗賊達である。鰹節を見つけた猫である。悲しむべき運命はまるで、可憐な湖山小町の上に隼が小雀を襲うよう次から次へと無惨であつた。

それから三年の歳月が流れた。湖山小町の不幸以来、さしも威を張つた郷士も気弱りめつきり老けた。北の果から吹き寄せる寒風が砂丘の砂を飛ばし、小雪を雑えて荒れに荒れていた師走の半頃、百名近い人数の剽盗が終に郷士の家を襲つた。平家蟹の権もその中にいた。彼の怪異な容貌は、平家蟹そのもので、仲間はそう呼んだのだが、彼は且つて湖山小町を犯した一人であつた。

恣いままに略奪された郷士の家は、烈風にあふられた火焔に包まれ、盗賊が退去を合図する法螺貝が鳴り響いていた。平家蟹の権が裏門を抜け、空壕を渡ろうとした時、彼は壕の中に赤子の泣声を聞いた。何気なく覗き込んだ彼は、櫓の火焔に照し出された壕の中に若い女を認めた。飛鳥の速さでとび降りた彼は、女が抱く赤子を突き除けた。

女は一声も発しなかつた。何の抵抗も示さなかつた。息をしていないのではないかと疑えるほどだつた。

赤子は彼に突き飛ばされると、不思議に泣き止み、平家蟹の権の荒い呼吸を除いては、地上の騒音から隔離された別の世界であつた。

一息ついた彼は、無用の抵抗で手間取らなかつたとはいえ、何となく気抜の態であつた。彼は不思議なものを見る様に、じつと女の顔に視線を向けた。見覚えのある顔…。

「おゝ！そなたは湖山小町ではないか」

彼は叫ぶと共に女を抱き起した。体を任した女、それはいつの世でも可愛いものである。平家蟹の権達は、愛情を瞬時に絶ち切らねばならぬ生活の中にその半生を過して来た。割れた種子は二葉をさえ出すことのない荒涼たるものであつた。ところがその夜の権は、仲間を呼び集める法螺貝の音がいやにうとましく、女を捨て去るに忍びない甘酸つぱい懊悩が、彼の心奥に沸々と湧きはじめていたの

だつた。

女は身動きもせず、彼に抱かれたままだつた。火焔が風にひらめいて時々蠟人形の様な女の顔に映えた。平穏な一時であつた。女の鼓動が権の心臓にじかに伝わつて来る。彼は何か生温いものが彼の手を濡らしているのを意識した。

「オー血！しつかり致せ。これ確かり致せ」

彼の声は狼狽にふるえていた。意識が薄れ始めていた湖山小町は彼の叫びに目を開くと、権の顔を始めて打眺めた。彼女は思考の焦点を必死に集めている様であつたが、かすかに頬を染めると、ハラハラと涙を流すと

「その子を御覧じませ」

と呟いた。それだけ言うのがやつとらしかつた。けれども彼の次の言葉を待つらしい懸命の努力が、女の目の色にもうかがわれる。小供は真面目くさつた面持で、大人達の様子を眺めていた。平家蟹の権は言われるままに小供に視線を移したが

「ヤヤヤ……」

と頓狂な叫びをあげた。彼は思わず笑顔になつたのだが、面相は一層怪異であつた。彼は已が顔に瓜二つの子蟹が、自分の子供であることを悟るまでに時間を必要としなかつた。小供はそれ程彼に似ていたし、その時の空気は不自然でない心のなごみを彼に与えていたからだつた。三年前彼の荒した清純な畠に、親達の意志とは無関係に、幼芽は生育しているのだつた。

「坊、いい子じや。いい子じや。可愛いい子じや。喃。坊」

彼の無骨なあやし方の中にも、親の愛情がにじみ出ていたのか、子供は泣かなかつたばかりか、彼の奇怪な顔立が子供を喜ばしたのか、カラカラと笑つた。それが又彼には無上に嬉しく

「いい子じや。いい子じや可愛いい子じや」

を繰返しながら、色々の顔をして見せた。彼がこんな風に、小供に気を取られている間に、女は彼の膝の上で事切れていた。かすかな笑を残して、綺麗な死顔であつた。

平家蟹の四十年の生涯の中、始めて味つた家庭の団欒も、一瞬の悲しい泡沫であつた。

「何で死んだ！エー、何で死んだ」

文字通りの彼の号泣が、空濠の両壁にぶち当つて、ウオーン、ウオーンと反響した。濠外では火のはぜる音、風の音に混つて、一しきり法螺貝が鳴る。小供はカラカラと笑い続けている。

どの位の時間が経過したであろう。ほんの数十分の時間であつたかも知れない。が、平家蟹の権の四十年の生涯に必適する時間であつた。子供にとつても——。

彼は尽きない愛撫の後小柄で毛を剃り落した。

湖山小町の毛を確り抱き締めた平家蟹親子のあてどもない旅は、長くは続かなかつた。裏切者への制裁は実に厳しい彼等の社会だつた。草の根を分けても捜し出さねばおかない彼等一味の刺客に斬殺されたのは、翌年の早春、丹波路の嶺々はまだ白雪に覆われて、西北風が肌に冷めたく吹きつける日であつた。丹波の豪族赤井一門の本城、保月の山頂を真向いに見上げる由良川の堤上に、首の持去られた父親の横で、泣き疲れた平家蟹の孤児は、寧楽寺の和尚に拾われ、仏弟子として生長することとなつた。これが天厳和尚であつた

彼は自己の生立を知らない。父母の顔も記憶にない。然し空壕議中で屍女を犯す男の姿態、その時彼が感じた陶酔が、彼の潜在意の

の中に、強く焼きついたのだつた。

（三）

山々を血色に染めた保月城の火焔も次第に薄れ、余燼が朝明の霧に溶け込んでいた。獣慾を満足させた荒くれ武者達が、慌ただしく去つた釣瓶井戸の方は、再び静寂に返つた。

雪隠を出た天巌は、磁石に吸いつけられたように井戸端に近ずいて行つた。全身の戦慄は歩一歩と激しかつた。

天巌は歯を鳴らし、猿人の様に前屈みに両脚を開き、手を拡げた空濠の中で焼ついた潜在意識が、強烈な爆音をたてて彼の超自我（良心）仏弟子としての附焼刃的修養など微塵に粉砕し去つた。淫気の漲つた双眼が、毛虫の様な睫毛の下で、爛々と輝く。

倒れている二個の女体に、天巌は見覚えがある。血に濡れている方は、今年十五の皐月、見事なヌードを曝している年嵩の方は、その姉の彌生、今年十九で、城主赤井直政の愛妾である。彼女達は、竹田城主塩見治長の娘で、治長が塩津峠で戦死して以来、直政に養われた評判の美人姉妹であつた。姉の彌生は彼女の破瓜を待つていたかの様に、十六の春その処女を直政に捧げた。皐月もいずれ近い間に、直政の犯すところとなるであろう。既に直政の嫡子忠政が手を出しているとの評もあつた。

この様に、彼女等は時の権力者の寵女である。天巌などには無縁の女性である。その女達が、あられもない姿で、デンと天巌の前に横たわつているのだ。

次々と強烈な刺戟にもみくちゃにされていた天巌、彼が真の高徳であつたとしても、妖しく心がときめいたに違いない。ましてや淫臭に満ちた出生の宿命を背負う彼である。何条もつて耐えられよう阿彌陀も閻魔も糞喰え！

彼はそう叫んだわけでないが、確にそんな気持だつた。姉にか、妹にか、どちらが先だつたか後だつたか、彼には全く記憶にないほど、無我夢中だつた。

（四）

寧楽寺から程近い多里村に、たよという十四になる娘が急死した今でいう急性盲腸炎である。それから三日後のことであつた。彼の肉体は、まだ三日前の出来事で、ジーンと痺れている様だつた。余りにも早く来過ぎた第二の機会は、淫鬼としての彼を決定ずけた。

たよの屍体は、蚊帳の中に寝かされていた。ほの暗い行燈の焔が青蚊帳を通して、かすかな光を屍体の上に投げていた。夏のこととて、屍体の上には薄い麻蒲団が懸けてあつた。

得難い獲物を呪尺の間に、枕経をあげている天巌、ゴクリ〳〵と生唾を飲み込んでいたが、彼の背後で彼の読経に唱和していた娘の母親が、暫くするとうまい具合に席を外した。

占めた！　彼は心中歓喜の叫びをあげると、一段と読経の声を高めながら、グッと蒲団の下へ手を突込んだ。

オーその瞬間、ビクビクと屍体が動いたのである。仏罰を一撃脳天に喰つたほど驚天した天巌は、思わず尻餅をついた。

恐怖のあまり腰を抜かした天巌は、

「南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏……」

と唱えながら、蚊帳の外に逃れようとするが、体が自由に動かず蚊帳の釣り手を切つてしまつた。

「和尙さん、どうしなさつた?」

飛んで来た此の家の主が、捕獲網にかかつた獸の様に、蚊帳に包まれて蠢く天巖に叫んだ。

「仏…、仏様が…、南無阿彌陀、南無阿彌陀…。動いた。動いた」

天巖の嗄れた返答に

「何、動いた!娘が生き返りましたかや」

主はあわてて蚊帳をまくりあげた。騒ぎに転ぶように入つて来た娘の母親は、天巖を突き除けると

「たよや、まあよく生き返つてくれた。ノーたよや」

と泣き叫びながら、真裸の、石膏彫像の様に固く動かない、たよに縋りついた。

青蚊帳をとり徐けられ、まともに行燈の明を受けた女体は、驚くほどの成熟を示して、艶やかに輝いていた。少し心の静まつた天巖は、なめる様に眺めてゴクリと生唾を呑む。

「おかしいぞや。どいてみい」

片膝をついて、ジット見ていた

母は、母親を押しのけると、たよの体に手を掛けた。コチツと固い衝動、死人特有の冷気……

「和尙さん、本当に動きましたかや」

主の問に、虚を突かれた天巖はあわてて居ずまいを正すと、

「動いたとも。ドーンと拙僧を蹴りましたぞ」

彼は主に答えると同時に、衣の上から確りと裾前をかき合した。

「蹴つた?」

もう一度動かぬたよの体を調べた主は

「仏は硬直しましただ。南無阿彌陀仏」

と言いながら、屍体に掛蒲団をかぶせた。チラツと天巖に流した主の目に、彼の取り乱しかたを蔑視するような、彼の心内を見透した様な色を感じた天巖は

「これは拙僧と致したことが、とんだ失態、お騒わがせ致せし段、平に御容赦の程を。いや失礼致した」

粗茶を、と引留めるのを倉皇と座を立つた。

たよの体への未練は、時間の経過と共に天巌の肉体を燃えた。間一髪という所で硬直したたよの体が、いまいましくてならなかつた。

寝待の月が三更（零時から二時まで）の山里を青白く照していたボーメ度の高い糖液の様に、濃密な空気は微動だにしなかつたが、暑気は幾分やわらいでいた。

残んの香煙が漂う新墓の辺を、しきりに動く人影があつた。真裸のシルエット、無毛の青頭が時々光る。醜怪な面相、角を生やせば正しく鬼である。仏界を守る天鬼、地獄の卒牛頭鬼馬頭鬼の類でない。業火に焼かれる地鬼の姿、それは天巌であつた。

墓地は砂質であつたので、割と楽に掘れた。音を恐れた彼は、十本の爪に彼の目的の全てを托した。汗と泥砂が容赦なく彼の裸身にこびりついた。彼が発掘を始めて半刻は過ぎたであろう。彼の全神経を四囲の気配に集中して、忙しく動く彼の指先は、棺の上蓋に達した。棺と指先は、あたかも陰陽の電流が接触した瞬間の様に、怪しい火花を散らし、異様にぬるぬるとした戦慄が天巌の全身を襲つた。

棺の蓋は現今の様に釘が打ちつけてない。繩が掛けてあるばかりだつた。彼は腹這になると、歯で繩を噛み切つた。彼が棺の蓋を取つた時、屍臭が強く立昇つた。ムツと、思わず顔をそむけたい様な臭気であつたが、天巌には得も言えぬ女臭であつた。

彼は腰に力を入れると、両腕を棺の中に差入れた。たよの体は既に硬直が解けていた。天巌の腕に抱きしめられた少女の顔は、変色し始めていたが、愛する男に全てをゆだねた女の様に、軽く瞼を閉じ微笑さえ湛えている様に天巌には映るのだつた。ダラリと下つた肉附のよい脚が余りにもきつちりと仕立てられた経帷子を割つて、真紅の湯巻を乱し、白々と月光に映えていた。

急がねばならぬ…。どこかで天巌に私語く声がする。寝待の月も西山に傾きかけていた。

たよの場合は、弥生、皐月の時と違つて、余りにも労多く、待つのが長かつた。それだけに天巌の血は湧いた。誰にも知られず、誰にもまだ荒らされない乙女との秘密、彼はたよをしつかり抱き上げていた。いつまでも抱いていたかつた。離れねばならないものならば、いつそたよの肉体を食つてしまいたいと思つた。

早く埋めろ。夜が明けるぞ…。私語はだんだん叱声と変つて、グワングワンと彼を打つ。何処かで鶏鳴がする。天巌はよろめきながら、屍体を穴まで運んだ。彼の足先から崩れた土砂は容赦なくたよの顔、頭髪にふりかかつた。

「オー！」

思わず呻いた天巌は、急いで屍体を抱き上げた。たよの顔の土を払い徐けた彼は、暫くそのまゝの姿勢で立つていた。この可憐な女を、どうして無慈悲な土砂の中に埋められよう。彼は彼女から永遠に離れられそうに思えなかつた。早く埋めてしまえ、夜が明けたならば、お前の身は破滅だぞ…。内なる声の命令に負けかけた彼は、彼女の顔を土砂が汚した刹那、強く反撥していた。その対象に限りない情愛が加味されたとなれば、結局内なる声は敗けであつた。

又鶏が鳴いた。

「そうだ」

と呟いた彼、ニヤリと笑つた彼、自己の思いつきに如何にも満足

であつたが、月影を通してこの光景を見た人があつたならば、おそらく身の毛もよだつ思いをしたであろう。

彼はたよの体を地上に横たえると、彼女の衣類を棺内にほり込み蓋をすると、急いで土を元通りに覆つた。

その日から天巖と少女の奇怪な生活が始つた。彼は丸一日彼女を抱いて暮した。次の日も、その次の日も、薄暗い寧楽寺の眠藏の中で、が、何と悲しき花嫁であり花聟であつたことか。

彼等とは無関係に、冷厳な自然の節理は、その間に刻々と花嫁の肉体を崩していた。眼球は落ち凹み、もろくなつた肉塊は、今にも剝脱しそうであつた。毛髪は僅かの刺戟にも抜けた。暗い部屋に充満した腐臭、腐臭をしたつて何処からともなく群がつて来る蠅の群…。腐肉に挑む淫鬼、毛髪は伸び、肉は落ち、青黒く浮き上つた静脈、且つては高徳の僧天巖の面影はどこにもなかつた。

（五）

丹波は明智光秀の領土となり、赤井一門の領地は、光秀の家臣斎藤内藏介利三の治下となつた。戦禍ようやく治り、住民やつと安緒した。その頃誰言うとなく、屍肉を喰う鬼が出るという噂が丹波の地に拡つた。あちらこちらで、墓が発かれていると騒ぎ始めた。血なま臭い話が次々と起る戦国の世であつたが、悲惨な最後をとげる者は、支配階級の連中であつた。飢餓と調発に悩まされる心配は絶えなかつたが、農民達は一種の見物人としての気安さがあつた。ところがこんどの被害は、農民達に直接かゝつて来たのである。しかも風評は気味の悪い、幽鬼の仕業であつてみれば、手の施しようのない恐怖に陥入つたのだつた。噂は噂を生んで丹波地方は騒然とした。

鬼魔退散の加治祈禱が行われ、天巖も度々祈禱を依頼された。誰一人彼が鬼魔そのものであるとは気がつかなつた。

一方名代官斎藤利三は、隠密を四方に放つて、噂を一つ一つ洗つて行つた。すると発かれたらしい墓は、全て女の墓だつた。その一つを発掘して見ると屍体がなかつた。これから察して、犯人は物取りの仕業ではなく、変質者に焦点が縮まつて来たのである。斎藤は更に領内の変態性性慾者を根気よく洗つて行つた。然し領民は代官が隠密に調べていることなどは少しも知らなかつたのである。墓の発掘なども夜暗に行われたのだつた。

「代官様はどういうおつもりなのかの」

「先日も名主様がお訴状を差上げなさつたそうだが、一笑に附されたそうや」

百姓達が心配げに語る前に

領内に妖怪鬼魔出没すの流言あるも之諸民の妄想に過ぎず。唐天竺のことならばいざ知らず、本朝に於ては、信長公の御威光天下に遍く、斯様のこと無。領民安堵してその職に励むべし。

代官

こういう高札が上つていた。斎藤は領民を諭すと共に、犯人を油断させる一石二鳥の策をたてたのである。

雪の茅刈峠を血に染めて、今年十六になる娘が殺されていた。見るも無惨に腹部は食いちぎられ、内藏は殆どなかつた。乳房、太股の肉が抉られて、白い骨がのぞいていた。雪上には山犬の足跡が点々とある。矢張り代官様のおつしやる通り、墓を発いたのも妖怪変

化の類でなく、山犬だつたらしい、と人々は思い始めていた。

検死の役人は然し違つた角度から見ていた。娘の肉を食つたのは正しく山犬に違いない。が、山犬がどうして娘の帯を解き、モンペを脱がしたか？犬の仕業ならば娘の着衣は破れ裂けねばならない筈だつた。

此の事件はまたたく間に四方に拡つた。犬はいつの間にか元の人喰い鬼に逆戻りしていた。領内には赤井直政の治政を慕う声まで混線して、代官の無責任が問われ始めた。主君光秀からの叱責に近い犯人逮捕の督促状が屈いた。斎藤利三の面上には、苦悩の色が日々に濃くなつて行つた。これ以上の犠牲は出されないので兎に角女の新墓の警戒を厳にすることと、女の一人歩きは厳禁する布令が出された。こんな布令が出るまでもなく、茅刈峠事件以来、女で一人歩きする者など一人もなかつたし、新墓の警戒はずつと以前からされていた。墓の上には、一人二人の力では容易に動かない大石が乗せられた。

天巌の求める女の死人が、そう次々とあるものでない。始めの頃は没落する諸豪族の由縁の者らしい上物が、時々丹波路を辿つて来て行倒れることがあつたし、附近の農家の女達の墓の警戒もなかつたのでよかつたが、噂が拡がつてからは、墓中の女はどうにもならなかつた。枕経の時も二度ばかり成功したが、たよとの強烈な思い出には遠く及ばなかつた。中風などで長く寝込んだ老婆では、女に違いないが天巌もさすが遠慮した。

思うに任せなくなつた天巌は、どこを叩いても美男とは言えない平家蟹の面相、高徳の僧としての虚名への手前などから、甚だ憶病にたよの母親の気を引いてみた。どの女よりも、たよの母親という ことは、彼には懐しいのだつた。

彼女は三十にまだ一年ある、油の乗つた大年増である。案んずるより産むが易いの諺の通り、此の年配の女には、彼の怪異な容貌が猟奇的な興味を持たせるものらしい。

けれども彼は燃えない。道鏡の後裔を自負して恥ずかしくない自分ながら、一向に興味が起らないのだつた。女は増々喜ぶが、彼は砂を噛む様に味気なく、淋しかつた。母と娘を犯すことは、古来国津罪とされた。たよの死霊の怨みのせいでもあろうかと、彼は女を変えてみたが、結果は同じであつた。

淫鬼の辿る最後の道、それは一つしかない。天巌は遂に茅刈峠で娘を殺したのである。色漢は普通の場合犯して後殺す。彼の場合は殺して後犯すのであつた。

(六)

それから一ヶ月、丹波路に雪が消え始め、綿雲が静かに浮ぶ頃、警戒の厳しい丹波から、天巌の姿はフッツリと消えた。

信長、光秀すでに滅び、世は秀吉の天下となつた。越前国丸岡の城主青山宗勝の領内に於て、珍しい処刑が行われた。僧形の淫鬼夜な夜な女の墓を発き、屍体を姦すと、当時の古記録にある。

刑場には粘土が盛り上げられ、丁度人の大きさ位の穴が丸形に造られた。組まれた櫓に、添木をして縛られた淫鬼は撞木の様に粘土の穴の中に直角に釣り上げられた。刑の執行人は女達である。我と思わん女は、淫鬼につけられた綱を持つて、梵鐘をつく時の撞木の様に、反動をつけると、力まかせに淫鬼の体を粘土の穴めがけて頭からぶち込むのである。

怒りとスリル、淫猥と惨虐、興奮のどよめき、ぶち込まれる毎にワーッと喊声があがつた。

ポツカリと穴のあいた泥塊へ、淫鬼の裸体が突入する毎に、スポッという音がする。泥土に汚れた淫鬼は、スポッ、スポッという音を遠い夢の中に聞いていた。彼を囲んで、パチパチと火のはぜる音蠅の飛び廻る羽音が蘇つて来た。彼の古里、母の胎内それはたよであつたかも知れない。甘美に夢幻の境をさまよう彼には、どちらでもよかつた。彼の全ては胎内に帰りつつあつた。

「アーッ！」

淫鬼の断末魔の悲鳴、群集にはそう聞えたかも知れない。然し彼には歓喜のクライマックスの叫びであつた。色即是空、親切な処刑者が作つてくれた彼の古里に、淫鬼は溶けたのである。

古記録は唯僧形の淫鬼と記すのみで、天巌という字はどこにも見当らない。天巌の末路、それは結局無であつた。（完）

（読者通信）

洋髪か和髪かの問題について大分やかましく論議されていますので、それに関連して一読者として編集者に希望したいと思います。卒直に云つて私は伊藤氏と黒井氏の論争を見て黒井氏の説を支持したいと思います。二月号で伊藤氏が黒井氏の髪が嫌いであるという意見に対してクリ〳〵坊主の野蛮人が好きなのかと云つているのは言い過ぎで、黒井氏の言うのは女を縛る際の髪の扱い方に幽霊のようにぼう〳〵と乱すやり方が嫌いだというので決して、女の髪全部を否定するのでないことはあの文章をよく読めばわかることです。現代の若い女性が極めて一部の限られた者を除いては殆んど洋髪であるのは現代人の嗜好が那辺にあるかは自明の理です。

私達新時代人には日本髪長繻絆は陳腐な過去の遺物でしかありません。清濁合せ飲む編集者の度量には敬服しますが、若い人達が貴誌を支持する所以は晴雨調にない新感覚にあるのですから新時代の風俗誌を標榜する以上断然玲子調の現代物を中心として編集されたいのです。二月号を拝見して、いさゝか編集者の意図に逆行を認められたので敢て苦言を呈する次第です。

（大分、高森生）

○

森山美歌様、貴女はきつと空想的サジストではないでしようか、若しそうでないとすると、貴女のアイデイアは何んてロマンチツクで惨酷なのでしよう。十二月号のロマンチツクなサデイズムで貴女が三吉氏に約束せられた契約書を是非発表して頂けないでしようかその内容はきつと惨酷な条件でございましよう。申す迄もなく三吉氏は貴女の奴隷として奉仕することに無上の喜びを感じ、又貴女は三吉氏の主人として膝下に侍らせ責めさいなんで愉悦を覚えられることも了解出来ます。しかし奴隷といつても〝人間家畜〟である以上、人間としての感情はある筈です。そこで二月の悩ましのサデイズムに至つて私は思わず、ぞツとして三吉氏に同情を禁じ得ませんでした。貴女と二人きりで責めつけられる場合無上の喜悦に浸ることが出来るでしようが正男氏が登場してきてその恥しい姿を同性の眼前に晒さなければならないとしたら断腸の思いであつた事でしよう。この場合単なる肉体的苦痛よりもその精神的苦痛は数倍、否想像に絶したものだと信じます。どうか三吉氏を余りいじめないで下さい。

（H・Y生）

1

私が郷里へ帰つて来ましてからもう一年になりました。でもまだ前の様に元気な体になれず、毎日をブラブラ送つて居ります。

今でも時々東京に居た時の夢を見ますが、その夢は決つた様に、あのおそろしかつた下宿生活の夢なのです。その筈です生れて始めて知つた此の世の生地獄の中で恐ろしい鬼の様な人間と生活した経験九死に一生は得たものの、こんな体にされてしまつた私なのですもの、夢に出て来る位は当然かも知れません。

皆様も私の話を聞かれて、映画か小説の筋だと言われるかも判りません。でも本当らしいと思われる皆様だけでも結構です私の話をお聞き下さい。

私が東京のM百貨店に勤めて未だ日も浅い頃のことでした。私は店の女子寮に居りましたが、何処か下宿する家はないかと友だちにもたのんで探してもらつて居りました。だが貸間は有るには有つても二万三万と言う高い権利金のために、女子寮から出たくても出られずに味気ない日々を送つていたのです。

ある日、その日は月曜日で店が公休なので昨日友だちが教えて呉れた、都心から少しはなれた郊外住宅地に有ると言う貸間を見に出かけました。申しおくれましたが、私の名は原田芙美といゝます。

2

その藤出三造と言う家はすぐに見つかつた南向きの二階だての家で、ここで権利金さえ安ければ申し分ないんだがと、玄関の表に立つて扉を開けました。

声をかけましたが、家人の返事がなく留守かとも思つたけれど鍵はかかつていないし、もう一度呼んで見ました。

「はい、一寸お待ちになつて」

と言う声がやつとして、しばらくしてから

障子が聞き四十に近いと見える女が顔を出しました。

色の白い肥つた体と人を見る時にやや鋭くなる目が印象に残りました。私が訪れた目的を話すと、彼女は上気嫌で私を二階へ案内しました。

階段を、彼女のうしろからついて登つて行く時私は不図、先へ行く彼女のたもとから何かたれ下つているのに気がつきました。それは紅のしごきでした。私も紅のしごきと判ると別に気にもせず、二階へ上りました。

二階は二間で両方共貸しても良いと言う。そして、私が独り者だと判ると

「そうですか。いいえ権利金なんて一寸もいただこうなんて思つて居りませんから安心して気がねなく使つて下さい。主人は留守が多く女中と二人で私も丁度良いお友だちが出来て有難い位なんですよ」

笑いながら、そう言うのです。

皆様、今時、こんな貸間があるでしょうか考えて見れば、権利金がいらないなんて話が第一変だつたのです。でもその時の私は下宿がやつと見つかつたうれしさが先になり、外のことは何も考えずに、部屋を貸りることに決めてしまいました。

帰りに私は押入れの様子を見ようと、開けますと、中はガラン洞でなにも入つては居りませんでしたが、その片隅に紐の様なものが二三本有るので良く見るとそれは、先刻階段を登る時、おかみさんのそで口からたれ下つていたのと同じ紅のしごきでした。

紅のしごきが色んな所に有る家だとは思いましたが、その時私がもつと想像をたくましくする女ならば、あんな恐ろしい目に会わずにすんだことでしよう。しかしそれは無理なことで私の胸は、ただM百貨店の女子寮から引越せる喜びで一杯だつたのです。

3

私は次の日、この家へ移つて来ました。

それから毎日新しい下宿生活で、独立した生活の設計に胸をふくらませて店へ出勤し、帰りには夕食の仕度に心をかける楽しい数日が続きました。

私が移つて来てから一週間ほどたつたある日のことです。夕食を終つて雑誌を読んでいる所へ来たのはおかみさんのお峰でした。主人が留守でお邪魔に来たと言つて世間話などの末女剣劇を見に行つた話を始めました。余程女剣劇の大河美知子が好きらしく

「三幕目が、悪代官の屋敷の庭になるんです連れて来られた大河美智子の娘が大勢に囲まれ得意の立廻りをするんですが、とうとう捕まえられて、長じゆばん一枚にされ松の木に縛りつけられてしまうのよ。その縛られて居る大河の繩の間へ、青竹を突込んでギユーとねじ上げられる、その大河の苦しみに悶える姿には芝居だと言うことも忘れて手に汗をにぎつてしまつたわ」

一人ゆかいで堪らなそうに話すおかみさんの顔を見ながら、私は余り興味もわかず、ただ対手の話をうなずいて聞いていました。彼女はなおも続けて

「それでも白状しない大河の娘を、その次にはえび責めにするんですよ」

「えび責め？」

「えび責め知らないの？教えて上げましょう」

意味を知らずに聞いたのがいけなかつたのです。教えて上げようと言われて、馬鹿々々しいとは思いましたが、質問した以上、うなずかなければならなくなつてしまいました。

「あぐらをかいてごらんなさいよ」

「あぐら？」

「そうよ。男の様にー！」

「だつて私―そんなこと―」
「良いわよ。早く組んで――それから両腕をうしろへ廻して――」
仕方がなく私は言われる通りあぐらをかいて両腕をうしろへ廻しました。彼女はどこに持つていたのか、数本の細引きを取り出すと後手になつた私の両手首を素早く縛り、両足首を縛り、別の細引きで太腿から肩へ、肩から別の太腿へ細引きをかけて引張るのです。私の体は前へ二ツに折れ曲るので、痛さに顔をしかめて
「おばさん、痛いわ。判つたからほどいて」
「フフフ……判つた?」
おかみさんは私が苦しそうに言う姿を、さも楽しいことでもする様に笑つて、縛つた細引きをほどきながら
「どう縛られるのも良いもんでしよ?」
と言う言葉がはつきり私にはのみこめず、ただうなずいて苦笑していました。

4

皆様、私はあの時の様子を今でもはつきり想い出せます。私をえび責めとかに縛り終つた時、おかみさんの目は充血し、色白の顔を紅潮させ、ニヤリと笑つて私を見ていたのです。私は何故かドキリと胸がさわぎました。だが、その時は芝居狂いだな、位に思つただけで別に深く考えもしませんでした。
それから数日後の月曜日。店の公休に私はのんびり午後を送ろうと外出もせず、久しぶりに郷里の両親へ便りを出そうと、机の前で手紙を書いて居ました。
今日は主人の三造さんも家に居るとみえて話声が聞えて来ます。その話の中に静やと言う言葉が度々はさまつています。私はそう言えば静やの顔が見えないが―と思つたのです静やはこの家の女中で東北弁丸出しの田舎娘なのです。二三日前でしたが私が店から帰つて来ると、奥から静やの泣き声が聞えて来ました。
私はそれ以上聞くにたえず、足音を忍ばせて二階へ上つてしまいました。二階で耳をすまして居ると、しばらく静やの泣声が聞えていましたが、許してもらつたのか階下が静かになつたので私は、自分が許してもらつた様なホツとした気持になりました。
なにをしたのか知らないが、あんなにひどく叱らなくても良さそうなものだ。と私は思いました。次の日静やの手首に繩のあとがあり〳〵と残り、首すじにミミズばれが赤く線になつてついているのを私は痛ましそうに見て
「昨夜は如何したの?あんなに叱られて?奥さん何時もあんなひどい叱りかたをするの?」
私が聞くと、静やは今にも泣き出しそうな顔で走り去つて行つてしまいました。

5

皆様、私と言う女は何処まで鈍感なのでしよう。そんなことが有つてもまだ私はこの家を出る気持は全然ありませんでした。本当に今思うと自分で自分のおろかしさに呆れてしまいます。

「駄目だよ。もつと痛いそれ貸してよ」
「まつたく強情な奴だ」
おかみさんの声がして、ピチツ、ピチツとなにかで叩く音が静やの悲鳴に混つて聞えて

私は手紙を書きながら静やのことを思つていると、階下から、おかみさんがお三時ですよと呼ぶので私はペンを置き降りて行きました。

三造さんもおかみさんも御気嫌で、紅茶や菓子をすすめ、おかみさんはお得意の世間話を始めました。やがて彼女は何を思つたのかトランプ遊びをしようと言い出したのです。私は同意したのですが三造さんが、子供がする様なことーと反対すると、おかみさんは、じや罰を決めれば良いと言うのです。罰とは一番勝つた人と次の人が負けた者の罰を決めて負けた人はそれを受ける。というのだそうです。心臓の弱い私は困つたことになつたと内心ビクビクしながら、三造さんも賛成したので仕方がなく勝負を始めました。幸運にも第一回は私と三造さんが勝ち、負けたおかみさんに罰を下すことになりました。

三造さんは笑つて

「言い出した奴は負けるに決つているよ。ねえ原田さん、何をさせましよう?」

「そうね?」

ちよつと首をかしげて考えた私はふと先日の夜の女剣劇とえび責めの話を思い出し三造さんに言うと

「それにしよう。今日はお峰がえび責めになるんだ。原田さん押入れから繩を出して」

私も先夜のことも有り、ついお調子にのつて、繩を取つて来ますと

「おばさん、この間の仕返しよ」

私は持つている繩で冗談のように縛り上げてしまう。両足を縛り肩から太腿にかけた繩を三造さんが強く引く。おかみさんの体は前へ折れ曲り、両股の着物は乱れて、肥つた白い太腿に繩がくい込み、変になまめかしくて私はおかみさんの着物をなおそうとすると、三造さんは笑つて

「それで良いよ」

と言うのです。そしておかみさんに向つて

「如何うだい?たまには縛られてみるのも良いもんだろ?」

クックックッとのどにつまつた様な気持の悪い笑いかたをしました。そして

「どう?原田さん。これで許しますか?」

「ええ、負けた時の仇討ちが恐いから、これで良いことにしましよう」

「そうですね。でも原田さんを一度縛つてや

◎第二回讀者座談會開催予告◎

松井籟子さんを囲む座談会

司会者　箕田京二
出席者　松井籟子
〃　川端多奈子

第一回読者座談会に引続いて第二回の座談会を松井籟子さんを囲んで閉催致したいと思いますので出席御希望の方は左記要項に従つて御遠慮なく御申込み下さい。

松井籟子さんは今迄十数篇の責めの小説ばかりを本誌上に発表、只今淫火を連載中の美貌の閨秀作家でありますので、きつと豊富な話題が泉のように飛び出すことゝ思います。尚特に縛られる女を代表して川端多奈子嬢も出席して下さるよう内諾を得ましたので席上愛読者有志による緊縛方法の研究についての実演も実施したいと思つて居ります。

○出席御希望の方は略歴記載の上曙書房内塚本鉄三宛御送付下さい（返信料不要）詳細決定次第出席者へ速達にて連絡致します。場所は、京阪神地区の何れか。

らなくちやあー」

またクックックッとつまつた様な笑い方をしました。私は背中へ水をかけられた時の様なゾーとたまらない嫌な気持になりました。

6

皆様、お笑い下さい。馬鹿な私はまた次の勝負を始めました。すると今度は一番に三造さんが勝ち、二番を私とおかみさんで争いました。内心ビクビクしている私のカードは矢張りビクビクおじけて、遂におかみさんに負けてしまつたのです。

私は目を閉じて罰の宣告を待ちました。三造さんとおかみさんは、何かヒソヒソ話合つていました。聞いている私の胸の中は早鐘をうつようになり、本当の罪人が罰の宣告でもうける時の様な気持がしました。よつぽど逃げ出そうかと何度思つたか判りません。だけどそれも子供みたいだし、と言つても私もまたえび責めにされて、三造さんの嫌な笑い声をきくだけでもたまらない気持でした。

如何うしよう?と迷つていると、おかみさんがニヤ〳〵しながら私にこんなことを言うのです。

「帯をほどくのよ」

「帯を?」

「そうよ。罰にはぜつたい服従よ」

「だつて、そんな無理なこと――」

「嫌なの?」

ガラリとおかみさんの様子が急変しました私はびつくりしておかみさんの顔を見ると。

「嫌だと言つてもするわよ。おとなしくしないと損よ」

立ち上つて私の帯に手をかけました。私はあわてて、その手をおさえて声をふるわせ

「そんな遊びなら止めさせてもらうわ」

立上ろうとした私の体を、三造さんがうしろから羽ガイじめにするのです。私はひきつけられながらもがいて

「な、なにをするの!放して、放してよ。嫌!誰れか!」

さけぶ私の口を、三造さんの大きな掌がおさえつけました。私のその姿を見ておかみさんは獲物を捕まえた野獣の様な妖しい微笑をうかべて

「今になつて、あわてたつてもう駄目よ。あばれればあばれるだけつかれると言う訳さ。そんなに急がなくつても今にいくらでもあばれたりもがいたりさせて上げるわよ」

私は畳の上へおし倒され、おかみさんの手がお帯をほどき着物をぬがし、ブラジヤーとズロースだけにされても、口は息も苦しいほど三造さんの掌がふたをし、体はもがけばねじられた腕がもげそうに痛み、おかみさんの手がブラジヤーのボタンをはずしにかかつてもなす様にさせておくより外に仕方がありませんでした。

「まあ、美しいお乳だこと。ねえ、ほらこんなにやわらかいわよ」

おかみさんの掌がギユーと私の乳房をつかみました。私はおさえられた体をピクリと動かしてその手を避けようとしました。おかみさんは如何にも楽しそうに笑つてロープを持つて来ると

「あんた、あばれてさわがれてはいけないから縛つちまつたら如何?この手拭で口もゆわえてしまつたら――フフン苦しそうだわ。ホホう。そうして置けば安心だからね」

私は両手を縛られ、猿ぐつわを固くはめられて畳の上へころがされました。

三造さんとおかみさんは顔見合せて笑うのです。

「やつと静かになつたな」

「どう、裸にすると素晴しい体してるじやないのか?可愛想だけど野暮なものは脱がして

しまおうよ。でも言つておくけどね、この娘は私が捕まえたんだよ。私の許可なしに変な真似したら貴方も殺してしまうよ。いいね」

「判つてるよ。うるせえな全く――」

三造はふくれています。

おかみさんの手がズロースのゴム紐にかかる。私は腰をまげ、両足をちじめて彼女の手から逃げ様としましたが、それは彼女をより一層しげきするのに役立つたにすぎませんでした。

「フフン、あんなに涙をためてるよ。今ね、良いものを見せて上げるからね。それを見れば全てが判るわ。私たちがどんな人間だつて言うこともね。ねえ、良く見える様に柱の所へ連れて行つてよ」

三造さんの手で私の体は柱の前へ立たされて、ロープで乳房の上から、柱にギッシリ縛りつけられてしまいました。ロープは乳房にくい込んで痛くて仕方ありません。次いで太腿をロープで縛り、両方きちんと並べて立つている足首まで縛り上げられてしまいました

うなだれて肩までたれて居る毛髪が頬にくい込んで居る猿ぐつわの布衣の間に挟まれてくすぐつたくてならないのです。

おかみさんは廊下の障子を開け、女中部屋の障子に手をかけて

「ねえ、顔を持つてこつちを見せてやつてよ」

この時三造さんは私の顔をぐいッと上向かせて女中部屋の方を見ろと顎をしやくるのです。

女中部屋の障子が開かれて……あツ中を見た私は猿ぐつわの下で思わず恐怖の悲鳴を上げていました。

7

皆様、私が見たのはなにかお判りになりますか。その開らかれた女中部屋のきたない畳の上には今朝から見えないと思つて居た女中

の静やが、全裸体にされ口には雑巾がおしこまれ、体中をまるで荷物かなにかの様に細引きで、がんじがらめに縛られてころがつているのです。

私は今はつきり、家主の三造さんとおかみさんの正体が分りました。そして静やがされた様に私もされなければならないことも——でも私は何故？なんのためにこんなひどい目に合されるのかと思うと口惜し涙が出て来ました。映画や小説には有つても、現実にそれも日曜日の午後。太陽がまだ高い真昼中にこんなことが真実にあるのか知ら？と思うと、今この柱に全裸体で縛られて居る私が昔よんだオトギ話の国の姫君や映画の女優になつたんではないかと、夢を見て居る様な感じがしたりしましたけれども、矢張り現実に私は柱に縛られて居ることを知ると、何故？何故？クエッションマークは私の頭の中をグルグルかけめぐるのでした。私はおかみさんの声で肩をゆすられ、ハッと我に返つたのです。三造さんは不服そうな顔で外へ出て行く所でした。

おかみさんは私の顔を上向けて

「如何？見たかい女中部屋を——。あんたもあんな姿になるまで私が楽しませてやるよ。

でもあんな女中とは一緒にしないわよ。フフー素敵な乳房ね。それに如何？この発育の良い腰の張切つていること。まあスベスベした太腿だこと、どれもこれも全部私のものよそしてフフー——これも——」

脇腹をさすつて居たおかみさんの掌がグーと太股から下へすべり込むのです。私は猿ぐつわの中で呻き声を上げました。

おかみさんは笑つて私の体を抱きよせる様にして

「私たちの正体が判つたでしよう。早く言えば私たち夫婦は気狂いなのよ。あんたの様に美しい娘さんを見ると、苦しませたり悲しませたり痛めつけたりしなければ居られなくなるのよ。だから貸間で飛込んで来る獲物をねらつて居たの。だけど今時権利金も取らない家主に不審を持たなかつた貴女も悪いのよ。フフーまあ今さら悲しんでもならないんだし、気をおちつけて貰う方が得よ。これから毎日毎晩可愛がつてもうどうにもならないんだし、気をおちつけて貰う方が得よ。これから毎日毎晩可愛がつて上げるよ。貴女が生れてまだ一度も味わつたことがない楽しみを経験させて上げるわ」

おかみさんは笑つてうしろへ廻つて、私の体を縛つて居る繩をほどき、軽々と抱き上げると、そのまま奥の部屋へ運んでスイッチの釦を押しました。

8

皆さん、私は再び抱き上げられると部屋の片隅の鉄製のベットへ横たえられました。急におかみさんは私の腰へ逆に馬乗りになると私の両足を縛つたロープをほどきました。私は足をばたつかせてもがきました。おかみさんはあばれる右足を膝でおさえ、左足を両手でつかんで無理矢理に、ベットの片隅につけてある革のバンドの所へ私の左足首をバンドで固くしめ上げてしまいました。

私は自由な右足を激しく伸び縮みさせて、捕まえられないでおこうとしたのですが、上半身にはおかみさんの肥つた体がおさえて居るし左足はすでに自由を失つています。次第に足首を捕まえて居る力に負けて、ズルズルともう一方のベルトは私の右足首にかかつて強くしまつてしまいました。両股を大きくひろげて縛られてしまいました。次におかみさんは手首をほどき、同じ様に両腕を大の字に開らいて両手首をバンドで固くしめ上げてしまつたのです。

丁度、手術台にのせられた患者の様に私は身動きも出来なくなつてしまつたのです。お

かみさんも荒い息を静めながらベットから降りると、私の体を見ながら言うのです。

「やつと動ごけなくなつたね。もういくらあばれたつて構やしないよ。あばれられるならあばれて見ても良いよ。さあ私の仕度が出来るまで、おとなしく待つておいでよ」

ニヤリと私を見て笑うと、おかみさんは帯をほどくのです。着物も下着も肩からすべらせると、腰巻一つの色つぽい姿で目を細めて

「さあ、これからクタクタになるまで可愛がつてやるよ」

おかみさんの掌は私の両脇腹ののびきつた所を擽り始めました。私は今迄知らなかつたまらない感覚を頭から足の先へ打たれて呻き声を上げ、腰をくねり、首を振りつずけて妖しい責めの手から逃がれ様としました。それがおかみさんにとつてはますます油を注ぐ結果となつたのでしよう。彼女の触手は次第に両脇腹から腋の下、お臍のまわりに及んできました。

「ウムーー」

と思わず私の口から呻めき声が洩れ背をそらせ、縛られた掌を強くにぎりしめ、縛られた足首をのばして足の指をくの字に曲げ、太腿ははち切れんばかりに怒潮して悶え狂いました。擽られるということの苦しみをその時ほど味わされたことはありませんでした。

私はそのまま深い深い穴の中へ引ずり込まれて行く様な気持になり、全身がしびれて来ると、それつ切り気を失つてしまいました。

9

皆様、それからどれ程時間がたつたのか私は人の話声に目を覚しました。周囲が明るくなつて居る所を見ると次の日になつて居たのでしよう。隣室で話して居るのは三造さんとおかみさんの声でした。

私の体は昨夜のまま、ベットへ縛りつけられて居ることが判りました。話声は二人が言い争つて居る様子でした。私の体はだるく痛み、縛られた手首足首はしびれてしまいました。二人は何を話して居るのか判りません。ただ時々引越すとか警察とか言う言葉の端が聞えました。

すると足音がして、おかみさんが外出着で入つて来ると、私の手足を縛つたバンドを調べて、安心した顔になり、次に猿ぐつわに手をかけて、結び目を改めてもう一度、強くしばりなおすとニヤリと笑つて部屋を出て行きました。静かになつた家の中は急に空屋の様に激しい悲しさと空腹が、私をおそい始めたのです。同時に今、今逃げなければ！と考えた私は、大きく開いて縛られて居る左右の腕を動ごかし、手首をうごかし、足首も同じ様に動かして、すこしでもバンドをゆるめようとあらゆる努力を始めました。

猿ぐつわもはずそうと首を曲げ、顔を布団へすりつけて、口をおゝう布衣をずり下げようと色々とやつてみました。手首も足首もバンドがかんで、真赤にただれた様になり痛むのも忘れてもがきつずけました。だが矢張り駄目でした。繩ならばあるいはゆるみも、たるみもしたことでしよう。だが革のバンドでは寸分のゆるみも来ないのです。猿ぐつわさえほどけずに、ぐつたりつかれてぼんやり天井を見上げているより外に方法がありませんでした。しばらくしてかすかに表扉の鍵をはずす音がしました。ハツと私は全神経を集中して耳をかたむけました

静かに入つて来たのは三造さんでした。

「如何だ？さみしかつただろ？うまくお時を連れ出してまいて来たよ。あいつは一人で楽しんで居やがるんだ。俺がお前さんと楽しむ

番だ。全く良い体だ。オイオイ何もそう恐ろしがることはないさ。」

私はこの男が自分にしようとする行為は判つて居ました。判つていてもどうにも出来ない自分を知ると本当に観念の目を閉じました

私は舌をかんで死のうと思いました。だが猿ぐつわの布片はそれさえ許さなかつたのです。死ぬに死ねない私の苦しみを御想像下さい。三造さんはやがて、また何処かへ出て行つてしまいました。

しばらくしておかみさんは帰つて来ましたそして私の体の隅々までなめる様な目で見るのです。そして変にウス笑いをうかべてベットへ近ずいて来ました。

10

おかみさんは私の髪毛をつかむと

「ねえ三造が帰つて来ただろ？フン、だまつてるね。良いよ言わなくつても、言う様にして上げるから。」

両手足のバンドをほどいてもあばれる精魂を失つて居る私を、椅子に腰かけさせ、両手を縛り足首を椅子の後足に縛りつけると、その太腿の左右別々に繩をかけ、その繩をうしろへぐーと引しばります。私は嫌でも海老の反りかえつたようにならなければならないのです。そして暫く悪魔の所業が続きました。

「さあこれからが舞台は大詰さ。これを見逃したら大変だからね。これなんだか知つてるかい。甘い甘いチョコレートさ。これを食べるとすぐ楽になるよ。私たちはこれから一寸旅に出るのさ。貴女にしばらくおとなしくして居てもらわないと亭主がおちつかないで困るのさ。居ないと判ればあきらめるだろさ。あんな亭主だが浮気されると無闇に腹が立つよ。さあ今楽にして上げるよ。」

採笑つて銀紙をむくと白いかたまりの丸薬で した。おかみさんは私のうしろへ廻り、固く縛つた猿ぐつわをほどくと、一言もさけばせもせず私の首に腕をまわし、無理におしこんでしまいました。

皆様、私はそれから数時間後あられもない姿のまゝで昏睡しつずけているところを御用聞きにきた酒屋さんに発見され九死に一生を得て助けられました。話にきくと静やは、女中部屋で全裸体のまま縛り上げられ、古雑巾を口へおしこまれた可愛想な姿で死んでいたそうです。食卓にエビ料理が出ると頭が痛くなり弱りました。皆様私の体験談を終りますが、どうか呉々も権利金の要らない下宿など夢々お探しになりませんように心から御忠告申し上げます。（終）

縛られた女の寫眞集

大好評！　全部未発表の素晴しい特写成る

只今分譲中の第七篇（六十一集～七十集）は多数読者の要望を取り入れて特別に会員分譲用として最近撮映したもので、すべて未発表の粒よりの逸品揃いでありますから、どうぞ御安心の上御申込下さい。

海老責、柱しばり、猿ぐつわ、ローソク、高手小手、ストッキング、長襦袢、十字竿、棒責め、拷問台、ハシゴ、吊り上げ、逆高手、アグラ、芋虫、ムシロ、折檻、腰巻、逆立、荒縄、等、豊満な裸女の肌に固く喰い込んだ繩の緊迫感はきつと皆様のお気に入る事と存じます。

第五篇、第六篇も併せて分譲中です。一集分五枚一組200円（送共）

大阪府堺局区内

曙書房代理部

振替大阪第34956番

読者通信

私達夫婦の生活について同好の方々に御参考迄に申し述べたいと思います。私は会社員で二十九才五尺三寸八分、十五貫五百、妻は二十六才で五尺二寸二分、十三貫六百です。妻には二十四才になる弟と二十一才になる妹があり、実家も直ぐ近所ですので、私は縛られた女にこそ美を見出ずといつた性質ですが、思うように妻を責め上げることが出来ません。それは妻が一日おきに実家の風呂へ行くので細目をつけることが出来ないからでそれで私は次に述べる独特の方法を用いております。

結婚した当初は私の本心を明かす事も出来ず味気ない日々を送つて居りましたが、ふとした事から妻の協力を得て極めて幸福な生活を送つて居ります。そのふとした事というのは、私が縛られた裸女の写真をチョッキのポケットに大切にしまつてあつたのを妻がプレスする時見つけてしまつて、私が会社から帰ると夕食の時、その写真を見せて「貴方、縛られた女の姿好きなのね」と言つて私の顔をじつと見つめるのです。その時の妻の眼はしつとりと濡れているような光をたゝえていました。私はその夜初めて妻にすべてを打明けました。「そんなに縛られた女がお好きなら私を縛つてもいゝわ」と言うのです。その時程嬉しかつた事はありません。そして妻も又その縛られた女の写真を見て、言うに言われぬ血汐が騒ぐと云うのです。

さて前置きが長くなりましたが私達の遊戯を説明致しましょう。縛り方や道具もいろ〳〵とあるのですが、その中で私達が一番多く用いる棒責め（私達はそう呼んでいます）ですが、先ず妻を全裸にしてイヤ〳〵ともがき逃げるのを手首に傷がつかぬ様に腰紐で固く縛り上げる。次は細引で胸から二の腕にかけて二重三重にきつく廻して背部で厳重に縛ります。私達の遊戯はせいぜい一時間内外ですから二の腕の赤くはれた跡は一日一晩で消えてしまう。実家で風呂のある夜帰つてから初めると一日おいた次の風呂の夜迄に大体消えてしまうものです。

さて背部で縛つた細引の余りを先に縛つた両手首に二重にかけてぐつと上につり上げる。此の時妻は「あッ痛いわヨ、勘忍して」と叫ぶ、それをかまわずグッと力一杯つり上げて元の背部の細引の結び目の所でしつかりと解けないように縛る。そして愈々棒責めです長さ一米、太さは大人の手で握つて丁度一パイ位のを使用しています。この棒を後手に縛られた両手首と背中の中間に差入れる。この場合たゞ差し込んだのでは絶対に駄目で、両手首の縛り合せた所を持つてグッと背部より離すように持ち上げつゝその合図の棒を差し込むのです。

こゝで妻は苦しさの余り「許して許して」と盛んに叫びますが私はかまわず棒をはめ込みます。もうこうなれば正しく坐つて居れません。だが上向きに寝る事は無論出来ず横になるにも棒の先端が身体より二五センチ位ずつ両方は出ているのでそれも出来ません。上体は自然前かがみになり、後手に縛つた両手は背中より離れて持ち上げられた恰好になり、少し身体を動かしても苦痛は甚しく「あゝかんにんして」と呻き出します。余り叫び出すので口の中にブラヾヤーを押し込み猿ぐつわの代用にします。大の男でも此の場合三十分とは辛抱出来ないでしよう。私は妻の顔を眺めつゝあらゆるテクニックで責め立て、妻の眼から涙が出ると許すことにしています。

此の外に私達が今行つている縛り方は七種類あります。喜多玲子様の責めの画は二人でいつも見て参考にして居ります。私達は現在自分達天婦がアブノーマルだなんて事は全然考えておりません。そんないやな気持は少しもなく、至つて愉快に健康で幸福に暮して居ります。

私達の夫婦生活の思い出として羞しかつた事、悲しかつた事、嬉しかつた事等いろ〳〵とありますが拙い筆で長々と誠に申訳ありませんので、私と同じ様な方々のお便りを頂ければ又書かせて貰いたいと思います（愛知県K・M生）

◎後手に縛つた二の腕と背中の間へ棒を挿し込んだ画が入つて居りましたが残念ながら割愛させて頂きます。同好の方々のお便りをお待ち致します。（塚本生）

アドニスの灯（ともしび）

鷲巣千芳

「モシ〳〵電気課ですね……生田さんに堤さんが御面会です」

社内電話で連絡して呉れる受付嬢の横顔を信吉は息を詰めて見据えていた。その返事に依つては生か、死か、これからの己れの生涯が賭けられているかの様に。

信吉はその性的倒錯者なるが故に当然継ぐべき家を捨て父母を捨てゝ十数年全く孤独寂寥の日を送つて来たのである。偶々同じ心の青年である松雄、そして彼が尤も理想とするタイプの青年松雄を得て、然も同棲ずる迄に至り、実に古き諺なら盲亀の浮木に会いしというべきか、彼が生涯の最良の年を迎え得たのである。併しその松雄が都合あつて一ヵ月程前に彼の許を去り、その際固く約束したにも不拘、何の音信もよこさぬばかりか、彼の再三の書信にさえ何の返事もないのである。毎日共に暮していてさえ夕刻の帰えりがひたずら待たれたものを一ヵ月程も逢わずに居てはたゞ逢いたさの想いの募るのみであるそれのみか、若しもこのまゝに過したならば或は松雄との縁もこれ限りになるのではあるまいか、と危惧し始めてからは、居ても立つても居られぬまゝに思い切つて今日その勤め先を訪ねたのである

もしもこゝで松雄を失つたなら己れの今後はどうなるであろうか一度明るく楽しい生活に入つただけに再び元のあの孤独の闇に沈むことが出来るであろうか、その辛さ悲しさは思うだに心も凍る程で所詮生きて耐えられ様とも思えぬ。それだけに受付嬢から

「今来られますどうぞそこの応接室でお待ち下さい」

と云われた時には、嬉しさに張りつめていた心が一時に弛んで、膝がガタ〳〵する程であつた、漸く応接室の椅子に腰を下しては今迄の恨みも悲しみも何処へやら、たゞもう直ぐ逢えるという喜びにワクワクするのみ

顔を見たら何と言おうか…、思い切り恨み言を述べようか、いや〳〵その為彼を憤らせたらなんとしよう。さりとてこの一ヶ月の待ちに待つた苦しみを知らぬ顔に過させるも口惜しい。等と早や他愛ない想いに胸を躍らせているのであつた。その時外に足音がした、松雄？と瞬間片唾を呑んだが、扉が開いて顔を出したのは受付嬢だつた。

「アノ……堤さんておつしやいましたネ、生田さんは今日はもうお帰えりになりました」

「エッ」

信吉我とわが耳を疑がつた、今の今迄逢えるとばかり喜びにゆるめ切つた心にはこの衝撃は大きい、思わず立上つたが、その胸を拳で突かれた様によろめいた。

「で：でも、今居ると云つたではありませんか」そんな抗議が何になろう。

「ハア先刻のは間違いでした、お帰えりになつたのがホントです」

わが用事終れりと立去る受付嬢の冷たい後姿に、

「アノウ……」

と取縋りたい様な声を出したが、聞えた聞えぬか振向きもしない突き放なされた想いの信吉にはガランと天井の高い建物が一層頼りなくうら悲しい、思わず湧き出る涙を呑んで悄然と其処を出た。

この辺りはビル立並ぶ官衙街。すでに夕刻の舗道はゆく人の姿もまばらで、早や散り初めた鈴懸の落葉が三つ四つ、時折のうそ寒い風に吹かれてコロ〳〵転がつてゆく。

一旦居ると云つて置き乍ら二度目には居ないという、どちらが真実であるか、若しや自分を避けているのではあるまいか、と胸の内に一点の疑惑の雲がさし初めては、忽ち心一杯に拡がつて、やり処のない憤りとなり、譬え様もなき不安なつて信吉を苦しめた。その苦しみに駆り立てられる様に信吉は歩きつづけて行く、人目には急用を持つた人の姿とも見えたであろうが信吉自身は己れの爪先の向いた方角さえも知らずにたゞ憑かれたように歩を運んでいるばかりであつた。

信吉の目は見れども見えず、耳は聞けども聞えず、頭の中にはたゞ一つの思いが無限動力の歯車のように永久に解決のつかぬ堂々めぐりをつづけているのである。

松雄は自分をどの様に思つているのであろうか、何故に自分の許を離れて行つたのであろうか、再び元の生活に戻つて呉れるか、これ限り顔さえ見られなくなるのであろうか、と様々に松雄の態度を思い浮べては、あれこれと検討して見るが何としても最後の解答は出て来ない。答の出て来る筈はない、これを解く人は彼信吉ではなく、松雄なのであるから。それにも心付かず歩きつゞけ、考えつゞける信吉である。

考え疲れた信吉の頭の中にはいつしか松雄と始めて逢つた時からのことが走馬燈の如く次ぎから次ぎへと浮んで来た。

それは一年前のことである。ある休日に浅草の日本倶楽部に映画を見に行つた。中はかなり混雑していた。立見席に立つていた彼は始終出入りの人波に揉まれて落付いて画面を見ることも出来ない。その時、右の方からグッと押されると同時に軽くではあるが足を踏まれた。少しムッとして振向くと向うでもそれと知つたのか、「すみません」と直ちに謝つて来た。年の頃は二十才前後、細面の色白の顔が、映写中の薄明りの中にもクッキリと見えて好もしい青年である。

「イヤア……」軽く会釈を返したが信吉の心は少し動いた。そして中途から見た映画の筋が通らず気が乗らぬまゝに心は次第にその青年に傾いて行つた。尚押され押されてゆく内にいつかピッタリとその青年に寄り添う形になつていた。心なしか服を通してその体温さえ感じられる様である。もう映画も上の空であつた。又々押されて手と手が触れた時思い切つてその手を握りしめた。

その人は驚いた様に彼を振り返つた。視線がパッタリ会つた。信

吉は恥かしく思わず顔を伏せた。併しその瞬間にもその人の眼の内に何等咎めの色がなく、むしろ何か温かい光の流れるのを感じとつていた。その証しのようにその人は手を預けたまゝでいるのである信吉は嬉しさに身体が慄えた。おそる〳〵顔を上げて伺えば何とその人もほのかに耳を染めているのではないか。あゝ我が思い通ぜりと信吉は喜びに一身の血が逆流するかに覚えて握つた手に一層力を加えた。かくして何分か〻過ぎた映画は次第に終りに近ずくらしい。彼は焦り始めた。このまゝで映画が終つてしまえばそれ迄であろう。思い込んだ末とはいえ見も知らぬ人の手を握つては明るい処で顔を合せるのは面伏せである。明るくなつてはこれ以上の進展は望めそうもない。さりとてこのまゝにこの人と別れてしまうにはあまりにも心残りである。考えあぐねた末に思い付いて持ち合せた名刺をその人の手に握らせたのである。

「どうぞ訪ねて来て下さる様に」と無言の思いをその名刺にこめ乍ら、途端に映写は終り場内はパッと明るくなつた。信吉は手を離すと追われる様に其処を出た。館の前を五六歩離れた時その入口を振り返つて見た。若しやというかすかな期待を持つ心に、併し勿論その人の姿は見えない。それはそうあるべき筈であるとは思い乍らも彼は何か落し物でもした様な虚ろさをどうすることも出来なかつた。そうして家への帰えりの道が非常に遠かつた。

こうしたかりそめの事よりして未知の青年に対して火の様な慕情を抱いた。しかし名刺を渡したとしても先方が果して彼の心を汲み取つて呉れたか否かも判らぬし、まして先方の所も名も知らぬ片便りでは、向うより便りのない限り、再会は覚束ないことと思えば胸も痛んだ。然るにそれよりして約一ヵ月の後、思いもかけず、その人より便りを受け取つたのである。而も信吉が希い求めていた通りの人だつたのである。その文面にはこうあつた。

「前略　突然こんな便りを出してよいものか随分考えて見ましたが思い切つて出して見ることに致しました。失礼の点は不悪御許し下さい。

貴方は僕の事など忘れてしまつたかも知れません。もうあれから一月以上も経つていますからね、でも僕はあの日本倶楽部の一日以来毎日一枚の名刺を見ては考えました。

お手紙を書こうか、書くまいかと——。しかし何だか怖ろしい様な気がして遂今日迄書かずにしまつたのでした。

でもこのごろは何故かあの時のことが思い出されてなりません。貴方はどんな気持で僕にあの名刺を下さつたのでしょう。

僕もこのごろ自分がつく〴〵変つた人間だと思います。でも変つた人間は変つたなりに生きようと思います。

僕は貴方のあの時の温い手を忘れることは出来ません。変つた人間と御笑い下さい。

御返事をお待ち致して居ります。

さようなら

生田松雄

堤信吉様

読みゆく信吉の心は嬉しさにふるえた。筆とる間ももどかしとばかり返書を認めるのであつた。

「拝復　御手紙有難うございました。どんなに嬉しく拝見したことでしょう。僅かに名刺をお渡ししたに過ぎない蜘蛛の糸よりも細いはかない一筋を恃みとして心細くもお待ちしていたのです。すでに一ヵ月その恃みの糸も切れ果てたかと、悲しみ歎いていた処

なのですホントに有難うございました。」

信吉は真実に嬉しく又真実にその嬉しさを披歴して彼の来訪を待つた。そしてその日に彼は来た。その青年が松雄だつたのである。この日から二人の交りは始まつた始めは映画や観劇に、そして次第に馴染むにつれてやがて松雄は泊つてゆく様になつた。その初めての夜である。信吉と松雄は衾処を共にした男同志だけが知る禁断の木実、さすがに松雄のそれは稚かつた。それだけに彼の純真さが偲ばれて信吉は一層いとしくなるのであつた。

桃色のシエードをかけたスタンドからは柔かい光が部屋に流れている。一度の戯れが終つて軽い労れを覚え乍ら二人は満足の眼を見合せた。やゝ羞いを含めて微笑している松雄ほのかに上気した頬にはまだ少年の俤が残つていて美しく清純である。信吉は堪え得ずその頬を両手に挟むと強く〳〵接吻した。甘美極りないその唇の感触。

「松雄君はおとなしいのネ、まだ何にも知らない様ネ」

「……」

「これから色々教えて上げるよ今夜はどうだつた」

「ウフ……」

はにかんだ含み笑いも可愛い丶

「今迄こんなことがあつた?」

「エ丶……でも僕泊つたことなんか始めてです」

「そう……!でもいろんなことあつたんでしよう。大勢知つているんでしよう……松雄君はハンサムだから……」

「ウソですよ……ただ電車の中で手を握られたり、混んでいるときうしろからソツと抱かれたりしたことはあります。」

「へエ、いつ頃?」

「エ丶、いつ頃つて、今迄時々」

「どんな人?」

「いろんな人……だけど大体年輩の人が多いですね……」

「そう——そしてその時はどうだつた?……嬉しかつた!」

「イヤ……、そんなの図々しくて何だか厭ですね……」

「そうかしら、じやあ僕もその仲間ですね」

「ち……ちがいますよ…、厭なら僕、来やしない」

「ハハハハ……御免〳〵……でもその他には…!」

「一度ね、鉄道の職員の人に誘われて江の島迄遊びに行つたことがあります」

「ホウ そしてその時泊つたの……」

「ウウーン、日帰りさ……ただ宿屋で昼食しただけ」

」どうだか……その晨食の時何か嬉しいことがあつたんでしよう」
「知りません」
真赤になつて蒲団の襟に顔を埋める
「だめ〳〵……そんなの卑怯よ……サアその話をして」
無理やりに抱き起して又接吻の雨——。
それからは松雄は二、三日毎に来ては泊つて行つた。泊つてゆく夜毎の楽しさに引かえて、松雄の来ぬ夜の淋しさやるせなさに信吉は次第に耐えられなくなつていつた。

寒き夜はうすき衾のかたしきや
身は細りつゝ君を想えり

併し彼の切なる希いは幸い松雄にも入れられてやがて同棲することが出来た。それからは春なれば桃色の柔き灯光の下に飽くことなき抱擁と接吻、夏なれば灯を消して差入る月光も青き蚊帳の中に全裸となつて尽きせぬ愛撫と、松雄のそれも次第に成長して夜毎夜毎の楽しみは実に天国に遊ぶ思いであつた。そうして信吉の松雄に対する愛情もそれに比例してグン〳〵深まつてゆくのであつた。今迄では信吉の生活の総べてが松雄であり松雄なくしては彼の生活は成り立たぬと思われる迄に至つた。信吉が斯程迄に松雄を愛する様になつたのはその夜の戯れの故ばかりではない。寧ろ彼の好みに合つた端正な面差しや、近代的なセンスを持つ教養、殊に嬉しいのは比較的無口である信吉を淋しがらせぬ適度の饒舌等精神的なものが大きな要素を占めていた。その精神的なものと肉体的なものとが渾然一体となつて彼の愛情を絶対的なものにしていたのである。それだけに松雄の心が自分から離れはせぬかと常々から並々ならぬ心遣いをしているのであつた。

「ねえーまあちやん……まあちやんはその様な美青年だしそれに若いんだから引く手はあまたでしよう。それなのに僕はもうこの通り中年だし、財産も才能もない、まあちやんを惹付ける何ものもないのだからそれを思うと僕は心配で心配で耐らない」
「ヤダナア……またそんなことを言う、大丈夫だよ、僕だつて小父さんが好きだからこそこうやつて一緒に暮しているんだよ……嫌いなら頼まれたつて来やしない」
「ホント……」
「ホントさ……」
「じや、安心していていゝかしら」
「くどいねェ……」
こんな会話も度々繰返しては心嬉しく且つ気休めにしていたのであるが、今より一月程前松雄に突然家へ帰ると言いだされて驚き且つ悲んだ。そして泣いて引止めたのであるが松雄は止まらなかつた
「そんなことを言つてもそりや無理だよ、小父さんは突然だと思うかも知れないが僕にして見れば決して突然ではないのだから一と月も前から今日は言おうか、明日は言おうかと思つていたのだが小父さんの顔を見ると気の毒で言いそびれていたのだもの、そりやあ小父さんの事も思わないではないが、併し僕にも僕の都合があるのだもの……」
松雄には松雄の都合があると言われては松雄を愛しているだけに無理強いは出来なかつた。真に断腸の思いながら、たゞその交情の別れて後も変らぬことを固く約して帰らしめたのである。

……

夢中で歩きつゞけていた信吉がフト心付けばそこは何と松雄の住

む豊島町の一角ではないか、信吉はハッとして足を止めた。激する心のまゝわれを忘れて歩きつゞけ乍ら、あわれその足は、いつしか此処に向いていたのである。

日はもうすつかり暮れ果てゝ街々には明るい乍ら晩秋の夜気に冴え切つた冷たい灯光がかゞやいている。あの街角を曲れば松雄家も見えるでろう。併し彼の足はもう前へ進まなかつた。何とかして松雄に逢つて心を確めたい思いが無意識の内にその足を運ばせたのであろうか心付いて見ればそれは出来ぬ、許しなく松雄の家を訪れて若し彼が迷惑する様なことがあつてはならぬ。その様なことの為に松雄を憤らせたなら僅かに残る頼みの糸も切れ果て様とも知れぬ、と心は千々に乱れるばかり、しばらくは其処に立ち尽していた。たゞ一つの恃みは松雄が用事でもあつて外出し此処に通りつつて呉れることであるが、そんな偶然は覚束ない、さり乍ら、不安と憤懣にうずく胸を抱て何でこのまゝ去り得よう、さらぬだに正雄と別れてからは淋しさ、やるせなさに不眠の夜をつづけて来たのであるのにこの上に疑惑の念いを加れば今宵より何として眠り得ようぞ、転々として来る夜来る夜も悶え明す己れの姿が眼に見える様で怖ろしいその不眠の恐怖からも脱れるには松雄に逢うより外に手段はないのであるが、

併し信吉は立ち尽くしていた。

高架線の上を灯光も明るい電車が音立てゝ通る、その轟音が遠くなり近くなり、潮騒いのように寄せは返すのを幾度聞いたことであろう。そうして刻は次第に過ぎて行つた。松雄の姿は遂に見えぬ、信吉ひとり悄然として駅へ向つて歩き出していた。逢いたい念願を諦てたのではない、無理をしてたゞ一つの絆迄も断切る様な羽目に陥るのが怖ろしく諦め切れぬ想いを諦めたのである。

電車の中でも身心共に虚ろであつた。しかしわが家近き駅に降り立つと少しく元気付いたかに見えた。それは僅かながらであるが期待があつたのである。信吉の留守に松雄が来てもいつでも家に入れる様に鍵が渡してあつた。それ故に、若しや行き違いに来ては居るまいかと、やゝ急ぎ足に曲り角迄来たが、やはり期待は外れた。窓の内は真暗で徒らに硝子戸のみが折りも昇り始めた月の光に冷たく光つている。

信吉は身心共に疲れ切つていた。ドッカと上框に腰を下すともう靴を脱ぐ元気も、電燈を点ける元気もなかつた。見廻わせばこの家の隅々に迄も松雄の想出は漂つているものを、しばしは焦点のない瞳を据えて闇の一点を見据えていた、と、逢わんとして逢い得ぬ松雄への慕情が激する奔流の如く胸の内に漲つて来た。

「まあちやん、まあちやん……」

堪えに堪えた悲しみの堰が一時に切れて信吉はどうとばかり畳の上に身を投げ倒すと声を放つて号泣した。はるかなる松雄の胸にこの悲しみのひゞくや否や……。

あゝ背かれし愛慾の、しかも世の常ならぬ愛慾の故に、その苦しみはかくも深きか、窓を洩れる月の光がクッキリと明暗を描ける畳の上に、信吉あたかも釘ずけにされた大きな宮守のようには身を悶え手足を慄わせ、泣きに泣きつずけていた。

——終——

× × × ×

奇譚クラブ最近号　主要目次

○七月号　女天下時代特集号○
○八月号　責めと男色特大号○
○九月号　特集倒錯の告白○

口絵　倒錯の告白画集……竹中英二郎
玲子習作二十態……喜多　玲子
縛られた女の写真集……美の　緊縛
狂い咲くカンナ……羽村　京子
白い腋窩の幻想……三富　浩生
僕という男……中野安太郎
妖しい花びら……寺尾　修治
弱者の醍醐味……村井　健司
憂鬱症の転機……薗　守
サデイストの悲哀……天野　一郎
足部憧憬の悲願……山本　貞輔
鎖夏怪異漫語……嵯峨あきら
変態心理を衝く……波多野　新
記録係……岡田　咲子
中国艶話　夜譚随録……皆田　仁
邪恋の焔……松井　簪子
サド侯爵と殺生関白秀次……高取　辰治
処女性の神秘……的場　通
洋パンを囲む座談会……辻村　隆
加虐淫虐症の種々相……仁比山　等
吉原の淫虐鬩……緑　猛比古
桜姫全伝　曙草紙……山東　京伝

○十月号　特集切支丹迫害史○

口絵　責め場面挿絵集…喜多玲子・構成
切支丹迫害史画集…五井野弘・画
縛られた女写真集…辻村隆・構成
切支丹迫害史……漆島　迫平
氷責めの断罪……赤城　芳年
遊女花菱の受難……花山　剣作
江戸の刺青模様……潮　マリ
マリヤ・マグダレナ……桂　牧次郎
性慾の昇華……赤坂　剛
或る医師の告白……亀岡　恭二
大衆文学に現れた「女の責場」…高月　大三
愛と苦痛の交錯……鳥上　源一
恋の烙印……松井　簪子
少女の像……粟村　由美
呻される夢……波多野　新
男色の海……井口　正憲
あらたま村の奥にて……二俣志津子
アブニストの記　へぼきうり……鬼山　絢策
夫婦愛と緊縛の考察……辻村　隆
サーニン……戸森　暁
宿命に哭く……浅田　正人
悪　女……岡田　咲子
江戸時代の堕胎医……福森　耕司
縛られた妻……早川新二郎
遺　書……小峰登美子
猿轡五態……喜多　玲子

○十一月号　宗教刑罰戦慄画譜○

口絵　宗教刑罰戦慄画集
風俗便所考　淫書開好記
緊縛の受難（縛られた女の写真）
悲惨の笞刑……松井　簪子
局部装飾としての文身……高野　雅和
続・へぼきうり……鬼山　絢策
羞恥と潮紅……波多野　新
ストリップ変態記……朝見　速夫
現代陰間茶屋談義……染田　玄
好き者放談……鷲見　東一
続・変態艶書……岡田　咲子
誌上雑感……小田　利美
少年矯正院体験記……牧一
桃色の地獄……藤安　節子
反戦論者の弁……三富　浩生
夢性の美少年……三村　幾夫
堕胎と出産風俗……阿久津　猛
珍版・南国随筆……井村　幸男
羞恥心の発達……赤坂　匡
都会の異態交響楽……中河津規男
江戸奇習　縁切寺……畑村　連治
悪魔と口紅……桂　牧次郎
発狂文学者の研究……杉山　清詩
ジヤン・ペルネル夫人の狂楽…シヤルロット
男色鬩の虜……井口　正憲
性愛描写の文学……紀市　郁栄
切支丹迫害史……漆島　迫平

最近号主要目次

○十二月号　惑溺の愉悦特集号○

口絵　フランス貴婦人の変態性生活　喜多　玲子
扉　甘き歓楽の後
耽美派小説名場面集（潤一郎の巻）
折込口絵写真　縛つた女を写す…辻村　隆
濁れる愛執……松井　籟子
初夜……笹田　豊
奴隷妻……片矢　薫
指の秘密……武山　武彦
男装寵姫伝……亀岡紘七郎
孤独なファンタジー……芳野　眉美
モンテカルロの佝僂男……モオリス・ブルウジェ
中国艶話　毛のない女の物語……赤塚与志夫
女性器崇拝……雨森　順一
糊と泥と砂……長岡変一郎
4Sクラブ探訪記……二俣志津子
非公開映画　世界の閨房……藤安　節子
囚衣（或る人妻の生活記録）……古川　裕子
陰に関する怪奇な報告……村田　生
SODOMIEの珍裁判……鳴尾　善治
ロマンチックなサデイズム……森山　美歌
香具師放談……浮家　鷹三
女囚私刑体験記……小坂多美枝
セックスの記憶……綾　久江
錯乱の倫理……近東規矩也
夕映え燕の教訓……丘　正雪
狂い咲くカンナ其の後の告白……羽村　京子

○新年号　縛つた女を描く○

口絵　吊り下げられる女　喜多　玲子
中世紀の宗教刑罰画集
扉　愛の使徒　色刷口絵　椋鳥
口絵写真　縛つた女を描く
アブニストの記・らぶ・すれいぶ鬼山　絢策
脱落者……小森　原平
徳川閨門痴情録……的場　通
淫火（みだらび）……松井　籟子
戦争処女の手記……藤安　節子
長崎らしやめん考……花山　剣作
お国自慢・好色民謡選……七条美樹子
人妻告白記・妻の復讐……辻　佳月子
桃色のベールに包まれて……川端多奈子
読者座談会「交悦に伴う責めの衝動心理」
マゾヒストの果て……福田　英一
糊の執著……長岡変一郎
鼻腔礼讃……丹岡　金吉
変の字問答……浮家　鷹三
告白記　僕の記録……黒井　珍平
女の責場を描く時の心境……伊藤　晴雨
少年の恋……守田　雄二
貞操帯奇譚……ジョルジュエフカルトル
あなたのムチの下に……角田　平八
赤につかれた男……上村秀久雄
男色の花道……堤　行房
風変りな作戦……笹田　豊

○二月号　責めの小説特集号○

口絵　怪奇派小説名場面集（乱歩の巻）
口絵写真　恋に狂つたワン・カット
スペインの宗教裁判
妖花（心の悪魔）……羽村　京子
夜開く孤島……岡　真史郎
淫火（第二回）……松井　籟子
若衆散華（同性愛欲史譚）……戸崎　平馬
変の字問答（第二話）……浮家　鷹三
らぶ・すれいぶ（第二回）……鬼山　絢策
燐光……久留木　栄
女嫌いの種々相……仁比山　等
アレキシナの日記……鳥上　源一
女囚獄中記…花井お梅ざんげ譚…小町　右近
糞尿崇拝とトーテム思想……三瀬　淑朗
処女崇拝と宗教売淫……島影　映
比丘尼開眼……久松　俊介
琉球の女達……木之下白鬮
悩ましのサデイズム……森山　美歌
切支丹迫害史……漆島　迫平
死刑執行奇談……茂木　芳久
黒井珍平氏に答う……伊藤　晴雨
しいたげられるよろこび……林田　澄子
破つた日記帳……川端多奈子
硝子便所……芳野　眉美
つわもの哀史……吉井　川洋
映画とサデイスムス……雲井　彰

二人の会話

貴崎郷子

（此れは本誌八月号に不貞の倫理と題して掲載しました人妻告白記の後日譚としてごらん下されば幸甚に存じます）

「やあ。遅くなつてすまなかつた。どの位待つた？」

「四十分程、一時の約束が……。私、もう帰ろうかと思つていたのよ」

「すまない。家を出ようとした時に、丁度、クランケ（患者）が来て手間どつてしまつたところでこの部屋は、この前の部屋と同じだね……」

「私、洋間の方がいい、つて云うと、ここに案内されたのよ」

「そう。半月振りだね……。然し……今日は馬鹿に奇麗だね。何か、今迄にないパッ、とした新鮮さがあふれているよ」

「おだてても駄目よ」

「いや、本当だよ。今迄の君は、ほがらかさを忘れた、世帯やつれのした奥さんのような印象を受けたが、今日は、はつらつとした娘さんでなしに、若奥さん、新婚ほや〳〵の奥さんのようだよ」

「アラ！私、結婚二カ月目よ」

「それはそうだが、フフフ……。煙草は？」

「いらない」

「じや、僕もよそう」

「何故？」

「キスの前後、少くとも一時間は煙草をすうのはエチケットに反す、つて……」

「だめよ。まだ、あの女中さん来るわよ」

「大丈夫。部屋に入る時、用があればベルを押すから、つて云つておいたもの」

「じや、鍵をかけましよう」

「うん。鍵をかけたら、ここに来て……」

「いやにせくのね」

「だつて半月振りじやないか」

「でも、お話をしてから」

「そりやそうだが。……話は、こうしていても出来るよ」

「じや、キスだけよ。……あとは駄目よ」

「O、K」

「だめ！だめよ先生。はなして…話をきいて……お願い、先生。……さあ、私はここに坐るわ。向き合ってお話しましょう。…アラ、口紅がついてるわ」

「いいよ。誰もいないのだから……」

「先生のそばに行くと、クレゾールの匂いがするわ」

「仕方がない。商売だから。……君も以前は匂ってたのだよ」

「でも、今はしないでしょう」

「うん。匂いはせんが、やはり人妻になると違うね」

「何が？」

「何処となく、人妻らしい落ちつきが出来て官能美と云うのか、男の心をそそるような性的魅力がそなわるね」

「そうかしら……自分では、そんな事わからないわ……。ある種の男の人にとつては、女に夫がある、と云うことに付いてある種の魅力があるのじゃないかしら……」

「さあね……」

「先生もそうじゃない？……だから、私が看護婦で先生のおそばに居た頃、あんなに私を踏みにじつておきながら、私が結婚すると」

「君は、まだ僕を疑つているの？」

「ほんの少し……」

「実際、僕は悪かつた。然し、後悔しているのだ。だから、僕の誠意を君に示すために、妻も離婚して君に謝罪しているのだ」

「それは冗談。先生の誠意は十分わかつてます……。私…一昨日、とうとう〳〵主人に切り出したのよ」

「……どういうふうに？」

「しばらく田舎に帰らしてほしい、つて…」

「彼、どう云つた？」

「しばらく考えてから、よかろう…と云つたの。主人は、このような事態になる事を、うすゝ〳〵想像していたらしいわ。で、田舎に帰ると云う事は、この生活を精算する事になるのだが、何時荷物を持ち出す……つて、それは、あつさり云うのよ」

「好都合じやないか」

「でも、私にしては、余りにも張合いがなかつたわ。拍子ぬけした感よ。私としては、何故そんな事を云い出すのか…と詰問されるとばかり思つていたのに……」

「そう云われた場合、君は、どう云うつもりだつたの？」

「その時は…、結婚して二カ月、色々と努力もしてきましたが、どうしても自分の気持が平静になりません。不安で仕方がないのです……未だに気持が落ちつかず、始終その事ばかり、なやみ続けているのです。こんな気持で、これから貴方と生活を共にして行く事は貴方に対しても申訳ないと思います。だからこの気持が平静になる迄、暫らく……と云うつもりだつたのよ」

「ふーん。すると、彼は、君と僕との事を感ずいていた事になるね」

「そうよ。結婚する迄の先生とのいきさつもある程度主人は知つているのよ。そして結婚後も、先生と逢つているのではないか…と思つていたらしいわ」

「知つていたのに、何故黙つていたのかね」

「それは、知つている、と云つても漠然とした事だけでしよう。だから、詳くは云えなかつたのよ。それに主人は、気が弱いと云うか内気な方だから、そんな事を口に出して言えなかつたのじやないかしら……。でも、心の中では、覚悟はしていたのね。だから、ああ あつさりと云えたのだと思うわ」

「……その方が、結局は、僕達にとつて、好運だと云えるね。僕は、これにともなう、離婚訴訟とか慰藉料等の事も覚悟はしていたのだよ」

「主人は、たとえ、そのような事を考えても決して、そんな事をするような人じゃないわ●君の自由はあくまで君の自由だ。僕は、何も拘束しない。だから、君が田舎に帰る、この生活を精算する、と云うならそうしたまえ僕は何も云わない。そりや、僕としては残念な事だ。然し、君にその意志がないのに、如何に僕が哀願したり或は脅迫しても、なんにもならない。それによつて、又君と生活をするようになつても、ロボットと生活をするようなものだ…と云うのよ」

「ちよつと、普通の人では云えないね」

「そうよ。だから私、拍子ぬけ……と云うより、なんだか、主人に悪いように思つて…」

「同情は禁物だよ」

「同情じやないのよ。ただ…そんなに話のわかる主人を、今迄、あざむいてきたか…と思うと、なんだか、自分が世界中で一番悪い女のように思え……」

「どうしたのさ、涙なんか出して……。さあ涙をふいて上げよう。感傷的になつたら駄目だ。ね、ベットへ行こう…ね」

「待つて先生。もう少しきいて」

「ベットの中できこう」

「いや。ここできいて下さい」

「じや、こうして君の手をとつて聞くよ」

「先生。…私を悪い女、不貞な妻と思わない？」

「僕は思わない。たとえ、世間の人はそう思つても、僕は思わない。みな僕がいけなかつたのだから…。僕が、君と結婚すべきなのに心の迷いから、他の女性と結婚したりして…後悔している。自分の真の愛情にめざめたのだよ。君の結婚もたしかに反動的な不純な結婚だつた、と僕は思う。お互いにスタートを間違つたのだ。然し、世間の批難等に耳をかさず、もう一度スタートをヤリなおして、真の愛情に生きようではないか…。多少の犠牲は仕方がない。その犠牲に拘泥すれば、僕達は、一生、不幸になるのだよ。お互いに愛し合いながら別々に暮すなんて……」

「先生。わかつてます。私だつて先生と離れて暮して行くなんてことは、なんの生甲斐もありません。でも……すんだ事はもう云いません。だから、先生がとられた行為に対しては私は、何も不満や恨み言も云いません。私は、結婚してまだ二ヵ月程ですけど、決して幸福ではありませんでした。毎日々々先生の映像を画いて泣いていました。そして、がまん出来ず、たびたびと先生のお宅にも行きました。そして半月前、先生が、僕はあやまつていた、許してくれ！と云われた時、私は…本当に、うれしくて…その日からでも先生のおそばに居よう、と思つた位です。でも…決して幸福ではありませんが、主人に対して」

「変な同情はよそう。この際、同情や世評にとらわれない事だ。そんな事を云えば、僕だつて、妻に何か申訳ないような気もする。然し、そんな事を考えないで、僕達二人だけの

幸福を考えよう」

「私は、主人に田舎に帰る、と云つておきながら、主人が何の文句も云わないで、独り、じつと腕を組んでいる様子を見て、思わず、許して…と云いました。もう決して、こんな事を云わないから、許して下さい、一生貴男のそばに居りますから、つて……」

「……」

「主人は、いつたん、このような気まずい事になると、これから先の事に付いて、僕は自信がない。だから、田舎に帰る方がお互いの為ではないか…と云いましたけど、私は、首をふつて主人に許しをこいました。泣いて謝罪しました。主人は、それは君の自由だが、僕としては、何か割り切れない気持だ、と云うのです。私は、この償いはきつとします。私のこれからの愛情で、貴方のその気持をいやします……と云つたのです。先生。私達はこれで別れましよう。たびたびとこうして先生と逢つてきましたが、今日限りで……私は先生の事は、一生忘れません。初恋の人、始めて知つた男性なんですもの……。私は、これから一生、主人と苦労を共にします。先生何もおつしやらないで……別れましよう…」

「いやだ！僕は絶対いやだ。君は、そんな気持でこれから生涯暮して行くと云う事は、決して幸福ではない筈だ。君を幸福にするのは僕の君に対する今迄の償いなのだ。そして僕以外に、君を幸福にさす人間はいないと思う君は、感傷に負けているのだ。外聞をおそれているのだ。僕は、君を、絶対に離さない。君が、いやだ、と云つても僕は引きずつて行く……」

「でも……」

「お願い！僕の今迄の君に対する罪は、どんな事をしても謝罪する。僕は、今迄、色々な女と交際もしてきた。然し、それは皆、真実ではなかつた。云わば、スポーツの様なものであつた。君は、現在、そしてこれからの僕にとつて、内面的にも外面的にも……仕上の上でも必要なのだ。ただの看護婦としてでなく、身心共に僕の助手として…」

「先生のお気持は十分わかりました」

「わかつてない。わかれば、僕と別れる…なんて云えない筈だ。そして僕の謝罪も、うけてくれてないのだ…」

「私は、もう先生を恨んではいません」

「じや、何故、素直に僕の云う事をきいてくれない？」

「だつて……」

「離婚なんて事は、そう簡単に事が運ぶ事でない事はわかつている。然し…僕の、この苦しい気持……君には、わかつてないのだ…」

「先生。わかります。私は十分わかつているつもりです。でも、私も苦しみなやんでいるのです。先生を心から慕つていながら、夫婦と云うきずなにしばられている苦しみ……」

「御生だから僕と一緒になつてくれ……」

「私は、先生のその言葉うれしいのよ…」

「じや、一緒になつてくれるね？」

「でも…又、主人に……」

「そんな事…困難な事件は覚悟の上…ね…」

「どう主人に云つたらいいかしら……」

「後で考えよう。二人で……ベットの中でゆつくりと考えよう……」

「ええ」

「さあ。早く着物をぬいで…」

「なんだか……」

「馬鹿だね…何時も一人でぬいだのに…」

「でも今日は……」

「じや、ぬがして上げよう……」

「煙草は？」

「いらない」

「そう。じや僕もよそうか」

「なぜ？私が火をつけて上げましょう」
「うん。……君が、こうして彼にしているのか、と思うと、ちょっと妬けるね」
「いやな先生。先生こそ……ハイ、煙草」
「ありがとう……。こうして吸う煙草は、また格別だね……」
「そうかしら……私は、煙草ってもふかしでしよう。だから、そんな味わからないわ」
「何時頃から吸い出した？」
「先生が、私から離れて行ってから」
「本当にすまなかつた。こんなに愛しているのに、あの時、どうして離れたのか、不思議でならない…。結局、近くにおり過ぎて、君の良い所がわからなかつたのだね。遠くに離れて、始めて君の良い所がわかつたのだね。もう君なしでは、一日として、じつとしていられない」
「私だつて…。先生が結婚された時、どんなに悲しかつたか……」
「わかるよ君の気持……」
「私も幸福な結婚をして、先生を見返してやろう、と思つたのだけど…。結局は駄目だつたのね。結婚した翌日から、もう先生の事を考えてばかりいて……」
「僕は、これから君を、きつと幸福にするよ長い間、本当にすまなかつた。僕は、さつき君が別れてくれと云つた時、どうしようか、と思つた。君を失つたら、もう僕は生きて行く力もないのだ。なんの生甲斐も張合いもない。ただ、僕は零で、死しか手段がない、と思つた」
「先生、泣かないで……。すみませんでした もう迷いません。どんな事があつても、きつと迷いません。私は、先生のものです」
「そうだ。そして僕も君のものなのだ」
「長いまわり道をしていた、と思いましよう」
「うん。苦しいまわり道だつた」
「先生。私、今夜、主人にはつきり云いますわ」
「そうしてくれ。一日も早い方がよい」
「……でも難問題ね。…話の切り出しが…」
「どう云う？」
「いまから考えるの…。ね、一緒に考えて」
「うん。キスしてから…」
「さつきした所なのに…」
「さつきはさつき。いまはいま……一緒になれば、一晩中キスしてやる」
「朝迄？」
「うん」
「じや、眠れないじやありませんか」
「こうして、抱き合つて唇を重ねたまま眠るのさ」
「眠れるかしら……」
「眠れるさ」
「そうかしら……。先生、奥さんとそうしていたの？」
「馬鹿な……」
「いや！それ、はつきり云つて…でないとキスしない」
「そんな事しなかつたさ」
「うそ！別に、かまわなくてよ…」
「そりや、キスはしたが…そんな…」
「でも、朝迄、こうして抱き合つていた事あるでしよう？」
「……ないよ」
「本当？」
「うん。しばらくは抱いてはいたが、すぐ腕がしびれて、だるくなつたもの…」
「私なら？」
「腕がちぎれても離さない……」
「有難う……。許すはキスを……」
「でも……、君だつて彼と……」
「そりや、夫婦ですもの……。いやだ、と思つても……、そんな事云えないもの。黙つて

彼のなすままにしていたわ。だけど、主人に抱かれ、そしてキスをしても、私は、脳裡で先生の映像を描いていたのよ…。彼を、先生だ…と思って、自分の心の切ないのを慰めていたのよ」

「……この唇だいぶ、彼にいためられたね」

「先生の責任よ」

「わかる」

「主人とキスをしても、少しも感情は湧かなかつたわ。私が、先生を慕つているからと云う先入意識もあつたでしようけど、先生とくらべて、テクニックも下手だわ」

「でも、悪い感じはしなかつたろう？」

「そりや……もう、そんなお話よしましよう気持が沈むわ。ねキスして……」

「眼をあけてしようか」

「いいわ。お互いの顔を見つめながらね…」

「うん」

「どう、たのしい？」

「とつても……。うれしいの……。早く、話の結末をつけて先生のおそばに行くようにするわ」

「うん。たのむよ。それ迄、僕は、じつと待つているから……。こんど逢う時は、晴れて……誰に遠慮する事もなくね」

「ええ」

「何時頃になるかな」

「今日、云い出して…もう一週間もすれば」

「それ迄、キスもおあずけだね……」

「まだ時間早いでしよう」

「うん。三時前だよ」

「じや、いいわ。一週間分のキスを、今日しておいて……」

「キスだけ？」

「御自由に……フフフ……」

「よおし……」

「でも、一週間のその間、浮気しちや駄目よ」

「O、K……ね、これもとらない？」

「いやよ、そんなの」

「何故？」

「とらなきやいけないの」

「ああ。別に、はずかしい事もないだろう。僕達、二人きりなんだから……」

「…いじ悪ね。私に、ストリップさすの？」

「僕もするよ」

「一週間すれば、毎晩、ストリップして上げるのに……」

「待てないんだ」

「じや、いいわ。ストリップして上げるわ。そのかわり、私じつとしているから、先生脱がして……」

「O、K。……相変らず、白い肌だね。……彼も未練だろうね。こんなやわ肌と別れるなんて……」

「いやよ先生！寒いわ」

——おわり——

ジプシイの性的生活

有馬正秋

ヨーロッパ文明人の間に交つてジプシイが一種異つたる性的生活を営みつゝあるのは興味ある事実である。

不思議な東洋の人種である。彼等は数百年以前にアジアの何れよりか、大群をなして西欧に移住し、爛熟した欧洲文明の怒濤にも揉まれずして、原始人類社会が一度び経験した母権制度の下に、彼等独自の社会を形成して居る。

彼等の社会が有する道徳、人情、制度、其の総てが、母権制度より父権制度に移つて、既に数千年を経過したヨーロッパ人の文化社会から異つて居るのは、敢て云うを俟たないところである。又このような異種の人類が、欧洲の社会で非常な圧迫を受けるのは、不思議とするに足らない。

勿論、彼等は数代に亘つて欧洲に移住し各部属の居住する地方も異つて居り、従つて環境の影響を受けたところにも、多少の相違はあるが、然し大体に於て、境遇の影響如何に拘らず其の独自の特徴を保持して来た、其処に我々の研究すべき価値がある。唯だ、彼等を人種的に甚だしく低劣なものにしてしまつたのは、全く欧洲のブルジョア文明の圧迫からであつた。

一、性慾的生活と衣服の関係

若しジプシイが、其の郷国たるアジアに在つたならば、今日尚傷われない彼等の行動の総てを、現代の、父権制度道徳の標準から、又資本主義社会の批判から免れ得たかも知れない。然し、彼等の周囲の社会は、総ての点に於て反社会的であり、反現代的である彼等の行動を、現代道徳の用語を以て批判せざるを得なかつた。

普通人より見ればジプシイ種族の間には性慾に関する羞恥心と云うものが、殆ど缺如して居るかに観察せられる。一体斯ような無羞恥な感情は、何に基因して居るかと考えるに恐らくそれは、非常に早くから性的生活を試みた結果かと想像される。彼等の間には少年少女の結婚が平気で行われる。我々は、昔時の日本に於て、早婚の弊を見た。然るにジプシイの間には、幾代の間、早婚に何等の制限も附せられて居なかつた。十二才若しくは十三才の少年が、父の行つたことを踏襲しようとする、彼等は早く「父」になることを希望する。父になることが、少年の一般的願望であると云うに至つては、驚かざるを得ない。

（註、「父になる」と云う語は「子供の父」になり度いと云う意味ではない、異性と性的関係を結び度いと云う意に取られ度い）

イタリージプシイの研究者であるコロチイ及びプレダリイの研究する所によれば、イタリージプシイの中にあつては、十才位の少年少女が、性的関係を結ぶことを、不思議とされて居ない。のみならず、一般にジプシイの間には、兄妹結婚でさえ平気で行われて居る蓋し、それは、血族結婚の遺風と見てよい。こうした遺風が残存して居る事実は「ファラオの歌」と称する俗謡が、ハンガリー、セルビア、ルーマニア及びバルカン諸国に伝播して居るに徴しても明かである。

性的生活に於て、最も早熟な種族であるだけに、彼等が、其の方面に豊富な言語を有することは驚くばかりで、男根の称呼には七種類あり、女陰の名称には十種類ある。両性の性機関に対する名称は十一種ある。

ポーランドに於けるジプシイに於ては、兄弟が其の××と性的関係を結ぶことを、異数なりと考えられて居ない。其処では、女性は人間として認められて居ない。彼等は唯だ性慾の対象物として認められて居るきりである

一般に、ジプシイの間には、純潔な処女と認められるべきものが殆どないと云つてよい。然し群婚時代に在るジプシイ族に対して「処女の純潔」の意義を教えるは無意味である。彼等の間には「貞操」と称する道徳が未だ起つて居ない。蓋し「貞操」なる語は父権制度以後の産物である。されば彼等の少女達の性的名誉などと称するものは其の同族の間に於てすら保護を受けない位であるから、他の優越な人種から凌辱を蒙ることは、敢て不思議とされて居ない。それ等の少女は多くは其の青春の頃、土地の地主の若者達から、玩弄物とされ、後には弊履の如く棄て去られるのである。グロース博士の云つた如く、ジプシイ少女の性的名誉は何人にも保護されないそして、既に子供の年齢に於て「母」となつてしまうのである。

一体彼等は無羞恥なるが故に、思春期に入る前まで、裸体で育つそれが其の性の保護を失う原因の一つにもなつて居るようである。ボスニヤ、ヘルツエゴヴイナ、カルパアテンの村々に於て、十才以下の少年少女が、両親達の行為を真似ることは、普通とされて居る。

ハンガリージプシイの少女達は、両親の住つて居る小舎の前で、行人に対して、手真似を以つて××の提議をなす、そしてそれを毫も恥辱と感じないのである。そうした行為に恥辱を感じない位であるから、勿論裸体などに羞恥感のある訳がない。然し、其処にジプシイ少女の悲哀がある。なぜかなれば、彼等の種族は尚、母権制度を採用しつゝあるに拘らず、父権制度発生後の現象であり、そして財産私有の観念発生後の事実であるところの売春を行わねばならぬとすれば、それは悲惨の極ではないか。是れは彼等が原始共産時代の家族制度の下に立ちながら、而かも卒然として、ヨーロッパ文化の渦中に突入して来た結果に外ならない。

我々は衣服に対する解釈をカーライルの如く哲学的に、むつかしく考え度くはない。同様に、ジプシイ族の如くに衣服を、単純に性的刺戟の材料、又は手段として考え度くもない。然しフロイドの説くが如くに、人間の凡ゆる行為を性慾に関係あるものとして考えるならば、衣服は、最も性慾生活に関連の深いものであろう。

扨てジプシイは如何なる衣服を着けて居るのであるか、彼等には、四季の流行もなければ、型の変化もない。それは如何にもプリミチイブであるが、それも其の筈である。彼等

の多くは衣服を纏うことを贅沢の一つと考えて居る位であるから。然らば多くのジプシイは、どうして生活して居るかと云うに、大部分は裸体であつたり、無帽であつたり、裸足であつたり、如何にも悲惨な生活を営んで居る。我々が歌劇の「カルメン」や「ボヘエム」や「トルバドル」で見るジプシイは、先ず上等な部類で、とても実際はそれ以上の悲惨な境遇にある。

ジプシイ研究の大家ウリスロッキイは、ハンガリー及びルーマニアのジプシイの服装に就て次の如く記して居る。

「マンテルも帽子もなく、殆ど裸体で、ハンガリー及びジイベンビュルゲンを流浪して居るジプシイの中に、理想的なジプシイ美人に出会うことも稀れではない。是等の人々は非常に粗野ではあるが、同時に又、其の顔の輪廓や、体軀の均整の美事なのに我々は一驚を喫する」

即ち彼等は殆ど裸体で、しかも立派な成育を遂げるのである。

こんな状態であるから、少女や、年長の婦人達が、特に自分達の衣服のために苦心することも出来ない訳である。それに就てグレルマンはこう云つて居る。

「女性の着物が、男子の着物より多分に費用が費つて居る訳ではない。婦人は、其の良人達よりも、一層不潔でもあり、又汚くも見える（中略）往々身に纏うものは、麻の布一枚に過ぎない。」

それも未だよい方である。時には、それ等の憐れな女性は、穴だらけの布を纏つて諸方を漂浪して居る。冬になれば、男のズボンを穿いたり、男の上着を纏つたりして居る。さすれば一見して、彼等が男であるか、女であるかさえ不明なこともある。けれども男も女もおめかしをすることは中々熱心で、接ぎ剝ぎの上着でその体を蔽うだけが精々であるに拘らず、頭には頭巾を被り、耳輪をつけ、指輪をはめ首飾りをかけ、様々の下卑た趣味を発揮する。

ラインベックの記す所によれば、ジイベンビュルゲン及びカルパアテンのジプシイの女達も亦男子の気に入るために、非常なおめかしをやるが、彼等は多くの南方の人種と同じように、華美な綺羅びやかな色彩を好む。是等の着物は、ゲエテが云つた通り、其の黄橙色の顔色とすらりとした姿態には、可なり似合つて居る。南ロシアのジプシイは其の服装が、他のジプシイと殆ど同じであるが、これに反して北方ロシア及びコーカサスのジプシイは、ロシア人達と同様の服装をして居る。（註、勿論帝政時代のことである）それは当時のロシア政府が、ジプシイを、露国民と認めて、国内に漂浪することを許さなかつたからである。

セルビア・ジプシイの服装に関して、ライストは次の如く云つて居る。「是等のジプシイは、自己独特の服装を採用して居る。殊に漂浪して居るジプシイは、唯だ、惨憺たる襤褸を身に纏つて居るきりである。けれども概して彼等の服装は、空想的、又は道化的である。そして其の色彩には特異な華美と濃厚が喜ばれる。されば、彼等はハンガリー兵やセルビア兵の、赤や紫や、緑色の古服を買つて、それでもつて、華美やかなものを作り上げる。」

イタリージプシイの服装に関するコオラの報告によれば、彼等の殆ど大部分は、乞食同様な襤褸を纏うて居るが、或る所では、貨幣をもつて着物の装飾にして居る。そうした場合には、着物の色彩としては、緑色が最も喜ばれる。然し大部分のジプシイは赤色の上着を愛好する。それにはハンガリー兵の服装のように、金糸、銀糸の刺繍を施し、それに銀

ボタンを附ける。又イタリージプシイの女性は、殊に黄金色、緋紅色、紺青色の如き華美な色彩を用いて装飾とする。

スペインジプシイは、古代スペインの服装を採用して居るので多少とも上着的になつて居る。一般にスペインジプシイの女性達は、スペイン婦人に類似して居る。其の人種的特徴は、彼等がスペインに移住して余りに長きに亘つたがために漸次に失われて、今ではスペイン婦人と同じ水平にまで達して居るが、（英国ジプシイも亦同様である。）然し富裕なジプシイ婦人は、金のあるに任せて、余りに多種多様の装飾を施すために、却つて、ジプシイとしてのお里を現わす場合が多い。彼等は今日でも尚其の両頬や、頭顱に大きな膏薬（註、頭痛膏の如きもの）を貼り付ける。是は現今では、スペインの婦人達の間には、全く用いられて居ないものであるが、一種の化粧としてジプシーの間には現に用いられつゝある。グスターフ・フライタツハも、スペイン婦人とジプシイ女の相違を余り認め得られないと記して居る。彼等の子供達は十才位までは殆ど裸体で、それ以後になると、着物を欲しがるけれども、十六才より十八才位までの少年は唯だズボンを穿いて居るきりである。同じ齢頃の少女はやつと其の腰の周に布を纏うて居るに過ぎない。

フランスジプシイの服装に就ては、何等云うべきことがない。彼等は熊芸人として、軽業師として、襤褸の洋服で場末や、田舎の村々を漂浪して居る。彼等が相撲を取る場合には、彼等は全裸体になる、彼等は、皮膚に孔のあくことを惧れるので、寧ろ着物に孔のあくことよりも、寧ろ着物に孔のあくことよりも、寧ろ着物に孔のあくことである。

ドイツジプシイに関してラインベックの記す所によれば、彼等の服装は、質素とか節約とか云つた範囲を超越して居る。子供達は、十一二才までは裸体で居る。それ以上になつても、男子はズボンと上着、女子は、前掛と肩掛を着て居る位のもので、外套を着て居るものは稀である。その好む色は紫や紅の華美な色である。

こうした乞食のような襤褸を纏い、垢まみれになつて居るに拘らず、彼等は、体を洗うことが嫌いである。殊に婦人は概して華美好みで、其の着物にも、肩掛にも、頭巾にも華やかな色彩や模様を好む、此の外、少女達は真物又は偽せ物の、腕環や、頸環や、耳輪などを附けて喜ぶ。けれども、老婆になると彼女達は、唯だ上着とコルセット、前掛けと足に草鞋を穿くだけである。

さて以上の蒐集材料によつて、我々はジプシイの服装及び其の趣味の程度を知り得たがイワン・ブロッホ博士の如き性学大家の説明によれば、色彩は、最も原始的な誘情的手段たり得るもので、ジプシイの殆ど総てが愛好する「赤色」は、女性の頬の色の赤色や、××の赤色や、マゾヒズムによる血の色や、其の他、男性を誘惑する、総てのものを連想させると云うことだ。

一体赤色は総ての動物を興奮させる力がある。赤い布が、牡牛や、七面鳥を興奮させる実例は何人も知つて居るところで、筆者の如きも、アルプス登山をやる時、半腹の牧場に於ける家畜群を驚かす惧があると云つて、赤色のものは一切登山に携行しなかつたものである。多くの動物学者は、交尾期に於ける狒々のお尻の真紅な胼胝から、牡鶏の真紅な鶏冠に至るまで、何れも皆な第二次的性の特徴であると云つて居る。エルンスト・グロオスの説によれば原始人類に取つては、赤色は重大な意義が持たれてある。即ち赤色は血の色である。原始人類は、此の色を興奮した感情の動きに於いて、狩猟の熱狂に於て、闘争に於て、性的接近に於て見たに相違ない。尚赤色

は、それを使用する場合に、直に他の連想を起さした。即ち原始人類に取つて、最も性的目的に関連を持つて居る舞踏、及び決斗の記憶等が、赤色によつて喚起されたに相違ない。又恐らく原始の人類が絵画を書いた時に最初の材料として用いたものを、射殺した野獣の血汐か、それとも、殺した敵の血潮であつたに相違ない云々と、グロオスは云つて居る。

斯ように考えて来るとジプシイが赤色を愛好する根抵には、性慾的な衝動が潜在して居たと云つても差支えない。そして其の赤色を最も多分に用いた彼等の服装は、一面には彼等の性的崇拝物であり、又他面には性的興奮の具であると考えられる。

二、性慾的魔法及び媚薬

何れの国民も、媚薬と云うものを持つて居る。日本に於いては恐らく「いもりの黒焼」が其の代表的なものであろう。他にもあるようだが、一般に知れ亘つて居ない。こう云つた種類のものは支那が本家本元のようであるが、寡分にして私はそれを知らない。

フランスには、媚薬を製する老婆があつて家畜の胞衣を嚢に入れて乾燥し、それを薬研で粉末にし。その上に、内楊樹の黒焼を絹篩にかけたものと、コーヒーの粉と、サフランと及び少量の麝香を入れて攪伴ぜ、それを蜂蜜で煉り上げる。此の媚薬は近代のフランス人が発明したものでなく、古代のミーマには此のコーヒーや番紅花を雑ぜない代りに、危険な芝茸を加えて用いたそうであるが、それがため、往々服用者を発狂せしせ、又は死の転機に導いたと云うことである。

ところがジプシイ族の間には、御念の入つた程、種々な性慾的魔法があり、又媚薬の製法がある。恐らくそれは科学的価値に於て認められるべき程のものではないだろうが、可なり奇怪なものであるから、二三を挙げることにする。

ボヘミアの漂浪ジプシイの中には、次のような変つた恋の魔法が行われて居る。例えば巫女と云われて居る一人の婦女が死んだと仮定する。其の場合に一人の少女が、死んだ老婆の乳房を布で摩擦して、その布を秘密に九日間膚身離さず持つて居る。そして其の後に少女は左の手から二三滴の血を布のように垂らして、それを焼く。若し其の灰を彼女の意中の人の食物又は飲料の中に混じて呑ますと思う人を手に入れることが出来る。

又林擒の種を、粉になる程焼いて、これに月経の血を混じ、意中の男子の食物に混じて食わずと、其の男子は、女に対して夢中になる。

セルビア・ジプシイの少女は聖バジリウス祭の日（一月三十日）に、恰度教会の鐘の鳴る頃を見計らつて硝子の破片を以て左の足を傷つけ、その血を新らしい壺に入れて、或る死亡した男の墓の中に死骸と一緒に埋める。

そして、九日後に其の壺を掘り出して、それで食物を煮て意中の男に食わす、すると、意中の男は少女に熱情を感ずる。

又、少女が意中の人を自分の所へ来させようと思えば、左の足を傷つけ、その流れ出る血液の温い中に、それを意中の人のゲートルに塗り付けて置く。すると、少女は其の男を夜となく昼となく、自分の方へ引き寄せることが出来る。

若し少女が、其の意中の青年を、唯だ自分

の所へのみ引付けて置こうと思えば、次のような変つたことをやらなければならない。即ち少女は意中の青年の髪を二三本抜き取つて××の実と、自分の左の小指の血液を混ぜてそれをどろ〳〵に煮る、そして後にそれを嚙みながら満月に対つて、次の言葉を三四回繰り返して叫ぶ。

私はお前の髪を嚙む私はお前の血汐を嚙む髪と血汐から恋が成りたつ新生涯が成りたつ吾等のために——

こうした呪文めいた言葉を繰り返した後、少女は、どろ〳〵の煮物を恋人の着物に塗り付ける、すると、若い恋人は棒縛りに会つた人のようになつて、少女の所以外は、決して何処へも行き得ない。

ジーベンビュルゲンのジプシイの中では、若し、女が新年に月経の血を得ることが出来ればそれは、間違いなく恋人を手に入れ得る手段であると信じられて居る。けれども、女の方から其の恋人の着物に経血を注ぐことは可なり困難なことゝ云わなければならない。さて、こうした恋の魔法の実例は、今日稀有と云う訳ではない。我々が余りに莫迦々々しいと想つて居る事柄が、ジプシイの仲間に於いては、着面目な真剣な事柄として行われて居る。

血液による魔法を以て、恋愛を得ると同様に、又血液によつて、全然反対の結果、即ち憎みと、嫌忌を喚起する場合もある。

南ハンガリーのジプシイの中には、次の如き嫌忌の魔法が信ぜられて居る。

若し妻が、焼いた鵠（かささぎ）の羽の粉末を、良人の尿に混じ、それに自分の血液を加えて、良人の嗜好して居る食物を煮て食わすと良人は妻に対して、憎悪と嫌忌の感情をもつようになる。（註、勿論此の夫婦は、一時的のものである）

ジプシイ研究家のイクトル・アレコオが、一八八七年の六月に、ロオゼ・チユレエズと云うジプシイの婦人を訪問した時、彼女は血液の神聖なる効用に就いて〻の如く述べた。

「血液は、私達の体内に於ける最良のものである。若し、貴下の血液が冷くなれば、其時貴下は死なねばならない。若し、貴下が、貴下の血液を飲むことを私に許されるならば、其の生命及び心臓の熱を与える訳である。心臓の熱血の中には、思想とか、希望とか云つたものが悉く含まれて居る」

血を呑むことは、多くの東洋人の間に於ける習慣のように想われる。血盟の友とか、血を啜つて兄弟の約を結ぶとか云つたようなことは、中国にも、日本にも行われたことであるが、此の血液の魅力を信ずる一事に徴してもジプシイの東洋人たることが愈々明かである。

三、フエティシスムスと性慾生活

古代のインド、エジプト、ギリシヤ、ローマは云うまでもない、近代の欧洲にさえ拝物思想は残つて居る。さればジプシイの拝物思想を、特に取り立てゝ云う必要もないが、興味ある研究であるから、多少の記述を許され度い。

ジプシイは、旺盛なる性的衝動を以て、何等かの原体と考えて居る。彼等は、男性の性的原体をチヤリイヂ（tcharidji）と云つて居る。唯だ不思議なことには、古代ギリシヤ、ローマーは勿論、日本に於てさえも、男性の神像は男根であり、女性の神像は女陰であるに拘らず、ジプシイの神々達が全然反対であるのも不可解なことである。然し説明を聞いて見れば、或程と首肯される点がある。

彼等の女性達は、是等の神々より見離され

てはならない。否な、女性許りでなく、男性も、チユーロ神より見離された場合には、種族の中に於いて、可なり悲惨な境遇に置かれる。蓋し、ジプシイ族の不文律により、族長は、性不能の男子及び不姙の女子に対しては一切装飾することを禁止するからである。されば、そうした制裁を恥辱として戦慄する女性達は、チヤリイヂ神の神怒に触れることを何よりも怖れ、娘もつ親達も、娘に対するチヤリイヂ神の祝福を祈る訳である。

ジプシイ族中の良家の少女が、結婚当夜、チユーロ及びチヤリイヂ神を全然図案化した刺繍のある結婚着の不着を纏うて行く訳も、其の結婚に祝福を受けんがために外ならぬ。是等の下着は、子々孫々に伝えられる場合もある。現にセルビア存在のジプシイ中には、そうした下着が今尚保存されて居るそうである。（註、茲で云う結婚は、厳粛な一夫一婦の結婚でない）

又姙娠中には、の下着を神聖なものとして姙娠が身に纏うこともある。

要するにそれ等の図案にしろ、刺繍にしろ絵画にしろ、健全なる子孫を得度いと云う観念から造られたものに外ならぬ。

男性より嫌われる女性や、不姙症の女性達が、今日もなおそれ等の奇怪な神像を、木札や、硝子札の上に描いて、それを腹部に結ぶ習慣が残つて居る。けれども、それによつて何等の恩寵が見出されないので、今日では、新らしいジプシイの男達が、次の如き歌を作つて嘲笑して居る。

唯だ徒らに、女達よ、お前達は、
チユーロとチヤリイヂの札を結び付ける
お前の体が百になるとも
お前は姙娠しない、決して、決して——

ジプシイは、男子が人倫の常道を行うことよりも、此の再性の二神が、男女の体内に一時的の居住をするものと信じて居る。されば彼等の婦人達は、二神の完全なる合体により祝福（即ち姙娠）を得んがために、二神に供物を捧げ、祈禱を行う。

古いジプシイの研究者ヨルダンは、ベルリンの郊外スパンダウから、毎年漂浪の旅に出て、キリスト誕生祭に帰つて来るジプシイ団で、キリスト誕生祭の当夜、肉や、粉や、の婦人達が、クリスマスの当夜、チユーロとチヤリイヂ神の像に卵を混ぜて、チユーロとチヤリイヂ神の像に型どつた菓子を作り、踊つたり、騒いだりして居るのを見たと記して居る。

ウリスロッキイも、セルビア・ジプシイの女達が、キリスト教の聖母受胎告知祭の夜、同じような菓子を焼いて、大樹の洞窟の前に供物を捧げるのを見た。そして、其の子達の最年長者は、洞窟の前にひれ伏して祈禱をあげた。その祈禱のうち、他の妻女や少女達は菓子を口にしながら、総て一緒に手をつないで跪拝したと記して居る。

こうしたフエチシズムは近世のイタリーにもあつた。エツアルト・フツクスによれば、ナポリの市に、聖コジマの祝祭があつた時、性不能の良人をもつた婦人達が、手に〳〵奇怪な形をした蠟燭をさゝげ、隊を組んで教堂に参詣したそうである。こうなるとキリスト教堂の迷信も、ジプシイのそれと五十歩、百歩の差に過ぎない。

それは兎に角、総ての異人種の宗教を蔑視して居るジプシイが、単純に生殖神のみを信仰して居るのも面白い。殊に、それが文化の中心地であるヨーロッパに於いてゞあるから可なり皮肉である。

——完——

◎読者の皆様へ◎

ありのまゝの告白記をお待ちいたします。誌上匿名の上秘密は厳守いたします。

悲劇的な喜劇

笹田豊

「お花や、今日限り此の家を出て行って頂戴！」

「お、おくさま、そんな……」

「いゝえ、是が非でも出て行って頂戴！」

「でも、それは無茶と云うものでございますわ……何の理由もないのに藪から棒に……」

「何の理由もないのに？……冗談じやないわ。私はこれでも、今迄やとつた女中の中ではお前が一番気に入つていたのだよ。何の理由もなく、そのお前を馘にすることが出来ると思つて？」

「お、おくさま、あたしが悪うございました。昨日、一箇十五円のコロッケを二十円と申し上げたのは、全く其の場の出来心でございます。どうぞ此の度だけは……」

「まあ！……そんな事もやつていたの。私は馬鹿だつたわ、こんな女を信頼するなんて……」

「あ、あの、おくさま、じやもつと他の事で？……」

「無論そうだわ。もつと重大な事だわ」

「あたしには、それ以上の事は一向に心当りございませんが……」

「嘘おつしやい、私にはちやんと判つている事なんだから」

「でも……」

「白を切るつもりなのね？……じや云うわお前はゆうべ……」

「お、おくさま。おやさしい奥様に隠し事をしたりしていたあたしが十々悪うございました。ゆうべ奥様の手文庫から出した三千円は田舎の病気の母に送りました。何しろ家には働き手が一人もなく……」

「まあ！……そんな事もやつていたの。私は馬鹿だつたわ、こんな女を信頼するなんて……」

「お、おくさま、まだ他の事で？……」

「あゝ、何て私は馬鹿だつたのかしら？…此の調子じやお前はどんなに大それた事をやつてたか知れたものじやない。あゝ胸が煮え返るようだわ。今、即刻、此の家を出て行つて頂戴……」

「でも奥様……」

「此の上、まだ、いけ図々しく私に喋りたい事があるの？」

「でも奥様、これ位の事でしたら何処の女中でもやつている事でございますわ。何も取り立てゝ……」

「盗人たけゞ〳〵しいとはお前の事だわ。あゝ……気が狂いそうだわ」

「でも……」

「お、お黙り！何が、でも、なの？成るべく穏便にすませようと思つたけど、もう我慢出来ない！——成程、お前には、此の家の雑事を手伝つてくれと頼んだわ。けど……けど……旦那様を可愛がる手伝いをしてくれと誰が頼んで？……」

「お、おくさま……」

「云い訳は止して頂戴！　私はすつかり知つているのよ。ゆうべの事全部見て了つたわ」

「お、おくさま……」

「ゆうべの集りは予定よりずつと早く終つたのよ。家で待つていると思つて。見たい映画も見ずに急いで帰つてきたらあのざまだわ」

「お、おくさま……」

「お、おくさまは止して頂戴！間の抜けたおうむじやあるまいし。も少し気の利いた文句が云えないの？」

「お、おくさま……」

「あゝ、気が狂いそうだね。お前を殺してやりたい！　飼犬に手をかまれるとは此の事だわ。さ、早く出て行つて！　こゝに今月分の給料があるわ。此れをもつて早く出て行つて！」

「……」

「さ、早く！　聞えないの？」

「良く聞えるわ」

「まあ……何て言葉遣い、女中の分際で」

「女中？…笑わせないで頂戴！　もうお暇を貰つた以上、あなたは主人じやないわ。女一人対女一人。五分五分の関係だわ。——何よ、奥様々々と奉つていれば良い気になつて。あたしはもう自由よ。だから此の家を出て行く前に自由に云いたい事を云わせて頂くわ。ところで——ね。美也子さん……」

「まあ、美也子さん、だなんて……何て侮辱でしよう」

「侮辱してるのはあなたの方よ。あたしはもうあなたの女中じやないのだから、花子美也子で呼び合うのが当然だわ。そこで、も一度——ね、美也子さん」

「……」

「あたし達——つまり、あたしとあなたの旦那様との関係はゆうべが始めてだと思つて？」

「まあ……まさか……」

「その、まさか通りよ。半年前此の家へやつてきた次の夜からだわ」

「あゝ、何て事でしよう……」

「確か其の夜の十一時頃、自分の寝床を取つていた私の後から突然——」

「あつ、その先は止して！」

「丁度あなたは同窓会とかでまだ帰つてなかつたわ。ふふふふ、旦那様はそう〳〵あたしのオッパイを見て、〝秋の田園のように豊かだ！〟なんて馬鹿気た事をおつしやつたわ。それから、〝おゝ、君は明石鯛だ、それに比べれば美也子なんぞ腐つた鰯だ〟なんて言つたわ。お蔭であたしもすつ

かり変な気持になつてしまつて……素晴しかつたわ。あの夜は……」

「口惜しい……出て行け……出て行け……あゝ神様……こんな女に見返えされるなんて……あゝ……どうしよう……」

「それからと云うもの。旦那様は、あなたの留守を窺つては感に堪えぬような声で〝君はパラダイスだ……君はパラダイスだ〟つて云うのよ。馬鹿にしてるじやないの。パラダイスは極楽でしよ。死んだ人が行く処だわ。だからあたしは抗議してやつたわ……」

「馬鹿。馬鹿、馬鹿。出て行け……出て行け……鬼……鬼……あゝ神様……私は清い女です……信仰もしています……だのに……だのに……余りひどすぎます」

「確かに旦那様は技巧派だわ。本論に入る前に絶対緒論を忘れないのよ。いやむしろ緒論が長すぎるんだわ。だから本論に入ろうと云う時、すつかり元気が抜けてしまつている事だつて少くないわ。しかし、とに角可愛い人だわ。あの人は……」

「お黙り、お黙り！」

「あゝ堪らないわ。あの人の接吻と来たら……あの柔かさ、甘さ、しびれるような後味……」

「あゝ……気狂い！　鬼！　悪魔！　出て行け！」

「これで大体胸の中がすつとしました。お言葉に従つて出て行きますわ。では最後にもう一言」

「……」

「オッパイもお尻もそれから——あたしの方が奥様よりもずつとよろしいつて事——此れは旦那様ばかりじやなく。クリーニング屋の若主人もそう申しておりましたわ」

「お、お前、そ、それは……」

「若主人は何時も会う度にこぼしています わ——お前の内の奥様は……仕方がなくて、それからこんな事も言つていましたわ、奥様は僕の顎をなんであのように嚙むんだろうて」

「……」

「……」

「お花さん、何時までも此の家にいて頂戴！」（終）

ハナヲタカクスル

問　私は鼻が低くて悩んでいます。隆鼻術というのをよく聞きますが、効果があるものでしようか。

答　先ず特殊薬注入法があります。鼻すじだけ通じたいという人には理想的な方法です。次に象牙挿入法は今から三十年前から初め、アメリカでも使用され捨て難い方法です。合成樹脂も最近は材料がよくなり使用され出しました肉質法は少しづゝ高くし度い方には良い方法です。以上は費用何れも六千円です。

更に当院独特な永久不変な弾力性物質が発明され、その自然性においては、如何なる方法も追従を許しません。従来の象牙合成樹脂のもつ欠点は一掃されました。将来は当院で発表すれば、如何なる人も皆この方法で行うべき運命をもつているのです。費用は一万二千円以上です。

大阪市北区梅田新道
交叉点東一丁電車通
三山整形外科内
三山隆鼻法研究所長談

淫

みだらび

火

（第三回）

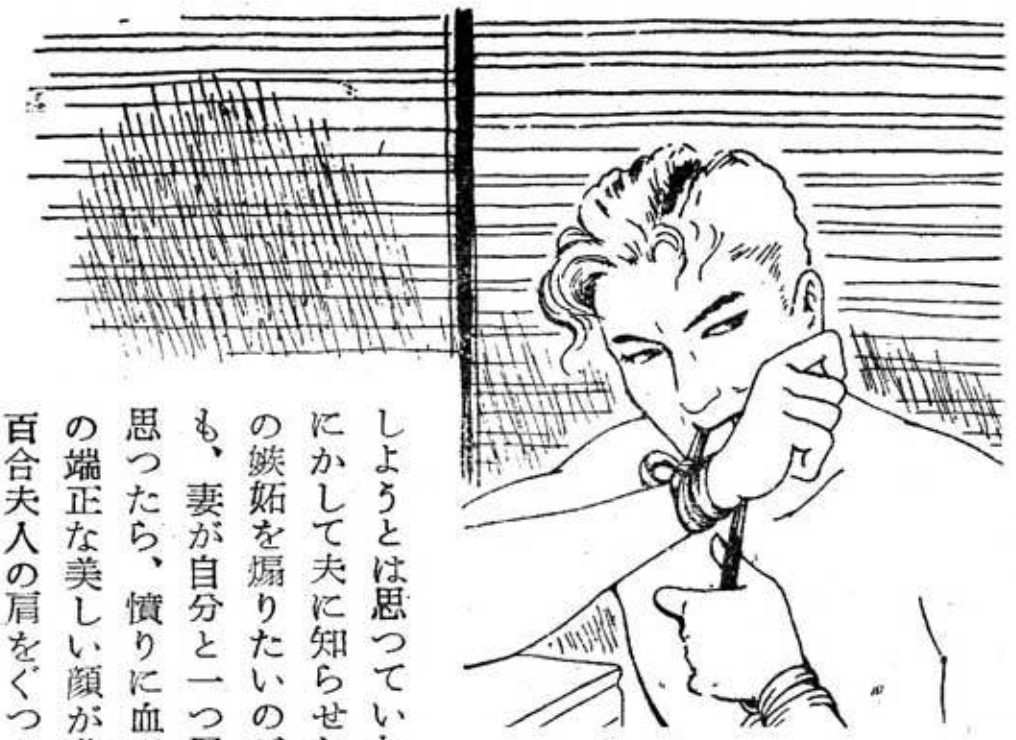
松井籟子
画・喜多玲子

一

小百合夫人は寝巻の上に羽織をはおつた。白地に大きく紺で扇面をえがき出した白ちりめんの単衣を肌にじかに着て寝巻にしていた。薄いピンク色のビジヤマを着ることもあつたが、小百合夫人の肉体の奥がさわぎ出すと、絹ビジヤマよりは、ちりめんの浴衣の方が望ましくなつてくるのだ。なぜなら、夫との夜のいとなみに、夫の手がすつと衿元にかゝつて乳房を探るのに、ちりめんの重味で、ぬぐつもりもなく、すべるように胸がひろげられて、あらわな肌が出てくるからだ。それが丁度、後手に縛られた女がもがけばもがく程胸がはだけて、肩があらわになる連想にむすびつくのだつた。木綿の浴衣ではそういかない。夫人はわざわざ白生地に染めさせて、白ちりめんの浴衣を、ただ夜のひそやかな満足の為につくらせたのだ。そして、その白地の上に、真赤な血しぶきがかけられたら、どんなに美しいだろうと思つたりする。

素足にスリッパをはいて、小百合夫人は静かに階段をおりていつた。洋風な客間を通ろうとする時、表ではげしく犬が鳴いた。

夫の後輩の南部邦彦の為に、奥の日本間に寝床がのべられている



筈だつた。そこへ夫人は行こうとしている。邦彦を慕つているわけでも、恋しているわけでもない。それなのに、夫の目を盗んで邦彦の寝床へしのび込もうとしているのだ。しのび込んだところで姦通しようとは思つていない。ただそれをどうにかして夫に知らせたいのだ。知らせて夫の嫉妬を煽りたいのだ。常はもの静かな夫も、妻が自分と一つ屋根の下で姦通したと思つたら、憤りに血がわき立つだろう。夫の端正な美しい顔が蒼白に引き締つて、小百合夫人の肩をぐつとつかんで、責めてくれるかもしれない。そうしたら夫人はあくまで強情に夫の血をたぎらせるようにしむけよう。そして、責めて責めて、責めさいなまれて、ぐつたりした体を無理やりに愛撫されたら、苦痛と歓喜と入り交つて、どんな声をあげることだろう。それを思うと、小百合夫人の血がジーンと音をたてゝ鳴り出すのだ。

犬がしきりに啼く。モンローという名は夫人がつけた名だつた。私の狼というフランス語は、狼そのものの呼び名ではなく、男に対する愛称なのだと聞かされた。小百合夫人はモンローと呼べるような恋人が欲しいとその時から思つていた。

夫人の手が日本間のからかみにかゝるのと、戸外であわただしい罵声の高く聞えたのと一緒だつた。さつきからの犬のなき声といい何か尋常でない気配が感じられた。

小百合夫人は急いで椽の戸をくつた。

満月に照らされた庭は、水の底の様に神秘に静まりかえつている。その水をゆらゆらとゆれ動かすように、茶室にあたつて人声がしていた。

庭下駄をはく足元が冷たかつた。彼女はふと、自分の素足にふまれてみたいと言つた男のことを思い出した。自分が帰えつてしまつたあとで、あの男はいつたいどうしたろう。肥つて醜い淫売婦をよんで、捕えられて獣のようにみじめなめにあわされて、そして歓喜の呻き声をあげているだろうか。

思うともなく、そんなことを思いながら歩いて来た夫人の目に、茶室の前の人影がうつつた時

「あつ！」

と思わず立ちすくんでしまつた。

今の今、思つていた、あの新世界で会つた男そつくりの人が、あろうことかあるまいことか、後手に縛られて、転るように地面の上に伏していたのだ。それをとりかこんで立つているのは夫と南条邦彦の二人だつた。

小百合夫人は足音をぬすんで、その場の様子をなお一層よく見る為に近付いた。

「盗んだものを出せ！」

夫が言つているのが聞える。タオルのガウンの前をはだけさせて

いるのは、その紐で男を縛ったからしかった。
「こいつ、強情だな」
邦彦が男を蹴った。
男は「ううつ！」と呻いたが、もろくも仰向けにひっくりかえった。その衿首をつかんで引き起すと
「どこへかくしたのだ？　盗んだものさえ出せば許してやると言っているのに……」
再び雄作がうながしたが、男はだまっている。
「だめだよ、君のような手ぬるいことでは……」
邦彦は夫にいうと
「こいつ！」
と再び男の尻を蹴った。若さゆえに癇が立つらしい。
男は蛙の様な恰好で前のめりにのめった。ジャリジャリと顔を地面でこすったらしかったが、体を起そうともしない。その尻を続けて邦彦は蹴った。その度に男は庭に敷きつめた小砂利に、額や頬をすりつけて呻いた。逆手に縛りあげられた手首が、脂汗をかいているのか、月の光に痛々しく光ってみえる。
小百合夫人は未だ曾つて目の前に縛られている人を見た経験がない。幼い日に、乳兄弟達によつて縛られた自分自身の裸身を見たことはある。その思い出だけでも血が引締まるのに、目のあたり縛られた男が蹴られて呻いているのだ。立っているのが息苦しいような気持だった。彼女は寝巻の上にはおった羽織で口をおほっていたがいつかその袖口を噛んでいた。
やがて騒ぎを聞きつけたのか、召使達が探しながら出てくる気配に、夫人はそっと立ち去ろうとしたが、その男が縛られたまゝ、警察の者の手に渡されて、小ずかれながら、ひかれて行く姿が見たいという、肉体にひそんだ悪魔の声に抗し得なかった。といって、夫達に自分の姿を見られるよりさきに、召使に声をかけられたら、自分がさつきからそうして男の責められるのをひそかに見ていたと思われそうな気がして、それが自分自身恥しく、出るも引くも出来ずに立ちすくんでいたが、勝手元から走りよって来た女中と歩を合わせるように、夫と邦彦の傍へよつた。ただ、あまりに新世界で会った男に似ているので自分の口もとを袖でかくすことを忘れなかった。
「小百合さん、君まで出て来なくてもよかったのに……。なあに茶室へ入つて、一茶の軸を盗んだらしいんだが、他にとられたものもなし、その軸をどこへかくしたのか、手に持っていないので少し乱暴なことをしていたんですよ」
そういう夫に彼女は言つた。
「許しておあげになつたら？」
その声を聞くと、縛られた男はやつと体を起して、女中の照らす懐中電燈の光の中で探るように小百合夫人の顔を仰いだ。月の光はあるというものの、男の目をまぶしく照らす電燈に邪魔されて、彼の方から夫人の顔はさだかには見えないらしい。夫人の方からはよく見えるのだが、泥によごれ、それに血がにじんで、はたして新世界で会った男と同人なのか、又は別人なのか判然としなかった。
男は見えないものをなおよく見ようとするじれつたさに二、三度目ばたきしたが、又吸い込むような視線で彼女をみつめた。
「おい、どこへかくしたんだ？」
再び促がされると、うそぶくようにはじめて口を開いた。

「盗つた軸はちやんと茶室の中の合所みていな棚に置いてあらあ、さわがれて盗りそこなつたつてことよ。おまわりを呼ぶなら呼んだらいいだろう。俺はあの築山で面白いものを見たんだがなあ……」

それを聞くと、雄作と邦彦ははつとした様に同時に顔を見合わした。二人の視線のさきが電気の様にバチバチと音をたてたようだつた。何を信号し合つたのか、邦彦は男のいましめの紐をといた。

「二度とこんなことをするな。今日は許してやる」

なかば女中達に聞かせるように雄作は言つた。そして小百合夫人の手をとらんばかりに体でかばうと

「小百合さん、夜気は毒だ、入りましよう」

やさしく言つて歩みを促した。

夫人は自分の背中に男の視線を痛いように感じながら、母家の方へ戻つたのだ。

二

その翌日

「昨夜の泥棒が奥様にお目にかかりたいと申してきませんのでございますが……」

女中が叱られるのを覚悟のような、おずおずした声で取次に来た。うろんな者を奥までとりつがなければならなかつた不手際を必ず夫人に叱責されるだろうと思つているのだ。

「昨夜の泥棒……？」

何の為にと思うよりさきに、体の奥で血管がふくれるような気がした。

「本当に相済みません、お留守だと申したのですが、お帰りまで待たしていただくとしつこく申しまして……。昨夜許していただいたお礼にあがつたのだというのです。警察へでも電話をかけた方がよろしゆうございましようか？」

女中はよほど手こずつたのか、自分の弁明をするように言つた。

「いいわ、会いましよう」

そうは言つたものの、小百合夫人はその男を何処へ通したらいいか困つた。玄関からあげて応接間へ通すのも変だし、自分が勝手口へ出て行つて立ち話するのも変だと思つた。

「裏庭からまわつて、庭の亭へ案内してちようだい。そしてあんた達二人程、それとなく庭にいてちようだい」

小百合夫人は女中に命ずると、先ず着ていたドレスを和服に着かえることにした。昨夜の男が新世界で会つた男と同一人であるかもしれないという懸念がぬけなかつたので、自分を見破られない為に出来るだけなりを変えようと思つたのだ。

髪をアップにあげて、大きなロールを花のようにまとめた付け髷をつけると、顔の感じが簡単に変る。着物は黒地に銀の滝縞のお召を着て、鼠地に錆朱で小米桜を散らした小紋錦紗の羽織をはおつた。ふだんはかけずにしまつてある金ぶちの眼鏡をかけると、新世界をやぼな緑色のセーターで歩いていた娘とはどう見ても思えなくなつた。

「お待たせ致しまして……」

わざと慇懃に、亭の前に立つている男に声をかけて、その支那風の瀬戸物の腰かけに腰をおろすようにすすめた。

男はおどおどして夫人を見ていたが、長くは見つめていられないのか、すぐ足許に目を落し、又、それでも気になるように夫人の顔

を見つめたりしていたが

「昨晩はどうも……」

と、言つたきり、挨拶の言葉もない様子だつた。

「何か御用でございましようか？」

小百合天人はわざと高飛車に、切口上で問うと、男は言おうか言うまいかと、しばし迷つていたが、思い切つて

「実は昨晩、奥様に助けていただいたお礼に一寸おかしなことをお耳に入れたいと思いまして……」

「はあ、何か？」

「しかし、やつぱりやめましよう。とても本当とはお思いにならないだろうし、あつしが変なつげ口するようでもなんだから」

「どんなことでしようか？仰云つて下さいませんか」

「それではこれは別の話なんですが、奥さんにはどこか奥さんの知らねえ所で妹が生れていたつていうようなことを聞いたことはおありなさらないでしようか？」

——やつぱりこの男だつた——

と、小百合夫人は思つた。「別の話」とことわつているが、男の話そうとしたことは、多分自分に瓜二つの女がこの世の中にいると告げて、彼女から新世界で会つた女の片鱗でも知ろうとしたのではないだろうか。まさか小百合夫人の夫の雄作と友人の邦彦が、昨夜庭の築山で、月の光を浴びながら男同志唇をよせ合つていたというような奇体なことがあつたのを、男が知つていたということには想像も及ばなかつた。

「では、あつしはもうおいとまします。ただ奥さんの知らないことで、あつしの見たことがたつた一つあります。それが聞きたかつたら、新世界の風流というのみやで村山といつてたずねて下さい。あつしは村山富男という者で、泥棒に入つたのも、何も物が盗りたくて入つたのではありません、一寸ばかり、人には言えないわけがあるのですが、まあ、ここで奥さんに聞いてもらうわけにもいかないでしよう。奥さんのとても考えられねえ程、世の中には変つた奴がいるものです。では、お邪魔しました。ごめんなせえ」

男は腰をあげてびよこんと礼をした。そして、ふ夫と人の白い指に目が行くと、病的な光がさつと彼の目に走つたようだつたが、頭についた埃をはらうような恰好で首を振ると

「奥さんがもし、あつしに何か聞きたかつたら新世界の真中の通りを一つ裏へ行つたところの風流という家へ来て下さい。風流なんてしやれた名は一軒しかねえから直ぐわかりまさあ、つまり、地下鉄をおりたら左へ行つて……」

と、再びくりかえしかけたが、到底それは望みようもないことと諦めたのか、それつきり言葉を切つて頭を下げると、案内された道を裏庭の方へ去つて行つてしまつた。

三

男が帰えつていつてから、小百合夫人は一日憑かれた者のように男の姿を瞼の奥で追つていた。その男を恋したわけではない。ただその男の体から、あの油臭いような一種異様な臭いのする新世界という街が、蜃気楼の様にうかび上つてくるのだ。いけない、いけないと自らいましめて、書斎へ入つて、およそあの世界から遠い仏画集をひもといたりした。しかし、仏像の写真を見ると、四天王は必ず小悪鬼をふんまえている。仁王像は手に荒縄をぶら下げている。

思い直して、清浄な山の空気を思い起そうと、山岳写真集を開けばこゝでもザイルで体を縛つた姿にぶつかる。小百合夫人はそうしたものに異常な血のたぎりを感じる自分が、変態なのではないかと思うと、声をあげてわめきたい程恐ろしいのだ。何故人と変つた血が流れているのだろうか。

もしかしたら、これはフロイドの精神分析でいう、胎内空想というものではないのだろうかと小百合夫人は考えた。胸から下のことをいうのは端たないとされて、下痢をしていても、それをはつきり母親にいうのをはばかるような家庭で育つた小百合夫人が、どうして出生の時の事を聞いたのか、おぼろな記憶なのだが、小百合夫人は生れる時、臍の緒を首にまいていて、直ぐには産ぶ声をあげなかつたので、産婦をはじめ他の者も随分心配したのだということだつた。普通胎児は臍の緒で胎盤につながつていても、胎児の体にまきつけているようなことはなく、ただ姙婦が転ぶとたまたま胎児が臍の緒で首をしめられて、出生の時息がとまることがあるという人がある。小百合夫人の場合、出産の時その臍の緒が首へまきついたのか、母親の胎内にいた時からすでにそんな形でいたのか、彼女のいう胎内空想とはそれをいうのだ。人間母親の胎内にいる時が一番安らかで快いので、それに復帰しようという慾望の潜在があるのだそうだ。その時に臍の緒をまきつけていたという

状態が、縛られるということへの慾望につながるのではないかと夫人は思うのだ。

小百合夫人は自分を変態と名ずけたくない為に、そんな理屈を考え出した。専門家が聞いたら一笑にふしてしまうことかもしれない。

しかし、理屈はいくらつけられても、小百合夫人が縛られたいという希求は、霧のようにただよって、吹きはらってしまうことは出来ないのだ。

一日、二日と小百合夫人は新世界へ行ってみたい慾望と戦った。行ってみてもどうなるものでもないだろう。はじめて名前を知った村山という男に会ってみたところでどうなるものでもない。けれどあの男の知っている人に女をいじめたい男があるような話をこの前会った時していた。もしかしたら、あの男をいじめるという豚のような女が自分を責めてくれないものでもないだろう。たった一度でもいい、縛られてみたい。或いは本当に縛られたら、自分が想像しているよりは、はるかに痛く、苦しくて、たった一度でこりてしまうかもしれない。それならそれで、再び自分の血の濁りを心配しないでもすむはずだった。

三日、四日とだんだんに自分を制することがむずかしくなっていった。

夫も夜のいとなみを忘れたようにオルゴールの音もしない。南部邦彦がよく来ているが、小百合夫人はもう二度と邦彦を相手に下手な芝居を打とうとは思わなくなっている。それよりも、新世界へ行ってみたいのだ。新世界こそ、文字どおり彼女にとって新しい世界なのだ。

小百合夫人はこの間のように緑色のセーターを着て、上から外套をはおった。家を出るのに素足に下駄ばきというわけにもいかないので白革のちよっと見るとズックに見えるローヒールの靴をはいた。

梅田へ出て、喫茶店から夫の雄作に電話をかけた。

「私ね、今お買物に梅田まで来ましたら、偶然女学校時代のお友達にお目にかゝりましてね、はじめてうかゞったのですけれど、その時の先生がお病気で伊勢にいらっしゃるのですって、その方はこれからお見舞にいらっしゃる所なんですって……丁度よろしいからと誘われたのですが、私、一日うちをあけてはいけませんでしょうか

白い便器の幻想

——サジズムの女性に捧ぐ

芳野眉美

だいだい色の煙の見えたピアノのある家の窓ガラスも、紫色の十字架がぽつんと立っているおもちやのような故会の窓ガラスも、緑色のカーテンがひかれた。

街はすつかり暗黒の精に支配され、北風が激しく行きすぎる誰一人いない、冬の夜、

ただひとつ、そこにほのかなあかりを見つけた僕は、今夜もまた白い幻影に生き血を吸われたようにたちすくむ。

白い便器

目もさめるような白い便器があの人のぬくもりをいだきながらじつと僕を見つめている。

誰の家か知らない、消すのを

?……」

そんな嘘がすらすらと口をついて出た。

夫の許しを得ると、同じようなことを自宅へも電話して、自分の留守中の夫への心ずかいをこまごまと女中に命じた。そして、やっと二つの電話をかけ終ると、耳たぼが熱をもっているような気がして、何となく顔があげられなかつた。それは一晩自由にすごせることへの期待と、嘘をついた事への羞恥と一緒になつて彼女を上気させたらしかつた。

地下鉄を動物園前でおりると、前と同じように動物園へ行つて、外套をぬいで手に持ち、やがてそれを風呂敷に包んで、ネッカチーフで髪をおほつた。

うろ覚えの道をたどつて、この前男のつれてくれたお好焼屋へ行つてみると、そこが風流という家で、お好み焼の看板と酒の看板と並んで出ていた。

小百合夫人は紙をはつてある硝子戸をあけて中へ入ると、芝居をしているつもりで

「ちよつと、お酒ちようだい」

と、はすつぱに言つた。

女学校時分にそんな場末の飲み屋を背景にした芝居をしたことがあつた。舞台稽古の日にクリスチヤンの教師が怒つて、折角何ヶ月もかかつて稽古した芝居をしてはいけないと言われて、生徒達がもめたあげく、徳利を出さずにやかんで湯呑でするならいいということに妥協した。つまりお酒をのむということがもつての他だつたので、水なら酔つてもいいというわけらしかつた。小百合達はぶうぶう鼻をならしたものだつたが、今思えば、やかんでドブロクをついで湯呑でのむという、いかにも場末らしい舞台だつたのだと、夫人はその時をなつかしく思い出して、ひとりでに微笑が湧くのだつた。

今、丁度その芝居を演じているような気で一本の徳利をゆつくりあけた。強い洋酒になれていたが、燗をした安酒はさすがに一本あけるとお腹がホカホカと暖かく、酔いがまわつてきた。客も一人ふえ、二人ふえて、ひとりで飲んでいる彼女の美貌をあやしんで、それとなく小女にたずねたりしていた。外の暮色も漸く濃くなつていく。

やがて、硝子戸をあけて入つて来た男を見ると、小百合夫人はその人を待つていた筈なのに、やつぱりはつとして、思わず伏目になつた。

「よう、珍らしいね」

男は声に喜びをかくしきれない様子で彼女に言つた。村山富男と名のついた男だつた。

「つるちやんだつたね、どうしていたんだ?」

そういうと、他の客の視線の中で、自分がその美しい女を知つているということを誇る様に、元気な足どりで夫人の横の椅子に腰をおろした。そしてまじまじと彼女の顔をみつめていたが、

忘れたのだろう。垣根のわずかと思う。だが夜が来ると僕の足なすきまから、小さなガラス戸はこの不思議な家に向いついてからくつきり浮かび上つた白いいる。便器。なんて美しいのだろう。そこに、あの人がいるからだもだえる。苦しむ。いけないあの人が僕を呼んでいる。

「似ているなあ、たしかに……。姉妹じやねえのかなあ」
感心したようにいう男に、夫人はなおも芝居をしている調子で
「なによ、小父さん、私の顔におまつりでも通つているの？」
とポンポン言うと
「小父さんはひどいね、お兄さんといえよ。フーン、やつぱり違うかな」
「じやあ、お兄さん、あたし今日はシケているのよ、おごつてね」
いつもの自分の声よりも、一オクターブ低いガラガラの声を作つて言つた。そして、この前の時、はじめはその調子でいながら、ホテルへつれこまれると、もちまえの細いきれいな声になつてこの男に哀願したのを、もしこの男が覚えていると、さぞおかしく思うだろうと、おなかの中で苦笑した。
男は「おい、いつもののやつ」と、小女に注文しながら、目は彼女から離さず、
「お前も随分変つた女だな。小父さんでもお兄さんでもない、村山という名がちやんとあるんだ。村さんとでもよんでくれ」
「そう、村さんね」
「ところで今日はどうだい？　この間俺の言つたこと承知してくれるのかい？え？、やつてみてもいいと思つて来てくれたんじやないのか？」
男はせきこんで聞いた。
「そうねえ……」
彼女は少し弱気になつた。
すると村山は女の気の変るのをおそれるように
「まあいいや、それはその時のことにしよう。とに角どこかへ行つて落付いてめしでも食おうよ、いいだろう？」
押しかぶせる様に言うと、小女の持つて来た茶わんをとつて一と息にぐつと飲み、さらに一息入れて二タ口、三口にのみほすと、小女に「たのむよ」と、金を払うでもなく、彼女をうながして外へ出

【読者通信】

時山加代子様、二月号で貴女の読者通信を拝見しました。私は当年二十六歳の責というより女性の緊縛美に興味を持つている独身の青年で現在市内銀行の某支店に勤務して居ります。かねがね十二月号の〝囚衣〟のように陰陽の二人がめぐり逢えたらどんなに素晴しいことだろうかと若しその様な機会があれば如何なる犠牲も恥も惜しまないと思つて居ります。加代子様、お逢いしたいのです。日時と場所をきめて是非お逢いしたいのです。場所は人通りの多い所で結構です。そして貴女の私に対するファーストインプレッションが悪ければ其のまゝ姿を消してもいいのです。

（神戸、山里英二）

○

二十日頃からもう一日千秋の思いで待ち続けておりましたので封を切るのももどかしく、早速目次を開いて、あッと声を立てる所でした。私の拙い告白が先輩諸兄姉にそッと肩を並べているのです。かーッと顔が赤くなり胸がドキ〳〵して夢中で頁をむさぼり読みました。しいたげられるよろこび、何んと詩的な題をつけて下さつたものでしよう。嬉しくて、でも読者の皆様に責められる私の全裸をのぞき見されたようで今更ながら恥しくなりません。あの時は夢中で一晩寝ないで書き上げたのですけど……

（林田澄子）

た。

夜と昼の別れめの、煙つたいような靄が街を包んでいた。

四

その辺では一寸小ぎれいな、日本風の料理屋の様な旅館へ彼女を案内すると、

「つるちやん、又逃げ出しちまうんじやねえだろうな」

と、村山は言つた。

「今日は逃げないわ、逃げると思つたら縛つておいてくれてもいいわ」

小百合夫人のつる子は、縛るという言葉を口にするだけで咽喉がかすれるような気がした。縛られないさきに両手の皮膚が色を変えるような感じなのだ。

「俺は女を縛るのは苦手だつて言つたじやないか」

村山は言つたが、

「じやあ、つるちやん裸になれよ、裸じや逃げ出そうたつて逃げられない。そしてお前の服を一とまとめにして、お前の手の届かない天井へ俺がつゝといてやらあ」

「裸に?」

「そうだ、俺に見せてくれ、お前の裸を見せてくれよ」

「でも……」

さすがにつる子はためらつた。

「じやあこうしよう。お前トランプ出来るだろう?、二人でトランプをやつて、負けた方が一枚ずつ脱いでいこう。それならいいだろう?」

村山は彼女の答えも待たずに廊下へ出て行つた。

今のうちに逃げようか——と小百合夫人は思つたが、それは頭の一部をまるで申訳のように通りすぎた考えだつた。彼女は男を待つて座つていた。

やがて、男が戻つて来て、女中が丼物にビールをはこんで来た。

「用があれば呼ぶからね、これでいいよ」

と、女中に云うと、女中の出て行つたあとの襖に鍵をした。鍵といつても小楊子のようなものでとめておくだけのものたつた。

「つるちやん、だがよく来てくれたね、俺は嬉しいよ、こんな嬉しいことはないよ」

村山は小百合夫人の傍へよるでもなく、がつちりした体に似合わぬやさしい声音でいうのだつた。

「今日はのみながらゆつくり遊ぼう。つるちやんには借があつたつけね」

「あら……」

小百合夫人は思わず赤くなつた。出すぎたしかたをして帰えつたようで恥しいのだ。あの時は再びこの男に会うこともないと思い、ひどい女だと云われまい為に、金銭的な負担だけでも男がらくをしたと思う様に、二千円という金を置いて帰えつたのだ。

「ああ、夢みたいだな、本当に俺は嬉しい……」

男は目もとをうるませる程にして、しみじみそう云つた。

「俺は本当にお前のようなきれいな女に苛められたいんだ。なあ、俺をお前の奴隷にしてくれ。お前の為なら何でもする。俺は本当に俺が夢の中で見ていた女に会えるとは思わなかつた。そりやあお前の様にきれいな女が世の中にいないわけではない。此の間、俺は実

に美しい奥さんに会つた。しかし、その奥さんが俺と遊んでくれるものではなし……ねえ。それがつるちやん、お前はその奥さんに負けない位きれいで、そして、こうやつて俺の目の前に座つていてくれるんだ。嬉しいじやねえか。俺はこんな嬉しいことはないんだ。さあ、一杯やろう、お前ものんでくれ」

小百合夫人はビールをぐつとのんだ。

夫人の住んでいる社会は、思つたことをあからさまに言えなくて骨折つているような所だ。誰がこんなに卒直に夫人の存在を喜んでくれたろう。美辞麗句を並べるのは、痩せた体をごまかすのに、豪華な衣裳を着るようなものだつた。

「さて……と。トランプ何やろうか？ポーカーなんてしやれたものを俺は知らねえして、三十一つての知つてるか？」

「ええ」

男の卒直さが小百合夫人を女学生の様な無邪気な心にさせて、男と二人きりで旅館の一室にいるというよりは、親戚の中学生と遊んでいるような気易さを感じて来た。

しかし

「ほら、つるちやんの負けだ。セーターぬげよ」

そう言われると、急に稚い心は消えて、やつぱり成熟した女の体から起る羞恥に顔が赤らんだ。

「脱げよ、脱がしてやろうか」

村山に再度うながされて

「いいわ」

夫人は小さく言うと、緑色のセーターを頭から脱いだ。下にシミーズを着ているものの、丸い肩があらわになつた。それを隠そうとでもするように、肩をせばめていると、又負けた。今度はスカートを脱いだ。靴下をはいているのだから、一番さきに靴下からぬげばよかつたのだが、男が彼女の素足をはじめから気にしていたので、素足を見せることが、肩を見せるより恥しかつたのだ。

すると今度は村山が立てつづけに負け出した。片足ずつ靴下をとり、トックリセーターをぬぐと、ズボンはそのまゝにして、シャツをぬいだ。体の皮を逆さにはがすように、首を前にまげて、背中を丸めて男がシャツを首の方へ引つぱりあげて、スポツとぬごうとする時、小百合夫人の目に、見るともなく男の背中の青黒い痣が目についた。はつとすると、シャツをぬぎ終つて、正面向いた男の胸にも肩にも、同じような痕があつた。男は思つたより白い肌をしていた。その胸から肩にかけて、まるでビールやサイダーの栓をギユウツと押しつけたように、星形に光つて赤くなつているのは、歯で噛まれた痕なのだろうか。痛々しく、まだそこから血がにじみ出てくるような感じだつた。その同じ形の痕が紫色になつているのもある。

「つるちやん、どうだい、こんな痕をつけてみたくねえか？」

夫人の視線を感じたのか、村山は言つた。

「今度俺が負けたら、ここを噛んでくれ」

夫人は思わず「うん」とこつくりしてしまつた。異常な血のさざめきが、自分の皮膚に噛みつくつもりで、人の皮膚を噛んでみたくさせたのだ。正常な反能の刺戟が、正常な接吻を望むのに似ていてもつと強い刺戟の表現が、接吻よりはもつと激しいものを求めさせたといえるだろう。

村山が負けた。

「さあ」

とうながされて、夫人は男の傍へよって、男の肩へ唇を近ずけた。

夫以外の男の裸身に、それ程近く顔をよせたことはない。夫の体は香のような匂いがする。髪につけているヤードレーのポマードが体からほのかに匂ってくると、日本の香の様な匂いに似るから不思議だった。

村山の体は酸っぱいような匂いがした。チーズにお酢をかけたような匂いといえば当っているだろう。

「さあ、思いきり噛んでくれ」

彼は言った。

小百合夫人は自分からすすんで男を苦しめるのではなく、男にしいられて、無理に男を苦しめるということに被虐的な快感を感じた。いえばサジズムとマゾヒズムの入りまじった快感だった。

「もっと、もっと！もっと強く！」

彼は言いながら息をはずませる。

夫人は歯に力を加えながら、はずませる男の息とは反対に息がつ

玲子

まる思いがしてきた。

夫人が唇を離すと

「ああ！」

と、男は深い溜息をした。幸福そうな吐息だつた。

「もうトランプなんて面倒くさい。ジヤンケンにしよう、そして……」

と、男はズボンのポケットを探つていたが、真田紐を三、四本とり出すと言つた。

「今度は負けた方の手や足をこれで順に縛ろう。ジヤンケンが出来るように、手は手錠のように少し離して縛ればいい」

小百合夫人は胸が高まつてきた。目の前の紐が蛇のように、生きて呼吸をしている感じがするのだ。そしてその呼気が夫人の肌を筆の穂先で撫でるように、チリチリさせるようだつた。夫人はゴクンとつばをのんだ。そして、

「ジヤンケンポン」

そう声に出したが、声がふるえるような気がした。

しかし、又、負けたのは男だつた。

小百合夫人の先ず男の足首をそろえて、かたく縛つた。

まるでわざとの様に男は負けた。

膝頭を合わせて縛ると、今度は手首だつた。片方の手首をぐつと肉にくいこむ程にかたく結んで、その紐を一尺程のばして片方の手へまきつけて結んだ。」

「今度負けたら、本当に俺をその足でふんでくれ」

彼は言つた。

「ジヤンケン……」

二人とも声がふるえていた。

その時だつた。廊下の足音が部屋の前で止ると、襖を激しく外からゆすぶる者があつた。

二人は、はつとしてそのままの形で視線を襖に向けた。

ガタガタ、ガタガタと、ゆすぶる拍子に簡単にさしておいた鍵がぬけて勢あまつて襖がはずれてしまつた。すると、転げこむように廊下の人が中へ入つてきた。

パーマネントで頭をチリチリにした太つた女だつた。おかめの面のような顔が怒りをたたえると、何と形容していいかわからない顔になる。人間というよりは獣に近かつた。

「こんなことだと思つた」

女は言葉をぶつけるような調子で言つた。

「さつき風流であんたがどこかの女と一緒に出たと聞いたから、もしやと思つて探していたのよ、案のじよう此のていたらくだ。よくもあたしつて女があるのに……くやしい！」

言うと女は村山の頬をピシヤッと打つた。彼は手も足も縛られているのでどうしようもない。

小百合夫人は裸身に近い自分の姿を早く隠そうと、幸い男がそのまゝおいておいてくれたセーターとスカートに手をのばすと、女はいきなりその手をとらえた。

「そのまんま帰えんなさいよ、いい気味だわ、さあ、そのまんま出ていけばいいじやないの」

無理やり小百合夫人のスリップ一つの体を廊下へつき出した。

「あつ！ごめんなさい、洋服だけ……」

小百合夫人は女に手を引かれながら哀願した。

「なにさ、ひとの男をとろうとした罰だわ。何も追いはぎするつもりじやないわ。あの風呂敷包みあんたのだろう。持つていきなさいよ」

女は片手に夫人の手首をむんずとつかんだまゝ、ずるずると部屋の中までもう一度引きずつて、片手に夫人の風呂敷をとると、男に向つて

「あんたはそうしておいで。今、たんと苛めてやるからね」

歯で手の紐をとこうとして努力している男に投げつけるように言うと

「さあ、こつちへおいで、」

と夫人の手首を引つぱつた。

「かんにんして下さい。かんにんして！」

夫人はスリップのまゝ廊下をずるずると引きずられながら、女の指をほどこうともがいたが、手首がちぎれる程の力で引つぱる女の指はどうほどきようもなかつた。

廊下の両側の部屋からは、物見高く人がのぞいている。しかし、こんないさかいもままあることなのか、誰もとめようとしない。

スリップの紐がずれて、肩どころか乳房までのぞけそうな姿で、みじめに廊下を引きずられながら、小百合夫人は体の奥が快くうずくような気がした。

「かんにんして！」

口ではそう言いながら、それは夫との夜のいとなみで言いたい声をかみこらえて「ああ」と呻くのに似ていた。

ナイロンの靴下が廊下の割れ目にひつかかつて破れてしまつた。手首をつかまえて引きずられるので、スリップがまくれ上り太ももがじかに廊下に冷たく擦れた。その冷たさが気持よい程、体中がカッカッと熱くほてつた。殊に手首は火傷したように痛かつた。

「これでもうこりたろう」

女は廊下から玄関の靴ぬぎへ小百合夫人をつきとばすと、あとも見ずにもとの部屋へ戻つて行つてしまつたのだつた。（未完）

◈次号（四月号）豫告◈

口絵　喜多玲子・画
操られる女の各態

淫　みだらび　火（第四回）　松井籟子
らぶ・すれいぶ（第4回）　鬼山絢策
風流猿ぐつわ　吾妻新
切腹史談（続篇）　中康弘道
続・囚衣　古川裕子
異婚抄（人獣交婚譚）　山崎浩平
支配者と被支配者　波多野新
妓の影　泉辰之助
キヤメラ愛好会　岡田咲子
窄衣（さくい）　嶽収一

ネクタールを作る方法、肥つた紳士の魅力

愈々その真髄を発揮する錯倒の小説と告白の特集

原稿募集

一、すべて未発表の興味溢れる作品を望みます。
一、内容は本誌に適当と思われるものでしたら如何なものでも結構です
一、四百字詰原稿紙五十枚迄の作品
一、発表作品には発行後相当の謝礼を差上げます。
一、原稿は原則として返戻申し上げかねます。
一、締切日は特に定めません。
一、挿絵、口絵、写真、漫画、小話、笑話等も募っております。
奮て御応募下さい。
（奇譚クラブ編集部）

◎本誌の旧号在庫について◎

本誌旧号は昨年八月号以降より毎号若干保有して居りますが、七月号より以前は全部売切れでございます。昨年度の分は一部送共百円にて急送申し上げます。KK通信第三号以前品切れ。

◎読者の体験告白文は内容及びその長短は問いませんから、どし〳〵御送稿下さるようお待ち致します。誌上匿名は御自由です。

◎御願い◎

編集部発行所に対する御照会には必ず返信料の同封を願います。但し文書輻輳の節は御返事の多少の遅延は御猶予下さい。尚理由の如何に拘らず直接御訪問は固く御断り申し上げます故悪しからず御諒承願います。

◎編集方針について

尚本誌の内容編集方針について読者のお問合せをお待ちします見御希望には左記の通り誌上を以て御回答申し上げます故、御遠慮なく御申出下さい

一、縛られた女の写真に関して（辻村　隆）
二、男子同性愛の件について（染田　玄）
三、縛られた女の絵について（喜多玲子）
四、編集方針の一般について（箕田京二）

KK通信大増頁

本誌愛読者を中心とした楽しいグループの自由な集いのパンフレットとしてKK通信もこれで第六集となりました。読者諸士の強い要望と四囲の状勢から大充実の上、名実共に皆様の伴侶としての役を果したいと思います。

見本一部二十円
半年分　百　円
三月分三冊（送料共）三　百　円
半年分六冊（送料共）六　百　円
一年分十二冊（送料共）壱千二百円

先ず書店へ御予約下さい

熱狂的な本誌ファンの激増により、各地で本誌の入手難を訴えられておりますが、毎号最寄り書店へ御予約下さい。確実に入手される一方法であります。

◎日本唯一の特色ある雑誌としてその文献的価値を高く評価されて居ります本誌は是非毎号欠号のないようお揃え下さい。

◎直接購読者募集◎

毎月品切れにて御迷惑をかけていますが、御買洩れのないよう是非直接購読の御申込下さる様お待ち致します。半年分御申込の方には責められる女の写真三枚一組一年分御申込の方には八枚一組サービス品として贈呈申し上げます。その外KK通信毎号贈呈

奇譚クラブ　第七巻　第三号
毎月一回一日発行
三月号　定価　百　円
昭和二十八年二月二十日印刷
昭和二十八年三月一日発行
編集人　箕田京二
印刷人　上田庄之助
発行人　吉田稔
大阪府堺局区内菅原通四ノ三〇
発行所　曙書房
振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。